

# 奇譚クラブ

1960年 5月号

被虐小説

悪夢の記憶

塔婆十郎



LE DÉNICHEUR

5月号

昭和三十三年四月二十日印刷  
昭和三十三年五月一日発行  
(第十四巻五月号)  
(第八号 通巻第百三十八号)  
昭和三十三年五月一日発行  
(毎月一回一日発行)  
昭和三十三年五月一日発行  
(毎月一回一日発行)  
昭和三十三年五月一日発行  
(毎月一回一日発行)

昭和三十五年五月号

5

奇譚クラブ

昭和三十三年四月二十日印刷  
昭和三十三年五月一日発行  
(第十四巻第八号)  
(毎月一回一日発行)  
昭和三十三年五月一日発行  
(毎月一回一日発行)

定価二百円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



IBM. 2805

昭和二十九年度を飾ったサド小説と新作フオト集

悦虐小説と緊縛写真特集 4 集 臨時増刊限定版

四馬孝傑作緊縛画集

- ☆密室の私刑
- ☆鬼憲兵の拷問
- ☆高樓の裸身
- ☆悪魔の舌抜
- ☆橋下の踊子
- ☆湖底の美女
- ☆帆柱の女神
- ☆恐怖のムチ



拘束美態特選集

- ☆今昔競艶……絹川 文代
- ☆巧まざる魅惑……田代 悠子
- ☆柔肌秋刑……大塚 啓子
- ☆逞ましき柔軟生物……桜井 葉子
- ☆句やかなる乱菊……花坂 道子
- ☆野盗退散……絹川 文代
- ☆白魚の像……大塚 啓子
- ☆忍従の哀婉……典子
- ☆ニユー・モード・ダンス……絹川 文代
- ☆軟体彫像……田原美佐子
- ☆寂々たる喜悅……絹川 文代
- ☆悟道の聖徒……大塚 啓子
- ☆弾性物質……愛川 悦子
- ☆変造美形……絹川 文代
- ☆樹間の冷風……絹川 文代
- ☆熱（もくもん）悶……絹川 文代
- ☆抱（はうばく）縛……大塚 啓子

悦虐小説特選集

- ☆私のモデル……飛田 良二
- ☆嫉妬の搾り責め……角 皓子
- ☆デパート人形……白金 紅次
- ☆美しい五月に……古川 裕子
- ☆告白半公刑……篠原 咲恵
- ☆私の新婚旅行……富永 一雄
- ☆童貞作家……淡美 一郎
- ☆魔触（まじよく）……二保志津子
- ☆私刑（リンチ）……霞場喜代子
- ☆わが心の記……古川 裕子
- ☆赤札囚（続・半公刑）……篠原 咲恵
- ☆流浪八年……沖野也美子
- ☆悪の部屋……二保志津子
- ☆股裂き散華……多山 皓

略号（悦特4）

定価 三百円

お申込は  
大阪市阿倍野郵便局  
私書函 十四号  
天 星 社 へ

☆懸賞愛読者原稿募集☆

規 定

- 一、原稿の内容は本誌の掲載にふさわしいものであれば、どんなものでも結構です。
- 二、創作、小説、文庫、研究、物語、告白体験等形式は如何なるものでも構いません。
- 三、枚数は最高百五十枚位まで（四百字詰）
- 四、必ず未発表の作品であることが必要です。
- 五、締切は毎月十日。以後に到着の分は翌月題しとします。
- 六、入選者は毎月の誌上に発表。賞金は一篇につき二千円以上五万円迄贈呈いたします。
- 七、掲載外の佳作には、本誌三月分乃至一年分贈呈いたします。
- 八、封筒には「懸賞愛読者原稿」と朱記のこと。原稿返戻御希望の方は返信料同封下さい。
- 九、発表に支障のある箇所は掲載の際に訂正又は削除することがありますから予め御承諾願います。

天 星 社 編 集 部

読者原稿募集

- 【体験、告白、手記】 なたにも一つや二つは必ず思い出とか、体験とかいったものはあるものです。物いわざるは腹ふくまるのたとえ、どうか皆様の真実の叫びをお寄せ下さい。内容や長短は問いません。採用篇には本誌三月分以上贈呈します。
- 【創作、小説、物語】 一度自分も小説らしきものを書いてみようと思われた方は出来の如何に拘らず御遠慮なく御投稿下さい。但し未発表の自作に限ります。いずれも誌上の匿名は御自由です。採用篇には本誌五月分以上贈呈します。
- 【映画、雑誌通信】 映画や既刊雑誌の中で特に興味をお持ちになった事項がありましたら通信下さい。お待ちします。映画は撮影所名、題名、雑誌は発行所名、雑誌名、発行年月の明記をお願いします。掲載の分には本誌三月分贈呈いたします。
- 【レポート】 新聞記事（週刊誌を含む）の切り抜き又は感想など皆様の関心をお持ちの事項について御知らせ下さい。掲載の分には本誌二月分以上贈呈します。
- ◎尚、以上の五項目の採用原稿には御希望により編集部作成の各種フオトを贈呈する準備がございます。
- 【読者通信】 編集者、執筆者、投稿者への通信、呼びかけ、前号の批評、希望、感想、思ひ出話、或は読者相互間の交歓文通応答、編集上の御意見など忌憚なきお便りをどしどしお寄せ下さい。誌面の許す限りつとめて発表いたします。

★本誌御購読の榮★

- 一月分（1冊）△送共V 二百円
- 三月分（3冊）△送共V 六百円
- 半年分（6冊）△送共V 千二百円
- 一年分（12冊）△送共V 二千四百円

本誌は直接郵送による販売を主としておりますので、購読御希望の方は直接発行所宛お申込下さい。半年分予約の方には景品として大手札型緊縛写真三枚、一年分予約の方には同じく六枚一組贈呈いたします。御予約の方へは発売の都度厳重荷造りの上急送申し上げます。尚、発行済の旧号は別項記載の通り在庫の上、御注文をお待ちしております。

奇譚クラブ 定価 二百円

昭和三十五年四月二十日印刷  
昭和三十五年五月一日発行  
編集印刷兼発行人 吉田 稔  
大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号  
発行所 天 星 社

電話 天下茶屋 三六〇七番  
振替口座大阪第五〇〇四二番

御送金は、事故の際困りますので出来る限り振替、現金書留、又は書留にてお願い致します。切用代用は、八円か十円の小額のものをお利用下さい。宛先は必ず精書ではつきりお書き願います。尚振替用紙は当社作成のものは品切となりましたので御諒承願います。



臨時増刊 サド特集号第三集

略号「S特第三」 定価三百五十円

四馬孝画集 (力作二十四点)

蛇倉幽閉	防裂の恐怖	股裂きの実験	水責め倉	哀れな力	持体裁戦	深夜の逆吊	ムチ打ち開	拷問台	121110987654321
烙印のX字架	箱詰の舌吊り	苦悶の舌吊り	鼻責め地獄	猿轡と煙草	森の中草	愛人の危	山小屋の異	浣腸室の動物	242322221019181716151413
白痴実験動物	美畜訓練師	山小屋の異	浣腸室の動物	美畜訓練師	山小屋の異	浣腸室の動物	美畜訓練師	山小屋の異	

狂咲く稀花特選 (フオト百四十八葉)

佳花の戯れ	狂花の戯れ	厚遇の座席	共通の戦き	華の受難	流るる美線	友愛の表現	哀美の抽	応接間の稀態	
三木	田原	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	
脱し得ぬ拘束	苦痛への階段	押込みの艶肢	レインコート	ひとばしら	泥まみれの青春	白蝶の不安	美貌の憤悶	スポーツライト	
絹川	絹川	絹川	絹川	絹川	絹川	絹川	絹川	絹川	

傑作サド読物集

塔婆十郎・作 滝れい子・画

サド小説 『地獄の無法地帯』

覆面子白頭巾・作 参考写真多数

『緊縛フオトと緊縛フオト夜話』

「悦虐小説と緊縛写真」特集・第三集

臨時増刊 悦特 No. 3

「嵐を慕う蝶」特集号

定価三百円

華麗絵巻、四馬孝傑作画集

新作フオト「嵐を慕う蝶」 (百十四葉)

柱掛人形、岩に咲く珍花、隔世の障子、お仕置前奏曲、大塚

昔日の問題作「悦虐小説特選集」

告白、謎の女と私、罪ある女、縄に憑かれて、蜘蛛とお仕置、縄をめぐる随想、復讐、猿くつわと私、悪の部屋、私刑に泣く未亡人、私を愛して下さった皆様へ

臨時増刊 悦特 No. 2 定価三百円

「悦虐小説と緊縛写真」特集号・第二集

四馬孝緊縛画集

柱背負い、深夜の水浴、喰込む縄、あんよは上手

悶悦姿態特選集

蓬瀬のポーズ、はかなき悶え、羞姿晒陽、綾なす白縄、柔肌の喘ぎ、未知の驚き、造形美術、ロープ・ブラジャー

往年の好読物集

妓の影、凌辱の幻想と期待、僕らの記録、くすぐられるよろこび、キヤメラ愛好会、被虐の愛情、責、アブノーマル・ファンタジー、変の字問答、マダム紅鶴、哀艶責め場絵噺、蜘蛛とお仕置、由紀子のお仕置、聖画の誘惑





# 奇譚クラブ

復刊第六十号  
五月 月号

## 目次

四馬孝画集「怪教の人身御供」	四馬 孝・画
緊縛画「尼 寺 受 難」	滝れい子・画
責め絵「城下の磔美女」	北原純子・画
口 写 真緊縛美のア・ラ・カルト	絹川 文代
頭 巻 マゾヒストック・フォト「ブレイの果」	
切腹フォト「擬 態(きたい)」	川辺砂登子
男性緊縛フォト「穴倉幽閉」	大塚 啓子
特写フォト 樹間のさらし	
豊満くらべ	

編集つれづれ草「私の編集ノートより」	編 集 子	18
サド小説「悪夢の記憶」	塔婆 十郎	24
猿 轡 放 談 (終回)	浮家 鷹三	36
告白小説「俺は知ってるゾ」	長岡変一郎	40
告 白「女装と私」	原田 幾世	44
特高拷問史	庄田美起夫	46
正月映画の縛られた女優達	大河原珠樹	52
変 身 (かわりみ) 第二回	南 時夫	54
乗馬ズボン・シリーズによせて	法谷 四郎	58

サド小説「画鋏の歌」	仏光刀四郎	60
ある女優の乗馬日記より	倉仁 成人	72
映画通信「春の映画縛りシーンから」	サガ・ミヤコ	76
マゾヒズム百景	馬場 好男	78
創作 黒井チエの青春(三)	近藤 一	82
沅陽ファンタジー	久里須照夫	98
愛好者の記録	とろま・かつひ	100
告白 私の切腹難感	山田久仁子	102
秀緒の生活難感	藤山 秀緒	106
連載第三次元小説「影の国」	雪俊 遙	110
モデルの独り言「紅色の自画像」	絹川 文代	122
告白手記 随 想 (すいそう)	松井 籟子	124
女相撲と女斗美	雪崎 京人	130
サド特集号第四集の特写フォトについて	近藤 一	132
「私の詩と真実」ガラスとゴムの想い出	原 由貴子	134
アイデア 美少女と責写真	古屋 敏夫	138
新連載「手記「無実の罪に哭く男」より」		
「宇宙のどこかで」 第一回	佐治 麻造	140
考察 腹を切る事(その五)	折伏 下男	160
告白「鼻と裸とスター」	みよ・すすむ	162
読者通信		165



臨時増刊サド特集号第四集

略号「S特第四」定価三百五十円

「美しき惨虐物語」四馬孝傑作「画集」

狂 乱 女 執 念 美 貌 飲 酒 美 貌 飲 酒 美 貌 飲 酒  
手 厳 しの 返 待 礼 女 執 念 美 貌 飲 酒 美 貌 飲 酒  
楽 の 足 が 好 憎 い 待 礼 女 執 念 美 貌 飲 酒 美 貌 飲 酒  
こ の 団 の 好 憎 い 待 礼 女 執 念 美 貌 飲 酒 美 貌 飲 酒  
誘 い お 仕 置 虹 餌 い 待 礼 女 執 念 美 貌 飲 酒 美 貌 飲 酒  
汚 倉 地 獄 置 虹 餌 い 待 礼 女 執 念 美 貌 飲 酒 美 貌 飲 酒  
蛇 倉 地 獄 置 虹 餌 い 待 礼 女 執 念 美 貌 飲 酒 美 貌 飲 酒  
愛 倉 地 獄 置 虹 餌 い 待 礼 女 執 念 美 貌 飲 酒 美 貌 飲 酒  
深 倉 地 獄 置 虹 餌 い 待 礼 女 執 念 美 貌 飲 酒 美 貌 飲 酒  
私 倉 地 獄 置 虹 餌 い 待 礼 女 執 念 美 貌 飲 酒 美 貌 飲 酒  
夜 倉 地 獄 置 虹 餌 い 待 礼 女 執 念 美 貌 飲 酒 美 貌 飲 酒  
刑 倉 地 獄 置 虹 餌 い 待 礼 女 執 念 美 貌 飲 酒 美 貌 飲 酒  
森 倉 地 獄 置 虹 餌 い 待 礼 女 執 念 美 貌 飲 酒 美 貌 飲 酒  
……湧き上るムード特選集……

(フォト百二十葉収載)

ファイアンセーの困惑(館)  
敷居上の苦斗(田代)  
溪流に哭く女(大塚)  
蜘蛛の糸(大塚)  
強迫性障害(大塚)  
曲線の麗姿(大塚)  
囚人の舞(大塚)  
……「美しき惨虐物語」傑作集……

新剛家の出来事(三和)  
狂乱の女(三和)  
星の苦衷(大塚)  
手厳しの返礼(大塚)  
誘拐団の好餌(大塚)  
探しの私のモデル(大塚)  
恋の求めた虹(大塚)  
金髪と虹(大塚)  
美女の密偵(大塚)  
執念の最期(大塚)  
荒野の惨劇(大塚)  
……「美しき惨虐物語」傑作集……

臨時増刊号 略号「S特第二」

「サド特集号 第二集」

定価三百五十円(送共)

【麗美巻頭図絵、四馬孝画集】

☆密質倉庫  
☆悪魔のような女  
☆春美の受難記  
☆シリーズ 四点  
☆新品第一号  
☆嫉妬の鬼  
☆妖艶の船  
☆妙なる吊責  
☆雨中の引廻し  
☆奈落のリハーサル  
☆鼻責めテスト  
☆黒目鏡の女  
☆地下室の苦行  
☆苦行  
☆吊し責め  
☆乳房責め  
☆人間フープ  
☆檻  
☆アクロの訓練  
☆捕われた商品  
☆犬の訓練  
☆女体の鞭  
☆夜ながし

【被縛女特選集グラビヤ百九葉】

絹布と絹肌(田中)  
飾り人形(大塚)  
台上の賛(花坂)  
若妻の秘美(花坂)  
白い若鮎(田中)  
三面鏡(愛川)  
仇姿黄八丈(絹川)  
縄さばき(浜本)  
挑発の笑(絹川)  
被海(花坂)  
深海(田中)  
哀れな賓客(絹川)  
豊胸(愛川)

【興味尽きぬS的読物】書下し二篇

私の責画 責めの美人と皮革 (四馬孝)  
緊縛フォトと緊縛モデル (白頭巾)  
南村俊平画八猪大人の御乱行、強制女体  
浣腸器V

『悦虐小説と緊縛写真』特集号

定価三百円(送共) 略号「悦特」

この素晴らしい小説集とグラビヤ写真、緊縛絵画で皆様のお心を温めて下さい。売切れては大変未見の方は、すぐお申込を！

△悦虐小説傑作集V S的作品のエッセンス

雌獣の手記 呪  
妻は縛らず 悦虐の旅役者  
夕の朝顔 長刑  
続・囚人の主 私の思い出奇  
私 狼 縛られた妻以前  
色 女奴隷の手記 燐  
女 奴隷の手記 地獄絵行脚  
受 奇曼陀羅教 鉄格子の中に  
怪 妖 精(ニンフ)  
妖 精(ニンフ)  
三ツ葉葵の横顔 シュミーズ  
誘 致 放 間 謀 成 心  
羅 洩れ イ 致 間 謀 成 心  
木 洩れ イ 致 間 謀 成 心  
夢 洩れ イ 致 間 謀 成 心  
競 洩れ イ 致 間 謀 成 心

△四馬孝画集 口絵V

白魚の悶え 宙に踊る  
苦悶の前奏 アクロバット  
鉄鎖のきしみ 濡れる朱唇  
籠の白鳥 土蔵の花



# 怪教の人身御供

かいきよう　ひとみ　ごくう

得体の知れない怪僧のあげる冷い声音。ゆらゆらとゆらめく香の煙。この白いイケニエは、これからどのようにして神の祭壇に捧げられるのであろうか。





# 尼寺受難

尼寺へ侵入した賊は、主人の尼僧とその妹で、丁度、春休みで泊りに来ていた女学生の二人を縛りあげて、盛んに簞笥の中を物色するのであった。



滝  
れい子・画





北原純子・画

## 城下の磔美女

何の咎によったものか、奥深い城中のことはわからなかったが、制札によると、不義とだけあった。とにかく、若くて美しい女であった。



# カルト





緊縛美の  
ア・ラ・



モデル 絹川 文代





樹間のさらし (モデル 川辺砂登子)



豊満くらべ (モデル 大塚啓子)



新しい文献研究誌

奇譚クラブ

1960年 5月号

(第十四卷 第八号 通刊第四百十号)







# 編集つれづれ草

— 私の編集ノートより —

## 編 集 子

### 読 者 通 信

読者から来た便りを誌上に載せることにしたのは、本誌がまだB5判だった頃、主として埋草用として使ったのが始まりですが、その当時は分量も少く、まとめて掲載するほどのこともなかったのですが、昭和二十七年の四月号を最後としてB5判と別れを告げ、五月号からA5判（今の型）と改めてからは、俄然熱心な読者からの通信が号を追うに従って増加してきました。

これは勿論、雑誌の大きさを変えると共に内容の方にも変化を加えたためなのですが、それからというものは、読者の声を誌面に反映させて、きわめて柔軟性のある編集ぶりです。読者からの通信は無論のこと、告白でも小説でも、意見希望といったものまでドシドシ誌上に盛りあげてゆきました。

従って読者の方では内容の特異性と相俟って、今まで只天下り式に読まされる立場ばかりだったものが、自分の意見や手記、手紙など誌上に載り出すものですから、自分たちの

雑誌として非常に身近かなものに感じたのでしようか、一日、一日と投稿数や通信数が増してきました。最高に達したのが、昭和二十九年の末から昭和三十年の春頃でした。

その頃は、手紙の転送や住所氏名の紹介に応ずる人達の住所氏名のお知らせもしておりましたものですから、そういった種類の通信が殊の外多かったようです。誌上で告白文を発表した人のもとへは、時には数十通の手紙が殺到することも稀ではありませんでした。誌上匿名の人への通信は一々住所氏名を対照



しなければならず、手紙の転送ということは中々厄介な仕事で一人がかゝりつきりでも、十分すぎる分量はありました。中には、何回も交わされる往復文書をすべてお互いに匿名でするといった人達もあって、おしまいにはなかなか手が回りかねたものです。

そんなわけでしたから、誌上の読者通信欄へ通信を掲載してほしいという希望も極めて多く、毎月掲載洩れの通信が机上に山積しました。結局没になったものは焼却してしまうわけですが、これが中々の量で冬の朝なんか焚火がわりに三十分も一時間も焼き続けたこともありました。そうかといって読者通信欄をむやみに増頁するわけにもゆかず、一ときは読者交歓欄として三行広告といった形式の欄を設けたこともありました。

読者通信による文通幹旋、手紙転送、同好者紹介といったサービスも昭和三十年五月特大号を最後として本誌が休刊してから終止符を打たれてしまいました。当時の情勢としては、そんなことよりも本誌の発行そのものに危惧をもたれていたくらいですから、やむを得ないことです。数カ月の休刊によって当然本誌の編集スタッフも潰滅し、読者通信係も姿を消してしまいました。

読者通信によって無二のよき友を得たというて立派なコーヒセツトを持って礼に見えられた方もありました。そんなことは、ほんとうに稀な例で、殆ど何かトラブルが起ったときのみ苦情を持ってくるというのが普通のようなのです。一例を挙げれば、こういうのがありました。仮にA君としておきましょう。A君が読者通信に「友を求めろ」といった文章を発表して十数通の通信が来しました。そのいづれとも文通の結果、A君は同年輩のB君と意気投合しました。しかし、他の十数人の文通者の中、C氏という中年の紳士がA君に熱をあげ、結婚してほしいとまで要求してきました。A君は自分にはBという友人が出来たから今後文通交際は一切お断りするとC氏へ返事したところ、怒ったC氏は、自分の要求をいれてくれないのなら、君の性癖を勤め先や親戚へ行つて暴露してやるといつて嚇してきたというのです。

私の方からC氏の反省を求める手紙を出してこの件は解決しましたが、中には、毎日のように同じ人から料金不足の手紙が来るので困っているが何んとかしてくれといった苦情もありました。封筒にも内容にも住所も名前も書いてないというのですから手がつけられ

ません。読者通信を悪用するといった手あいもなきにしもあらず、といったぐあいで、いろいろ迷惑を蒙った話もありますが、それは又別の機会に述べることにしましょう。

### 逢いたいという人

九州からわざわざ出てきたのだから是非逢つてほしいという人、東京から、名古屋から北海道から来た、といつて、ひきもきらず何かの用件で訪ねてくる愛読者。

或る日曜日の朝、今日は午前中に最後の台の校了をして昼から印刷にかかるのだから、とゲラ刷を前にして赤エンピツを持ったとき電話のベルが鳴りひびきました。受話器をとってみると、今東京から上阪したのだが、是非お会いしたいという。どんな用件かは知らないが突然きても駄目だから、用件を手紙で出してくれといつても、なかなか承知しない、とうとう五分でいいから、と強引にこのこ訪ねてきたのはいいが、これが、とうとう昼前まで、なんだかんだと粘りに粘って、機械待ちの校正をおジャンにしてしまったことがあります。

来る人来る人に逢つておいたら、もう仕事は何もしないでも、読者に対する応接だけで



身体が三つも四つもほしいとネをあげだしたのが、昭和二十九年ごろの事です。

最初のうちは、訪ねてくる人も少いし、又いろいろ話をきくと参考になることも多いので、つとめてお逢いするようにしていましたから、休みの度に訪ねてきて経験談を語り、写真のアルバムを眺めて帰る学校の教師、自分の撮った写真を手に、その苦心談を語る私鉄の社員、等々、他の人には、こういう話は出来ないが、貴方にだけはなんでも話せるとふくるる腹をすかしにくる人。その当時は千数百枚の写真を数冊のスクラップブックに貼ってありましたので、そのフォトを一枚一枚丹念に眺めるだけで、二時間も三時間も、かかるのですが、そういう人たちにも辛抱づよいお相手をして昼で潰した時間は夜の自分の睡眠時間をさいてでも、カヴァーしようという悲壮的な心掛も持っていたのです。

あとになって、昭和二十八年末頃から、一切お逢いしないと誌上で断り書きを載せたところ読者がわざわざ訪ねてきたのに会わないなんて怪しからん、と凄じい見舞で文句をいつてくる人も中にはありましたが、結局、会わないようにしむけてきたのも、心ない人たちの言動が大きな原因ではないかと今になって

思います。

何の用件で来たのか、口の中でブツブツ呟やきながら無言の行を続ける人、半日でも一日でも帰れという迄動かない人、給料はいらない、どんな下働きでもするから使ってくれという自称失業者。山のような急ぎの用件をかかえてジリジリしながら、そんな人に会っていると、こちらの方が先に頭へきてしまいそう、助けてくれと悲鳴を挙げたくなりま

す。

大体、手紙で用件を書いて来ずに、顔だけをニユッと出して突然逢いたいとか、電話で顔も見せずに声だけを聞かせにくる人たちの用件は符節を合せたように殆ど一致しているのも妙です。

自分の名前も住所も申し上げられないし聞いて頂きたくもない。只貴誌の熱烈な愛読者だということは特に強調します。さて、何月号に載っている誰某の住所氏名を知らせてほしい、といった希望が一番多いようです。

次には、自分の趣味とよく似た同好者、出来れば近辺に住む読者を紹介してほしい。モデルをかしてくれ、そちらにある一切の写真を見たい。没になった原稿を読ませてくれ。読者通信の中で誌上に載らなかったものを見せ

よ。読者の名簿を写されてくれ。雑誌に使用しなかった資料を閲覧させろ。写真撮影の際一緒に見学させてくれ。自分をモデルにしてくれ。等々、といったぐあいです。

男性でモデルにしてくれ、といったのも案外多いですね。先日、九州から今出てきたが、どこそこにいるから迎えに来てくれと、電報で言ってきた男がいましたが、早速車で指定の場所まで行って窓からのぞいてみると、ちゃんと郵便ポストの脇に、それらしい男がいるのです。

すぐ車へ押し込んで郊外の一軒家へ連れ込み、ガンジガラメに縛り上げて、海老責、吊り責とさんざんに責めあげた………ということになりましたと、その自称マゾモデル志願の男は思う壺と大変喜んだことでしょうが、現実には、そういうコースを決して辿りはしませんでした。近くの喫茶店まで誘って、いろいろ話を聞いて（ある女性モデル志願者にある約束の時間まで暫く間があったので）みましたところ、故郷を風呂敷包一つで飛び出してきたが、どんな仕事でもいとわずにするから、ひとつ使ってくれないか、というのです。男性モデル志願者の殆どは、誌上に載せてくれては困る、或は顔だけは出さないように



してほしい、といった希望で、モデル料はいらないというのが軌を一にしています。いくらモデル料はいらないといったって、誌上に載せなかったり顔を出さなかったら、何のためを使うモデルか、わけがわからなくなりまゝす。それでいて、中々いろいろの注文が多いのです。なかには映画スターにでもなったつもりの人もいるのですから、世はさまざまになア、と感心させられます。

無料でプレイをやってもらうつもりの人、よい男が、モデル志願者に多いと言ったら叱られるかもしれませんが、毎度モデル募集で応じてくる人たちを見ると、モデル志望というより、プレイ志望者といった方がよいと思う人が殆どです。これはモデル募集という広告で、やむなく自分の都合のよい方に解釈して志望してくるので、本来はモデルそのものを志望しているのではないということがいえると思います。先般問題になった「あけぼの会」という原忠正氏の主宰したクラブの会員のあり方から考えてみても、こういったマゾ・プレイ志望の人たちが意外に多く潜在しているのではないかと、思えます。

モデル料は支払う、然し、写真の使用に関しては一切支障はいわない、ということにな

ると、殆どのモデル志願者は尻込みをしてしまふものです。なかにはその点を承諾してもモデルとしての条件に合格しない人も少くありませんが。

### 女性のモデル志願者

男性モデル志願者、その多くはマゾ関係、ときには切腹モデル志願者もありますが、先に述べたのは、縛られたい、責められたいという男性（サジスチンを対象とするもの、男性を対象とするものを含む）についての話であります。女性を責めてみたいと志す男性、これはモデル志願者ということはいえませんが、こういった人々は当然のことながら非常に多いということは、一応うなづけるところであります。

しかし、女性のモデル志願者も、男性と同じように決して少くはありません。本誌の口絵写真を見て、自分もこれくらいならやれると志望してくる勇敢な女性もあります。そういう志願者は非常に熱心な人たちが多いです。例えば春日ルミさんのように、本誌の進展に大いに力をかけて下さった方がありますが、その協力的な態度にも拘らず、身体的な条件が残念ながらモデルとして適当しない

という人もあります。

「話の肩籠」で辻村氏が言及しておられた痩せて貧弱な身体 of 女性なんかも、その好適例で、何本も撮影しながら使用できないという有様です。しかし、読者の中には、こういったモデルでもよいから紹介してほしいという奇特な方が、数人もあらわれたのには、辻村氏と共に顔を見合せて驚いたものです。

その外、背中一面に白く目をむいた灸痕が一面にちらばっているといった女性がありました。これは灸責マニアの方にはまことに恰好のモデルかもしれませんが、どうも一般むきしません。顔も身体もよい人だけに惜しかったのですが、二十才か二十一位で何故、こんな大きな化膿痕が残るようなお灸をしたのかと不審に思ったものです。

一度、責めのモデルを志望している美人モデルがあるというので見に行ったことがありましたが、場所はある白線といっても、その頃はまだ売春防止法が発効していない時で、今でいえばコールガール式の割合立派な屋敷でしたが、紹介されたのは、一六〇センチ以上も背があり、のびやかな肢体と均整のとれた体軀の色白の美人でした。手足の恰好のよさ、膨らんだ胸、それに胴の附近のくびれな



どヌードモデルとしても、第一級に値すると思われる優秀な肉体の持主なのです。

ただ、どうしたわけか、二の腕の内側、臍の脇、内股、などといったところに素人芸とも見える奇妙な刺青を施しているのです。こんな美人がモデルになってくれるのなら、と惚々するような肌の美しさなのですが、その刺青があるため、折角ながらお断りしたことがあります。

その刺青というのが、普通一般に行われている模様とか図案とかいったものではなく、或る男の持物だということを示した稚拙な文句や男の姓名を無理矢理に彫りつけたものでないかと想像される刺青なのです。誘拐されて麻酔中にも彫られたものか、女もひどくその刺青を恥かしがっている風でした。

物腰、身体つき、言葉づかい等からして、もとは良家の子女だったものが、何かの理由で転落したという風にも見受けられました。彼女の刺青を見て、サディスティックないろいろの空想が湧いてきて、身の上話を聞いてみたい意欲にかられたのですが、何にか、始終おどおどとおびえているようで「ええ」とか「はあ」とか言うだけで返事をしてくれずそれに、ヒモらしき愚連隊風の男が部屋の外を

うろろするものですから、とうとう聞かずじまいになってしまいました。

女性のモデル志願者の中にも、先に申しました男性のモデル志願者と同じように、モデルにはなりたいが、自分の顔は誌上に出して貰っては困るといった人がかなりあります。

しかし、これも誌上に出さないということになれば、編集の立場からは純粹にはモデルということではできませんので、プレイ志願者ということになるかもしれません。そういうプレイ志願者について変った話は、又別の項で述べることにしましょう。

### 若い女性のハラキリ

昭和三十五年二月二十四日の産経新聞の夕刊に次のような記事がありました。一段の行数にして六、七行といった小さい社会面の市井記事ですが、二十一才になる女性の「切腹自殺」というのですから、ちょっと興味がひかれました。

#### 女子大生が切腹自殺図る

二十四日午前八時五十分ごろ、京都市上京区寺町通り広小路上ル、聖浮華院内の竜泉院（小林至純住職）風呂場で、下宿人の京都外大短期部二回生近藤正美さん（二二）＝鳥取

県日野郡日野町＝が出刃包丁で腹部を三カ所を突き刺し、左首すじを切って苦しんでいた。近藤さんは第二日赤御池分院に收容されたが二週間の傷。（二月二十四日、産経新聞）

見出しには「切腹自殺」とありますが、時間的には午前九時前、場所を風呂場に選んでいること、並に二週間の傷というのは、自殺にしては軽微に過ぎはしないか、等ということから、自殺としては、いささか不審に思われるふしもないではありませんが、なにしろ短い報道ですから、この記事の範囲内では、原因なども書いていませんし、詳しい事情はわかりません。

出刃包丁で腹部三カ所を突き刺し、というのですから、立派に切腹といっていいかと考えられます。風呂場というのはですから、或は裸になっていたのかもしれませんが。少くとも刃を当てた腹部はくつろげたに違いありません。なににしても、若い女性、しかも女子大生というインテリ女性の割腹というのはですから、関心を持たせた記事でした。

#### きいろいサクランボ

スリー・キャッツの「きいろいサクランボ」以来、声によるセクシー攻勢が激しくなっ



きましたので、又々道学者先生からお小言の一つも頂くことになったと聞きました。もう二十何年前、渡辺はま子の「忘れちゃ、いやよ」が治安維持法第十六条で禁止になった頃のことを思えば、民主主義になったお蔭の自由さを有難く感ずる次第です。

なにしろ、安寧秩序を乱し、良風美俗に反すると認めた時は警察官はこれを禁止することを得、というのですから、肌脱ぎになっていて「おい、こらッ」とやられる警察犯処罰令どころの騒ぎではありません。

しかし、流行の推移というものは、カミナリ族やマツハ族のスピードよりも早いものだと驚かされます。大分以前、ヘップバーン・スタイルというので、若い女の子が我も我もと髪を短くしたことがありましたね。街を歩いていて、日本中の娘が皆断髪に刈り上げるのじゃないかと案じたことがあります。

或る老婦人教育家は口角泡を飛ばして、娘たちこの風習を慨いたものですが、よくしたもので半年も経たぬうちに、このスタイルも街から姿を消してゆきました。サックドレス然り、カリブソ・スタイル然り。「お富さん」という流行歌が一世を風靡した時、その下劣さに悲憤した人の口が乾かぬうち、この

レコードは埃をかぶってしまいました。

害だ、怪しからん、何故こういうことが流行するのか、等と憤ったり議論している中に御本尊の流行の方は、ドンドンと先へ先へと進行してゆくのですから、本当にその推移のあわただしさには、あきれるばかりです。一種の被害妄想症というのでしうか。道学者先生は、その度にヒヤヒヤして高血圧になっってしまうのではないかと、私たちの方が心配します。

カミナリ族が白いヘルメット、革のジャンパー、半長靴に防塵メガネといういでたちでオートバイのマフラーをはずして、うなりを上げてハイウェイを突っ走っている蠟燭たる風景も、さていつまで続くことでしょう。

さて、脇道へそれましたが、標題の「きいろいサクラランボ」のことですが、サド趣味の人たちも、どうやら、きいろいサクラランボがお好きのようです。といっても、セーラー服を着せたり、お下げに結わせたりで、年令よりもうんと若づくりに扮装や化粧をするというのだったら結構ですが、現在の日本の法律では、未成年者を対象とすることは、よし御本人の承諾があってもいけないことになっておりますから、あらぬ御希望は無理というも

のです。

こういう馬鹿げた親がありました。大阪のカスバと言われる地区での話です。小学校上級生位の女の子をモデルに使ってほしいというのです。聞いてみれば年頃になったらパンをさせるつもりだが、それまで遊ばせておくのは勿体ないから、モデルにでもして稼がそうというのです。いやはや、恐れいって逃げだしたってわけです。

進駐軍の兵隊が、まだ街中をうろろしていた頃、彼等のラブコースに当る写真館では恋人のヌードを撮らして、マスケットにする仕事？で大分目の保養をしたそうですが、時には、日本女性の体位の研究でもしている篤学の士が知らないが、まだ子供供した日本の女性を連れてきて、そのヌードを撮らしたことがあった由、あちらでも、そういう趣味があったのかと目を瞠りました。

進駐軍といえ、外人の方で本誌の熱心な読者の方があります。そういった方々の話や外人のコレクションの話など、珍しい事件を次回の本欄で述べたいと思います。前回にも述べましたが、お気づきの点は御遠慮なく通信下されば幸甚です。



# 悪夢の記憶

塔 婆 十 郎

## 1

いまから十五年前、つまり、戦争がもっとも苛烈だった頃のことである。

アメリカ空軍のB二九の編隊は、ついに東京上空へ姿を現わし、日夜の爆撃を開始していた。

当時、杉並に住んでいた杉原千代子、娘のマリ子と二人で、東京近県の山間の部落へ疎開していた。

千代子の夫は英国人で、日本軍の真珠湾攻撃とともに、本国へ帰ってしまった。つまりマリ子は日英の混血児だった。

都会は空襲されていて、さすがにここは田舎だった。三月になると、春祭りである。

だが、東京からの疎開者には、心の浮かない春祭りだった。

「せっかくのお祭りだけど、こんなご時世じや、お前にいい着物も着せてやれないね。お母さんは戦争を呪うわ。戦争で一番不幸になるのは、結局、女ですもの……」

針仕事の手を休め、千代子は静かな怒りをつぶやいた。

「またお母さんの愚痴がはじまった。私、着物なんか着られなくてもいいの。そのかわりに、この赤いリボンを髪に巻いて飾るわ」

村の雑貨屋で見つけてきた人絹の赤いリボンで髪をくくり、マリ子は明るく笑った。

「こんなリボンだって、もう町には売ってないんですって。どう？ きれいでしょ」

パーマメントも禁じられていた。髪の毛をうしろに束ねて結ぶだ



けの、いじらしい祭りの髪飾りだった。

(かわいいそうに……)

と千代子は胸のなかで泣いた。

「私もお祭り見にいかうかしら……」

とマリ子が腰をうかせた。十八才の娘にとって、祭りとながつけば、それは心の弾むものにちがいがなかった。

「行ってもいいけど、気をつけてね」

千代子は、愛情ぶかい眼ざしを娘にむけていった。

混血児であるために、マリ子の髪にはやや茶色が混り、瞳は母親似の美しい澄んだ黒色だったが、皮膚の色はぬけるように白い。

排他的な村人たちから、一種の敵意めいた異様な眼で見られるのだ。

「大丈夫よ、お母さん」

マリ子は愛らしい笑顔をみせていった。父親のいない家庭になってから、意志の強い娘になっていた。

## 2

ところが、祭りの終わった翌日、この村の農業報国会の事務所で、

盗難事件がおきた。

盗まれたのは、現金で三千元。当時の三千元は大きい。

所轄の警察がさっそく犯人の捜査を開始した。事務所の内部には怪しい者がなく、盗んだのは、外部の人間ということになった。

と、その事務所の小使いで、栄作という老人が耳寄りの証言をした。

ちようど金が盗まれたと思われる時刻に、事務所の裏の雑木林を

一人の娘があわてて馳けていくのを見たというのである。

それをきいて巡査は意気こんだ。

「で、その娘の面相、風体は？」

「さあ、うしろ姿でしたから、顔はわかんねえすが、たしか、黒いもんぺに白いシャツを着ていたと思ひやしたが……」

黒いもんぺに白いシャツの女なら、この村にいくらでもいる。

「そのほかに、とくに気のついたことは？」

と、巡査はきいた。

「そういえば、頭に何やら、赤い紐を巻いていたように見えました……」

栄作老人は、眼をしょぼしょぼさせながら答えた。

巡査は眼を輝やかした。

赤い紐……赤いリボン髪に巻いた娘……有力な手がかりである。村中をしらみつぶしの聞きこみがはじまった。

マリ子がひっぱられたのは、その翌日だった。この二、三日、マリ子の髪に赤いリボンが巻いてあるのを見た者はたくさんいた。美しい混血児は、どんな小さなおしゃれをしても田舎ではよく目立つのだ。

「そ、そんな、うちの娘が、ひと様のお金を盗むなんて」

千代子は蒼白になって、卒倒しかけた。

警官にひかれていくマリ子を、近所の村人たちが、好奇と憎しみの眼で見送っていた。

その野次馬の肩越しから、敏代という娘がのぞいていた。敏代はマリ子と同じく十八才であるが、この村でも評判の不良少女であっ



た。その敏代には、あざやかな緑色のリボンが巻かれてあった。

「マリ子、マリ子！」

千代子は、きちがいのようになって、警官とマリ子のあとから、ついていくのだった。

3

「——国をあげての非常時だというのに、ドロボウなんかするとは何事だ。それで米英に勝てると思うのか。きけば、お前の父親は英人だというではないか。するとお前の身体には、半分敵国人の血が混っているわけだ。おい、白状しろ。農業報国会の金庫から金を盗んだことを、素直にいうんだ！」

小さな田舎の警察だから、署長みずから、マリ子の取調べにあたった。

「私ではありません。私はひとのお金なんか盗みません。私の両親は、私をドロボウなんかに育てません」

マリ子は、ひるまずに無罪を主張した。その瞳は美しく澄んでいた。

「ううむ……」

マリ子の清純な瞳に見つめられて、署長はたじたじとなった。

そのとき、ちょうど署長のところにきていた五十年配の男がニヤニヤしながら寄ってきた。マリ子の白い顔を無遠慮な眼で眺めまわしながら、そばから口をはさむのだ。

「ねえ、署長さん、こうみたところ、そのお嬢さん、ちよつとやそつとでは、口を割りませんぜ。どうです、その仕事はわたしにまかせてくれませんか。いまは旦那がた忙しい折柄だ。あたしがお手

伝いして、うまく泥を吐かせてみせますよ」

この男は、矢田久五郎といって、この村の顔役の製材業者である。表むきは堅気で、この村の存郷軍人会の会長であり、また防犯協会の役員をしているのだが、裏へまわれば賭博場なども持ち、何をやっているかわからない男だ。しかし、この近在では有力者だった。

「そうだな、こういうことは、矢田さんにまかした方が早いかもしれない」

と、署長がいった。

空襲の激化とともに、東京から三時間しか離れていないこの土地にも非常態勢が敷かれて、署内も人員が手薄だった。

この顔役にマリ子をまかせることを危惧しながらも、署長はついそんなことを言ってしまったのだ。

（しめた！）

と思ったのは、矢田久五郎だった。

この男は、千代子母娘が、この村へ疎開してきたときから、マリ子に眼をつけていた。

こんなに美しい、色の白い清純な娘を久五郎は過去に見たことがなかった。この五十男は、ひと眼みたときから、マリ子にぞっこんまいてしまったのだ。

そこで三カ月ほど前、母親の千代子にそのことをもちかけた。つまり「金はいくらでもだすから、マリ子をおれのメカケにさせないか……」というのである。

この申出を、千代子が拒絶したのは、無論のことであつた。千代子はこの思いもよらぬ侮辱に激怒し、泣いてくやしがつた。



と同時に、久五郎のほうでも憤激したのである。

（ふん喰うや喰わずの売り喰い生活をしているくせに、なんていう生意気な母娘だ。この村に住んでいて、おれの意に従わない者はどうなるか、おぼえているよ……）

久五郎は、いっか千代子母娘に仕返しする隙を狙っていた。可愛さ余って憎さが百倍という心理である。

だから、マリ子が窃盗の嫌疑をかけられて警察へつれてこられたのは、久五郎にとって絶好の機会だったのだ。

## 4

久五郎の家は、警察署のすぐ裏手の川ぞいに建っていた。

製材業者の家らしく、二階建て総檜造りのこんな田舎には珍らしい、ぜいたくな構えだった。母屋に隣接して作業場がある。

マリ子はその製作工場の材木倉庫の中へつれてこられた。

「な、なにをしようというのです。私にはなんの罪もありません。早くお家へかえして下さい！」

マリ子は、はげしい不安をおぼえて久五郎にいった。こんな倉庫の中へ連れこんで、この男はなにをしようというのか。材木特有の湿気と鋸屑の匂い……それがマリ子の心に不気味な圧迫を与えた。

「ふふふ……署長さんから預ってきた、だいじな犯人だ。そう早くは帰せねえよ」

久五郎が、ニヤリと笑って腰をかがめ、マリ子の顔をのぞきこんだ。そのうす笑いのなかに、堅気の人間にはない凄みが生じた。

この倉庫には、材木を束ねるための荒縄がいくらかもある。久五郎の手が、その一束をつかんだ。

「うふ、うふ、うふふ……」

久五郎の舌なめずりのような笑声とともにマリ子はその場にねじ伏せられ、たちまち、うしろ手に縛りあげられた。

「あッ、痛ッ、なにをするんです！」

抵抗したが、このあぶらぎった五十男の腕力は、相当なものだった。腕をへし折られるかと思うばかりの乱暴さで背中へねじあげられた。材木を束ねるような縄さばきだった。

胸をしめつける縄の強さに、マリ子はウウツと息をのんだ。

ほそい手首は左右とも背中にくくりあげられ、もう動かすことができなかった。手首の皮膚のまわりに、ザラザラした荒縄の感触が喰いこみ、その痛さにマリ子は泣き顔になった。が、ここで負けてはいけないと思った。

「私は縛られるような悪いことはしておりません。私にかけられた疑いは、そのうちに必ず晴れます。それまではけっして逃げたり暴れたりしませんから、こんな縛るようなまねはやめてください！」  
強く訴えると、マリ子はそのまろい美しい瞳をキッとさせて、久五郎をにらんだ。

「うふふッ、なんてまあ、可愛らしい娘なんだ。まるで猫みてえな眼をしてやがる……」

マリ子の言葉など、久五郎の耳には入らなかった。久五郎の分厚い唇が、涎を溜めて濡れた。ふくらんだ臉の下のはそい眼が、濁って燃えた。

「ああッ……」

マリ子は戦慄した。全身の血が凍るような恐怖だった。

この五十男の眼は、窃盗容疑者から弁明をきこうとする在郷軍人

会会長の眼ではない。防犯協会の会員の眼の色でもない。

ふまじめな眼光だった。不純なうす笑いに濁った眼の表情だった「助けてッ」

不穩を感じたマリ子は、うしろ手に縛られたままの恰好で、この倉庫の戸口にむかって逃げようとした。が、駄目だった。

縄尻は、久五郎の手のなかにしっかりと握られているのだ。だから久五郎は、あわてずにその場に立っていた。五メートルほど駆けただけで、マリ子の背の手首と、久五郎の手の縄が、ピーンと張った。すると、勢い余った反動で、マリ子の身体が、胸からぐいとのけぞった。

「うふふふ、駄目だよ、逃げられないよ」

久五郎が、ほそい眼をいっそうほそめて笑った。得意げに赤鼻をうごめかし、しっかりと握っている縄尻を、ゆっくりと手操った。

「そら、おいで、おいで……」

久五郎のそばには、頑丈な木の椅子が置いてある。荒削りの木を組み合わせて、ぶっつけただけの手製の椅子だ。

縄尻をひかれてあともどりしてきたマリ子の身体は、その椅子の上に、ドタリと



げこんだ。

いや久五郎がその椅子に坐らせるようにうまく引ッ張ったのだ。

「さあ、ゆっくりとここにお坐り、可愛いお嬢さん……」

久五郎は長い縄尻を利用して、マリ子の上半身を、その椅子にぐるぐると縛りつけた。

「ああッ……」

マリ子はもがいた。必死に立ちあがろうとした。こんな固い頑丈な椅子に縛りつけられたら、もう逃げられない！

だが、立てなかった。久五郎の両手が、上からマリ子の肩をつかんだ。マリ子の腰は、固く痛い椅子の上に、無理やりにおさえつけられた。

久五郎は、べつの縄束を手にとると、マリ子の腹と椅子の背とを、ギリギリと縛りつけた。グウッ……といった。縄が腹のなかに喰いこむ音だった。マリ子は苦しげに口をあけた。顔がゆがんだ。

「どうだ、逃げられるものなら逃げてみるがいい。立てられるものなら、立ってみろ。うふふ……」

久五郎が、心地よげに笑った。そして、マリ子のブラウスの襟



に手をかけると、それを力い  
っぱい手前に引ッ張った。乱  
暴な力だった。洗いざらして  
もう古くなっている木綿のブ  
ラウスはビリリッと裂けた。

「あれッ！」

マリ子はもがいた。白くふ  
くらんだ十八才の乳房が、ブ  
ラウスの裂け目から、むっく  
りと形をあらわしたのだっ  
た。

## 5

そこへ、署から刑事が一人やってきた。須賀というまだ若い刑事  
だった。

「やあ、矢田さん、ご苦労さまです。どうです、調べは終わりました  
か？」

この刑事は、署長からマリ子の様子を見てくるようにと命令され  
てやってきたのだ。

手には竹刀を持っていた。

「いや、これからなんですよ。いまね、あたしの顔をひっかくやら  
突き飛ばすやら、さんざん暴れて仕方がないので、こうしてやっと  
縛ったところです。いやはや、この娘はみかけによらず、たいへん  
不良少女ですよ」

久五郎は、濃い頬ひげに手をあてながら、さもてこずったという



表情でいった。

「うそです！」

と、マリ子は首をのばしてさ  
げんだ。が、相手にされなかつ  
た。

「だまれッ、なにがうそだ！」

須賀刑事は大声で一喝した。

「世話を焼かさずに、早く本当  
のことを白状しろ！」

須賀の手にある竹刀が、ピツ  
リッと非情な音をたてて、マリ  
子の肩に鳴った。

現在の民主警察においては考

えることのできない、暗黒政治の戦時下だった。

マリ子は息をのみ、その苦痛に肩をすくめた。マリ子にとって、  
この拷問は空襲よりも怖ろしいものになった。

「矢田さん、これをお使いなさい。これなら骨を痛めずに、肉だけ  
が鳴りますから、こんな小娘を調べるときには、効きめがあります  
よ」

といって須賀は、持ってきた竹刀を、久五郎に渡した。殺伐な時  
代だった。

「なるほど……」

うなずいて、久五郎はその使い古して褐色になっている竹刀を受  
けとった。

「じゃ、すみませんが、ぼくはこれで失礼します。いま隠匿米を摘

発するために、各村部落を巡っていて忙しいんですよ。これも戦争に勝つためだから仕方ありませんがね、あははは……それでは、あとはあなたにおまかせします」

という、須賀は威勢よくこの倉庫から出ていった。若い元気な須賀が去ると、この部屋には、湿った静寂がもどった。

「きいたか、マリ子。おれはこんなにも警察から信頼されているんだ。さあ、これから思うぞんぶん責めてやるぞ、うふふふ……」

久五郎は、竹刀をマリ子の鼻さきに突きつけていった。マリ子はふるえあがった。

すでに生きた心地はなかった。しかし、久五郎ははじめからマリ子の身体を叩くようなことはしなかった。叩くよりもっと陰険で残忍な手段を思いついたのだ。

久五郎は竹刀の先端を、マリ子のうしろ手の、手首を交叉して縛ってある縄目のあいだにねじこんだ。

「あッ、うううッ、なにをするんです！」

新しい苦痛を感じて、マリ子はうめいた。

手首を縛りあばた縄目が、きゅうにきつくなったのだ。血液のめぐりもとまるほどだった。

「ふふふ……こうしてやるのよ。おれはな、お前のその可愛い顔が苦しみにゆがむところが見たいんだ。さあ、泣いてみる、わめいてみる。どうせここは誰もこない倉庫のなかだ。その白いきれいな顔を、クシャクシャにして吠えてみる！」

いいながら、久五郎の手に力が入った。

竹刀の先端が、マリ子の背中肉を、ぐりぐりと小突きだしたのである。

「ウウウッ……」

たちまちマリ子は胸をそらせて苦しみはじめた。

たまったものではない。久五郎の力は、情容赦もなく、マリ子の背中をこじりあげるのだ。

ぐりぐりぐりぐりッ……

ぐりぐりぐりぐりッ……

竹刀の先が、柔らかい肉をとおして、骨までも突きなぶる。背骨がゴリゴリと鳴った。

「ウウッ、ひいッ——」

耐えきれずに、マリ子は椅子の上でのけぞる。せいっぱいにのたうちまわる。

すると、胸にかかった縄目が、いっそうの強さでしめつけた。破れたブラウスの襟から、ふっくらと顔をのぞかせた十八才の白い乳房が、苦痛にのけぞってふるえる。

なおも縄目をこじりあげる久五郎、乳房の美しいまるみは、そのためにザラザラした荒縄をよりはげしく噛みこんで、柔らかい半球体は、むざんな形にくびれるのだ。

「へへッ、こいつはいいや！」

久五郎の眼がその乳房に吸いつき、ゴクリと咽喉を鳴らす。竹刀の手を休めて左手をのぼすと、マク子のブラウスをつかみ、破れた襟もとから、さらに大きく無慈悲にひき裂いた。

ビリリッ……と音がして、ブラウスはその下の肌着ごと破れ、ボロ布のようなむざんな布きれとなって剥がされた。

「ああッ……」

この恥辱に、マリ子の顔は赤く火照った。上半身、ついに裸にさ



れてしまったのだ。

まどっているものは、肌に喰い入っている数条の縄と、その縄と肌のあいだに落ちないでとどまっているブラウスと肌着の残片だけであった。

「ほほうッ、なんてまあ、いい肌をしてやがるだろう！」

久五郎はうめくようにいった。

日本人の肌目のこまかさに、英国人の色の白さを足した皮膚の美しさだった。久五郎はまるで匂いでもかぐように鼻を鳴らして、眼をマリ子の咽喉もとあたりまで近づけて、この混血娘の美身をむさぼるのだ。

「ああッ、いやッ、いやッ！」

マリ子は屈辱と恐怖で、必死に身を硬くした。たとえ、上半身だけといえども、かつて素肌を男の前にさらしたことは一度もない娘なのだ。

「うるせえッ」

と、となり、久五郎はまた竹刀を握りしめた。

その竹刀の皮のついた先端を、こんどは、マリ子の背後ではなく前の左右にふくらむ乳房にかかった縄目のあいだにこじり入れたのだ。

「そうら、痛いか、痛ければ泣け、泣けッ、えへへッ」

自分は竹刀の柄を軽くつかみ、ぐりぐりぐり、ぐりぐりぐりと揺すりまわすのだ。

「ひいッ、ひいッ、ああッ、うーッ……」

白い咽喉を大井にのけぞらせて、マリ子は絶叫した。上半身のもっとも柔らかく、敏感な部分を責めつけられたのだ。キリキリと身

をしめあげる荒縄、突きなぶる竹刀。

乳首がふるえた。呼吸がとまる！

「はあッ、あッ、あッ、もう、もう、ゆるしてえッ！」

もだえるたびに、椅子がガタガタと床に鳴った。あまりの苦痛にマリ子は眼の前が暗くなった。

意識が遠くなり、耳もきこえなくなっていくのである……。

## 6

太腿に進い疼痛を感じて、マリ子は息をふきかえした。

「ああ……」

身体はまだ固い椅子に縛りつけられたままだった。

しかし、なんということか。上半身はおろか、いまは黒いもんぺも剥ぎとられ、マリ子はパンティ一枚だけのあられもない姿になっていた。

太腿にうけた痛みは、その素肌に竹刀が打ちおろされたからであつた。

「ゆるして……ゆるしてください……私は、ほんとうに、なにもしないのです……悪いことはなにも……」

マリ子は、あえきながら哀願した。

だが、久五郎にとっては、この娘が窃盗の犯人であるかどうかはもう問題外なのだ。

もし、いまの世の中が平常だったら、こんな美しい気品のある娘を、こんなむごい恰好に縛りあげて、公然とこのうす暗い倉庫の中で、共に時間を過ごすことなんて、とうていできないだろう。

久五郎は、胸の底からゾクゾクするような気持を味わっていた。

娘の四肢を縛りあげて竹刀で小突きまわすことが、こんなにおもしろいこととは思わなかったのだ。

狂った時代の、これは狂った久五郎の楽しみだった。

「うふ、うふふふ……」

久五郎はふくみ笑いをして、また何かを思いついた。冷酷な思いつきだった。

「それ……」

久五郎はマリ子の胸に手をかけて、思いきり強く突いた。

すると、抵抗のできないマリ子の身体は、椅子ごとうしろの床にズシンと音たててひっくり返ったのだ。

「ああッ……」



頭を床に打ちつけて、マリ子はあらたな悲鳴をあげた。椅子に縛りつけられて自由のきかない身体が、うしろにひっくり返ったらどんなにぶざまな恰好になるか。

上半身は水平だが、縛られていない下半身は、腰かけたままの形で、宙に浮くようなあられもない肢態となるのだ。

「あれえッ……」

マリ子は宙に浮いた両足を恥しくない形にするため、必死になった。

「ふふ、ふふふ……」

久五郎は残忍に笑って、竹刀でその足をくずしてしまうのだ。

白い太腿は、苦悶にふるえた。やがてその太腿に久五郎の竹刀が打ちおろされ、むごたらしい赤紫色の痕がしみついていく……。

こうしてマリ子は、夜に至るまで、久五郎によって責めつけられた。

身体じゅうを打たれて咽喉がかわき、水が欲しいと訴えると、久五郎は大ヤカンの口から、マリ子の顔に水をぶちまけた。

夜になって、空気が冷えこんできた。マリ子がたまにかねて、便所へいきたい、という久五郎はそのままやれといって笑うのだ。

耐えていても、腹を竹刀で叩かれれば、我慢しきれずマリ子は死ぬよりもつらい屈辱にまみれた。

疲れ果てたマリ子は、ぐったりと虫の息になった。そのころになると、心配になったらしく署長がやって





千代子は泣きながら、マリ子を介抱した。

7

しかし、マリ子はその翌日の早朝、母親が気づかないうちに、寝床から這い出した。そっと外へ出て、もう母親のもとには戻らなかった。

裏の雑木林で、首を吊って死んでしまったのである。屈辱きわまり、身心を痛め傷つけられた十八才の娘の悲惨な覚悟の自殺であった。

母親にのこした遺書があり、自分はあくまで潔白であると、血のような言葉で訴えてあった。

娘の縊死体を前にして、千代子は声もなく蒼白の形相で坐っていた。母親は泣かなかった。唇を噛んで、つめたくなった娘の身体を両手でさすったり揉んだりしていた。

さすってもさすっても、マリ子の肌についた黒紫色の縄の痕は消えなかった。腫れあがった竹刀の痕は消えなかった……

母親の瞳に、復讐の決意がひらめいた。

それから三日後、千代子は自分の家に榮作老人をまねいた。娘のことで、ぜひ聞きたいことがあると誘ったのである。

榮作老人も、今度の事件に関しては後味が悪かった。自分の証言が、こんな始末になってしまったのだ。

納屋を改造した四畳半にあって、榮作老人は、ドキリとした。

げっそりと頬がそば、髪もきゆうに白くなった千代子が、暗い中に妖鬼のように坐っているのだ。しかも、その白髪頭に、なんと、

きた。

マリ子が全身を紫色に腫れさせて半死半生の息でうめいているのを見ると、さすがに署長もおどろいた。

(ふうむ……まだ十八の小娘が、こんなに責められても自白しないところを見ると、真犯人はほかにいるのかな?……)

と、署長は首をひねった。

そこでひとまず、マリ子を家に戻すことにした。

母親の千代子が、変り果てた娘の姿をみて氣を失うほどにおどろいたのは当然だった。

娘のように、派手な色のリボンを巻いていのだ。

「お、おくさん、どうしたんだ、そんな赤い紐をわしに見せつけて……」

栄作は、憤然となっていた。

「栄作さん！」千代子の瞳孔が青白く光ってじっと栄作を凝視した

「栄作さん、このリボンが、あなたには、赤い色にみえるのですか？」

低く迫る声だった。

千代子が髪に巻いているリボンは、赤色ではなかったのである。

緑色だった……。

栄作は、小さな声で、あっとさげんだ。

恐怖の表情で尻ごみをはじめた。

「栄作さん、わかりました。あなたは色盲なのです。あなたの証言は、色盲患者のでたらめな証言だったのです！」

千代子は鋭い声をだし、栄作の肩をゆすって、はげしく迫った。

「お、おくさん、申しわけねえ！」

栄作老人は、紅緑色盲なのだった。赤と緑の区別がつかない人間なのだ。

「わ、わしは警察にいつて、このことを！」

栄作は千代子の顔を仰ぎ、あえいだ。

「もう遅い……娘は死んでしまった！……」

がっくりと千代子は肩をおとした。

千代子は眼をつぶった。その瞼の裏に、あの日、髪に緑のリボンを結んでいた、近所の不良少女、敏代の姿が浮かびあがった。

（——敏代さん、あの娘が真犯人なのだ！）

それから三日後、栄作老人は附近の川に落ちて死んだ。

さらに五日後、今度は敏代が、同じ川の下流で、溺死体となって発見された。

栄作は年寄りで酒好きだったから、酔っぱらって川に落ちるということも考えられる。

しかし、若い敏代が溺れ死ぬなんてことはあるだろうか？あのアマは泳ぎは達者だったはずじゃねえか。もしかしたら、殺されたんじゃないかなろうか？……村人たちは、そんな噂をささやくのだった。事実、医者が検屍したところによると、敏代の咽喉には、うすぐろい絞痕がついていたのだ。

その翌日、こんどは製材業でこの村の顔役である矢田久五郎が、附近の林の中で、猟銃によって射たれて即死した。これは、あきらかに他殺だった。

警察は、この三つの連続怪死事件の捜査を開始した。いかに多忙な戦時の警察でも、放っておくわけにはいかなかったのだ。

しかし、捜査をはじめた当日に、この事件は打ち切りになった。打ち切りざるを得なかったのである。

なぜか？……

東京から汽車で三時間離れた山間に住むこの部落民たちは、山間であるがゆえに、B二九の爆撃による恐怖を、過少にみていた。

警戒警報が鳴っても、空襲警報が鳴りひびいても、燈火管制という面倒なことはしなかった。

また、アメリカ空軍も、高価な爆弾を、基地でも軍事施設でもな



## 〔新版〕袖珍女体緊縛分譲写真集

Y組六十集 大名刺判(9×6.5寸) 印画紙焼付

各組一枚一組(全部送料共)

一組一枚	八〇円
五組五枚	三〇〇円
十組十枚	五五〇円
二十組二十枚	一〇〇〇円
三十組三十枚	一四〇〇円
四十組四十枚	一七五〇円
五十組五十枚	二〇〇〇円

Y1	全裸荷造棒しぼり	(大塚啓子)
Y2	乱れ黒髪裸見本	(大塚啓子)
Y3	観念した胡坐	(大塚啓子)
Y4	見事な飾り物	(大塚啓子)
Y5	浴室股間縛り	(大塚啓子)
Y6	麗しの緊縛裸像	(愛川悦子)
Y7	逆十字後手縛	(愛川悦子)

Y8	裸身の補われ人	(愛川悦子)
Y9	逆エビ後手足吊り	(愛川悦子)
Y10	全裸ねやの縛り	(田中芳代)
Y11	なまめかしき緊縛	(花坂道子)
Y12	全裸フトンむし	(大塚啓子)
Y13	蒲団貫通棒またぎ	(大塚啓子)
Y14	初々しき裸全身像	(岩井知子)
Y15	ヌード股間しぼり	(絹川文代)
Y16	全裸脚掌股間縛	(絹川文代)
Y17	セーラー後手吊り	(川辺砂登子)
Y18	庭園ヌード縛り	(絹川文代)
Y19	全裸全身軀自慢	(愛川悦子)
Y20	豊満双丘くらべ	(愛川悦子)
Y21	追いつめられた裸女	(愛川悦子)
Y22	遅ましきヒップ	(愛川悦子)

Y23	大の字晒し	(絹川文代)
Y24	縛り正面正坐	(絹川文代)
Y25	胸のポリウム自慢	(愛川悦子)
Y26	麗人受難の巻	(益田房子)
Y27	もつこれで許して	(益田房子)
Y28	むしられたスロース	(花坂道子)
Y29	全裸縛りの全身	(平野笑子)
Y30	鎮座する縛り女神	(平野笑子)
Y31	囚女後手柱縛り	(大塚啓子)
Y32	全裸強烈股間縛	(絹川文代)
Y33	ベッド縛りのポーズ	(絹川文代)
Y34	開股一番一直線	(絹川文代)
Y35	縛り腰巻色模様	(絹川文代)
Y36	亀田股間縛正面	(絹川文代)
Y37	全裸椅子またぎ	(田原美佐子)
Y38	妖艶闊のしぼり	(絹川文代)
Y39	椅子またぎ裸後手	(田原美佐子)
Y40	強烈第手首縛	(田原美佐子)
Y41	ハタカ縛り人形	(絹川文代)

Y42	濃艶ハタカ縛り	(絹川文代)
Y43	あられもなき開股	(大塚啓子)
Y44	全裸変形股間正面	(大塚啓子)
Y45	後手立木吊り	(村井知可子)
Y46	全裸後手壁ハリツケ	(愛川悦子)
Y47	全裸寝台乗取責め	(花坂道子)
Y48	振袖令嬢後手責め	(花坂道子)
Y49	長襦袢後手しぼり	(花坂道子)
Y50	ワンピース縛り	(花坂道子)
Y51	手吊り裸身の乱舞	(絹川文代)
Y52	柱縛り観念の図	(絹川文代)
Y53	不行儀姿態の美	(絹川文代)
Y54	カメラに晒す全裸	(大塚啓子)
Y55	緊縛女体の開陳	(絹川文代)
Y56	膨隆突出した臀部	(絹川文代)
Y57	前手錠全裸像	(大塚啓子)
Y58	股間縛開股の絵	(絹川文代)
Y59	聖壇のさらし者	(絹川文代)
Y60	エビ責めの表情	(絹川文代)

いこの寒村に、無駄な消費をすることは、めったになかったのである。

しかし、その夜、東京を猛爆してきたB二九の編隊のうち、数機は、おのれの胴体に抱えた爆弾を投下しきれずに、まだ数個を積載していた。

東京上空から、基地へ戻る帰途、その爆弾をこの部落に、ぜんぶ放擲していったのである。

轟然たる爆裂音とともに、村はたちまち火の海となった。警察署はその内部に勤務する人員と一緒に微塵となって吹ッ飛んだ。

混血の美しい娘が苦悶した忌わしい材木倉庫も、娘の復讐を遂げた哀れな母親の眠る納屋も、火炎の渦のなかに没した。

こうして、戦時中に行なわれた悪夢の一つは記録から消えた。

しかし、あの暗黒の時代の、悪夢の記憶はいまもなお、我々の胸底から消えてはいないはずである。

(終)

## 談 放 轡 猿

(終 回)

三 鷹 家 浮

「映画の中で、美しい女が縛られたり、猿轡を嵌められたりする場面の一番多いのは、何処の国のどんな映画でしょうか……？」

読者の皆さん。あなた方が、若しもこういう質問をお受けになったとしたら、一体、何とお答えになるでしょうか……。

「いう迄もなく、それは日本の時代劇映画だ……」と、即座にお答えになれるでしょう。

然り！ かく云う筆者自らも、左様答えます。

——神が我等人間に与え給うた男女の生理差——それがともすると、男性として女性に暴力を振わしめます。

わけでも日本の封建時代の、頭にチョン髷。腰に人切庖丁を差していたその頃には、婦女の強奪や誘拐、その他美女の受ける緊縛や猿轡の被害が、どこの国よりも多かった事は、さもありなん、事実と云えましよう。

さて、今回は愈々「猿轡放談」の終回と致しまして、我等KK党の端に連なる——但し懷古派の——筆者の見た、日本時代劇映画の上に現われた、美女の被縛猿轡の場面、に就ての、あれこれを述べてみましょう。

筆者は前回で、猿轡の形態を仮りに、東洋

型」と、西洋型」に分けました。

そしてその折——日本の時代劇映画に現われた女優被猿轡の場面で、西洋型に嚙ましたものを観た人は滅多にあるまい——と申しました。……如何にもその通り、アノ西洋型の文字通り口を割って嚙ましたそれを、見る事は滅多にないのです。

然し茲に、筆者が珍しくもその時代劇の中に、かの西洋型？なる猿轡を嚙ませた場面があったのを知っていますので、一寸御紹介してみましよう……。

——勿論、読者諸賢も御覧になった筈ですが——それは昨年の晩春から大映系で封切られた、「女と海賊」で、これは長谷川一夫と京マチ子のトリオによって構成されていました。が、その映画の中程で、京マチ子扮する町娘の小糸が海賊船に囚われ——といっても、これは強奪や誘拐されたのではなく、娘が、木村功扮する手代の幸七と墮落ちして、港に舛ってあった船に海賊船とは知らずに、追手の眼を逃れる為に隠れる。いつの間にか、それが出航したので事実上、囚われの形になるのだが——船倉に男と離されて独り閉じ込められる。

この時に嚙まされていた猿轡が即ち、こう



「解  
いといくれよ！解  
いといくれよ！」



した日本時代劇映画の上では滅多に見掛けな  
い「西洋型」であったので、筆者は非常に興  
味深く観賞もし、且つ記憶に止めている訳な  
のですが、まったくアノ場面は、我れらKK

党には中々の見ものであったと思います。  
日本手拭を、口を割ってガッチリ噛まされ  
た京マチの艶姿！ 唯惜しむらく、アノ場合  
の手の緊縛が、これも筆者のいう「東洋型」

いよいよ、これから縛られる……或は猿轡  
をされる場面が来て、いざ！と、こっちは緊  
張して観ていると、トタンにこれが、カット  
される。

(前回述べた——縄目を胸から背後に廻  
してかれたもの)でガッチリのものを見  
せて貰えたら、それこそ、かのスナップ  
は末代迄の記念として、この種コレクシ  
ョン・マニアの渴を癒やすに充分であっ  
たろう……と思うにつけても残念です。  
ところで残念ついでに、筆者がこうし  
た場面の映画を観て、常に残念に思う事  
が今一つありますので、述べてしましよ  
う……。

人間が、その口に猿轡を被る場合には  
殆んど全部とっていい位、手の自由を  
奪う目的の緊縛が為されます。従って手  
足の緊縛と猿轡とは密接な関係のあるこ  
とは、もう前回にも、くどい程述べまし  
たので、お判りでしょうが、筆者はこう  
した縛りの現われる画面に常に一種の不  
満を覚えます。——それは何か？と申し  
ますと、手足の縛りにしろ、また猿轡に  
しても、それを遂行する道程？を見せて  
呉れない……つまり、こうです——。

次に映った場面では、もうチャンと縛りが終りの……猿轡をされての……これでは全くウンザリです。

我等の願いは、こうした縛りや猿轡を観ている前で、順次に行って欲しい——即ち、道程を見せて欲しいものです。

では、見せて呉れたものはないかと云うと、偶にはあります。

また古臭くなりますが、昭和十一年頃の松竹トキー映画で、高田浩吉、飯塚敏子トリオに依って構成された「次郎吉格子」のラストに近く、飯塚敏子扮する「お新」（であつた？）が志賀靖郎扮する「自雷也床の仁吉」に縛られ猿轡をされる場面がありました。

これは中々の圧巻で、仁吉がお新の持つて来た手切金を受取って、この金を眺めたトタン！サッと顔の色を変えます。……と云うのが、自分が昨夜、浪人者親娘の家に忍び込んで強奪した金（次郎吉が盗んで親娘に恵んだもの）の封印と同じだからです。（中略）

そこで帰りかけるお新に飛びかかり、違い棚の上に置いてある捕縄を手にとって、女の両手を背後に捻じ上げ、先ず手首に縄をかけます。そして「解いとくれよ！解いとくれよ！」と絶叫するのを構わず、縄をその胸へ廻

してギリギリと締め上げます。

縛りが終ると、今度は手拭で猿轡を嵌めますが、この道程全部が観客に見せつつ行なわれたので、当時まだ若かった筆者なども、大いに酔いしれたものでした。

縛りの道程はなく、猿轡だけの道程なら戦後にも一度お目に掛けています。

それは、故阪東妻三郎が東映で演った「天狗安」での一場面で、この時の、土蔵の中で縛られ監禁される役の「お静」という女に入江たか子が扮して、それを見せました。

お静が土蔵の中で、柱に既に縛りつけられています。これは「安」と会わせない為にそうされるのですが、悪親分の用心棒に「戸上城太郎が扮していて、親分が「おい」と目配せすると、この用心棒が手拭をグツとしいて凄味を見せてから、お静の鼻口へそれを当てがって絞め上げます。

この場面も中々の嬉しい猿轡の道程が見られました。惜しいことに、筆者は何故か入江さんの時代劇向きしない顔つきが、先の飯塚さんの時程の魅力を呼びませんでした。

この、「おい！」とか「やい！」とか云って、これから猿轡を嵌めてやるぞと威しを、手拭をしごいて見て、それから事を行うとい

うやり方も、サジイストを喜ばせる見せ場でしょう……。

二年程前の松竹映画で、かの山手樹一郎氏原作の「青空剣法」の改題「弁天夜叉」が上映された時も、そのラストに近いシーンで、高峰三枝子扮する倉屋の女将お世紀が長襦袢一枚で荒縄に縛られていて、別間には救い主の「高田浩吉」扮する曾我平九郎が来ています。

お世紀を攫って来たのは女賊のお紋で、このお紋が平九郎に惚れていて、例の女の嫉妬から、お世紀を監禁している訳なのですが……雪代敬子扮するこのお紋が、「いい態だよ！いまにもっと、いい目に遭わせてやるから！」と毒づいたアト（おい）という目配せをしますと、子分の一人が心得て、「やいッ！」と手拭をしごいて見せるところ迄で、ここでカット、惜しくも筆者の望む道程は見せてくれませんでした。

時代劇映画の上に現われる、「女体緊縛と猿轡」の場面に憧れて、筆者もよく映画を観ます。とり分け、先程から申しました……縛りにしる猿轡にしる、その道程を見せてくれるものがズンと楽しみで、いつもそれを期待しますが、中々そういう場面には出会わしま



せん。

最近のこの種、傑作との報を得て、寸暇を割いて、かの東映の「千鳥の印籠」や大映の「薄桜記」等も観ましたが、これらは両方共にその猿轡が、筆者のいう「東洋型」であった事は勿論でしたが、……その東洋型のうちでの二種とみられる——鼻に掛けない唇だけの外側からの縛り——であった事が、何かと云えば鼻口をモロに縛るテの多いこれ迄の映画に比べて、一寸珍らしく感じられました。これらの両方供が全く瞬時のカットでアツケなく、歎息を洩らしたことでした。

一体——美女が縛られている表情——これ表現するには、いかにそれが職業の女優さんといえども、中々むづかしいのではないかと、というのが、これが筆者の常に考えることでして、……（そんなものは、訳ないよ。要するに懷古派の「晴雨」調か、或は近代派の明朗調かの二つしかないじゃないか）と、こうアツサリ云われるお方が、若し有りまして、筆者はとても、そう簡単に割切る訳には参りません。

媚々たる美女——と云っても、あんまりナヨナヨして病人的なもの魅力はないし、あんまり健康過ぎて、一向に応えません、てなの

も興冷めでしよう。

筆者は少年の昔から、随分こうした縛られたり猿轡をされている場面の絵画や写真を蒐めたものですが、その表情に気に入らないものがある時は、決して是等に猿轡（東洋的鼻口をモロに縛る型の）を画き足して、顔の半分を隠し——つまり眼の下わずかのところから下を塗り込めますと、なんとかそれらしい表情に見えたりして、オミットを免れしめた事がしばしばありました。……そこで、この経験から割り出しますと、猿轡をされている美女の表情は、むづかしい時には鼻口をモロに隠すテの、即ち東洋型の一を用うると、案外、楽に解決するのではないかと思っている訳なのです。

で、その点……先に述べました「千鳥の印籠」に於ける「中里阿津子」及び「薄桜記」に於ける「真城千都也」の表情は、口だけを隠した東洋型の二種であるため中々難しかったであろうと、老婆心を起してもみた訳で、——然し又、中々によく出来ていたと感心もしている次第です。

偕——永々と下らぬ事はかりを申し述べまして紙数を費し、読者諸賢をして大欠伸をさせた事と存じますが、猿轡放談を一応これで

終りました、又の機会に本誌上にて再度のお目もじを楽しみに、筆者は猶一層の勉強に励むことに致します  
(完)

(筆者後記)

猿轡放談全篇を通じ、東洋型とか西洋型とか申ししたのは、これは勿論、筆者独自の仮称に過ぎません。そして猿轡の場合に、東洋型の一種、二種、と分けましたのは、一種は鼻口をモロに隠した縛りで、通常、殆んどこれが用いられていますので、そうした訳です。

二種は、鼻を除けて唇だけを外側から隠した縛りで、千鳥の印籠や薄桜記（前記参照）の場面が、それです。

三種の実例は本文中には掲げませんでした。が、筆者の仮称を解説しますと、東洋型の一種と外形は同じで、口中に布切れを丸めて押し込んである、即ち東洋型の一番嚴重なものと思つて頂けば間違いありません。言い逃れの様ですが、口中に含んでいるかいないは、外側から鼻口を隠してあるので看破することが出来ませんし、勿論、映画でワザワザそんな念の入ったのを見せる筈もないので、実例を紹介することが出来ませんでした。

## 告白小説

「独りぼっちのマゾ？」続篇

## 俺は知ってるゾ

長岡変一郎

諸君よ！俺は本誌の旧刊時代に、「特異マゾの告白」と題し、最近、又「独りぼっちのマゾ」とも題して、俺——という人間の持つこの奇妙なマゾ心理を告白、発表し、諸君の中にも必ずや同好の志のある事を期待して諸君に呼びかけてみたのに、諸君はどうして応えて呉れないのか？……俺のこのマゾは、矢張り「独りぼっち」なのか？……

いや待て、然し、俺は知ってるゾ！諸君の中に、この俺と同じ傾向のマゾ欲望を持つ人が、必ずやある筈である事を……

諸君の中に（老若男女を問わず）アノ泉都

別府の砂風呂で、首だけを残した全身を砂に埋めて貰った時の気持を、今一度、否、何度でも味わい度くてムズムズしている人は居ないのか？俺は知ってるゾ！嘘について

更に云う！諸君の中には、アノ夏の海水浴場で、海辺の砂丘や干潮時に姿を現わす海中の干潟で、躰を砂中に埋める遊戯を楽しんだ人が相当数ある筈だ！

もともと俺と云う人間の持つマゾ欲求の最善のものは、既に告白発表した如く、アノ柔かくて粘っこい、そして真白な「米糊」の危

大な容量の蓄積場（そんなものは無いのだが）であり、俺はそこの中へズボリと全身を陥り込んで、底知れぬ深みへ沈んで行きつつ、もがきにもがいて……やがて、おもむろに窒息状態に陥って死に度い——と、こうなのであるけれども、この欲望は容易に達せられそうにも無いのが、偽らざる俺の現況である。

——しかるに懊悩は日々激しく、俺はもう双手を挙げて、「ウワァーッ！」と大声で叫びつつ曠野の果てへ消えて行き度い様な衝動に駆られる。

俺はいつも、妄想の夢に依って、せめても



の懊悩を軽からしめんと努める。それがK誌への投稿となり、同好の志を求めてやまぬ所以である。

米糊の……そんな尨大な容積に接する事の出来ない俺が……では、と詮方なくそれに代る手近かなものを、深し求めて憧れる。即ち土砂に依る「生理め」を希い、石炭微粉が水に溶けて生ずる粘っこい黒糊？に魅かれ、ポマード、水飴、等々何んでもよい。そうした粘着性の糊状のものが、人間の背丈を没し去る程の深みを湛えている中へ陥り込んで、思い切りもがいてみたい！と左様、希う。

俺は旧ろう「独りぼっちのマゾ」と題した告白文をK誌に投稿してこの懊悩に、せめてもの安らぎを覚えていたが、……それが諸君も御承知のアノ正月用のモチつき——あれを見たトタン！俺の妄想は又しても新たな構想を生んで、ささやかな、折角の安らぎも哀れに？消し飛んでしまったのである。

「えい、ほう。ポッテン。どっこい、まだまだ。ほらしよい」珍妙な思い思いの掛け声に混る、こころよいキネ音！然し、俺のマゾ神経は、ただひたすらに、ウスの中で次第に粘着性を増しつつ出来上ってゆく柔かくて真っ白な、その餅に集中され、次の様な奇妙な

構想を生む……。

ここでは何十人、否、何百人もの人が、それぞれの組に分れてモチつきを始めている。

恐ろしく永い時間を掛けて、しかも手水が無暗と多い。——その筈だ！……手水を多く長時間をかけてついて呉れなければ普通の出来上りでは、俺のマゾを満足させるに都合が悪いのだ！やがて、それぞれの組一様に特別柔かい、そして微温湯程度に冷えた未完成の餅——と云うよりも、一臼宛の餅糊が出来上る。ここでマゴマゴしては折角の糊？が固まって餅になる訳だ——。が、心配無用！

俺の構想は其処にちやんと大きな、見上げる様な高さ深さをもつ巨樽が用意されていて、号令一下、それぞれの組が一斉に、この巨樽に餅糊を投げ込む——その中へ俺が裸で込んでゆく！嗚呼！この快感！この恍惚境！適度？の温みを持つ強靱な粘着物は、俺の全身を徐々に呑み込んでくれるであろうし、ネバネバと全身にマツワリ締めてつけてくる餅糊の感触は、柔かい扱帯でグルグル巻にされたよりも、遙かなる愉悦の世界ではないか！

おや……俺は何時の間にか、自分と同好の志を求めて呼びかけていながら、思わずも自分一人、愉悦の境にさ迷っていたようだ。

話を元に戻さねばなるまい——。

俺——という人間の生立ちが、戦前の大阪市であり、戦後に今の北九州に移住して、炭鉱地帯で暮す様になったのだと云う事は、今迄に幾度か述べた。その北九州で発刊されている「夕刊フクニチ新聞」紙上に、次の様な記事が掲載されたのを俺は読んで、「ハテナ？」と持ち前のマゾ心理を働かせて考えてみた。——是は単なる偶発的事故ではなく、被害者がその様になる事を予期し、且つ、希っていたのでは無かったか……と。

その全文を紹介してみよう……。

“遊び半分が……生き埋め寸前に”

砂場を掘った少年危うく命拾い

「生き埋め寸前に救い出された少年は……砂の恐怖」に放心したように、ただオシ黙っていた。十二日、夕方、福岡市内の遊園地で井戸堀り遊びをしているうち、くずれ落ちる砂に首まで埋まり、かけつけた警察官、消防団員らの必死の作業で二時間後に助かったが、よくみかける子供の砂遊びにも危険がひそんでいることを警告する事故だった。

十二日、午後二時ごろ福岡市西本町三丁



嗚呼！この快感

この恍惚境

ネバネバと全身に

マツワリ締めつけてくる

餅糊の

感触

嗚呼……

麗

目、市立藤崎母子寮内、保険外交員、女野田シマさん（四六、仮名）の二男、北憲君（中学二年）は近所の友人、五、六人で「どこまで掘ったら水が出てくるだろうか」と、寮内遊園地の砂場をスコップを使って掘り出した。深さ約二メートル半と直径二

メートル位掘ったところドサツと砂がくずれ、穴の中に入っていた女野田君は胸まで埋まった。

子供たちが騒ぎ出し、付近の人が西福岡署、藤崎派出所に急報、通りかかった市役所吏員、田往健さん夫妻がすぐに自宅に引

返してスコップや板切れを持ってきた。救急車と消防車がかけつけたのが三時四十分ごろ。本格的救出作業にかかり、うす暗くなりかけた四時五十分、北憲君は消防署員に抱きかえられ、砂の穴から救い上げられた。

以上が新聞報道の記事である。

さて、俺がこの記事読んで「ハテナ？」と考えた——というのは……

その理由の第一——この事件の被害者当人が、若しや井戸堀り遊戯の発起人ではないか？ということ——

その第二——五、六人で行った井戸堀り遊戯とあるが、どうやら、その中で、被害者である当人が、一番年長らしいこと——。

その第三——直径二米。深さ二米半もの大穴を砂地に掘って、自分一人がその中に降りていた——ということは、確信は持てない迄も、ひよっとして周囲の砂が、その様に崩れ落ちてくることを予知し、且つ、内心希っていたのではなかったか？ということ——。

その第四——二米半もの深さの穴底での作業



は、当然、自力だけでは掘り取った砂を穴外へ放り上げることは出来まい。従って穴外、つまり穴の周囲に配置した友人達と受け渡し作業を行う——即ち、掘り下げて断面を為している穴外の友人達は、その断面に体重の重圧をかけつつ活躍するのだから、やがてこの断面は崩壊する——ということが、十五歳にもなった中学生に果して判らなかつたらうか？

以上、まだまだ疑問はある。然し、この事件は被害者本人が発起人であり、且つ年長者（他の者よりも）であれば、勿論「軽犯罪」法にもテイ触すまい。けれど若し、もしもだ！年長者であり発起人である者が穴外に居て誰か年少者をこの穴下に降りる事を指令したとすれば、これは一寸問題であらねばなるまい！だが、残念乍ら諸君の中に、たとえ司法官といえども、今俺が云った様な——つまり特異マゾの心理を有し、柔かい砂によって生埋めになってみたいと念願する者のあることを、是認する人は尠なからう……。この点俺は鼻高々とK誌に自己の異常心理を告白投稿することが出来るのだ。

かの医博「沢田順次郎」の著「変態性医学講話」の中でも云ったではないか——。

「変態を知らずして常態を知らず」と。否々、もう現代のK誌上に於て「変態」などというヤボ臭い言葉や文字は通用すまい。即ち「アブを知らずしてノーマルを知らず」か……いや失礼。

されば同好の志よ！名乗りを上げてくれ！俺は近頃、こうも欲求している。——

誰か莫大な遺産でも持つ美しい未亡人で、この俺を買ってくれ、退屈しのぎのお相手をしつつ時々、この俺の奇妙なマゾの欲求を満たしてくれる設備をしてくれる人は居ないものか？と……縛られる事も「話」だ！どんな命令にも忠実に従おう……。然し、俺の欲望欲求の結着点は、やはり「アノ」粘着性の練製物の龐大な容積の中へ、黽くとも週二回は陥り込んで桃源境に遊ばせて呉れるのでなければ嫌だ！

されば又、俺の妄想は、次から次へと新構想を生んでゆき、妄想の世界に遊ぶ間だけは懊悩から幾分の安らぎを覚えるのである。

食膳に乗っている煉味噌も、俺の眼に付けば忽ち、かの構想を生む——即ち、その煉味噌を醸造元の「アノ大樽」に満たし、裸になった俺がその中に飛び込む！

夜毎の夢も又、奇抜だ——。何の為に、ど

うしてそんな深い泥沼が人家の軒下に出来たのかは、一向に判然しないが、とにかく其処に出来た泥沼に、若し通行人が知らずに踏み込んだとすれば、彼の全身は忽ち泥中に姿を没してしまう筈である。

「教えてやらねばなるまい」俺は人家の軒下に凝と佇んで監視する！

あッ！子供が来た。しかも走ってくる！「危い！」俺は大声に叫び、その子を止めんとする。がしかし、夢がそうなっているのかこの子供は「あッ」と云う間に泥沼に飛び込み姿を没してしまふ！大変だ。——俺は誰か人々に知らせなければなるまいとヤキモキする！然し俺は、その場から眼を離す事が出来ない。何故なら、子供が陥り込んだ地点（個処）を知っているのは俺一人だからだ。

水の中なら被害者も自然に移動しようし、又、救け人も自由に移動して被害者を捜せるが、何しろ相手は泥沼だ！陥ち込んだ地点の真上から飛び込むのでなければ、被害者の身に触れる事すら出来ないのである。……それもあるが、救けは急を要するのだ！子供が窒息するのは判り切ったことだ！一瞬の後——俺は裸になると、その子供の陥ち込んだ

真上から泥の中へ飛び込んでゆく。——中は勿論、暗黒だ……ネバネバと五体に搦んでくる泥肌の魅惑に、子供を救けようとした事など何処へやら、俺は妖しくも嬉しい惑溺の世界にサ迷う！

だが数秒の後……俺の呼吸は当然の結果として苦しくなってきた。俺はモガきにモガき！ 漸く子供の躰に触った様だ。……然し俺の呼吸も又、一段と苦しくなった！  
「窒息！——俺は一段と激しくモガく！」

## 女装と私 原田 幾世

女性とは悲しいものであるといわれている。

女性とは弱いものであるといわれている  
その女性に憧れ、遂には女性化したい願望を、僅かに女装で慰める私。  
なんと、その気持は悲しいものであろうか。

女性とは美しいものであるといわれている

諸君——ここで俺の夢は大抵、醒める。

呼吸の苦しかったのは、掛布団を顔の上迄引上げて被っていたのであり、子供の躰に触ったのは、枕を並べて隣りに眠っている我子であった。

× × × × ×

さて——話を元に戻すが、俺は戦前、大阪市に住んで居た頃、夏の大浜（堺）海水浴場で、かしの海辺で、五、六人のグループを作って、生理め遊び<sup>（注）</sup>をしている大学生達を

る。

女性とは華やかなものであるといわれている。

その女性に憧れ、男の私が化粧して女装しなければならぬ気持。  
ああ、これこそナルチシズムの極致なか。

自分のこの心の奥底に、如何なる悪魔が

見た。

それは正しく、生理め<sup>（注）</sup>と云う言葉に相応しいもので——何故なら普通？ こうした海辺の砂丘や海中に出来た干潟でやる、躰を埋める遊び<sup>（注）</sup>は、皆、首だけは埋めずに残しているのに、彼等のそれは文字通りの全身を埋めていたのだからだ！ 顔も頭も！

——冗談じゃない……そんな遊戯ってあるもんかい？。だってそれじゃア人殺しじやないか！ と一笑に附される読者もあるう事は俺も予期している。だが、このことは事実であって、俺はその当時、彼等の「生理め遊び」を何回となく見た。彼等をグループだと俺が今日断言出来るのは、その生理め遊びをやっていた者達のメンバーが、いつも同じであつたということからで、このグループは一人一人交替で、埋められ役<sup>（注）</sup>に廻っているのである事も、蛇の道はへびで当時の俺が間もなく看破したことであつた。

勿論、彼等の中で、その埋められ役に当た者は、窒息しない工作を施していた。それは両方共の鼻穴にゴム管が差込んであつて、その端が二本躰を埋め尽した砂上に突き出ていて、——つまり啞えて水中に永くもぐっているアノ要領で、呼吸が詰らぬ様にしてあ



潜んでいるのだいふか。ひとたび女装してしまふと、私の身も心もすっかり変つてしまふ。女装してしまえば、新しい体験が私の運命の上に積みかさねられてゆく。

女装した私は、男でありながら、世間一般の人は私を女性として扱ってくれる。

ここに、全く新しい私の人生が開かれる私は、この秘密に痺れるような悦びを感じる。

私を眺める男性、

語りかけようとする男性、

いたずらをしかけようとする男性。

男が女に対して、あんな眼、あんな態度をするのかと思うと、男装の時の自分の姿が鏡にうつるように思える。

世の中は表と裏から見なければならぬ。社会の反対側の一部を体験できたことは、私にとって、月の裏側に着陸したような気分。

色彩の性格に与える影響、衣服の形態が性格に与える影響、或は性格が色彩やデザインを選ぶのかもしれないが、とにかく、それらが人間の感情に与えるものについては見逃すことはできない。

スカートの私に与える力がどんなに強烈なものか。ましてや、美しい白絹のような

優雅な女性の下着類が私をどのようにに変化させるか。

魔法の力？

化粧によって女が変化するより、男の變化の方が大きい。

自分の顔が次第に美化されてゆくときの奇悦。ヘヤーは全てを決定する、髪が顔にぴったり落ち着いた時の満足。二時間も三時間もかけて髪を結う女の気持がよくわかる。

ああ、ナルチシズムに全身を浸しきれるこの境地。水仙というよりは赤い血のような情熱を思わずダリヤの中の自分の顔。

誰も私の男を見破らない、その自信！

清楚な一人の女性として、社会的に束縛されることを意識して街を行く。

自己愛の喜び！

冒険、スリル、アバンチュール！

そのサスペンスに全身をさらした興奮は私を次のスタイルへと取組ませる。

私はこの生活を楽しむ。

鏡にうつる自分を見ながら、しみじみと本心に女ではないかしらと考えるとき、私は男性としての社会的な立場を忘れ、今生れたばかりの女の歴史の浅さを悲しむのである。

った。

アノ頃の俺は、彼等のその様な生理め遊戯を見て、どんなに憧憬し、且つ、羨望を覚えたことか……。俺は内心、彼等の仲間に入れた貰いたくて、見る度にいつもムズムズし乍ら、然し至つて気の弱かったその頃の俺は、同時に未だ少年でもあったので、最高学府の兄？ 達に遂に交渉する機会を失ってしまったのであったが、俺はその後一人で他の海辺に行つて、秘かに自分で自分の身を干潟の砂に埋めて楽しんだことも、来る夏毎に何度かあった。

光陰は矢の如し！ アレからもう三十年は夢の如く過ぎた今日ではあるが、俺が——広いの世の中には矢張り自分と同じマゾの同志がいる筈だと、自信を持てるようになったのは即ち、この時の、彼等の「生理め遊戯」を見てからであつた事に間違ひはない。

されば云う——

俺は知つてゐるゾ！ K誌愛読の中にも、必ずやこの俺と同好の志のあることを……。

味噌醸造元の御主人。

糊、製造元の御主人。

その他、俺のこのマゾの欲求する粘着性煉製物製造元の御主人で、K誌の愛読者の方が若し有るならば、何卒この俺の一生の願望を息ある裡に一度でもよいから教えて下さるまいか？ いや、その場合、決して死んだりしない事を神かけて誓約致します。

俺はその桃源境に遊べば満足なのですから百万遍、叩頭してお願いする次第です。

(完)

(註) 新聞記事の写しは、万一を慮かつて主要人物を仮名にしました。

# 特 高 拷 問 史

庄 田 美 起 夫

## 血にしみた麻紐

シユミーズの背中がべっとりぬれている。女の首すじから汗がツウーと流れおちるのが見えた。体中から汗をふき出しているのに、ガク／＼女はふるえている。冷汗なのだ。すえたような甘酸っぱい女の体臭がムツと立ちこめている。

「アウッ……」

何をされるのか、こわいのだ。女のふるえはとまらない。

取調室の中へ若い女がつれてこられる。泣

き叫んでいる。見なれない顔だ。はじめの娘かしらと女は思った。

「さあ、早くいっちなまえ、体にきかれる前にだ」

娘は下唇を噛むようにして、口をキュッと閉じている。

「今日は痛い目にあわさんが、強情をはるとただではすまんぞ」

それでも娘は、かたくなに口を閉じたままだ。何分か経ったころ、自分の前でガタ／＼ふるえながら冷汗をかいている女をみて、いまにも叫び出したくなるのを、こらえきれな

くなった。

「キャアア、カエシテ……」

突然、静寂を破って物凄いい悲鳴があがる。

「おとなしくしろ、痛い目にはあわさないといつてるじゃないか、ただ裸になってもうただけだ」

忽ち口へ何か押し込まれたのであろう、押しこらしたあがきが、部屋中にこもる。

娘はみるみる着ているものをひきはがされて、いまはやりのピンク色のひざ下までである長ズロースとブラジャーだけの姿にされてしまった。レースのブラジャーが半分程ずれて



乳房がはみ出してふるえている。

突然二人の女は一つにされた。女の背中に娘がおぶさるようにして、おしつけられ、二人の胸に革の太いバンドがまわされ、ぎゅっとしめあげられた。女はウエストにくい込んでくる革のバンドの角の痛さに泣き声をあげた。

「イヤア、ゆるしてよ  
う、あ、ああ、ゆるしてエ」

しかし、バンドは娘の背中で固定され、二人の女の手首と足首はそれぞれ別々素早くくり合わされた。娘はしきりにもがいて、うめいている。乳房が背中ですれてニチャニチャするのを女は感じた。人肌の生あたたかさが、フルエのとまらぬ



ぬ肌にうす気味わるかった。娘のもがくのが直接自分の背中から身体全体につたわって、

やりきれないので、背中にだきつかれたように括りつけられた娘の身体を放したいと思ったが、どうにもならなかった。

手首がぐいとうしろへ引かれたと思うと、うしろの娘が口のつめ物をなんとかして吐き出そうとしているところであつた。しかし女の手首はねじれて悲鳴をあげる。と、それがうしろの娘に伝って余計にもだえを大きくする。そうして二人の女はしばらくカニのようにもがいていたが、やがて、あきらめたように静かになった。

しかし、お互いの肌のぬくもりを気味わるく思うのか、もじもじと自由になる上体や足を動かした。そのたびに肌にしめった下着がネチャリネチャリとすり合わせて、女と

娘は声にならぬ、呻めきを洩らした。  
「よしっ、仕方がない、麻ひもを一本持って

こい、なるべく細くて丈夫なやつをな」

命じられた憲兵上等兵は、椅子から立ち上って、拷問用具の整理されている戸棚から、紐を持つてくる。

前になっっている女が、それをしおに、急に身体をよじつてもがく。すると、それにつれてうしろの娘が、「イイイイ」とうめく。わきばらがひきつったのであろう。

前になつた女のバンドにくくりつけられた麻ひもは、二人の脚の間をとおって、ぎゅつと締めつけられる。

「ああ、ツウ、イタイツ……」

「ひえッ、……ううえッ」

二人そろって、よじのぼろうとするようにして、その細い麻なわをさけようとしたが、どうにもならなかった。すぐに娘の背中にまわっているバンドの下をぐぐって、キュツとしめあげられる。二人は動物的な悲鳴をあげて夢中で宥しを乞う。

「ああッ、いたいよう、かんにんして……」

とうとう、うしろの娘が泣き出した。ともすれば横倒れになろうとする二人を支えて、麻ひもを、ちようど、男のふんどしのように固定しおえた少尉は、いいきかせるようにいった。

「さあ、いってしまふか。いえば、もう痛い目には合わさん。どうだ、うん」

うしろの娘は狂ったように叫んだ。

「しらないんです。何にも、……あたし」

踊るように両足をかわるがわる踏みしだいて、少しでも苦痛をやわらげようとしているらしい。白いズロースの脚に、ギュツとくい込んで細いなわがいたましい。

背中におぶさっている娘がもがくので、前の女はそのたびに縄がしまつて痛いらしい。美しい顔のまゆをひそめて、思わず洩れるうめきをこらえている。みるみる流れる汗。

「うううう……ゆるしてエ」

「いうか？レボのことを」

女は固く口を閉じる。そして、力なく首を横に振ったが、もう、この無残な責には、たえきれないようであった。

「ふん、ふざけやがって、見そこなうな。いのがイヤなら、いつまでも黙っとれ」

少尉の長靴が大きく弧を描いて、女の肩口を蹴り上げた。二人の女は、どんと大きな音を立てて床へころがった。ものすごいなり声をあげて、二人は起き上ろうともがいた。

今にも、はちきれそうなあがきようだった。「ギエーッ、……ク、クルシイ」

「ヒヤー、ムムムム、……ウーン」

おおむけにされたカメのように、足ばかりをバタバタさせたが、むなしく空をけるばかりだった。少尉の革靴の底は、そんな二人の女の上へ、これでもか、これでもか、と力いっぱい乱舞していった。もがいてもがいて、もう息もたえだえであった。

「イ、イイッ、ヒヒヒッ、ムウムウ」

先ず娘の方がたえきれない絶叫の末、遂に氣絶してしまった。しかし、女の方は、汗にまみれ、ごみにまみれた娘を背負ったまま、腰巻をべつとりと足にからませたまま、ハアと胸で呼吸していた。

みると、脚にくい込んだ麻ひもが血を吸った蛭のようにふくれていた。

## 熱 責 め

「どうしてもいわないな、では、そろそろはじめるか」

女は、きつく手首にくいこんでいる手錠の先につながつている紐をぐいとひっぱられ、思わず腰を浮かした。

卑屈になってはいけないと思ひながら、再び腰をおろそうとしたが、そこには、もう椅子はなかった。彼女のうしろに立っていた刑



事が椅子をひいていたのだ。

高い悲鳴をあげたのと、女が尻もちをついて、ぶざまにハイヒールの脚をひらいたのと刑事たちの哄笑がわき立ったのと同時であった。ノールな顔立ちをした若い女の顔が、このたえられぬはずかしめにひきつれ、思わずゆるしを乞う表情に変わったが、そこで女は思い止った。

「いけない、なんだ、こんなやつに」

女はキュッと唇をかみしめ、真先に乱れた裾を直そうとした。が、手錠に固定された両腕はひきつるように上にひきあげられ、彼女はいたずらに自由にならぬ両脚で地面をけりあげるばかりであった。

スカートがまくれピンクのペチコートの下からガーターに吊られたストッキングの上端があらわに見えた。ツウー、ツウーと絹のストッキングの上を、まるで肌をはじけるようにデンセンが走るのが見えた。

「ほほお、えらいサービスをしてくれるんじゃないア、まだそこまでは、見せてくれとはいってらん。じゃが、いいもんじゃなあ、若い

女の裾口というやつは……」

いつか、女の姿のこっけいさを笑っていた刑事たちの口もとが、ギラギラと粘っこい目

つきに変わってきている。

女は美しかった。まだ二十にはならない若さだが、何かこつうんとぶっかる固い決意を持ったシンの強さには、刑事たちも気がつかなかった。肌につけているものをさがさなくとも、この女を涙にくれさせ、何もかも告白させてしまえるという意識が、刑事たちの上にあったのだ。

女の身体につけている下着のなまめかしさが、一時、刑事たちの視線をひきつけたとしても、彼女をすっ裸にむいて身体にきくという常法を用いることは、あまりに痛々しすぎるという考えが、どの刑事の胸にもあったからである。そのため、女が今にも泣き出しそうになって、両腕は手錠で吊られたようになっていたので、両脚を動かしてまくれたスカートを何とか元通りにしようとして努力しているそんな女の妖しい姿態よりは、色っぽい女の下着の方に目をひきつけられていたのである。

「さあ、そうもがなくても、あんじょうしてやるぞ」

刑事の一人が女のスカートのすそをぐいと引っぱって下着をかくしてやった。しかし、女はビクッと体を固くしてキュッと口をくい

しばったままだった。

「いい子だ、……で、宮本と吉田は何をしやべっていたんだ」

しばらく沈黙がつづいた。女は地面に尻をついたまま目を伏せ、だまってうなだれた。ふと、女が口を開いて顔を上げたが、

「何に？」

と、のぞきこむ刑事たちの表情に、けおされたように再びうなだれた。

また沈黙がつづいた。長い沈黙であった。

「よし、仕方がない、入れろ」

一人の刑事が叫んだ。

女の手錠がぐいとひかれる。女が連れてこられたのは、長さ一間、幅一間、高さ一間半ほどの有機ガラスで出来た檻のような箱の前であった。そのガラス製の箱の四隅には、赤い色の電球が二列にズラリと並び、箱の中心部を照らすようになっていた。

女をその前まで連れてきた刑事は、女の手錠を外していった。

「さあ、自由にしてやるぞ。この中では何をしよう、お前の勝手だ」

そして、ガラスの一方を開くと、女をその中へ追いこんだ。

「この中で何をしようと、お前が勝手にする

ことだぞ」

ドアがガタンとしまるときに、別の刑事がいった。女は恐怖にかられて、思わず今開いたガラスの戸にすがりついた。が、内側からは何の手がかりもなく、女の手がいたずらにガラスのなめらかな肌をかきむしって、すべるだけであった。

女はしばらくの間、あちら側やこちら側のガラスをガンガン叩いていたが、丈夫な有機ガラスにとっては、何の手ごたえもなく、やがてあきらめて、男たちのい

ない向う側の隅にうずくまっていた。が、忽ち女は、

目の前のガラスが鏡であることに気がついて、顔をおぼてしまった。自分の全身が、あますところなく、上にも下にも、右にも左にも、そして前にもうしろにも、互に反射して重なりあい、もだえ泣けば、鏡にうつった百千の自分の姿も、また同じように泣くのであった。彼女がこうしてひとり鏡にうつる自分の姿に油汗を流しているとき、この

ガラス箱のおかれている部屋へは、十人ばかりの女がひきすえられてきた。一人の女の責めを利用して、同時に多くの女の自白を得ようとする狡猾な手段であった。

女たちの一人一人は坐らされた椅子にそれぞれ固定された。彼女たちには、ガラスの箱の中は余すところなく見とおせるのだが、箱の中の女は、ガラスに反射してうつる自分の姿が見えるだけで外部は見えなかった。つまり、このガラスの外部は半メッキされていて

内部からは鏡、外からは、すどおしに見えるのであった。

一瞬、ガラスの箱の中を照らしていた赤色の電球が消され、同時に室内の電燈は、今迄十ワット一個だったのが、急に六十ワットの電球が三個、十人の女たちの方へ向けて点灯された。今まで鏡にうつった自分の姿に脂汗を流していた女は、自分の目の前に忽然として、自分を見つめている十人の女を見た。

彼女は大きく口を開いたが、外部へは何らの物音もきこえなかった。

そのとき、刑事の一人が、拡声器のスイッチを入れた。しばらくすると、ガラス箱の中で見世物にされている女のあえぎが拡大されて、十人の女の胸をしめつけてきた。今にもたえいりそうな呼吸づかいである。

刑事の手が又、動いた。

と、女の体が真赤に照し出された。

「うあッ」

女は赤い光に押されてあとずさった。と、肌を焦がす熱さが背後から迫ってきた。女は夢中





で逃げたが、狭い箱の中を氣狂いのように、ぐるぐると回るだけであった。ガラスの箱の中の温度はグングン上る。

スイッチが全部入れられると女の姿は赤く赤く、しみるように赤く染って、あぶり出されていった。電球は赤外線ランプであったのである。

「ああっ、あつい、あっ……ううお、あっ……あっ……い」

何とかこの熱さからのがれようと、女はガラス箱の底にうつ伏せに身体をすりつけてもがいたが、やがて背中をこがす熱さにあおむけになった。肌の上を流れるように汗がういて、みるみる蒸発してゆくのがわかった。女の全身から湯気がもうもうと出るのである。

「ああっ……くるしい……ムムッ、あつい、あつい……むむうッ」

温度計は四十三度をさしている。女の身体からあぶり出された水蒸気が、ガラスの天井に水滴をつくり出した。

「あっ……あつい……あ、ゆるして……ゆる



して……く、くるしい」  
女はのたうって、ものすごい力でスーツの前をひきさいた。

ピーツと魂をひきさすような音が、女の呻めきにまじって、むりやりに、この責めを見せられている十人の女の腹の底までゆさぶった。目をおおって伏せようとする、鋭いムチがとんでくるので、女たちはまるで放心したように目の前の女の苦しみをみつめ、マイ

クが伝えてくる女の悲鳴と呻きに小さい胸をゆさぶりつつづけているのであった。

われとわが衣服をひきさいて、上半身裸となった女の肌は、じりじりと焦げついてゆくようであった。まるで女を火あぶりにしているという形容がぴったりとあてはまる惨虐な責めである。

立ち上っては倒れ、倒れてはもがきまわっていた女の動きが急に鈍くなって、うつ伏せになったまま呻きがとだえそうになったとき刑事はライトを消した。

身動きもしなくなった女は、カサカサに乾きあえぐようにしていた口もとが、何かを求めて、力弱くパクパクしていた。

ドアを開けると、むツとする熱気と共にむせかえるような女の匂いである。全身から水分という水分をしぼりとられてカスのようになった女が、無性に水を欲しがっていた。

水は与えられた。

女が欲するままに与えられた。どの位飲んだことであろうか。口もとからあふれそうに

なっていないが、まだ水を欲しがっていた。  
だが、再び責めははじまる。

正気づいた女が何もいわなかったからである。女の意地が目ざめたからだ、というよりは、むしろ氣力のすべてを奪いさられて、もう反応すべき何もも持たなくなった方が正しいかもしれない。

ガラスの箱へ戻された女の苦しみが再びはじまる。汗をふき出して、もがき回っている姿は、今度はむしろ醜態であった。悪いこと

に、飲めるだけ飲んで膀胱にまでいった水分は汗にならないことだった。女は、汗という汗を下着がぐしょぐしょになるまで、しばらく出されたが、それだけではすまなかった。

そんなガラスの箱の中の有様を、むりやりにながめさせられた十人の女たちは、まるで自分がそのような目にあわされているかのように入らされているよりは、かえって激しい恐怖心にかられたのだろう、中には脳貧血を起し

て倒れるものさえ出た。

ガラスの中の女は、相変らず全身から湯気を立てながら、もがきまわっていた。はじめは、これまでにして女を責めようなどとは考えていなかった刑事たちも、このなりゆきには、もう、とことんまで、責めつづけるより外はない破目に追い込まれていった。

(終)

## 正月映画の

### 縛られた女優達

大河原

珠樹・記

今年の正月映画は、とっても不作です。といっても日活系と新東宝系の作品はあまり観ていませんから、その点を割引願います。

▽丹下左膳、妖刀濡れ燕(東映) 桜町弘子  
病いえて久々の登場だったが、体をいたわってか、前手手首のみの合掌型縛り、青い布でキチンと猿轡をかませられていた。南部藩

の公金、江戸送りの護衛についた江戸の伊庭道場の娘で、途中、同じ南部藩の家臣ながら公金の江戸送りに反対する一団のために拐かされるもの。(松田定次監督)

▽忍術武者修業(松竹) 美珠さちよ  
美空ひばり二世だと松竹京都が力を入れているまだ十一才の子役。徳川に弾圧を加えられ

ても豊臣家一途に意志固い倉西備前守を味方にしよう、家康が倉西の娘の春姫を捕えて磔にかける。両手首を二、三巻、胸、腹、膝頭はそれぞれX型にタスキをかけ、足首をグル／＼巻にしていた。この姿で連発銃的にされかける。(福田晴一監督)

▽傷だらけの掟(日活) 中原早苗

ただし、これはスチールだけ。スクリーンには縛りは現われない。ヤクザ同志の対立の谷間にいる娘が、折檻されるため上半身を裸で、グルグルと太縄の後手縛りにされる当初の案だったらしい。日活映画には、どうもこんな、われ／＼マニヤをよぶためのオトリのスチールが多いので不愉快である。



## (阿部豊監督)

## ▽女奴隷船 (新東宝) 三ツ矢歌子

奴隷として売られる為に拐かされて船倉へ閉じこめられている十人ばかりの女の中の一人が、気晴しに甲板に出たところを発見されて私刑にあう。マストへ太いワイヤーで前向きに立縛り、別の縄で笞打たれる。といっても、この縛り方が胸に太縄をクル／＼二巻したつきりで、両手はダラリと垂らした姿。代表的な型式の縛りである。(小野田嘉幹監督)

## ▽千姫御殿 (大映) 中村玉緒

吉田御殿につれ込まれ翌朝、死体となって発見された許婚者の仇討に、吉田御殿の下女に化けて忍び込んだ娘が、仇を討ちそこねて捕われ、細引で後手に縛られ詰問を受ける。幸い居合わせていた幕府隠密のはからいで助けられはするが……。最近もてている玉緒ちゃんらしい可憐な縛られ姿である。(三隅研監督)

## ▽槍一筋・日本晴れ (宝塚) 八千草 薫

居酒屋の看板娘のお糸が、悪旗本の次男坊達に横恋慕され、通りすがりのところをつかまって拐かされようとする。後手に手首だけを帯の下で縛られ、黒い手拭みみたいな布で猿

ぐつわ、駕籠で運ぶ途中で逃がれようと動いている駕籠から足を出すところは一寸珍らしいが、肝心の縛りのほうは、細引か、それ以上に細い縄なのか、後姿を相当長く見せてくれるのに、縄の形すらみることが出来なかった。(青柳信雄監督)

## ▽爆弾を抱く女怪盗

(新東宝) 高倉みゆき、三条魔子

スチール写真に取材、まだ映画を観ていないので内容の詳細は知らないが、ラスト近くに仲間裏切られた怪盗の女首領がモーターボートの上へ点火したダイナマイトと一緒に縛りつけられ海へ流される。即ち女首領が高倉みゆきで、もう一人の女性と背中合わせに互いに相手を後抱えの形で後手グル／＼巻き腰掛け姿だが高倉のほうは折り曲げた膝と足首を腰掛け脚とシートヘグル／＼巻きにされ、三条魔子は足を投げ出し腰掛けと膝と足首をグル／＼巻に縛られていた。三条魔子とは昨暮からシークレット、ウェイスとして新東宝が売出しのニュー・スター。まだ十六才だがグラマーだし魅力的なマスクの持主だ。

これは想像だが、大映作品の風雲将棋谷、角田喜久雄の原作で、すでに何度か映画化さ

れているもの。今度は、おそらく近藤美恵子が、山の一族の後継者であり女明しという役で、縛られ、責められるのではないかと思われる。田坂勝彦監督が演出するらしい。

今度も数が少いので東映のTV作品と同じだが、風小僧シリーズのワイド映画で応援。

## ▽風小僧・消えた殿様

(東映) 玉喜うた子

代官の悪政を城主に告げようとする百姓娘で代官に捕われ、風小僧をおびき出す囃に、刑場へ連行される。胸をグル／＼と数巻き、後手縛りで裸馬に乗せられ山道を引廻しになるが、仕出し女優だけに縛りだけはギッシリ固く縛ってある感じだった。

このほかは

「任侠中仙道」「殿さま弥次喜多」「ひばり十八番、弁天小僧」「野狐笛、花吹雪一番纏」「旗本退屈男・謎の幽霊島」「血太郎ひとり雲」「雪之丞変化」以上、東映作品、「月影兵庫、上段霞斬り」「二人の武蔵」「浮かれ三度笠」以上、大映作品、「晴れ姿勢い揃い・剣俠五人男」「大利根無情」以上、松竹作品、11など、いずれも縛りのない作品であった。

変

かわりみ

身

(第二回)

## 南 時 夫

恵吾は朝から落着かなかつた。不完全ながら女装して自分の部屋に閉じ込もって自縛して楽しむこと、それだけでは満足出来なくなる日が必ず来ることを彼は知っていた。女になって外を歩き廻ってみたら……そう思うだけで、楽しみとも不安とも知れぬ気持で体が熱くなってくる。男である自分が、他の大勢の人に女性として見られる。女性だけの世界も覗けるかも知れない。初冬であった。彼は冬の来るのが待遠しかった。さすがの彼も身体の線が明らかに分る季節は、その勇気が出なかった。最も致命的だったのは頭髪である。かつらの無い彼にはその点だけはどうかまかすことも出来なかった。冬になると、スカーフで頭を包む女性が現在では、むしろ多い。冬のおとずれは、彼にとって女装の絶好の時期であった。

冬の夜は早い。茶間で雑談し

ている家族の声を聞きながら、彼は一人自分の部屋に閉じ込もって支度を始めた。何時、家人が入って来るか分らない。そう思うと、ゆっくり鏡の前に座っていられない気持であった。白のトックリ・セーターを着て、姉のスカートを穿いた。彼の足は当然ながら男性的だ。女学生の穿く厚手の靴下を穿き、その上からナイロン・ストッキングを重ねた。家人の立上る気配がする。彼は、あわてて手洗の中に入った。胸は、どき／＼と異常に波打つ。手洗の中で顔を造った。早く外へ出よう。そう思うことで彼は一ぱいであった。お白粉の乗りが良いか悪いか、眉の描き具合はどうか、頭髪は女らしく見えるか——その様なことを日頃考えている様な余裕とてなかった。姉の水色のコートをはおると、ハイヒールを穿き玄関を出た。「恵ちゃん——どこへ行くの？」姉の声が後方でしている。彼は黙っていた。文字通り逃げる様に足早に歩いた。ハイヒールの慣れない足もとは、彼の歩き方を、ぎこちなくさせたが、ともかく彼は一刻も早く家の附近から遠のきたかった。顔見知りの人にでも逢ったら——そう思うと不安が募る。罪人の様に下を向いたまま夢中で歩いた。原色のネオンの灯が彼の身近に迫り



洗濯場



人通りも多くなった。暗い場所を歩いていた時と比べて、その中に入って行くのには大きな勇氣と自信が必要であった。しかし、女装での外出の経験が今夜初めてという彼にとつて、自信を持つと言うこと自体が無理であつたろう。白ガーゼのマスクで顔の下半分を隠し、スカーフで頭を包んでいるため、出ている部分は眼だけになった。マスクを掛けたため、自分の顔にぬっている白粉の香りが一層強く匂ってくる。彼がマスクをしたのは、この場合、人から顔を見られる不安があつたからではあるが、もと／＼白いマスクを彼は好きだった。若い女性が白マスクをしている姿

に強い魅力を感じた。マスクは猿轡に通ずる。ある女性の猿轡を低められた顔を想像するには、白マスクをかけた顔を見ればよい。日本人の女性は必要以上にマスクをかける。それも猿轡の圧迫感に共通する何ものかがあるまいか。彼の側を一人の若い女性が通り過ぎた。女装した恵吾が明るい所で最初に会った人だった。

彼の顔をちらっと見ると、表情に何の変りもなく、そのまま行き過ぎていった。そのことが彼に僅かの自信を植えつけた。一日の勤めを終えて、思い思いに憩の場を求める人の群が駅前から盛り場に流れていた。夢中で議

論している学生達。手を握ったまま一つのポケットに突込んで黙って歩いている男女。洋服生地、ショール、ウィンドウの前に立止って動こうとしない事務員風の女。初冬だというのに素足にサンダルの女給。しかし、どの人も彼に何の関心も示さなかった。同じ流れの中に歩いている一人の若い女。それが実は男だなんて……。恵吾は何か奇妙な

気持ちに襲われた。私は男なんです。不意に、こう叫んだら皆、気味悪がって逃げるかも知れない。人々が無関心であるということは、自分が女として人々の眼にうつっているからなのだ。この流れの中の自分は女であることが当然で、男であつてはいけないのだ。もし統計をとる様な人が道端に立って「男一人」……「女一人」という具合に数えていたとすれば、自分の姿を見た調査員は「女一人」と数えるのだろう。

彼は婦人服の陳列されている店に入ってみた。デパートを歩いてみたかったが、もうデパートは閉店していたので、あきらめざるを得なかった。店員が「いらっしやいませ」と

言いながら、ちらっと彼の方を見た。外を歩いているのとは違った明るさに思わず、どきっとしたが、さりげなく洋服を手にとってみた。横に大きな姿見がある。彼の全身がうつっていた。金持の令嬢とまではゆかなくても平凡なサラリーガールの姿がそこにあった。姉のオーバーなのでびたりと身に合うというわけにはゆかず、又、胸のふくらみの足りないのが多少、気になったが、冬の衣装では別に大した影響もなかった。「どんなのを好みみでしようか？」女店員が近付いて言った。彼は黙って逃げる様に店を出た。しばらく流れて身をまかせて歩いている中に、慣れないハイヒールは足を痛めだした。女の足と男の足とは可成り違う。大分、大きいと思われる靴でも、男の彼の足には入れるのが、やっとなでであった。文数は大きくとも、爪先から全体の中が細い。一歩歩くごとに痛みが増した。これ以上、歩き続けることは到底、不可能に思われた。

初めて女装して外出した体験は、恵吾にとって、彼が想像していた以上の強烈な刺激であった。それは周囲のおもわくも、将来に対する危惧も、罪の意識も、すべてを超越した

夢中の世界であった。彼は夜になると女装し街を歩いた。二回、三回と繰返す中に、自分の女装の不十分な点が目につく余裕が出てくる様になった。女装を完全なものにするには矢張り自分の身体にあったものを着けねばならない。彼は五尺四寸強であったが、今の女性にはキングサイズ化しているので、女装してもそう目立つことはなかった。しかし姉の洋服や靴では、借着の域を出なかった。まず最も必要なのは靴だった。一、三時間、歩くと、もう歩けなくなるほど足が痛み、ひどいまめを作って顔をしかめながら、やっと帰って来ることが多い。パンプス型の靴では特に寸法がびたりと合わねばならないので、どうしても自分の足を無理にはめ込む様になる。そこで彼は、サンダル風のものに眼をつけた。サンダル風のは少々の文数の違いがあっても、方々が開いているので自由である。余り寸の高いヒールでは背が高くなるので、中ヒール程度のもので無難な黒を選び、一寸素人離れしたデザインの粹なサンダル風の靴を買った。穿いてみると足にびたりと合いい、しかも男の足のごつ／＼した感じは無くすんなりと優しかった。最も必要だった靴が出来上ると、あとは少しずつ調べていった。

恵吾とてまだ学生の身であり、自分の自由になる小遣も少い。彼は休暇になるとアルバイトに精を出し、黙々として貯金した。それは彼だけの秘密な楽しみであった。学業に必要な書物は別として、他の一切の娯楽費は極度に切りつめた。一点々々女装に必要な衣装や用具が揃ってゆくことの楽しさと興味。少々の空腹感など問題ではなかった。

彼は和服姿も好きだったが、いざ自分が女装する段になると和服より洋服が魅力だった。和装よりも洋装の方が、女装、という言葉にぴたりとしているように思えたからである。冬の衣装でこれも必要なオーバーコートも、やっとなで買ってくる。モヘア地のグリーンのコートだった。あとは頭髮を包むスカーフを二、三枚、純白の婦人用手袋、ナイロン・ストッキング等の女装に必要な最少限度の洋品類を買込んだ。コートだけには自分の寸法に注意したが、他のものは適当に見積って買ってみると、不思議に手足にびたりと合った。コートの場合は自分のオーバーを参考にして必要な寸法をメモしてからデパートに行き「田舎にいる妹に送ってやるのだが、これが手紙に書いてあった寸法で……」と女店員に相談する。この場合、相談相手に、な



るべく自分に似かよった背丈をもった女店員を選んだ。「妹は大体、貴女ぐらいか一寸、大きなのだが……」と言うと、気軽にいろいろなコートを着て彼に見せてくれた。ストッキングは厚手の濃い目のものを買った。外部から人目につく衣装だけ、どうにか揃えろと、次に洋服と下着、アクセサリ類に取り掛った。そして、それらのものは男姿では買いくく、女装して「女」として買いに行けば不自然さが無い、大きな感興が湧くという一石二鳥の点があるので彼は、よく女装してデパートへ行った。デパートに行くのは当然昼間でなければならず、今迄のように夜のみの女装外出では用をなさなくなった。デパート以外の商店は夜でもよかったが矢張り女店員も揃っている上、売場の広いデパートは変化があつて魅力だった。昼間、女装して街を歩き、しかも人ごみの多いデパートに行くことは、夜間のみ外出していた彼にとって非常な勇気と注意が必要であつた。暗い処では、ごまかせることも、白昼では歴然としてしまう。それには幾分、時間を余計にかけても女装を完全にすることが要求された。今迄のように家人の眼を盗んで、僅な時間で外へ飛び出すことも、むづかしい。そこで彼は大型の

ボストン・バッグに女装に必要な衣裳、道具を詰め、それを手に普通の恰好で家を出た。彼が目をつけたのは、映画館の中の化粧室だった。

女装するための化粧室には、いろいろと条件が必要だった。その中で衣裳換えするので十分広く綺麗でなければならず、又、紳士用と婦人用とが別々に離れているのは、まずい。彼が専ら利用したのは某一流劇場の化粧室であつたが、そこは売店からも丁度、死角にあり、紳士用と婦人用とが並んでおり、しかも広かつた。彼はボストン片手に映画館に入ると、まず時間表を見る。適当と思うとトイレに消える。適当な時間というのは、映写中ということである。しかも上映開始後、間もない方が時間に余裕がある。映画館のトイレは、上映中は殆んど使用されないものだ。着替えを終り、靴を取換えてからコートを着る。今迄着ていた男物は全部ボストンに入れた。そこまで手早くすると鏡を壁に立てかけて、ゆっくり化粧にとりかかる。婦人用の場合で他に人が居なければ、出たところの姿見の前で化粧してもよいが、矢張り中の方が気分的にゆったりする。念入りに顔をつくり、前髪を適当にまとめ、スカーフで頭を包み、

ヘア・ピンで止める。手袋をしてハンドバッグを持ち外へ出る。大鏡の中の自分をよく見て納得ゆくまで直す。

かくして「彼」は「彼女」に変わった。手にハンドバッグとボストンを持ち、映画を見ながら適当な時間をみはらかつて館外へ出た。夜間のみ歩いていた時とは違って、真昼間の街は女装した彼をかばって呉れる何物もなかった。前から歩いて来る人が、すれ違ってゆくに際彼の顔を、ちらっと見てゆく。自分の胸の動悸が自分の耳に聞こえてくる様に感ぜられる。駅前の手荷物預り所にボストンを預けると、休日に賑うデパートに入った。一人の女性として彼は今、売場のウインドウをのぞいて立っている。男であることが判っても、もう着換えることは出来ないのだ。化粧品売場でマネキン嬢が流行の化粧法を披露していた。さすがに取巻いているのは若い女性ばかりであつた。そっと近寄ってみた。「如何がでございますか？一寸おつけになつて御覧下さい」半円の前面に押出されていた彼の方へマネキン嬢の指が伸びた。指先には、たっぷりとクリームが乗っていた。彼は、あわてて引下つた。エスカレーターで昇つて下着売場に立つ。男姿では容易に近付けない、いわ

ば禁男の囲みであつた。まだ十代の少女と思われる三人連が、いろ／＼と品物をウインドウから出させて、胸に当てたり肩にかけたりしていた。彼も吸い寄せられる様に、のぞき込んだ。人形の着ているスリッパに手を触れてみた。ナイロンの柔い感触。「一寸、これを見せて下さい」出来るだけ声を細くして小声で言った。ブラジャーを胸に当ててもみた。

「それでは、おちいさいのではないですか？このサイズの方が……」女店員が彼の身体を見ながら丁寧云った。ピンクのブラジャーを買って売場を離れた。その中に彼は、自分の顔が心配になって来た。額に汗が出ている。お白粉が剥けていないだろうか。化粧室は人が多かった。彼は、若い女達に前後を挟まれて順番を待った。女性同志の気易さから随分と大胆なるポーズで靴下を直したりするものもいたが、それに対して特別の感情も湧かなかつたのも彼自身、不思議な気がした。普段の男としての彼なら、その様な光景はシヨックであつたかも知れない。しかし、女装して女として立っている現在、彼自身、彼女達と同性の人間であるような錯覚に陥っていたからであつたろう。鏡を出し、顔を直し、ネッカチーフを、しっかり結び直すと幾分、

気も静まつた。

彼の女装歴が回を増すごとに、女装そのものも円熟していった。しかし、そうかと云つてホルモンその他の薬物で体質まで女性化した

## 乗馬ズボン・シリーズによせて

法 谷 四 郎

アメリカ少女との切腹プレイを描かれた藤山さんの「乗馬ズボン・シリーズ」を読み終えて後、数日して、偶々、歌舞伎座で「吉野川」に見入るアメリカ少女と隣り合わせになり、思わずドキリとしました。

というのは、私のはいった処は一幕見の場所で、勿論、私は桜花散る吉野川を挟んでの切腹を見にきたわけですが、彼女も、どうもそうらしいのです。時々メモをとりながら喰い入るように、日本のロミオが腹切る様を見入っていました。しかし、この妹背山の切腹は、きれいごと過ぎて、どうも私達の切腹マニヤには物足りない様です。刀を突き立てた瞬間こそ「ううっ」と呻きますが、左から右へ引廻す処は、芝居では、どうも軽すぎる様です。

白い腹をキリキリと掻き破って引き廻し

てしまうことには決断しかねた。その副作用が怖かったばかりではない。それより、寧ろ彼自身、男性としての自分を捨て切れなかつたと云うより、男性としての彼には洋々たる前途もあつたし、女装の動機が男性として女

の瞬間こそ、実は最も苦痛と陶醉に満ちた瞬間ではないでしょうか。そういえば、歌舞伎の切腹では、たとえば判官の切腹写真などで見ても、いずれも突き立てた刀が上すぎる様です。勿論、切腹には臍の上を横に切ることもあるわけですが、私には、どうしても臍を十分に切り廻す方が自然の様に思えるのです。これは、十分に掻き切るためには、その方が、ずっと力も入りま

すし、姿勢も美しい様に思えるのです。さて藤山さま、その後、お身体の方は如何でいらっしゃるでしょうか。蔭ながら御案じ申し上げて居ります。私は貴女のファンです。新しい本誌を手にとり先ず目次を開いて貴女の名前を拝見した時いつも私は目のくらむほどの喜びと感激を味わいます。

貴女の描かれる凄烈な割腹絵巻。――主人



性を愛することの異常な強さにあったからである。それは、同性愛が昂じて自分を女性化してしまふ種類の人々とは本質的に動機が違っていた。彼は後で述べる様に、女性緊縛のサディストであつたと同時に、女装した自分を緊縛するマゾヒストではあつたが、ホモの傾向は全然なかつた。体質まで女性化してしまつた。女装した時の、この様な気持は感じないのであるまいか。そうは言つても、年とともに伸びてくるひげや自分の皮膚を見ると、女装する時だけはこれらが女性と同じものであつて欲しいと思うこともあつた。

彼は優秀なる成績で学業を終えた。家族のものも周囲のものも、彼の前途を祝福し期待した。一流銀行に就職するのも、その難関ではなかつた。二重人格的な生活も、もう今では彼にとつては、それがむしろ正常な生活である様に思えた。自宅から勤務することは左程、困難でなかつたが、無理にアパート生活を主張したのも、この異常美の追求に若き日を、かけようと思つたからであつた。郊外の静かなアパートの一室に居を移したのは、彼の二十三才の時だつた。かくして彼の「女装」と「緊縛」の両輪は魔の前進を始めたのである。

(未完)

公が呻きながら、のたうちながら豊満な腹に刃を加え、ジリジリと引き裂いて行く時「ううっ」「むむうっ」と苦悶の呻きは、そのまま私の呻きなのです。貴女の生み出された、いくつかの文章を前にして、私は貴女の腹切る様や、のけぞりながら苦痛に耐える姿を、思い浮かべ、貴女の苦悶が多ければ多いほど、私はいい様のない陶醉の最中に身を浸すのです。

藤山様、お願い。どうか毎号、書き続けて下さい。御自分では、又かとお思ひになつても、私達のために無残な割腹をする少女達を登場させて下さい。法谷四郎。この無骨なペンネームに比べて、私はまだ若いのです。そして貴女に近い職業と境遇にいますといつていいでしょう。

ゴルフ場の緑の芝生で、原色に近いコートを着て腹を切る女性ゴルフアー。或は、スキー場。リフトの上での切腹。気がついて騒ぐ人々の上に、したたり落ちる鮮血。そして或は、音楽リサイタル。晴れの舞台で唄いそこねて無念の切腹をする美しいソプラノ歌手。——いずれも貴女なのです。

最近の記事に、女子大生の方々の実験記が載っていました。素晴らしいと思います。たしかに切腹は、夢の中だけのもので濫りに実行するべきことではないでしょう。し

かし決心した者ならば出来得ることだと思ひます。そして切腹は、普通に考えられてゐる様に成年男子の者というより、むしろ美しい少年、或は、うら若い女性のみがその美しさを十二分に發揮出来るものでしょう。

青白く固い鋼鉄の刃、真紅の血潮、苦悶の呻き、はじける肉と脂肪、傷口を押えて見つめる死にひんした黒い大きな眸、等々は、残酷な、そして美しい絵巻です。——藤山さま、本当に、こうした美しい絵巻物を絶えることなく書き続けて欲しいのです。私も及ばずながら、お手伝いさせて頂きます。

又、もう一つ、これは中康氏にお願いしたいのですが、本誌の創刊からの切腹の記事を一度、総合整理して頂きたいのです。新しい読者のためにも又、切腹という特殊なジャンルに、はっきりとクサビを打ち込で本誌のためにも、これは是非、お願いしたい処なのです。「女腹切八景」の頃から現在の藤山さんのシリーズまで、実見記、研究、資料と、あらゆる方面から、ゆっくり整理して発表して頂きたいと思つております。それは、きっと大変なものになるでしょう。これも是非、お願いいたします。

画

鋌

の

歌

仏 光 刀 四 郎

1

紫門五郎がこの和装の美人を見るのは、これが二度目である。背のすんなりした、よく和服の似合う女である。この前の土曜日、初めてこの恵子の家で会ったときも着物姿で、紺無地のお召の色に白足袋が清楚に映えていた。和服の似合うひとだと云う印象が、先ず紫門にはあった。齡の頃は二十八、九、人妻と思える。

冬の淡い陽差しが窓から流れたアトリエで、彼女はまた前日のように恵子から責められるらしい。室の隅にうなだれて座って、観念した態度が哀れに美しかった。

「紫門、貴男は見ちゃだめ。出ててよ」

テーブルの灰皿に煙草を押しつぶして恵子は紫門に云った。黒いスラックスの脚がソファから離れて、立った。草色のジャンパーを着て赤いベレエを冠っている。いかにも絵描きらしい身なりだが、恵子は画家としては、まだ無名である。尤も、富家の娘で、絵の方は道楽であろう。お嬢さんの暇つぶしの芸である。

「出るとおっしゃれば出ますよ」

ストーブの前で紫門は云い、マフラーを首に巻き、椅子の上のオーバーを取った。このアトリエに這入ってまだ五分と経っていない。寒風の中をオートバイを飛ばして体が凍えたので、ストーブの火が恋しく、恵子のアトリエに立寄ったのである。

「気の毒だけど」



「馴れっこだよ。この前も追ん出されたからな」

「ごめんね、紫門、気を悪くしないで」

恵子はドアを開ける。紫門は廊下へ出ながら、ちらっとあの女の美しい横顔をふりかえって見た。白い、匂うように美しい顔である。細い肩を落し、やはり、うなだれていた。

紫門が去ると、恵子はドアを閉め鍵をかけて女の方へ近寄った。

バシッ、女の頬へ恵子の手が飛んだ。「ああ——」女は顔を抑え、  
「顔は摸たないでエ」

「お脱ぎ。さっさと脱ぐのよ」

「はい」

女は急いで帯を解き、足袋を外した。着物の裏色が恵子の眼に泌みた。

「どうぞ」

乳当とパンティだけの姿になると、その花のように華奢な体を女は床にはわせ、蚊の鳴くような声で云う。

「どうぞ責めてください、と云うのよ」

「——ど、どうぞ責めて……ください」

「よしよし、責めてあげるわ」

恵子は、しゃがんで、ぴしゃ、ぴしゃと叩きだした。まるい弾力のある柔肌が、ぴしゃ、ぴしゃ、と烈しく鳴る。

「い、痛い——」

床を支え、女は身をよじるので、陽差しが髪と背を艶やかに染めている。

「なによ。たったこれ位で音をあげて。じっとして！ じっとしてなきやあ承知しないから」

「ああッ……」

恵子が背中に跨って、どしん、どしんと揺さぶるのである。細い腕が必至に身を支える。髪が解けて床へ垂れた。

「ふふ。だいぶ赤くなったわ」

掌型が薄赤くにじんだ柔肌を恵子はなぜまわし、再び、ぴしゃ、ぴしゃと摸ちすえだす。二十分余りそれがつづくと、恵子の顔には汗がにじみ、女は哀れなうめきをあげて、双眸から涙をしたらせた。  
「お願い、降りて、背中が折れそうだわ。降りてぶって——ああッ、痛い……」

恵子が噛んだのである。

「しゃんと四つんばってなきやあ、また噛むわよ」

「はい」

云いもあえず、ハラハラと落涙した。

「お泣き。たんと、お泣き」

ぴしゃ、ぴしゃ、柔肌は鳴りつづける。十分経った。

「ゆるしてえ？ もうわたし、だめよ。ゆ、ゆるして……ゆるして——」

力つきて、女は床に伏した。背が波うち、せいせい息をあえがせている。

「お願い、このままで、ぶってください」

「だめ！ 四つんばうの！ 背中が降りてあげるから、さあ！」

「つらいわ……」

泣きじゃくりながら、女はまた華奢な体を起し、高々と這った。猿の臀のようにまっかである。

「どうぞと、お云い」

ビシッと撲って、

「お云い」

「——どうぞ」

余程、悲しくなったのだろう。女は大声で泣きだした。白いむき出しの肩が顫える。

「ほほ……たんと、お泣きよ」

びしゃ、びしゃ、叩きながら恵子は笑う。窓の陽差しは早や斜陽であった。

2

日が昏れて女は許されて恵子の家を出た。豪壮な西洋館の石柱門を出ると、林に沿った坂道を町の方へさがって行く。北風が強く、女はショールで顔をくるんでいる。薄闇の中にショールの色と足袋の色が仄白かった。ぶたれた箇所が、ずきずきうずく身を、いたわるように、そっと女は足を運んで行く。

しばらく行ったときである。坂の上からオートバイのエンジンの音がひびき、ライトが女の背中へ射して来ると横をすりぬけて前に停まった。ギギギと車体が軋み、降りて前に立ちはだかったのは紫門五郎である。

「待ちな。話がある」

さっきアトリエで会った男と知って、軽く目礼して行き過ぎようとする女の手を、ぐいと紫門は掴んで引き寄せた。女は瞳を見はつて、

「は、はなして——」

「何も乱暴するわけじゃない。実は、さっきから貴女の帰りを待つ

ていたんだ。ま、私の話を聞いてくれ」

貴女がどう云う人だか自分は知らない。恵子に訊いても、おそらく教えてはくれないだろうし、貴女も無論、自分の口から素姓を語ることとはしないだろう。しかし、恵子の責めのモデルになるのは所詮、金のためだろうと自分は推察する。そうだったら自分も金を払うから、責めさせてくれないだろうか。大体、以上のような意味のことを紫門は女に云った。女の手を掴んだままであった。女も強いて振りほどこうとはしなかった。

「恵子は女で、私は男だ。しかし、みだらな行為は絶対にしない。

恵子と同様、ただ責めるだけだ。これは神に誓って云う」

「——」

「どうだろう？希み通り金は払うが、承知してくれないか——？」

「——今夜、いまからですか？」

「できれば」

女は、いやいやをした。

「今までぶたれていたのです。ですから、今夜はかんにんしてください」

「いつならいい」

「明後日くらいなら……」

「よかろう。明後日の昼迄に私の家に」

紫門は女に名刺を与え、薄闇の中で白い歯を見せて笑った。

「寒いのを我慢して待っていた甲斐があった。どう」

何か温い物でも町で飲まないかと誘ったが、女は従わなかった。

「明後日また」

云い残すと、逃げるように坂をくだって行った。香水の匂いが、



かすかに紫門の鼻に匂って来た。あの女らしい上品な香水の匂いだ  
った。



翌日は雨になり、それが小雨に変わって翌々日も東京の街に降りつ  
づいた。暗い氷雨である。

挿絵画家、紫門五郎の家は渋谷にある。道  
玄坂から一寸這入った高台に、青い文化瓦屋  
根の瀟洒な平家である。紫門は此处で妹と二  
人で暮している。妹は家事を見、昼間は四谷  
の洋裁学校に通っている。

紫門は、ひとり座敷に座って窓に降る小雨  
を眺めている。後ろで電気ストーブが赤々と  
火照り、部屋の中は暖い。

柱時計が十二時の点鐘を告げた。同時に玄  
関でブザーが鳴った。紫門は玄関へ走った。

「やっぱり来てくれましたね」

「おそくなりました、ごめんなさい」

三和土に這入ると女は丁寧に頭をさげ、傘  
の雫を外の方で払う。今日は洋装で黒い外套  
を着ている。それを脱ぐと、茶色のスーツ姿  
が、すらりとあらわれた。

家の中の女の匂いを敏感に察したらしい。  
奥様に責められるところを見られるのは、わ  
たし、いやです。美しい顔をこわばらせて女  
は云った。妹と二人ぐらしだが、今、妹は留  
守、夕方まで帰らないと紫門が説明すると、  
女は、はにかんだように笑って、

「あたくし、てっきり……」

「支度を」

「はい」

女は上衣のボタンを外した。折柄、雨が霽れて薄陽が窓へこぼれて来た。

「どうぞ」

乳当とパンティだけの姿になって四つんばうと、女は小さく云う。顔が、ぱあっと紅葉を散らしている。

「ぶつぞ、いいか！」

がらりと紫門の口調が変わった。

「どうぞ」

ぐっと女は眸をとじる。ビシッ！紫門は素手でぶった。

「うつ……」

男だけに、恵子からぶたれるよりも倍も痛い。女は筋肉をひきしめて次の打撃をうけた。びしびし、つるべうちに撲ちすえられていく。

「いたい、いたい——」

「まだまだ、これくらいで！」

力一杯、紫門は、ぶつ。

「ああっ、い、たっ——」

柔肌が赤くただれていく。女のうめきと膚がはせる音が妖しく部屋を領した。

「ちゃんと、はえ！」

苦痛に耐えかねて女が突伏すと、紫門は黒髪をつかんでひき起した。

「それで責めのモデルが、つとまるか！」

左手に髪をつかみ、右手でビシビシと、ぶちすえる。女は顔に生汗を浮べ、

「かみを離して——」

「はえ！」

「はいます、はいます、だ、だから——」

元の如く女ははったが、ひとうちごとに、ぐらりぐらりと体が揺れる。無惨や、白い柔肌は一面、真赤な炎症を呈している。そうして唇からは絶え絶えな悲鳴が流れる。すでに時計の短針は1時に重なるうとしている。陽はいつかまた翳って、外は風が騒いでいる。渋谷の街の賑いが風に乗って伝わる。

「ふふふ。だいぶ赤く腫れたな」

赤くなっただのは女の柔膚ばかりではない。紫門の掌も赤くなっている。

「——先生、もうそこは、かんにんしてえ」

泣きじゃくって女は慰める。挿絵画家として紫門五郎の名は高い。普通、彼は先生と称ばれている。

「まだまだ！」

紫門は、ぶちつづける。

「ちゃんとせぬかっ」

右に左に紫門の手が飛ぶ。女は柔肌から火花が発し、焼けただける感じであるう。

「——たすけてえ」

一声叫ぶと、女は廊下へ逃れた。しかし、狭い家の中で何処へ逃れる術があるう。廊下の隅にうずくまって掌を合わせ、



「もう許してえ……」

涙に濡れた顔が哀れにも美しい。

「許さぬ」

「――」

顔を覆って女は慟哭した。少女のように華奢な肩が烈しく、わななく。

「よし、二十分、休憩をやる。風呂場に行って湿布して来い。行け！」

二十分以上経ったが、紫門は待つてやった。湯殿では時々タオルの水を絞る音が聴える。女は手当をしていることだろうが、さぞ寒いであろう。紫門は部屋で煙草を喫いながら、そんなことを想った。外では風が狂いだし、雲が空を吹き流れている。やがて女は戻って来た。

きちんと髪を、なでつけ涙も拭いている。美貌が一そう上品に見えた。

「寒かったろう、ま、ストーブにあたれ」

紫門は云った。

「ええ」

すみませんと小声で云い、女はストーブのそばに来了。急に火気に触れて、ぶるっと身を顫わせた。

「まだ痛むか？」

女は少し、皓齒をほころばせて、

「三日は、うずきますわ」

「うふふ。可哀想に」

「わざとお訳きになるのね」

でも、湿布をさせて戴いて有難い、と女は云う。余程うれしかったものと見える。

紫門は目顔で促した。

「はい」

女は素直に再び、ぶたれる姿勢になって、

「どうぞ」

はあっと顔を赧くした。

### 3

渋谷界隈のバー・ステーション・ワゴンで紫門五郎は恵子と遇った。あの日から六日ほど経った夜である。

スタンドの坊主椅子に掛けて、ハイボールのグラスを傾けている赤いベレエ帽の恵子を入口で、すぐ眼にとめると、

「どうだい、女流画家」

寄って行って紫門は背中を突いた。

「ああ、くすぐりたい」

恵子は身をよじり、

「紫門、顔色が悪いわ」

前の鏡を見て云う。

「仕事で徹夜したんだ」

「忙しいのね」

「ああ、年から年中、忙しくてくね」

「時に、あの君の責めのモデルね」

紫門は、あの女のことを話題にだした。

「僕も責めてみたが、いやまったく、すばらしいモデルだ」

あの日の責めの模様を逐一、恵子に語って聞かせた。

「驚いたわ」

恵子は云った。

「ショックよ」

「ショック？」

「ええ」

一息にグラスを乾して、

「貴方のモデルになるなんて憎いわ」

真実、憎そうな怒った瞳で恵子は前の鏡を見ていたが、おいと立ちあがって、

「お幾ら」

バーテンに云う。

「おい、もう帰るのか」

「帰るわ。貴方なんかと一緒に飲みたくない。私のモデルを勝手に使ったりして！」

「ま、待てよ」

紫門は止めたが、振り切って恵子はバーを出て行った。

バーを出ると、すぐ角の赤電話で恵子は女を呼びだした。女の家には電話はない。近所の八百屋に取次いで貰うのである。

「私のアトリエに、すぐいらっしゃい」

恵子は命じた。

「今からですか？」

小声で女は云う。

「そうよ。すぐ来るの！」

声荒く云って恵子は電話を切った。

どう考えても、むしろくしゃする。紫門も紫門なら、云うままにモデルになった女も女だと、腹が立ってならない。恵子は目についたバーに飛び込んで、ハイボールをまた一杯、呷ってから、我家までタクシーで帰った。

女は、もうアトリエに来ていた。恵子の酔って怒った瞳に見えられると、女は怯えたように服を脱ぎ、いつものパンティ一つになって、

「こわいわ。何を怒っていらっしゃるの」

「とばけないで！」

紫門の責めのモデルになったことを隠さず白状して詫ければ、恵子は許す気でいたが、こう白ばくされると、そう云った余裕はどこかへ吹きとんだ。

「おはい！」

「はい」

やわらかな双つの隆起を高々と上に向けて女が四つばい、

「どうぞ責めてください」

と云う台詞半ばに、恵子の四肢は華奢な背中を跨いでのしかかった。

猛烈な火のような平手うちが加えられた。

「ああッ——い、いたいッ」

「なによ、このろくでなし！」

約二時間後、女は紫門五郎の家を訪れて画紙を抜いてくれと懇えた。紫門に抜いて貰え、自分で抜いてはならない。そう命じて恵子が此処までタクシーに乗せて来たと言った。



外は夜が深い。その夜闇の道に恵子がまだじっと立っているような気が紫門はした。



「お願いです……ぬいて——」  
苦痛に声をつまらせて女は云う。

「上り給え」

紫門は云い、三和土に降りて女に腕を貸してやりながら外の気配を読んだが、恵子がそこに居る様子はなかった。紫門は女を座敷に通した。

俄破と突伏して「抜いて……」と女は懇える。画紙が、びっしり突き刺さっているのだ。

その無惨な身体を一目見て、「うわっ」と顔をおおい、壁際へいざったのは紫門の妹である。妹は理枝と云って今年十九歳。「むごたらしいわ、お兄さま、早く抜いて上げて」

顔を、おおったまま云った。

「お願い……」

苦しい息で女も云う。

「ずいぶん、ひどく責められたものだ」

紫門は薄笑いを浮べて、いたましい女体を眺め、手を下そうとしない。紫門の眼に、これはうれしい見世物であろう。

女のやわらかな白い肌には、幾条もの鞭痕が赤く爛れている。恵子のアトリエで二時間にわたって、まず平手打ち、次に鞭打ち、それから画紙を一面に突刺されたものと見える。その責めが、いかにすぎまじかったか、容易に想像するに足りるのである。

「もっと責めてやるぞ」

恵子以上の責めを、この女に加えてやろうと云った意慾が、紫門の面上に現われた。

「理枝、お前は自分の部屋に行っている」

「いやです」

彼の妹は云った。

「いやいや、お兄様。この人をこれ以上、責めるなんて」

理枝は同じ女であっても、この痛ましい女の美貌に魅かれ、同情を誘われるものがあるらしい。日頃、兄の言葉には、すべて従順な娘が、めずらしく逆らった。

「行け！」

紫門は嗷鳴った。

「悪魔だわ、お兄さま——」

悲憤の言葉を吐いて理枝が部屋を去ると、わあっと女は声を放って泣きだした。

「責めないで……お願い……」

泣きじゃくり紫門の足もとにひれふして懇える女を、紫門は力ずくで木椅子の上に座らせた。画紙が一そう肌に喰い込む。

女の唇からはとばしった苦痛の悲鳴は、理枝の耳にまで届いた。

「ううっ——」

血の涙をしたらせて女は苦痛に呻く。白い腕を後手にさせて、紫

門は絞めあげる。女は椅子から腰を浮すことができない。美貌が蒼白になり、白い腰に血がにじんだ。自らの体重で画紙の責めを激しくするのだ。一面、紅い血がにじみ、それは流れたした。

「ゆ、ゆ、ゆるして……」

「歌え。このままでもなにか歌え」

歌ったら許してやると紫門は云う。

夜の帳りが しずかに

しずかに しずかに 霧のように

霧のように 街に舞いくだる

悪魔のように 神のように

ひとびとの窓々に ひとびとの胸々に

霧のような帳りが舞いくだる

女は歌った。シャンソン「夜」の一節である。画紙の苦痛にあえぎながら、幽かな、しかし澄んだ美しい声で女は唄った。噫乎、その声は実はマゾの甘美に酔い痴れた声ではなかったか。

4

浅春の季節になった。紫門の家の庭の白梅が、そろそろ、ほころびかける頃である。とは云え、朝晩の冷たさはまだ冬の名残りが充分である。

紫門は近頃、油絵の制作にかかっていた。二十号の、画題は「答刑女」と云う絵である。何分、当今、売れっ子の挿絵画家だから余暇を見てカンバスに向う状態で、遅々として、はかどらない。



都合のいい時に女を呼び出して、鞭責めを加え、苦悶する姿を写し取って行く。女は午前中に呼ばれたり、午後には呼ばれたりするが、無論、天気の日に限って夜は使わない。

呼び出すと云っても女の住所が紫門に分っているわけではなかった。恵子を通じて招くわけだ。

恵子は一時嫉妬し、ああ云う無惨な画紙責めを加えて女を紫門の処にやるような仕打ちをしたが、今ではすっかり嫉妬の角を折って女を共同のモデルとして扱うようになっていた。交互に彼女を責めるのである。

女の素姓や住所は恵子は決して明かさない。この点は女との間に固い約束が結ばれている模様である。したがって、紫門が女を招ぶときには先ず恵子に電話して、恵子から連絡して貰う。

女は、前日、恵子に責められた身を紫門の家に運んで来て紫門に責められたりする。二日つづけての責めに耐え得るように、女の柔い肌は馴らされていた。

「どうぞ責めてください」

鞭痕に彩られたまろい肌を向けて女は四つんばうのである。

「頭をつける」

「こうですか」

女は畳に顔を伏せる。白い衿足が薄く紅味を帯ぶのは羞恥が消しがたいと見える。

「……寒い。早くぶって」

このまろい可愛い肌を撲たれるために、美しい顔に化粧を差し、粧いをやつしてやって来るかと想えば、紫門はこの女がまことにいいらしい。

びしびし鞭を当てて、女が声を挙げて泣きだすと、その苦悶のさまを紫門は画布に写し取っていく。絵筆を置いては鞭を振り、鞭を置いてはまた筆を取るのだ。責められる女の痛ましくもあてやかな姿が、次第に精彩を帯びて画布にあらわれてきていた。

描写と鞭打ちとを兼ねて紫門も疲れる。女の白い肌が大概、赤くなる、

「今日はこれまで」

と紫門は筆を置いてソファに身を倒す。

「手当していいの——」

泣声で女は云い、犬のように四つんばった身を起すと、湯殿へ湿布しに行く。冷たい濡れタオルを爛れた肌へあてがうのだ。ドアに鍵を掛け、誰も見てない浴室だが、しかし、あられもない自分の姿に女は、ひとり頬を染めてタオルを何度か水に漬ける。そうして責められた身体を鏡に写して見るのもこの時だ。女の顔は、ひとり羞恥に紅葉して鏡を眺め、濡れタオルを、そっとあてがう。

挿絵画家、紫門五郎が、ひさしぶりに描いた油絵の「答刑女」は、春に完成した。庭の梅花が散り、代って花壇の花々が、いっせいに花を開いた頃である。

「この絵は売りたいくない」

非売札をつけて展覧会に出品するつもりだと、紫門は女に云い、妹の理枝にも、そう語った。売るには惜しい出来栄えだと思つと、紫門は作品に惚れこんでいた。自画自讃ではなく、たしかに「答刑女」は生々しい凄艶な迫力の籠った特異な逸品であった。

紫門は恵子を招いて、この絵を見せた。恵子は道楽半分とは云え、

一応、画家の端くれだから、一目でこの絵のすばらしさに打たれた。わけでも彼女はサディスティンである。妖しいサディズムの香気に酔うような心地を覚えた。優秀な作品は、描いた者も見ざるも、ともに一種の法悦感を覚えるものである。

絵の完成を記念して、その夜、二人で女を責めることを紫門は恵子に提案した。一も二もなく恵子は賛成して、紫門の家から女へ電話をかけた。八百屋の電話番号を回し、女將に取次を頼む。紫門には聴えないように女の名前を恵子は小声で云う。

やがて、受話器へ女の声が流れた。「もしもし、恵子さんですか？」と云う。

「紫門の家にいらっしゃい。今日は彼と二人で貴女を責めるの。すぐ来るのよ」

短く命令して電話は切れた。否応ない命令である。

女は家に帰って仕度をはじめた。普段着の粗末な服を脱いで、茶色のスーツに着替えるためスリッパ一枚になったとき、隣間から夫がはいって来た

「あなた、休んでいらっしゃい。用事があったら云附けてくださるなきやあ」

女は夫の手を取った。瘦せた骨張った手である。顔が青く、弱い咳をして、

「また、ぶたれに行くのか」

しゃがれた声で云う。

「ええ、ぶたれにまいます」

女は、ほほえんで夫の手を握りしめた。

「貴男が元のお体になられるまで、あたくし辛抱しますわ」

「はえ」

「——？」

「這うんだ。四つんばうのだ。わしだって……わしも責めてやる」何も身を許すわけでもないのに、美貌の妻の体を他人が玩具のように責めて興ずることに、夫は妬心が動くらしい。哀れな妬みである。女のりこうな頭は、夫のその心の悶えを、すぐに察した。

「あなた」

はほずりして、

「帰って来てから、たんとぶって」

「は、這え。這うんだっ」

「ねえ、お願い。あとで、ぶって」

おそくなったたら、また、どんなひどい責めを受けるかもしれない、私を可哀想だと思って行かしてくださいと女は頼むが、

「はわぬかっ」

ビシビシと夫は素手で、ぶった。

「待って」

あきらめて女は四つばい、打撃に耐える姿勢になって、

「どうぞ」

ビシビシと、やわいまるい膚が夫の骨張った掌でぶたれだし、掌の型が痛々しく赤く擦れていく。女は唇を噛みしめて痛みを憶える。

「許してえ——」

体をよじって、みもだえた。

「片側ばかり、ぶたないで——」

「甘えるな。画紙責めだって受けるくせに。じっとしている。こいつ」



## 奇譚クラブ旧号の在庫案内

復刊第1号	(昭和30年10月号)	△売切
復刊第2号	(昭和30年11月号)	△売切
復刊第3号	(昭和31年4月号)	△売切
復刊第4号	(昭和31年5月号)	△売切
復刊第5号	(昭和31年6月号)	△売切
復刊第6号	(昭和31年7月号)	△売切
復刊第7号	(昭和31年8月号)	△売切
復刊第8号	(昭和31年9月号)	△売切
復刊第9号	(昭和31年10月号)	△売切
復刊第10号	(昭和31年12月号)	△売切
復刊第11号	(昭和32年1月号)	△売切
復刊第12号	(昭和32年2月号)	△売切
復刊第13号	(昭和32年3月号)	△売切
復刊第14号	(昭和32年4月号)	△売切
復刊第15号	(昭和32年6月号)	△売切
復刊第16号	(昭和32年7月号)	△売切
復刊第17号	(昭和32年8月号)	△売切
復刊第18号	(昭和32年9月号)	△売切
復刊第19号	(昭和32年10月号)	△売切

復刊第20号	(昭和32年11月号)	定価二百円
復刊第21号	(昭和32年12月号)	定価二百円
復刊第22号	(昭和33年1月号)	定価二百円
復刊第23号	(臨時増刊号)	△売切
復刊第24号	(昭和33年2月号)	定価二百円
復刊第25号	(昭和33年3月号)	定価二百円
復刊第26号	(昭和33年4月号)	定価二百円
復刊第27号	(昭和33年5月号)	定価二百円
復刊第28号	(昭和33年6月号)	定価二百円
復刊第29号	(昭和33年7月号)	定価二百円
復刊第30号	(サド特集号)	△売切
復刊第31号	(昭和33年8月号)	定価二百円
復刊第32号	(昭和33年9月号)	定価二百円
復刊第33号	(昭和33年10月号)	定価二百円
復刊第34号	(昭和33年11月号)	定価二百円
復刊第35号	(増刊号青い魔院)	定価二百円
復刊第36号	(昭和33年12月号)	定価二百円
復刊第37号	(昭和34年1月号)	定価二百円
復刊第38号	(悦唐小説と緊縛写真)	定価二百円
復刊第39号	(昭和34年2月号)	定価二百円
復刊第40号	(昭和34年3月号)	定価二百円

復刊第41号	(昭和34年4月号)	定価二百円
復刊第42号	(サド特集第二集)	三百五十円
復刊第43号	(昭和34年5月号)	定価二百円
復刊第44号	(昭和34年6月号)	定価二百円
復刊第45号	(悦唐第二集)	定価二百円
復刊第46号	(昭和34年7月号)	定価二百円
復刊第47号	(昭和34年8月号)	定価二百円
復刊第48号	(昭和34年9月号)	定価二百円
復刊第49号	(昭和34年10月号)	定価二百円
復刊第50号	(昭和34年11月号)	定価二百円
復刊第51号	(サド特集第三集)	三百五十円
復刊第52号	(昭和34年12月号)	定価二百円
復刊第53号	(昭和35年1月号)	定価二百円
復刊第54号	(悦唐第三集)	定価二百円
復刊第55号	(昭和35年2月号)	定価二百円
復刊第56号	(昭和35年3月号)	定価二百円
復刊第57号	(サド特集第四集)	三百五十円
復刊第58号	(昭和35年4月号)	定価二百円
復刊第59号	(悦唐第四集)	定価二百円

御希望の年月号御指定の上、御申込次第  
厳重包装の上急送申し上げます。御送金は  
なるべく現金書留か振替を御利用下さるよ  
うお願いいたします。

女が渋谷に着いた時は、そろそろ空が昏れの色を見せて、道玄坂の店々には、はや、燈が点っている。紫門の家へ向って急ぎ足に女

打擲は苛烈になる、しかし、肺を病む夫は、その力の消費に顔面蒼白になって、妻の背中に縋って、  
「ゆ、ゆるしてやる……」  
想いやりのないことをした、早く行って早く帰って来てくれと云った。

は道玄坂を登る。(こんなおそくなって、今日はきつと画紙を刺されるわ)  
画紙で責めながら歌を唄えと云ったら、何の歌を唄おうか知ら。女は思った。  
思いつつ女は坂を登った。



運馬  
馬に跨った私の後から  
荷物も背負った下馬  
武進加つてくる

倉 仁 成 人

## ある女優の 乗馬日記より

〇月×日

撮影の方は私の出るシーンを一応撮り終えたので、朝からゆっくり出来る。そうかと云って夏の暑い日ざしの中に出て乗馬などは出来ない。陽に焼けてしまったら大変なもの。

昼頃、前に頼んでおいた鞍と乗馬靴が相次いで届いた。早速、台の上において跨ってみる。成程、前あげは普通の鞍より高いし、全体が私の臀部に吸いついてくるみたい。その上、ある程度の柔かさがあるし、布の鞍覆いも洒落ている。亦、腿が当たる部分も布で覆われている。これなら裸でも大丈夫、やはり鞍は注文に限るわ。今夜は始めてあの馬を責めるのだから、存分に責められるように馬丁の石川に特に馬をよく手入れして新しい鞍を置くように命じた。ああ日の暮れるのが待遠しい。

夕食を早目にとって一休みした後、私は、かねて考えていた通り、ブラジャーとショーツと云う、ほんとの下着だけの姿に膝下までの長いウールのソックスを履き、そして今日届いたばかりの新しい乗馬靴を履いた。まだ夏の日には暮れない。そこで私は馬丁の石川を呼び、ちょうど人間馬の時のような恰好をさ



せ、武造には靴磨き台を持って来させて私は石川の背に跨り靴磨き台の上へ新しい乗馬靴を履いた足をのせ、武造に念入りにブラシをかけるよう命じ、更に拍車をつけさせた。

これで乗馬の仕度は全て整った。いつも馬に乗っている私にも似合わず、私は異常に胸が高鳴り、ジーンとして熱っぽい。新しい馬に乗る期待で私の身体が燃えているみたい。いつものように四つ這の武造の背から、新しく買った私の馬に跨った。馬丁の石川が直ぐに乗馬鞭を私にさし出して、鎧革を適度の長さにした。石川の吐く息が私の足にかかって何んだかくすぐったい。

私は馬腹に拍車を突き立てた。いつもの通り最初は手綱を引き絞って、絶え間なく拍車で馬腹をける。この馬の体は、女としては大柄な私にとって少し小さいかも知れないが、乗る時に足をあまり広く開く必要はないし、跨った時の感じが素晴らしくよい。その上、鞍も感じがいいし、鎧の長さも具合がよい。

しばらく馬を並足で責めていると、異様な興奮を感じてくる。そして馬の筋肉の動きや息使いまでが、ナイロンのショーツを通して、馬の背に跨ってしっかり締めつけている私の

太腿の内側から直かに伝わってきて気が遠くなるくらい。これだから馬に乗るのを、やめられないだわ！

私は夢中で馬をいじめたくなる。私は再び股で馬体を締めつけると、いきなり馬の首筋に激しい鞭の一撃を浴びせて、拍車を思い切り馬腹につき立てた。馬は一瞬、首を蛇の様にくねらせ跳び上がり、後足で立ち上ろうとした。私はハッとして手綱を締め上げ、上体をびったりと馬の背に張りつくようにして抑え、続けざまに拍車を馬腹へけり込んだ。馬は尚も私に反抗して後足で私の靴の辺りをけろうとする。そして私は馬の体を所きらわず鞭で打ちつづけて馬をしずめようとする。ピシッ、ピシッ、ピシッ、ピシッ、私の鞭が馬の体で炸裂する。この時のスリル、快感、そして異常な興奮は、忘れようとしても忘れられない。

この後、速足、駆足を交互にやらせて最後にゆっくりと並足で馬場を廻らせる。私はすっかり上気して、顔はほてり、びっしょり汗をかいた。

私はサジステイックな味は、やはり乗馬に限ると思う。だって人間馬にしても、普通の

責めにしても、あくまでお芝居なんだから。しかし、そこへいくと乗馬は違う。私と馬の戦いだ。両方とも根限り戦って、そしていつでも私は勝って馬を征服する。この気分こそ乗馬の醍醐味ではないのかしら。

馬上でそんな事を考えながら馬を歩ませていると、もう十時近くになってしまった。すると、もう三時間近くも馬を責めていることになるのだわ。全く夢中で馬に乗っていると時の経つのは早い。馬場の水銀灯が青白い光を投げかけている。

「夜更けの馬場に馬を責める美女」なんてフッフフ何だか映画の題名にでもなりそうな図だわ」ひとりで満足の笑みが浮んでくる。馬の腹の部分は、私があまりにも強く拍車を突き立てた故か、真白い毛が赤く染っている。どうやら傷をつけたらしい。その他、馬の身体のおちこちは鞭の痕で一杯だ。今夜は初めてこの馬に乗ったし、その上に、しばらく馬に乗っていなかったもので、つい／＼責め過ぎてしまったようだ。馬丁の石川によく手入れするよう命じて、お風呂に入る。今夜は、ほんとうにくたびれたが、私の征服感も充分、満されたのでよく眠れそうだ。

〇月×日

また、ここ一週間ばかりの間、徹夜の強行撮影の日が多いので、ろく／＼家へも帰る事も出来なかったが、一応、昨日でクランク・アップとなり、一週間ぶりで乗馬を楽しんだが、今夜はまた新たな楽しみを発見して愉快だった。と云うのは、今夜は一週間ぶりに馬に乗れると思ひ、期待に胸はずむ心持で家に帰り仕度させようとした所が、下男も馬丁も何処かへ出かけてしまっているらしく、私は気がむしゃくしゃして下女のクニに当たっている所へ、しばらくして二人揃って帰って来た。二人共、私がここ数日、家へ帰らないのを幸いに、外で酒を飲んで来たらしい。私は大声で怒鳴りつけて、それでも一応、乗馬の用意をさせ、私も最近の習慣で下着だけの姿に乗馬靴を履いて馬場へ出た。

所が、下男を踏み台にして馬の背へ跨がろうした時、少し酔っている武造は支えている腕を曲げてしまった為に、踏み台がくずれたのと同じで私は思わずよろけ落ち、危く尻餅をつく所だった。私は、しゃくにさわり、武造を乗馬靴の先でけとばし、倒れた所を思い切り踏みつけてやった。そして私は馬の背に

跨ってから、武造と馬丁の石川に「シャツを脱いでここへお出で！」と命じ、鞭打つ構えをした。二人は打たれるのは承知だが、しぶ／＼ながら云いつけられた通りになってやって来た。私は二人が馬の側へ来るや否や、いきなり乗馬鞭を振り上げ、武造の石肩から胸へかけて、ちょうどけさ掛けに、するどい鞭の一撃を打ち下ろした。ピシッ！と悲痛な音と共に武造は跳び下った。続いて馬丁の石川の頬へもピシッ！と激しい一撃を加えたが、二人ともあやまろうともしないので、私は思わずカッとなり、ピシッ、ピシッ、ピシッ！と二人の頬や肩、胸などを続けざまに打ちすえた。みる／＼うちに二人の顔や身体にみみず腫れがはつきりと浮び上って来た。

ああ、何と云う気分をそそる音だろう。馬に乗ったままで人間を鞭打つ気持は、また格別ね！ 私は馬に跨って馬上から奴隷達を鞭打つ残忍な女主人の姿を頭に描いた。

続いて私は二人に、この馬場の中を走るように命じた。これは実は、私がこのまま馬で二人を追いかけて鞭打ってやろうと云う、私が前から常に考えていた鞭打ゲームの面白さと、懲戒を兼ねた一石二鳥の遊びをしようと

今考えついたところだった。私が考えている鞭打ゲームと云うのは、まず奴隷を馬場の中で自由に走らせ、馬に乗った女主人は逃げる奴隷を追いかけて、ある時間内に奴隷を何回鞭打てるかと云う事を競うゲームだ。

ああ！ ほんとにそんな事が堂々と出来たならば楽しいがなあ！

兎も角、私はすぐに馬に鞭を当て、駆足で馬を走らせながら、馬上から逃げ惑う二人の男共の背に鞭を浴せた。二人は酔っているため、あまり速く走れない。その上に、どうしたって馬の方が人間より速いものだから、いきおい彼等は何回も何回も私に鞭打たれるわけだ。そこが私のつけ目と云うわけ。しかし彼等は直きに、へたばってしまい、馬場の柵にもたれかかって、もう許して下さいと云う。

私は丁度、嗜虐的な気分が上りつつある時だし、未だ鞭打ゲームの楽しい気分も満喫せず何か物足りない気持がするので、尚も二人に向って鞭を振り上げた。二人は只、恐れ驚いて、終いには私の馬の前に膝をつき、土下座をして私に許しを乞うた。私は続けて彼等を鞭打とうとしたが、とても乗馬鞭では土下座している彼等を打ちすえる事が出来ないの



で、やめてしまった。

しかし、さっそうと白馬に跨った私の前に土下座する二人の男を、馬上から見下すのは、とてもよい気持！ 何とも云えない優越感を感じて身体全体がジーンとしてくる。

まるで忠誠を誓う家来の前に立つ馬上の女王様のような感じがする。もっとも好枝は実際にこの家では女王様なのだから不思議はないわけね！「今度こんな事があったら、それこそ承知しないからね！」と云ってから、私は満ち足りた気分で馬腹に拍車を突き立てた。

股で馬をグイグイと押し出すようにしながら、絶え間なく馬腹をけり、そして鞭を当てる。その度にピン／＼とした反応が、跨っている私の太腿へ跳ね返ってくる。

私は馬場の鏡に映る、白馬に跨った美しい自分の姿を、うっとりとして、いつまでも飽きずに眺めていた。

○月×日

日中の残暑は厳しいが、夜は、めっきり涼しくなり、馬場の水銀灯も涼げな光を放ち裸で馬に乗っていると最初のうちは寒いくらい感じるようになった。

毎晩、新しく買った「雪王」にばかり乗っていたので、今夜は久しぶりに「松王」に乗る事にした。そこで私は馬丁に今迄「雪王」に使っていた鞍を「松王」に置くように命じてブラジャーとパンティだけとなり靴下をはきよく磨かれた乗馬靴に足を入れた。

やはり「松王」は「雪王」より馬体が大きいので跨った感覚が大分違うし、責め具合も違うが、どっちとも云えない、夫々よい味が味わえる。拍車を入れたり、鞭を当てたして歩を延しても、グツと動きが大きい。ゆったりとした何とも得体のしれない振動が両足の内側へ伝わる。そして鞍が上下、前後、左右とゆれて、適度な柔かさをもった鞍へピツタリと吸いついているように跨っている私の足

に快いリズムを伝える。

ハツとして眼を開き、いつものように鋭く拍車を馬腹へけり込み、鞭を入れる。直ちに馬は速足へ、そして駈足へ。私は夢中でピシッピシッと馬の肩、腹、尻などを乗馬鞭で存分にひっぱたく。馬は猛烈な勢いで走り出した。まるで私が両足の間に馬を挟んで飛んでゆくみたい。「松王」も久しぶりに、私にたっぷり責められ、汗をだらだら流し、大きな鼻の穴を尚更大きくして、フーフーと全身で息をしている。

私はさんざん、足下の巨大な動物を気がすむまで虐めぬいた末、解放してやった。

(続く)

## 女体責

### 写真厳選集

大手札型印画紙焼付 口絵に掲載不可能なる力作  
各三枚一組二五〇円 中より厳選した粒選り品。

## 危機一発

(絹川文代) 略号「きき」

後手猿轡の無防備な身体に襲いくる悪魔の手に引きはがれようとするパンティ……

## 女体開陳

(絹川文代) 略号「かい」

美しい女がきびしい縄目に足の指をくの字に曲げての喘ぎようは……

## 哀花悶々

(絹川文代) 略号「あい」

白く輝く柔肌をぎりぎりタテに縛りあげて悶えに悶えぬく哀れにも艶な姿……

## 雁字搦目

(絹川文代) 略号「から」

首、胸、腰、股とガンジガラメに喰い込めとばかり減茶苦茶に縄をかけられ……

## 寝室俯瞰

(愛川悦子) 略号「ふか」

ボリウムのある愛川さんの肉体が縄目にくびれて盛り上りベッドに転々と……

## 柔肌地獄

(大塚啓子) 略号「やわ」

押せば凹こみ放せば弾き返す張りのある全裸の柔肌を余すところなく露呈して……



# 春の映画

## 縛りシーンから

サガ・ミヤコ・記

テレビ攻勢に対抗するために映画界にエロ・グロが濃厚になってくることは、なげかわしい傾向だ。映倫でいくら倫理規定を設けても、そのアミの目をくぐり製作しているような印象を受ける。

「九十九本目の生娘」で、グラマー三原葉子の素晴らしい吊し責めを見せた新東宝では「裸姫と熊娘」など、題名からグロテス

クなもので、正月映画も「女奴隷船」「黒線地帯」「0線の女狼群」「爆弾を抱く女怪盗」など、縛りシーンやエロシーンを多く観せる作品を並べ、一部愛好者を喜ばしている。

「女奴隷船」は、シュミーズ姿の女性がウロウロするが大した縛りシーンはなかった。ただ清純スター三ツ矢歌子が、船上で柱にしばりつけられてムチ打たれるが、緊迫感はなか

った。原作では、三原葉子の女王がサカサ吊りにされたり相当に凄い責め場がある。

嵐寛寿郎の「大天狗出現」で、松浦浪路の芸者が人身御供で外人の許へ送られるのだが、長ジュパン一枚にされ、しごきで後手に縛られて襲われたり、チラリズムの色気をみせる。また路上で捕えられ、後手縛りで連れて行かれるが、「裸姫と熊娘」な



ど、今年は「いじめられ美女」として可愛がられることだろう。

「0線街の女狼群」では、小畑絹子が相当責められる。猿ぐつわ、後手縛りの電気責めシーンなどは、チョット凄じい。田舎出の少女が転落していくプロセスを採り上げたものだが、客取りを拒んで責められたり脱走をはかりリンチに遭うところなど、責めの材料はそろっている。

「大虐殺」で、巻頭の朝鮮人が縛られて銃殺されるシーンは、エキストラや新人達であろうが、縛られて突き転がされる場面など迫力がある。「爆弾を抱く女怪盗」では皇后女優、高倉みゆきが密輸団に挑戦する謎の女で、最後は敵に計られ、秘書役のシークレット・フェス・三条魔子と共に、密航船に監禁され、後手にしぼられた縄目にダイナマイトを挿みこまれ、モーターボートに乗せられる。ダイナマイトの導火線は高倉の体を焼こうとする。

「地下帝国の死刑室」でも、警察のスパイとなった池内淳子が一味に捕まり、地下室で縛られ、ムチ打たれ、独房に監禁される場面があるというから一寸楽しみである。次に大映だが、正月作品の「初春狸御殿」

では、若尾文子の狸のお黒が、オヤジの菅井一郎扮する泥右衛門と共に狸御殿にしのび込み、捕えられる。若尾は三巻程、荒縄でしばられ木につながれる。可憐である。前作では高山広子がお黒役で縛られていた。

二月作品の、角田喜久雄原作「風雲将棋谷」で、近藤美恵子の女目明し、お絹が吊し責めにあう。以前の阪妻出演作では、市川春代のお絹、大倉千代子の朱実という配役で市川が猿ぐつわをされてかつがれたり大倉が縛られてサソリ責めに遭うところなど、オールドファンには懐しい場面だったが、今作品は原作と異り、お絹が将棋谷の姫君、みどり姫ということで、お絹がサソリ道人に捕えられ、財宝の在所を示すズイ宝の王将を出せと迫られ天井からの吊し責めかけられる。近藤美恵子は「花太郎呪文」などで、縛られ責められる方は大いにかせいでいるのでなれたものだ。荒縄で胸を三巻ほどギッチリと緊縛され、吊られて後手の指も見せる。宙吊りはフキ替えらしいが、本当に宙に吊っているらしい。そして縛られたままで縄を切られ、地下牢へ転落、雨太郎に救われる。

「千姫御殿」では、中村玉緒の腰元おかつが山本富士子の千姫の前に縛られる。恋人を奪

われたうらみで、千姫御殿へ腰元として奉公に上り、千姫を刺そうとするが失敗して捕えられる。玉緒もよく縛られるが、可憐で痛々しい。

「よさこい三度笠」で、中田康子の酌婦おりんが、悪親分に捕えられて木に縛りつけられ、モリを投げつけられる場面がある。漁夫のモリ投げのリンチである。豊満な中田の縛りシーンは見ものだろう。

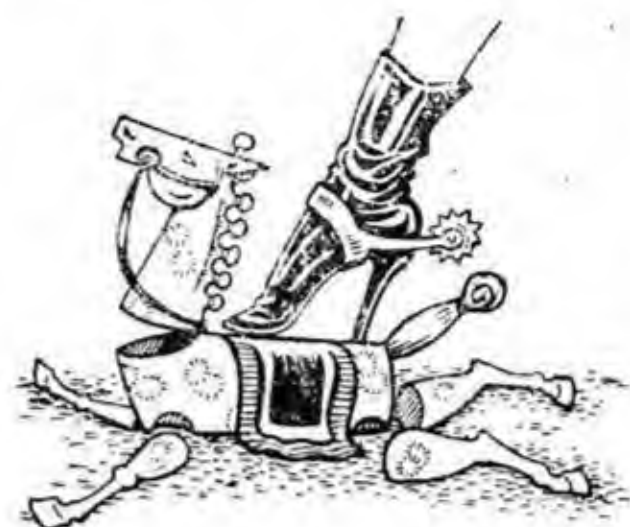
東映は最近縛りシーンが少なくなって吾々にとつては淋しい気がする。「丹下左膳・妖刀濡れ燕」で病氣快復後、第一回出演の桜町弘子扮する萩乃が、拐かされてしばらくはするが、猿ぐつわに前手縛りで一寸たよりない。

「むつつり右門・地獄の風車」で、青山京子が縛られ姿を見せてくれる。演技派のこゝとだから見応えがあっている。

(スチルは新東宝映画「地下帝国の死刑室」)

|| 筆者提供 ||

× × × × ×



# マゾヒズム百景

## 馬場好男

### 第三十景 続私は私の馬乗考

近所のデパートの屋上に行くと見ると、子供の乗物がいろいろ動いている。汽車、自動車、飛行機、それから現代の子供がよろこぶような人工衛星など。その中に、木馬がびよんぴよんはねをぐるぐる廻るのがあるが、何気なく動き始めたのを見るとみんな女の子ばかりなのだ。偶然だったのだろうけれど十三、四才の子から三つ位の子まで、十頭位ある木馬に跨ったのがみんな女の子で、正月らしく美しいふりそでの着物を着た子がすそを

はしよって跨っていたり、オーバーの子が跨っていたり、そしてぐるぐる廻り出すと見ている男の子女の子も、乗っている女の子達もみんな嬉しそうに大よろこび。一分か二分で終る此の乗物を、ちょうど女の子ばかりが乗っているのをみて気がついたが、毎回、半数以上が女の子で占められている事にも私は気がついた。

男の子は殆んど汽車とか飛行機に乗る故でもあるうけれど、女の子が、即ち将来の女性にみんな馬に乗るのをよろこぶのは男を馬にしてゆく天性のあらわれかと思ってもみる。

話は変わるが最近には本当に若い女性達は馬乗りに跨る事が多い。スラックスがスタイルブツクを飾る様になった事も原因があるかもしれないが、そのものずばりは本物の乗馬熱、これは問題なく馬乗りだ。それから雷族と云う例のオートバイである。颯爽と若い女性がこれに馬乗りに跨っているが専門語で何何と云うのか忘れたが、いわゆるシート？（座席）になりたいとは、とやま氏もいつか云って居られた。

自転車、然り「私はサドルになりたい」とMの人なら誰でも考える事だ。スラックスをは



いた女性は簡単に椅子を逆にして跨り、背当ての上に両手をかける。それが何でもない事だのに私はハツとする。

何と云っても戦後強くなったのは女性と靴下と云われる通り、女性は強くなって、体格もぐんとよくなっているから、それに又活発になった事も加えられて、我々馬化族はますます嬉しくなってくる。

では、ちなんだものを二ツ三ツ。

病院と云う処はデパートと同じで、大半が女性で占められている職場だ。これは或る大きな病院内の事だ。一部の看護婦か女子事務員達が主催となって関係のある男子職員を二、三人いれて忘年会を行った。女性とは云え現代だ。女も強いのは男にばかりでない。酒にも強くて大いに飲みはじめた。飲むほどに酔うほどに、みんなの気持は大きくなって唯でさえ女性の職場みたいな処でお互いが余り遠慮がないのに、酒が入ったから、もうドンチャン騒ぎだ。そして此の中に入った男は全くの捕りよ的存在なのだ。常日頃、女性を知りつくしているし、又職場のふんいきに馴れているから、殆んどさからう事もしないのに（本当は出来ないのだろう）これも酒が入ったからたまらない。一寸した男性対女性の

対立になったと思ったら、もはや羞恥感情なんてなくなった女性は衆を頼んで早くも暴力に出たのだ。

「それッ」と十数人の女性が笑いの勝鬨をあげた時にはうつぶせになった一人の男の首の上、背中の上、腰の上、両脚の上には御丁寧に二人、そして右と左の腕にも各一人ずつ馬乗りに跨って、此の一组ともう一组は男二人が背中合せにされた上に、やはり数人の女性連が悠々馬乗りになったままたと云う。

「乾ばいしましょう」と馬上で盃をあげた本当の話である。

歌舞伎で助六が腰ぬけ侍達に、股ぐりをさせる処があるが、女剣劇の不二洋子、大江美智子等がこれをやったらと思ったりする。或はこれ以上の事も、劇中にはあるとも思うが残念乍ら見た事がない。

マンガの「サザエさん」にも私の心を刺戟する場面がしばしばある。尤も結婚してからマンガは余り見ていなくて、要するにむかし分だが、カツオのいたずらを怒って「カツオ待テエッ」と追いかける場面など、そのあとを想像すれば庭の隅や廊下の上で、カツ

オをひっくり返して、馬乗りに跨って謝らせている事だろう。

映画で江利チエミは全く適役だと思うが、こんなシーンを入れて貰いたいものである。

### 第三十一景 ある姉弟

私が学生時代の事だ。その頃は支那事変がますます拡大されて、最早や解決のメドはとでも望まれそうもなく、日一日と戦争の不安を覚えていた時代で、軍国主義のはなやかなる事は大変なものだった。私の級にK君と云う身体のひよわな温和しい子がいたが、此のK君は体操と教練の時間は全く嫌らしく、いつも憂鬱な顔をしていたものである。それに又、担任の教師や教官が、面白がっているのか意地が悪いのか、或は善意に解釈して、立派な国民にするためにわざと鍛えていたのか知らないが、よくK君を苛めたものだ。たとえば動作がにびいと云っては運動場を駆け廻らせたり、力がないと云っては教練用の銃を両手に持たせて高くさしあげさせて、十分も十五分も立たせたりである。それが或る体操の時間の時の事だ。いつもの体操教師がその日は肋木の所に全員を連れて来て、五名ずつ此の肋木の一番上まで上らせて跨らせ、両手

を胸にあて、静かに上体を後に倒して肋木台に寝ては、又起き上ると云う運動をさせたのだ。

これは私も始めての運動で、それに高い処で空を仰ぐ気持は何となく落ちそうで、いささか胴ぶるいをし乍らも何とかやってのけられたが、可哀想なのはK君だった。肋木の一番上に昇ると云うだけでも、彼にとつては云い様のない恐怖で、下から見ても判る位青い顔でふるえているのだ。教師は意地の悪い顔で「こらッ、其処へ皆と同じに跨るのだ出来んのかッ」と怒鳴りつける。

K君は観念した様に、恐る／＼片足を引きずる様にして何とか肋木の上に跨ったが、もうその顔色はなく、両手を胸に当てる処か、肋木台にしがみついて、口をワナ／＼とふるわせているのだ。それでも怒鳴る教師の叱責に恐れてようやく両手を胸に当てたが、今度は後にねる事が出来ない。教師は口汚くののしり乍ら、わざと肋木をゆすり、自分も駆け上り、「こうするのだッ」とK君の頭をかかえて後にドスンと倒してしまった。

級友のあざけりの中にK君はとう／＼起き上る事が出来ず、皆にかえられる様にして下に降されたが、此の教師がK君に、

「いいか、今度の時間までにちゃんと出来る様になれ。出来なかったら今度はつき落すぞッ」

と、おどかして此の時間は終った。

こんな事からも、K君はますます無口になり友達も出来なくなって、果して今度の時間までに（体操は週に二回あったから二、三日あとの事だったと記憶している）どうするだろうと私は人事乍らK君のために心配していたものである。

その翌日だったと思うが、私自身も此の体操は余り自信がなかったので練習の意味ですぐ近所の小学校の校庭に、夜遅くなってからやって来たのである。処が肋木台の上に誰か人影が二つ見えるのだ。私は気づかれなかったのを幸に、すぐそばの十二階段の中に身をかくして様子をみると、一人はK君なのだ。

そしてもう一人は話だけは聞いていたのだ。彼の姉さんなのである。

「いゝ、怖くなんかないのよ。お姉さんがこうしておさえているから絶対に落ちないわよ。ハイ身体をおこして」

と姉さんは肋木台の上に寝ているK君の腰のあたりに彼の身体ごと肋木台に馬のりに跨っていたのだ。たしか私達より二つ年上の女

学校の四年生で、此の姉さんは弟と違って陸上競技の選手だったのである。仰ぐ暗い夜空にくつきりと、セーラー服らしい姿でK君の上に跨って

「はい、身体を起して。駄目ね、そんなに怖がっちゃ、しっかりしなさいよ。いゝ？一、二、三、ハイッ」

K君は起き上ろうと必死にもがいているが怖しくふるえているらしく、気の故か肋木台全体がブルブル動いてみえるのだ。

「ホラ、お姉さんがつかまえてあげる。ほうら起き上れたでしょう。大丈夫よ。その調子／＼」

姉さんは弟をひき起しては再び後につき離す。私は此の光景をみて、急にK君が可哀想でたまらなくなり、それとK君のお姉さんのやさしさが感じられて此の姉弟が羨しくなったのである。私が覗いているのも知らないで此の姉弟は幾度も／＼肋木台の上に跨ったまゝ「お姉さん」と気弱く呼ぶK君とは対象的に、一生けんめいはげましている姉さんの声が大きく響いて練習を続けているのだ。

次の体操の時間には練習のためかK君は何とか、これをやったのけたが、恐ろしそうな青い顔色は少しも変わっていなかった。私は此



の頃からK君と親しく口を聞く様になり、彼も又、私を唯一の友として慕って来たので、お互いに家の方へも行き来する様になったのだ。そして此のお姉さんのF子さんとも話す様になったが、家でのK君は学校とは違った明るさで、F子さんが又、天性の明朗女性で

二人はよくふざけて私の前で取っ組み合いをやったりしていたが、いつも勝つのはF子さんの方なのだ。  
万能的な運動選手のF子さんは、此のひよ、わなK君を、いともかたんに押し倒しては私の前でも平気で馬のりになってしまったり

喧嘩となると手の早いのはF子さんの方で、一回の平手打ちでK君は「御免なさい」と素直に謝っていたものである。私は此の姉弟について、これより知る事が出来なかったが、もっと／＼親しく解け込んでその全貌を知りたかったと、いつも思っているのである。

# 〔新版〕女体緊縛フオートオンパレード

R組 百花撰 大手札判 (印画紙9×13種)

各組一枚一組 (全部送料共)

一組一枚	一〇〇円
五組五枚	四〇〇円
十組十枚	七五〇円
二十組二十枚	一四〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇円
七十組七十枚	四〇〇〇円

1	柔肌に強烈な荒縄 (須川令子)
2	海浜に於ける緊縛 (蘇千恵子)
3	床間の飾り物 (佐賀美智子)
4	高小手猿ぐつわ (花坂道子)
5	海老責しはり (蘇千恵子)
6	後手猿ぐつわ (須川令子)
7	後手足しはり (村田那美子)
8	鏡に映つた後手 (伊吹真佐子)
9	股間しはり (須川令子)

10	鎖しはり晒責 (蘇千恵子)
11	股間しはり正面 (伊吹真佐子)
12	女学生制服しはり (須川令子)
13	尻立後手しはり (蘇千恵子)
14	開股しはり (川辺砂登子)
15	猿ぐつわの魅力 (伊吹真佐子)
16	トイレでの縛り (須川令子)
17	立木野外しはり (村田那美子)
18	緊縛横臥 (厚狭春江)
19	足縛椅子セメ (伊吹真佐子)
20	いたぶり (春日ルミと伊吹)
21	帆立しはり (蘇千恵子)
22	強烈な椅子セメ (伊吹真佐子)
23	椅子責め (佐賀美智子)
24	逆さ本吊りセメ (伊吹真佐子)
25	後手吊りセメ (伊吹真佐子)
26	股間しはり後手 (中塚文子)
27	逆エビ責め (伊吹真佐子)
28	高小手しはり (加賀利江子)
29	変型足手しはり (蘇千恵子)
30	松樹後手しはり (村田那美子)
31	くさりセメ (伊吹真佐子)
32	薄羅の後手緊縛 (加賀利江子)

33	股間タテしはり (中富綾子)
34	首縛股間しはり (坂口利子)
35	手足逆吊り (伊吹真佐子)
36	和服の後手しはり (藤田節子)
37	日向全裸悦責 (川端多奈子)
38	後手首縛ジメ (加賀利江子)
39	乳房下しはり (村田那美子)
40	肉体美への折檻 (伊吹真佐子)
41	お灸セメ (春日、伊吹二嬢)
42	後手猿ぐつわ (蘇千恵子)
43	松樹縛り晒責 (村田那美子)
44	コルセット縛り (中塚文子)
45	股間しはり (蘇千恵子)
46	手と足と緊縛 (加賀利江子)
47	後手しはり (蘇千恵子)
48	御開帳 (川端多奈子)
49	くさりセメ (須川令子)
50	折檻の魅力 (蘇千恵子)
51	全裸の股間しはり (愛川悦子)
52	逆立の折檻 (大塚啓子)
53	開股椅子セメ正面 (花坂道子)
54	振袖の緊縛 (村田那美子)
55	腰元の吊り責 (愛川悦子)
56	ヌードしはり (田中芳代)
57	本縄しはり (蘇千恵子)
58	股間しはり (村田那美子)
59	客比狼藉の緊縛 (川辺砂登子)
60	樹間のハリツケ (益田男子)
61	帆立舟のセメ (益田男子)

72	逆エビ責め (愛川悦子)
73	変形全裸股間縛 (花坂道子)
74	ヌード縛り (村田那美子)
75	全裸横臥緊縛 (蘇千恵子)
76	ビクニツク (須川令子)
77	ハイヒール (村田那美子)
78	湖畔の宿にて (蘇千恵子)
79	尻立逆しはり (須川令子)
80	下着の色模様 (大塚啓子)
81	目隠し開股縛り (田中芳代)
82	後手高小手 (愛川悦子)
83	乳房しはり (花坂道子)
84	開股ベッド縛り (愛川悦子)
85	全裸床柱縛り (蘇千恵子)
86	亀ノ甲縛り (愛川悦子)
87	ヌード股間縛り (大塚啓子)
88	全裸乱れ髪 (川辺砂登子)
89	ガンジガラメ (愛川悦子)
90	臀部丸出し痕 (中塚文子)
91	後手股間しはり (伊吹真佐子)
92	破れたシユミーズ (坂口利子)
93	女学生のしはり (須川令子)
94	仰向開股しはり (蘇千恵子)
95	乳房くさりセメ (川辺砂登子)
96	野外バンド責め (村田那美子)
97	トイレ正面排世縛 (中塚文子)
98	開設正面いじめ (伊吹真佐子)
99	乳房縛りセメ (佐賀美智子)

# 黒井チエの青春

(三)

近 藤

一

睦子は狂ったようにチエを虐げた。涙が後から／＼湧いては溢れ落ちるのを乱暴にこすりつける拳で、チエを痛めつける姿は、正に何かに憑かれたもののそれだった。怖ろしかった。存分に絞られ、一緒に流れ出した水鼻と、口の中を噛み裂いた血が混っている涎とが、陽焼けしたチエの大まかな顔立ちから胸の辺りまでをベトベトにし、テカ／＼光らせた。

チエは肩で荒い息をつき、腹部が独りで喘ぐ。涙は涸れたみたいで、足腰は立たなかった。

でも、チエはシボられながら幸せだった。おふさってみたものの、睦子に申し訳なくて背からおり、肩に纏って歩こうと喘ぎながら、心は和んでいた。

運ばれた睦子の家で、チエは床に就いたきり唸っていたが、肩を貸してくれた睦子、当り前のようにタクシーを呼び止めた睦子の心の温みに触れられた想いがして、下宿の人達の心配も、明日からの学校のこと、少しも気にならなかった。

そのままチエは睦子の家の一員になってしまった。というより、されてしまったという方が正しいかも知れない。下宿から引移るについては睦子が主となって何や彼や世話を焼き、チエのための部屋の飾りつけなどにまで、細かい注意を払っていた。だが、その本質は監視というべきものだった。

チエは、本当に心から喜んで監禁されたのだ。生活に奇妙な変化が起るのも自然であつたらう。



与えられた部屋は台所に近い三畳の小部屋だった。元々女中部屋に当てていたものが、女中を使わなくなつてから一寸した物置になつていたので、カビ臭く、湿っぽかった。

「チエ！あんた、今日からあたしの囚人よ。ここはあんたの監獄。特別のお情けで独房にして上げたわ。これから毎日、あんたは一生懸命、働くのよ。あたしだけじゃなく、あたしんちの誰の云付でも絶対服従。いい？囚人に対しては規律は厳格にする。労役は別に決めないけど、あんたは体が大きいんだから、重労働なら何でもさせることにする。あたしが出て行けつていうまで、あんたはここで働くのよ。つまり、無期懲役なんだから」

物心ついてからの習性で、チエは朝が早く、寝つきが良い。短い昼を有効に使って、健康を保持するために、その地方の必要が生んだ生活なのだ。

チエが起き出す頃には睦子はまだスヤ／＼寝息を立てている。階下の女中部屋でチエが着換をし、寝床を片づけ、玄関の掃除を済ます頃になって、睦子の母が起きて来る。家の表を掃き、水を撒いて靴を磨く。睦子の父と兄と睦子とそして自分自身との四人分の靴を丹念に光らせた。

「小さい兄ちゃん」睦子が子供っぽい呼び方をする。

「この子ネ、こき使つていいのヨ、あたしの奴隷なんだから。バスケットの新人なんだけど、下級生の癖にあたしを裏切ろうとしたの。だから捕まえて無期懲役にしたの。小さい兄ちゃんなら何したつていい。いうこと聞かなかつたら罰にお仕置しても構わないのよ。用があつたら、どん／＼いいつけてネ」

羨やましい程、睦まじい兄妹だった。チエは直感で身にしみてい

た。俯向いたまま黙っていたが、上目使いにチラと見た大学生の顔は睦子と実によく似ていた。

「いいのか、こんな真似して。お前のことだから馬鹿なこともしないだろうが、こんなおとなしそうな人をいじめるんじゃないヨ。困った奴だ」

優しく落着いた物云いの中に頼母しさが感じられて、宮部さんも素敵だけど、お兄さんも素敵だなとチエは思った。一人きりの女の子という理由だけで、あのキリッとしたキャプテンが小さい子供のような甘え方をするのだとは思えなかったし、それもまた無理では無いと思えるのだった。

勉強は苦手でも、元来、働くことを当然と心得て来たチエである。あまり細かく気を配ることはなかったが、なまじの女中は及ばぬぐらい骨惜しみをしなかったし、要領を使うことなど全くなくて無口で、丹念に立働いた。家事の雑用を測く時は、駆が大きいだけにチエの方が賃金もあり物馴れて見えるのを、睦子も事実とは認めながら、やはり口惜しい。

睦子が兄を「小さい兄ちゃん」と呼ぶと、チエは眼をクリクリッと動かし、悪戯っぽくニッと笑う。

「おかしいか！」

「うん」

睨みの利かないこと甚しい。

「何がおかしいんだ」

「キャプテン、ちっちゃい子供みたいだもん、おかしいヨ」

「いったナ、こいつ！」

睦子はチエにとびかかって、腕を巻きつけて頸を締める。こうい



う悪戯でも無意識に左手が主に動くのは本能といえる程だ。  
「くる、苦、し、い。ヒ——ッ！」

無理矢理、吸い込まれた呼吸が喉にひっかかって瞳が上ずったけ

れど、チエの両腕は纏りつくように睦子の腕に廻されているだけで  
されるままになっていた。

チエの口のきき方が少しでも大人びると睦子はムキになって怒り

出すし、自分と較べてチエの物腰の落着きを褒められ  
ると御機嫌斜めでチエに当  
り散らす。チエが取合わず  
にいと、ジリ／＼して涙  
さえこぼしたりする。チエ  
は睦子を可愛いと思い、難  
れ難い愛情を感じ、そんな  
純粹さを羨やましいとも思  
った。

睦子の家では一人きりの  
娘の我儘は、かなり広範囲  
に通る。チエを置いておく  
のも、チエが働き者であり  
なまじの女中以上に役に立  
つというよりは、睦子がね  
だりチエも望んだことだか  
らであろう。チエに対して  
の睦子の監督は厳重そのも  
ので、一寸した不行儀にも  
ガミ／＼叱りつけ、自分の  
気に副わない些細な言動に



も、不法極まるものとして罰を宣告する。その中には、かつて睦子自身が父親や母親から女の子の嗜みとして嫉けられたものの幾つかも含まれていて、秘かな苦笑を買っていた。親愛の情をこめて、睦子に小姑のニックネームが捧げられた。流石に今度ばかりはムキになっても相手にされず、睦子はブリブリ拗ねた拳句、チエが心配して機嫌をとりに行くまで部屋に閉じこもったままでいた。

キャブテンが小姑なら、わたしはお嫁さんで訳だけど、お婿さんは……

チエは独りっきりなのに、恥ずかしくなつてドキ／＼する柔らかな胸を両手で抱いてみた。

兄は睦子と呼ぶのに「ムッチャん」と友達みたいないい方をすることもある。普通にはやはり「睦子」だが、時には「おムツ！」とか「おい、小姑！」と呼んだりもする。おムツがおかしいといつてチエが笑ったことから睦子はチエの油断を見て俯伏せに押倒し、馬乗りに組敷いておいて、両手首と両足首をそれ／＼括り上げた。

「小さい兄ちゃん、一寸来てエ。」

チエは軀を捻じり、脚をボタン／＼させて跳ね起きようと無駄に足掻いた。

「こいつ、あたしのこと侮辱したんだ。小さい兄ちゃんのこと馬鹿にしたんだから。うんと懲しめるんだ。小さい兄ちゃんも手伝つて」

「いやっ、堪忍！ゆるしてっ！」

チエは組敷かれながら身悶えた。男性の手で、しかも仄かな憧れを抱いている睦子の兄の手で、取抑えられたり括られたりすることはたまらなかった。涙声になっていた。

「その細引、こっちへ抛つて！こらっ、暴れるんじゃない！じつとしてろ。脚をこっちへ折り曲げてヨ。背中で手と脚と縛りつけちゃうんだ。そしたら少しはおとなしくなれるだろう？」

「よせよ！可哀想に、泣いたって知らないゾ！」

「うるさい！泣きたきゃ泣けばいいんだ。幾らだって泣かしてやるから。さア泣け、さア泣け！これでも泣かないか！」

括り合わされた手首を左手で握み、右手でチエの右手指を三本握り締めた睦子は、ジワ／＼と逆に反らせ、そして激しく左右に捻り廻した。畳の上にピタッと押しつけられた頬をチエの涙があふれ落ち、ウウウ……と圧殺された呻きが洩れる。

「おい、おムツっ！幾ら小姑だって、嫁いびりも酷すぎるぞっ！いい加減にしろ！」

怒気を含んだ兄の叱声に、睦子は却ってひ／＼とみがかなくなつてしまった。キッと顔を起すとキラ／＼光る瞳で兄を見上げ、ぐつと胸を張ると反撥を表わして、眼の前のチエのヒップを烈しく平手で叩き始めた。

アウツ、アン、アアツ、アツ！

ピタッ！ピタッ！ピタッ！

力一杯の平手打は鈍く熱っぽい音を立て、チエの悲痛な叫びと良く調和する。

「しようない奴だ。お転婆！」

細引の縄をほぐしながら、二人の若い女の悶えに近寄って、睦子に手伝うように見えた兄の手は、一瞬、抱きすくめるように妹の上体に絡み、キリッ、キリッと細引を巻き締めて行く。

「ア、アツ、いやっ！何すんのよっ！」

だが、チエのヴォリュームを抑えつけていなければならなかった。睦子は、殆んど抵抗もなしに肘から上の自由を奪われてしまった。

力をこめてチエを抑えていても、胸に喰込んだ細引の縛しめでキュッと吊り上げられると、思わず腰が浮いてしまう。曳き摺られ、抱き上げられ、睦子は椅子に腰かけた姿で括られた。両足首を揃えて椅子の脚に縛りつけられると、もう動きはとれない。

チエは見惚れていた。藻掻くことさえ忘れていた。着やせとはいふものの、スラリとして見える睦子の上体が細引に締めつけられてデコボコになっている。痛々しいまでに美しい。遠慮の無い青年の力が施した拘束である。我儘一杯の通る睦子が、毒舌も飛ばさず、甘えもせず、血の出る程ギョッと下唇を噛みしめているのは、余程の苦痛に違いないし、恐らくは弱音を吐くことさえできぬまでに必死の努力で泳いでいるためなのだろう。髪が生え際に小さな汗の粒が浮いていた。

「仲良くしろヨ。今のお前にはクロちゃんと仲良くするほかどうしようないんだから、あんまり度を過ぐすなヨ」

兄が出て行くのを二人の娘は別々に縛られたまま見送っていた。使えるのは睦子の手足ばかりでは、睦子がチエの縛しめを解かないと自分自身が自由にならないのだ。といって先に自由になったチエが睦子を解放するだろうか。

素敵！こんなに女らしいキャプテンで、今まで見たことなかったもン。

チエは自分が縛しめられているのも忘れ果てて、睦子の無残美を見つめていた。髪の毛の生え際に汗を浮かべ、椅子を全身に緊く括りつけたまま、喘ぎ／＼蠕動して近寄って来る睦子に、チエは浴び

せるようにいった。

「苦しい？わたしを苛めたバチだワ。自分がされたらどんなに辛い  
か、身にしてみても分るでしょ？思い知るがいいんだ。いい気味！」

籠球部発足以来、最も充実したメンバーを揃えたチームは、問題なく準決勝に進んだ。少女達の希いは純粹そのものである。今年こそ優勝を！という目標に、全校の若い魂が一致結束したように想われた。思いもかけぬ処にシンパが現われて、卵や果物や洋菓子などを届けて来る。キャプテンの睦子や美代や淑子といった花形にはフアンレターさえ舞い込む有様なのだ。同じクラスの部員に附いて来て貰ったり、友達同志誘い合ったりして、応援とも激励ともつかぬ手合がやって来て、部室の片隅に立ちつくしたまま、レギュラー部員の一挙一動を溜息まじりで、うっとり眺めている。大体が一年生か二年生で、三年生の正選手から声をかけられでもしたら感激を素直に表現して見せる。

準決勝は激戦であった。初めのボールは淑子から美代に渡り速攻で決めたが、六、七分は一進一退で接戦が続いた。女子のバスケットには殆んどマン・ツー・マンが無く、オーソドックスなゾーン・ディフェンスが普通だった。相手のシュートがはずれた処で、フォローを争って美代がプッシングを取られた。リードされた一点を淑子のロングが逆転する。応援席は固唾をのみ、烈しく叫び合った。ゴール下の混戦で睦子が反則を取られ、そのワンスローの流れるのを淑子がフォローして睦子にパスし、ノーガードのゴールへ走る。

キャアッ、ワーツ。

悲鳴のような喚声が上がリ、見事なジャンプが綺麗な二点を加え



る。すぐに相手が走り、両チーム入り乱れて、右へ左へ疾走する。

流石に相手も優勝候補の一つだった。睦子が休むための交替も機会が無い程の苦戦で、終盤の大切な時に美代は五反則で退場した。

三年生は総動員だったし、二年生でも目立つ中沢幸や篠田武子やその他、二、三人が交代で注ぎ込まれた。チエには怖ろしいような激戦だった。ベンチへ戻った美代は全身汗びっしょりで肩で喘いでいたし、睦子もヘトヘトらしくストップが利かずにキャリーイングが多くなった。チエは自分の技術では未だ出場が覚束ないと思いつながら、だが、ここはこう攻めたらよいとか、ああ守るべきだとか考えながら観ていた。

追いつかれてワンゴール差だった。追われる者の浮足立ちと追う者のあせりからジャンプボールやオフサイドが多くなる。センターが切り込んでシュートと見せてのパスがフォワードに渡り、あっと思う間にリターンパスがセンターへ戻ってジャンプ！その途端、睦子の手がボールを叩こうとして烈しくその腕に当たった。

ピリピリッ！ホイッスルが鳴る。

遂に五反則。睦子は退場して項垂れた。代りに二年生の大江晴子が入ってゴール下へ並ぶ。一瞬の静寂。

ワンスロー。入った！満場に溜息が洩れる。続いてまた緊張。ゴール下では両軍の六人がフォローを身構える。

投げた！クルリ、クルリ。ボールは縁を廻り落ちた。一瞬、ジャンプした腕がボールを奪い合い、転ぶ。重なり合う。

途端、ピリ／＼、ピー／＼。タイム・アップのホイッスルが鳴り響いた。一点差の結末に勝者も敗者も騒然となった。ボールを抱き締めた選手が起き上り、四囲を見やうて凝然と立すくんだ。

頬が硬張り、口許がヒク／＼顫えた。フォワードの彼女は夢中だったから、ホイッスルをジャンプボールのそれと聴いたのだった。

うううっ、ううううう！

突つ立ったまま、少女は嗚咽した。腕を眼に当てて、ユニフォームの短かい袖で無理に涙を拭っている。それがキツカケで、両チームの少女達は胸が迫り、応援の少女達の眼も潤んだ。

試合終了の挨拶を交わし、控室に引上げると、選手達は嬉しさに口もきけず、涙を流して歎き合った。

部屋の片隅で睦子はチエの胸に顔を埋めたきり動かなかった。激戦に疲れ切って安らぎを求めているように見えた。だが睦子は泣いていたのだ。声も無く、身動きもせず、チエに縋りついて泣いた。温かい涙がチエのユニフォームに吸われ、胸の辺りにしみ通った。チエの手は睦子の肩を抱き、短かい髪を撫でていた。まるで母親のように見え、そしてチエもそんなふうに感じていた。睦子自身、抱かれて哭ける親しみを年下のチエに感じていたが、それは単に縋りつく睦子を支えられる程の大きな娘が渺いというだけでなく、生活を共にすることによって、より深く識ったチエの母性的な大きさによるものだったろう。

準決勝戦に比べると決勝戦は割合に楽だった。苦しい試合を経て皆の心が一致結束したためかも知れない。美代と睦子のポイントゲッターが順当な当りを見せ、適時な交替に疲労も出ず、常にリードを保ったまま押切ることができた。

追われた準決勝戦と違い、決勝戦の幕切れは快心のものだった。早いパスが廻り、淑子がサイドから狙ってロングシュートを放った。途端に飛込んだ睦子がジャンプして、こぼれ球をトス、ボード

に当ってスッポリ網の中へはね返った。してやったりという得意のポーズで睦子、淑子は、さっと走り帰る。その途端のホイッスルで応援席は湧き立った。日頃控え目な淑子も流石に嬉しいとみえ、美代と抱き合って笑っていたし、三年生や二年生の中には感激の余り泣き出すものもいた。そんな中で睦子一人が勝つのは当たり前という顔で、ブスッとしていたのが印象的だった。

女子のバスケット界はピンポンやテニスに比べても、バレーボールに較べても活況でない。どちらかといえば大企業をバックにした実業団の方が盛んであって、女子大学バスケットの低調さから、高校が実業団のファームのようになっていた。女子スポーツの選手は実命や婚期や就職問題やいろいろの点を考慮して高校の優秀選手は実業団に身を投じてしまう。求人側も心得たもので、目ぼしい選手には一般の採用試験を排して早目に手を廻し、時には進学の邪魔までしたりする。

前々から睦子にも誘いがあった。先輩を通じてこれこれの会社へ行かないかという希望を探られたことがある。それが国体予選の進行と共に、あからさまになって来た。チームの主軸である三人のうちで、美代は逸早く就職の態度を鮮明にしてAデパートに内定していた。

「アタシが容姿端麗ってんだから、ヤンなっちゃうナ」

「ううん、アンタ、グラマーだよ。美人だよ、顔は漫画だけど」

美代を採用しようという百貨店は特に女店員の容姿について喧ましかったので、部室は湧き立った。

——小川さんもいいだろうけど、宮部さんならもっと素敵なんじ

やないかな——

チエは、ふと、そんなふうに想ってみた。

——キャプテンがAデパートにはいったらどんなかしら、でも、もしかしたら女子大へ行く方が似合うかも知れない。男の子みたいにキリッとしてるんだから——

淑子は進学を志していた。もし失敗したら伯父さんの紹介で出版関係の会社へ入れて貰えるとかいう話なのだ。睦子についても、本人や周囲の者が真剣に考えるべき時期に来ているように思われる。そこはやはり、主将でもあり、ピカ一の選手だから、幾つかの実業団チームからの誘いがあり、中でもバスケット界の雄である日邦紡織からは、かなり具体的な条件を示して勧誘された。

「おクロ、あんた、どっちがいいと思う？日紡がいいだろうか、それとも大学へ行った方がいいだろうか」

「ワタシはどっちでもいい。会社へ入れば、お給料貰って来るからお小遣いセビれるし、映画でもお菓子でも奢って貰えるけど」

「こいつ、勝手なことって」

額を指先でつつかれながらチエは続けた。

「でも、ほんとのこというと、キャップはあんまりお化粧臭いのなんか似合わないと思う。サッパリしてるところがいいんだもの。ワタシは大学へ行ってスカッとした制服でスラックスでもはいてくれる方がいい。ムッチャちゃんは、いつまでも男の子みたいでいてくれる方が嬉しいナ」

「生意氣いって！」

だが、満更でも無い嬉しさを睦子は素直に表わしていた。それを見て、チエは甘えた。



「それにサ、大学生のムッチちゃんになら、安心して勉強、任せられるもん」  
二人の娘は、ほの／＼とした心の和みに、顔を見合わせてニコニコした。



のか分らないような、陸上競技とは勿論、バレーやピンポンとも比較にならない淋しさなのだ。選手の層も薄く、皇后杯とも縁遠い以上、やむを得ないのだろう。大体かなりの上背にジャンプ力、それに強度のスタミナを必要とするのでは、いかに戦後の体位向上があ

国体の直前、睦子は進学の態度を明確にした。体育関係の大学から受験の誘いもあったが、淑子と同じに、私立のK女子大の文学部に歴史科を選んで受験することに決めたのだ。正確なシュート力と相当な上背をもつ淑子が睦子とコンビで出願すれば、勿論、学業成績も悪くは無く実力を持つ二人だけに、合格は既に定まったも同様の筈だった。

女子高校のバスケットは国体でもあまり陽の当る場所では無い。一般の関心は薄く、いつ始まっていつ終わった

っても、日本の女子高校生に無理な競技なのかも知れない。

国体の決勝は、当然のことながら競争相手の多い都市の、それも大都市のチームが残り、東京の睦子達に対して名古屋の中京女子学院が覇を競った。新進ではあってもAブロックのシード校を連破してダークホースぶりを発揮して来たチームだけに強豪だった。特にフォワードの渡辺弓子は一七〇糎に近い上背を利用して縦横に走り廻り、相手校の脅威の的となっていた。アタックもディフェンスも、きびしくして、いかにも速攻得意のチームらしい。センターの松本ヒデ。ガードの三年生、富田昭子。フォワードの二年生、富田和子姉妹。ガードの斎藤秋子の他、数多い交替メンバーの中にも注目を浴びる選手が幾人かいる。一方、睦子をセンターに据えたチームはフォワードに美代と小林玲子、ガードに淑子と鈴木清子を充てて三年生だけでスタートした。ゲームの開始から五分間は試合の動向を決する重要な時間であるというのは常識で、当然、ベテランを揃えておき、それから随時、メンバーチェンジを行うことになる。

試合は一進一退というより、むしろ苦戦だった。すると駆け出しのチーム同志のように、選手がじきによるめき転倒する。それも両チームの主柱の睦子や弓子までが、カットからドリブルに移れず足許が乱れて転んでしまうのだ。激しい試合の連続で、やはり疲労が残っているのだろう。第一、クォーターで美代は早くも反則三を数えていた。

第二クォーターも瞬く間のように過ぎた。

第三クォーターでまず中京の富田和子が五反則の退場をした直後美代も五つめの反則を取られ、四四対四一で中京リードのまま第三クォーターが終った時、睦子は弓子と同じ四反則まで来ていた。

第四クォーター開始直後、中京の総攻撃のシュートをジャンプしてカットした睦子が弓子と激突して倒れた。何のはずみか、右の臉の辺りが切れて血が滲む。弓子は五反則で退場し、ワンスローが決まって四四対四二。フォワードの小林玲子の老巧なカットが中沢幸に渡り、巧みなフェイントモーションで幻惑しておいて淑子が正確なロングを決めて同点にした。中心の渡辺弓子と富田和子を失った中京は、長身の松本ヒデが先頭に立って最後の力を傾注する。長い間、病氣で休んでいた名手の伊藤昌江をフォワードに入れて、ラストスパートをかけようとする。

五〇対四六。あと時間は幾らもなかった。中京の富田昭子と斎藤秋子の間をパスが往復し、ディヴィジョンラインを越えて、松本ヒデに渡り、ジャンプしておいて伊藤昌江にパス、サイドからゴール下へ飛び込んでジャンプ！その途端、ピリピリッとホイッスルが鳴った。激しい睦子のチェックが昌江の軀を弾き倒していた。ああ！と声を上げて、反射的に上げた両手で頭を抱えてしまった睦子は顔面蒼白のまま退場した。

昌江の二投は流石に決まって五〇対四八。シーソーゲームに緊張しきったせいかキャリyingも多くなり、焦りからかオフサイドも多くなつた、幸、清子が淑子を軸にワングールを上げると、ヒデが続けざまにツーゴールを連取した。清子から玲子、そして淑子へ渡るパスを奪おうとカットに入ったヒデの腕が淑子の腕に当たった。淑子が眉を寄せて左手を振る。指でも突いたのであろうか。タイムアップ直前。このワンスローが試合を決定づけるかも知れない大事な時に突指とは致命的ではないか。味方の不安と相手チーム全員から失敗の期待を寄せられた淑子は暫し眼を閉じて呼吸を整えた。一



回、二回と足許でボールをはずませ、ニヤリと笑ったようだった。軽く膝のバネを利かせ、投げた、フワッと浮いたボールは直接、網に落ち込んだ。初めてみる淑子のシングルハンドだった。

球を拾って富田昭子が斎藤秋子に渡して反撃に移った瞬間、ホイッスルが一斉に鳴った。五三対五二。少女達の涙は尽きる処を知らなかった。

全国制覇が成った学校ではバスケット熱が最高潮だった。練習を見に来る生徒の数も二、三十人はあるし、新しく入部を希望した一年生も幾人かあって、練習自体もそういった校内の空気を反映するように変貌し始める。当然に、来シーズンに備えて新しい中心メンバーの成長を必要として、オープン試合や紅白に分けた練習試合の中から、後継者を見出そうと指導者達は考えていた。唯、今の二年生以下を三年生のレベルに引上げるのは確かに難事であろうし、技術はともかく、粘りや経験は実戦的なトレーニングを続けることが最良の方法と思われた。試験的に一人々々がいろいろなポジションを与えられ、観察されていたが、中でもチエは注目の的だった。今の二年生と実力に於いて大差はなく、しかも上背は一七〇センチを超えている。名主将、宮部睦子の去るべき穴を埋めてセンターにすわることも恥ずかしくない。あとは実戦の経験を積み、試合の駆け引きと、チームのリードを覚えるだけだ。チエにかけられる期待が大きく、寄せられる関心が強いだけに、チエに課せられるトレーニングは烈しいものになる。

この秋になって、チエの軀はめっきり丸味を帯びて来た。もとい、余り夏やせをしない体質の処へ、今年の秋は食べた物が何でも

みになるような気がしてならないのだ。睦子の家では食事の際の遠慮は禁物だった。敢えて遠慮の必要もなかったけれど、食べ物の遠慮の気配でも見えようものなら、睦子はチエを厳しく仕置きした。チエは宮部の家の雰囲気にも激しくうちとけて行ったのである。

激しい運動を続け、質も量もある食事を摂ったチエの軀には眼に見えて肉がつき、運動選手特有のたっぶりした肥り方がみえて来た。睦子より三寸も背が高い上に、肩や腰の辺りにたくましい丸味が加わると、一緒に歩いていて二つ年下のチエが姉のように見え、チエは恥ずかしかった。

睦子はデブ／＼した肉づきを感情的にまで憎んだし、またチエ自身、自分の軀の形が睦子のそれとかけ離れて行くことに、堪えきれぬ恐怖と嫌悪を感じていた。睦子の憎悪には自分にならないものへの嫉妬があったことは確かだろうが、それ以上に自分の肉体に関しての誇りが強かった。贅肉の全く無い、鍛え上げられた肢体はチエの崇拜的でもあったし、自らの清浄さのシンボルとして心の支えになっていたのだ。自分の後継者のチエ、愛しくてたまらないチエにもそれを求めるのは自然ではないか。少女がそれらしいさを去って女らしさを見せ始めるのは汚濁だと睦子は思う。乙女の清純さは真善美の極致と信じている。チエの肩の辺りや腰の廻りにふっくらとした丸味を見ると苛立ち憎む睦子であったが、しかもその睦子は胸の奥で秘かに女の墮落である豊艶な妖しさに憧憬を抱いている矛盾極まりない娘であった。女としての成育の個人差を知らない訳ではない。女としての自分に自信を持たぬ訳では毛頭ない。唯、現在の自分は最上のものであり、そして愛しいチエをもそうあらしめたいと希うのだ。

並はずれて大柄なチエの肉体を清純に保つために、人一倍の工夫と努力を誓わせ、学校の烈しい運動の他に苛酷なまでの鍛錬を課した睦子だった。

ウエストニッパを買って来た。自然のままに育ったチエは二八吋が精一杯であった。バストとヒップの張りが豊かなだけに、目立たなかったウエストがやはり比例して大きいのは癪だった。

「お前のウエストは二〇吋にまで減らさなければいけないゾ！」

「ええっ！そ、そんな、酷いこと」

「うるさい！つべこべいうな。お前は奴隷なんだ。私の云付を守ってればいいんだ！」

腹腔は一時的に絞り上げることができた。内容物は上下に厳しく二分されて、胃の辺りと腹部をプックリと奇妙な位に膨らます。チエは肩でハアハアと喘いでいた。立っていることができなくて見事な姿態を輾転させていたが、苦悶の余り物に縋って上体を起こし小刻みに肩の辺りを顫らせていた。顔には血の気が無く、額にジツリ冷汗が滲んでいた、ソロ／＼と壁際まで蹶って行ったチエは、ゲッ、ゲエッ！と何やら吐き出し、弱々しく喘いだ、手の甲で額の冷汗を拭い、ゴロツと転がった。

「汚い！バカ！」

睦子が叱っても立たなかった。

——ウエストを締上げるのは段々にやらなきゃいけないだナ。急いで事は仕損じるか。今日のは失敗々々——

奴隷の不始末は奴隷自身が浄めなければならぬのは当然の掟だし、その後では不始末を犯した罰を受けなければならぬのも当り前の話だった。

チエのウエストを削るために、そして睦子に贅肉をつけないために、二人は毎日少くとも三十分以上の乗馬を続けることを決めた。といっても本物の乗馬でないことは勿論である。チエを人間馬に仕立て、睦子が騎手になって烈しく責めようというのだ。

机に手を支えたチエの背へ馬のりに跨って、睦子はチエのウエストを脚でギュッと挟みつけた。振り落とされないように両の足首を組み合わせ、両手でチエの肩を力一杯、握んだ。

一六三糎、五二疋からある伸びやかな体軀を躍らせるように、睦子はチエの背で反動をつけて体をゆする。重圧は凄まじい。

ムーウ、苦しい！ううっ！

苦しまぎれにチエが棒立ちになろうとすると、睦子は指先をふるわせる位の胸締めをかけ、頸を締めつける。チエは掌をあちこち置き変えながら腕を一杯に突つ張っていた。両脚を充分に開いてしっかりと踏ん張っていないければヘタ／＼潰れてしまいそうだった。

——人には添ってみよ、馬には乗ってみよ、だッ——

口笛でも吹いてみたい心境の睦子の体重の下で、チエは眼を開いていられなかった。じっとしててさえ、背中の中の荷物は時の経過に伴って重圧の苦痛を増すものを、しかも荷物は絶え間ないじわるを続けているのだ。スマートな体とはいえ、鍛え抜かれた筋肉質の睦子である。肉の緊った肢体だから細いようでも昔流の十三貫五百は優にあるのだ。大きく弾みをつけて暴れられたら疾うに潰れて背骨を痛めていただろうが、意地悪い程正確で小刻みなだけに、チエは潰れることもできない。ジワ／＼と背骨が責めつけられ、反れる限りは反らされてしまった感覚だった。

むーう、うムーう！



髪が生え際は濡れて光っていた。額や首筋に湧き出した汗の粒が流れ、滴り落ちた。

ムーッ！ムーウ！

従順な奴隷の乙女は、その苦悶を絞り出される汗の量に見せながら、豊かな白い体軀を充分以上に撓らせているのだった。

運動で汗を流した皮膚は緩んでいるのだ。それを引締めなければ意味は無い。本物の馬ならば手数がかかるが奴隷なら自分でやらせれば良い。まず冷水で全身の汗を拭き取らせる。その次には冷水摩擦だ。全身が赤らむ程丹念に力を入れて擦らせる。それから水浴だ。血行の激しい肉体に冷水を浴びせかけて心臓を害さぬよう、段階を経て、徐々に多量の冷水浴に馴らすのだ。

ザブリ！

ヒヤアッ！いたアッ！

急激な冷感に、チエは水を痛いと呼んだ。だがそれに馴れ、日課のようにになると、浴室の流し場に蹲って洗面器の水を独りでかぶるようになった。

睦子は、見ているだけで満足でなくなった。あれこれ口喧しく指図する。やがて大きな掃除用のバケツを持出して、チエに頭からぶっかけることにした。そんな時のチエは、浴室のタイルの上にじかに正坐させられたり、すのこの上に坐らせられたりしていた。両手はきちんと膝に置くか、或いは形を取るために両手首を背後に廻し括り合わせていることもあった。多量の冷水を浴びせられ、眼を閉じ唇を噛んで震えているチエの姿は、恰も苦行を受けて心の汚れを抜く修道女のような神々しささえあった。斬り刻まれるような苛責をじっと泳がしているチエは清浄そのもののように思われ、睦子はそ

んなチエがたまらなく好きで、いつまでも見飽きなかった。

皮膚を強め、清浄さを保持するための水浴が睦子にとって思いもかけぬ奴隷への圧制と嗜虐を生み出して行った。人間馬の苦悶の姿と水責めのスリルは強烈であった。

「睦ちゃん、何十杯かけたって構わないけど、只、流しちゃったら水がもったいないじゃない？」

額に垂れた髪からもポタ／＼水滴をたらしながら、後手で正坐したチエが睦子を振り仰いでいった。

チエは浴槽の中へ正坐させられた。独りでは立上れないように脚も縛られた。頭からぶっかけた水は足許を浸し、膝、腰、腹部を徐々に冷やして行く。

「ムッチャン、もっと、もっとかけて！早く、寒い！早くして！うっ、寒いーッ！」

狂ったようにチエは喚き立てる、睦子は忙しく右往左往した。湯槽についている蛇口を一杯に開き、大きなバケツと小さなバケツを使って水をどん／＼ぶっかけた。激しい水音、叫び、呻き、喘ぎのうちに腰から腹、胸までが水に浸り、尚も水は、せり上る。

「止めてエ！むっちゃん、とめてっ！嫌っ！許してっ！こわいっ！助けてっ！ああっ！溺れちゃう！溺れちゃう！、嫌！」

肩から喉、口まで水が来て漸く睦子は水をとめた。長身のチエでも正坐をした姿では首が出るものではない。湯舟一杯に水を張られたらフグのように胃を膨らまして死んでしまうだろう。

「胸を張って！アゴを引いて！」

いわれるまでもなく背筋は一杯に伸ばしている。アゴを引くと鼻孔の辺まで水が来て言葉が出ない。大バケツで一杯汲み出されると

幾らか息がつけるような気がした。  
サザーッ、サザーッ、サザーッ！

汲まれた水が頭の一米位の真上から滝のようにぶちあけられる。  
水勢でチエの頭が前に揺らぎ、波立った。

一回、二回、五回、十回。

何か必死に叫ぼうとしたチエが  
呼吸器管の辺りで激しく咳込み、  
ブブ……と苦しげに溺れかけた。

時季外れの水浴で唇の色までが  
土気色に変わり死人のように冷えき  
ったチエはもとより、水の飛沫を  
浴びチエを助け出すために水風呂  
へ浸った睦子が肺炎に罹らないの  
は不思議な位であった。やはり丈  
夫なのだろう。しかし、風邪は引  
かなかったが、猛烈な下痢に襲わ  
れた。意地になって学校へは出た  
が授業中も我慢しきれなくなって  
幾度か席を立った。走ることさえ  
憚られた。顔色も冴えず、笑うこ  
とさえ慎んでいる睦子の下痢症状  
は一寸した話題にされた。  
「睦ちゃん！おなかこわしてる時  
は何にも食べちゃ駄目ッ！」



チエに監視されて睦子は三食とも口にできず、フラフラになって  
しまった。

「お、おクロ、何かア、何か、頂戴ヨ」

声までかすれた睦子を突はねたチエだが、余りの空腹に眠りつけ  
ない様子を見ると、一椀だけおかゆを作って食塩をかけ梅干で食べ



させた。睦子は暴虐な奴隷所有者でありながら、奴隷のチエに心から甘え、駄々っ子になれるのだった。

チエの丈夫さは睦子以上だった。全身が水に入っていたのもよかったのか知れない。もと／＼寒気の厳しい地方に育ったから寒いことには馴れていたし、一時の酷寒には参っても回復は早かった。睦子が激しい下痢に悩まされている時も、大した異常はなかった。

土曜日の午後には翠松女子高校を招いてオープン試合を行った。

儀礼上、レギュラーを出場させはしたが、来シーズンのため二年生や一年生をどん／＼投入する方針は、はっきりしていた。睦子の下痢が治りかけたばかりで少し走り廻ると頻りに喝きを訴える状態だったから山崎先生は第一クォーターで早くも交替を断行した。

美代、玲子、睦子、淑子、清子でスタートし、先取点を挙げた勢いで三ゴールのリードを取ると、睦子の代りに中沢幸を出した。美代がファウルを取られると、すかさず山崎先生は淑子に手招きして交替を告げた。

「四番アウト、二七番イン」

チエはドキンとした。山崎先生は大きく肩を叩き、それから押し出すようにチエの軀を突き放した。チエは走り出した。

三番の睦子と四番の淑子が山崎先生の両脇に並びコートを羽織って何やら頷き合っているのをチエは見る余裕があった。

第二クォーターも第三クォーターもチエは出づっぱりだった。三年生に代って縫田武子や大江晴子を初め幾人かの二年生と一年生の中で特に動きの良いファイターの河野瑞恵が交替で出場した。

第四クォーターで睦子が出場した。睦子は自分で殆んどシュートせずチエを必要以上に走らせては巧みなパスを送った。自分でも上

出来と思いつながら、チエは呼吸が苦しくなっていた。相手のパスがエンドラインを割った。疲れていないチエなら追いついて中へ掬い入れられるボールだった。

「二七番アウト、四番イン」

チエはベンチへ戻ってタオルで首筋を拭いた。五分程の残り時間に睦子と淑子が巧妙なパスワークを見せてくれた。

ゲームに勝って跡片付けを済ませ、洗面場に顔や手を洗いに行こうとしたチエが廊下の角まで来ると、いきなり背後から布がかぶせられ視界を奪われて藻掻く間に幾人もの力で押し倒された。

「嫌、嫌っ！ よしてっ！ 許してエ！」

疲労もあるが、もと／＼大人しいチエは叫んで救いを求めることなどしなかった。乱暴をする連中に哀願するばかりなのだ。

相手は無言だった。気配から軽装の少女達だと分る。顔にかぶせた布の上から紐の様なものを二巻きして喉の処でキュッと締め上げ頭を包んだ布が脱げないようにした。それから胸や胴に縄をかけ始めた。

——縄跳びの縄だ——

チエはそう感じた。あわてているせいか、縛り手は力を入れる割に縄が締まらない感じで、暴君の睦子とは段違いに不器用な縛り方だった。チエも口をきくのをやめた。

——嫌だな、こんな苛め方されるの——

一人がチエの右手首を掴んだから、どうせ後手にする心算だろうと思ったチエは、縛り易いように左手首を一緒に合わせて背後へ差し出してやった。別な縄が今度は割にしっかりと絡みついた。体を縛った縄尻をピン／＼と曳いたのが、歩けの合図らしい。眼先が見

えないまま、チエはソロ／＼歩き出した。幾本かの手が肩や腕を痛い程抑えているのは、暴れ出すのを怖れてのことだろうが、却って俄盲が歩くのに不安を薄くさせる道案内になった。

連れ込まれたのは体操用具の置場だった。突き転がされて、それがマットの上だったことからチエは直感したのだ。

何人かがチエの体に馬乗りになった。足首も抑えられ、頭にまで重苦しい圧力を加えられた。一斉に叩き、抓り、擦った。チエは五臓六腑が躍り出したように感じ、頭が割れそうにガン／＼した。

その責苦が去るとすぐ、息つく間もなく新手が出る。グリ／＼、ギュ／＼踏み蹴り、足蹴にする。

チエの体を引きこし両手を頭上で縛り直して縄尻を平行棒に結びつけ爪立ちになるまで高さを操作した。

ビュッ！ピシーッ！ヒューッ！

チエは激しく悲鳴を上げた。焼けるような痛みが背中に走った。責手が竹箒の柄で力任せに極りつけたのである。唐突に背骨を叩きつけられてはたまったものでない。

チエの絶叫に苛責は一応やんだ。被虐者の悲鳴を聞かれてはまずいと思っただけらしい。

ピシン！ムウッ！

次に体に加えられたのは、ボールの衝撃だった。睦子から与えられて忘れることのできないバスケットボールの衝撃である。ボールが逸れても狭い処に加虐者が多いのだから手間取れない。間断ない加撃といえよう。

——死刑ネ。ワタシ、死刑なんだッ——

チエは田舎の小学校で遊んだ五回ぶつかけの死刑を思い出してい

た。ドッジボールで最初に五回ぶつけられた者が皆の投球の的にされ絶対避けることを許されないのだ。

死刑にされたチエの軀はマットでのり巻にされた。その上で幾人もの乱舞が始まった。跳んだりねたり大変な暴れ様で、チエは呼吸もつけなかった。速廻して拷問にかけて死刑にして死体を埋葬して踏み固める処までの想定はなか／＼凝っていてユーモラスだなと思ったのは、それか暫くしてからだった。初めのように後手に縛り直されたチエは、頸で平行棒に吊られて立っていた。頭部を布で包まれている姿は、まるで照る／＼坊主のようだった。疲れていて、腰をおろしたかった。死ぬのは容易だった。膝の力を抜きさえすれば自分の体重が絞首刑にしてくれて、永遠の休養がとれるのだ。だがチエは、ふと睦子を生かして置いた儘では到底死ぬ訳にはいかないのだという気がした。そしてそれが当然のように、立ち続けの苦痛に喘ぎながら休んでいた。

どのくらい放っておかれたらう。気が遠くなるほど長いようで案外、短時間かも知れない。

きゅっ！きゅうっ！

い、いいっ！

突然、とび上るような痛みが突っ走って、チエは幻想から引戻された。

「馬鹿々々、おクロのバカ！何処で油売ってるのかと思ったら、こんな処で遊んで！悪い娘！承知しないから！」

探し疲れた顔の鞆子の傍に、河野瑞恵や田中トモ子の心配顔が並んでいた。



「ねえ、チエ。あんたを今年のホープにしようと思うけど、いいだろう？」

睦子がチエに膝詰の説得をする処だった。チエと呼び、睦ちゃんと呼ぶ間柄に二人は成育していた。

「ホープ？ワタシが？」

ホープという聞こえは良いが、籠球部の一つの伝統的などんちやん騒ぎに捧げられる一年生の犠牲である。男子の学校のストームに似た行動が女子の学校にあり得ない。三月には高校生活を終えて巣立って行く三年生には、青春のエネルギーと少女の感傷が燃えたぎっていて、一年生の有望新人に激励と称して一晩がかりの暴虐の限りを尽くす習慣があった。選ばれる一年生は勿論、激励に値し、激励に耐え得るものであることが必要だ。一年生のNO・1ならば調子に乗った三年生達がかなり破目をはずした苛め方をして、その為に部から逃出す惧れはなく、現に一つの事実も無い。犠牲に選ばれたからといって主将が約束される訳では無いが、従来、概ねチームの中核に据えられているし、更に与えられた唯一の特典として、彼女が卒業する時は自分の手で激励すべきホープを選定することができるのだ。

「あたしも一年の時やられちゃった。そんな時は、あたしこわくなってワン／＼泣いちゃったけど、今じゃとっても楽しい思い出になっている。みんな良い人達ばかりだったもん。チエだって同じだよ。チエなら体はあるし、こわがって泣くほど子供じゃない」

「誰かのお仕込みだから？」

「また！あたしはネ、チエがリンチされて首っ吊りになってるの見た途端、今年のホープはチエだと決めたんだ」

睦子に抗うことなど許されなかったし、チエは抗う理由など少しも無かった。

激励会には睦子以下、美代、淑子、玲子、清子のレギュラーのほか平素、余り顔を出さない三年生も含めて九人の吊るし上げ係が集まり、たった一人のチエを取囲んで糾問する。チエの激励に優先権を持つ睦子と、最も意欲的で愛校心に富む美代が専ら訊問係で、ジワリ／＼誘導して行く。

「ワタシ、一年の癖に生意気でした。先輩や上級生を尊敬しませんでした。」

ワタシ、病気でもないのに練習をサボりました。試合の応援も大事なのにやりませんでした。ちっともみを入れたトレーニングをやりませんでした。

ワタシ、罰を受けなきゃいけないと思います。今まで悪いことばっかりして来たお詫びに、うんと苛めて下さい。これから良い部員に生まれ変わるようにうんと鍛えて下さい。

ワタシ、まだ全然、駄目なんですけど、一生懸命やりますから、伝統ある籠球部員としてやって行けるように、どうか御指導御ベントツ下さい——」

## 告

限定版特別号第二集 略号（緊縛）

緊縛写真と緊縛画集 特価五百円

残部僅少となりましたのでお早くお申込み下さい。

限定版特別号第三集

緊縛写真グラフィック集 近日発売！

## 急

## ンタジー

照 夫



十八才の時、忘れることのできない経験をしました。

その夏、私は房州のある町に家を借りて海水浴に行っていました。私には当時二十八才になる叔母が居ましたが、この叔母は二年程前に主人を亡くして独りである気易さで、私達と一緒に海へ来ていました。

三日程前、暑さに当ってお腹を悪くして

縛られるのなら、どんなに酷くたって我慢できる自信がある。顔をぶたれるのだってピンタ位なら我慢できる。大きな怪我でなければ擦り剥いたり痕がつく位はいいと思った、籠球部の上級生の激励は、およその見当がつくし、擦られるのは困るけれど痛いことなら幾らでも我慢できるチエだった。

逃げる気は毛頭無いし、抵抗する気も無かったけれど、縛られることは暴れ出さない為にも、恰好をつける為にも必要だと思い、素直に自分から両腕を背に廻して、ギリ／＼縛り上げられた。

「鞭撻ってどんな字か、いって御覧！」

「あんた鞭撻して貰いたいんだネ？」

「ええ」

チエは、こっくり頷いた。

みんなバスケットのユニフォームだった。若さのはち切れそうな軽装でキビ／＼動く。チエの背が高いだけに両手を頭上に吊る場所

が無い。背吊りは酷過ぎるからと、鴨居から胴で吊下げてバンドで撻った。次には団子にして転がした。チエは大きなフットボールになって回転を強いられた。眼の前に、白い星がちらついて吐気がした。柔軟体操と称して滅茶苦茶なアクロバットをさせられ、耐久訓練といって、二つの高さの違う机に腕を突っ張って、自転車、を走らされた。

体力の限界で、チエはつんのめるように倒れた。最早、激励は快い愛撫だった。意識に在るものは唯、自分と睦子のつながりだけだった。

——睦ちゃんが卒業する。ワタシだって二年になってレギュラーなんだ。ワタシも睦ちゃんのように伸びて行くだ、睦ちゃんの奴隷になれたんだもの。黒井チエの青春は誰にだって負けない素敵な青春じゃないか。

チエの体だけが小刻みに顫えて哭いた。



# 浣腸フア

久里須

寝ていましたが、その日はもうよくなって蒲団もかたづけ、私達と喋っているところへ医者が来たのです。「もう大丈夫です」と叔母は言いましたが、医者は折角来たのだから、一応診察してみようということになりました。

海岸の間借りのことですから、室も一つしかなく、室の奥に毛布を敷いて叔母はそこに横になりました。私は縁側でそちらを見ない様なふりをしていましたが、まだ若くて美しい肌をした女の肌がそこにあるのだと思うと、そわそわしないではいられませんでした。

「もうすっかりよろしいですね」  
「普通のもの食べてもよろしいでしょうか」

「ええ、いいですね。だけど、大分お通じが溜まっているようです。お腹がはっています」

「あら、ええ、少しばかり……」

「浣腸しておきましょうね」

「まあ、浣腸なんていやですわ」

「そんなことおっしゃらないで、すぐすみませよ。リスリン浣腸でよいですから」

「だって、浣腸は羞しいですもの」

「どうしてですか。すぐすむし、少しも痛くなんかありませんよ」

そういつて医者はリスリン浣腸器を靴から出しました。そして「ちよっと、そこを閉めて下さい」と私の方へ向って言いました。しかし叔母は夢中になって起き上り、逃げかねない様子です。

「仕方ありませんね。ほんとうに大丈夫ですか、浣腸位なんでもないので」

そう言つて医者は又浣腸器をしまいした。医者の方へ向つたあとで、叔母の恥しそうな様子を見ると、私はそれだけで、異様な感情に襲われました。

これは最近のことです。二十四になる美しい良家のお嬢さんがいる席で年かさの奥さん連中が話をしていました。

その一人の奥さんの十五になる息子が昨夜お腹が痛いと言ひ出して、夜中にお医者さんが来たという話なのです。

「浣腸しようといしますとね、何しろ嫌だつて言つたら言うことを聞かないでしょう。私と二人でおさえつけて、やっと浣腸しましたの。十五といえ、もう身体も大きいし、それにあはれるのですもの、大変でしたわ」

と、言つたので他の奥さん達はニヤニヤして、「まあ」とか「でも浣腸っていやね」等と言っていました。

その時、私は、そのお嬢さんが顫すじから上まで真赤になり、席を立てて逃げる様に室の外に出てゆくのを見て、急に胸が騒ぐのを覚えました。

私は一生、浣腸器の夢を見続けることでしょう。美しい女の人が、あられもない姿で浣腸を受ける光景ほど、私を惹きつけるものはないのです。

(おわり)



# 愛<sup>マ</sup>好<sup>ニ</sup>者<sup>ア</sup>の記<sup>ノ</sup>録<sup>ト</sup>

ある M マ ニ ア の 手 記

とやま・かづひこ

(132) み か ん

一月二十一日、蔵前国技館にて。この日、かづひこはある商社から招待されて、相撲見物におもむいた。

せまいサジキに相客三人。うち一人は美しい奥様風の女性。二十六、七歳の小柄で品のよいひとだった。

茶屋からは、接待用のいろいろの飲みものや食べものが届けられる。リング、みかん、酒、弁当、ジュースなど、食べられない程運びこまれて、せまいサジキを一そうせまくする。

かづひこの左隣に座ったその女性は、ようやくミカンの皮をむきはじめた。手ぎわよくむいて、上品に口に運ぶ。フクロを再び元の皮に戻す。かづひこは、その様子を見るともなく見ているうち、すばらしいアイデアが浮んで来た。

手もとのくらのいのを利用して、そっとミカンの残が、いに手をのばす。さぐってみれば、ある、ある！ なかみを食べとられたミカンのフクロが。美しいひとの唇に、皓齒に触れたミカンのフクロが。

それをソツと取り出す。そのひとも、他の相客も、かづひこの、こ

の怪しき振舞いには全然、気づいていない。

(万一、気づかれたら大へんだが……)

折柄、場内は文字通りの超満員。

この美しいひとも、やがてはトイレの必要を感じよう。この混雑では、通路を通るにも一苦勞であろう。許されるならば、身を以てその煩雑さをさげさせて上げたい。何時間でも席を立たずに相撲が楽しめるようにしてさし上げたい。なんでもないことだ。ご用のたびに、チョットかづひこに合図さえすればよいのだもの……。

そんな白昼夢をむさぼりつつ、ミカンの得難い美味に酔った、たのしい半日だった。



## (133) 音 二 題

ある日の「観光新聞」から……。

「新宿花園町のあるバーで飲んでいると女給が「おごってくれたらサービス音をサービスするわ」という。ハテナなんだろうと好奇心から彼女にビールとカクテルをおごると、しばらくして彼女はこっちの手をひいてトイレの前へ連れていった。「ここに立っててね」というのでいう通りにすると、彼女やおら中へ入って、やがて威勢のいい音が流れてきた。サービス音とは、つまりこのことだった。(後略)

「お次は、ある日の「週刊文春」から……」  
「霞ヶ関にある衆議院会館——この設計者は大分粋な人である。トイレに男用と女用の区別がないのだ。(中略) あるブン屋さんが女秘書にお熱だったが、二人だけになるチャンスがない。ハタと思いついたのがこのトイレ。かの女がトイレに立ったとき、かれ氏も続いたのだが、そこでかれ氏の耳に入ったのは、なんと、ナイヤガラ瀑布のカンヅメを開けたようなとどろきだった。百年の恋もさめてしまったそうだが、

思えば罪なトイレである。」

どちらも、あの聖にして妙なる音をテーマにした小咄だが、かづひこは、もちろん前者を心楽しく読む。この胸に響くやるせない妙音も、聞く人によって、その受けとり方は、ずい分ちがうようである。

## (134) 悪徳の栄え

サドの原著を、渋沢竜彦氏が訳した「悪徳の栄え」——現代思潮社刊——

とくに、その続篇の方を読んで深い感銘を得た。かづひこは、ひとかどのコプロ派をもって自任してきたが、この中でてくる老人の行動などを読むに及んで、かづひこなどその足もとにも及ばないことを知った。とくに一一三頁から一二〇頁あたりまでは、同好の方々にはぜひ読んでほしいところ。

新刊書の紹介は、かづひこは苦手で、これを沼さんあたりに紹介してもらったら面白だろうと思う。参考までに、「週刊文春」で紹介されたその本のアウトラインだけを、知って頂こう。

「著者のサドは、十八世紀フランスの作家で伯爵。奔放な遊興とその作品のため、生

涯の大半を獄中で過した。サディズムの語は彼の名に由来する。原題は「ジュリエット物語あるいは悪徳の栄え」(現代思潮社 五八〇円) 〓

## (135) 買います

「妊婦の尿から新薬を造り出そうと、某製薬会社で、お腹の大きい婦人の一日分の尿を五十円で買いとることにした。この中に含まれている要素が他の妊婦の栄養剤になるというから、さしずめ共喰いの格好だが、過日、流産したのを隠して一カ月間も売り続け、千五百円を横領した女性が発見されたり、このところをちよつとしたシンベンブーム」

これは、前にもノットしたことがあるが、この商売?この頃大繁昌のようで、かづひこの知人の奥さんも、アルバイトのつもりで売ったことがあると話していた。

美しい若い奥さんなので、その会社に代って、かづひこは売ってもらいたいと、つくづく思ったことだったが、(プレミヤを十倍つけてもよいと……)こんなことをいい出したら狂人あつかいにされるのがオチだろう。

# 私の切腹雑感

告

白

山田久仁子

本誌の十月号誌上で、皆川さんの記事を偶然、拝見致しましたが、実は私も皆川さんの実験と大変似たことを行った経験がありますので一層興味深く読ませていただきました。そして、ここに私の行った点について御報告申し上げ、ご批判いただきたいと存じペンをとりました。

私が「切腹」に深い関心を持つようになりましたのは、小学校の六年生頃であったと記憶しております。

今でも奇妙にハッキリと憶えておりますが、或る日、男の子が、少年雑誌を学校に持って来まして、私にみせたことがございました。その雑誌に十五才の少年が切腹した読物と、今まさに短刀を腹に突立てようとする小姓姿の主人公のさし絵が載っております。私はこのことがあってから、どうしても切腹のことが心に焼きついて忘れられなくなりました。

そして、それから、いろいろの本や、雑誌類の切腹描写のところを漁り出しては読みふけたものです。けれど、それらは何か、物足らなく、真から私の気持を満たしてくれぬものは殆んどありませんでした。説明がたい不満、もどかしさ、というような気持が、

だんだんと、年月と共に激しくなっていってまいりまして、しまいには、本当に自分のお腹に短刀を突き立てて一文字に引き廻わしたい……という強い衝動にかられるようになりました。

あれは中学校三年になった年の、むし暑い夜のことでしたが、お風呂場のようなところで、私が太い木綿針のようなものを自分のお腹に突立てている夢をみました。その夢はすぐにさめましたが、眼が醒めると、いてもたってもいられない程気持がたかぶって、どうしても今みた夢通り実行してみたくて矢も楯もたまらなくなってしまうたのです。

針箱から、一番長くて太い針を選び出すと浴衣の夜着を脱ぎ、シュミーズを胸の辺りまでたくし上げ、おフトンの上に膝立ちになって、お腹にその針を一気に突き刺してしまっただのです。

チクツとする痛みが続いて、木綿針がお腹の皮膚を破っていくのでしょうか。プツプツという感覚が手の指に伝わり、その痛みともいいきれぬ痛みと共に異様な充足感を覚えたものでした。しかし、針ですと、いくら力をこめても、中学三年ぐらいの女の子の指先ではそれほど深くは刺さらないのでした。

熱にうかされたように、それこそ幾十カ所



も突刺しましたが、夢中だったので、それ以外のことは余りハッキリ想い出せなく、只、翌朝、家人の眼を恐れながら、こわごわ突き跡を見ますと、血らしい血も出ずに、ノミに噛まれたような赤い点々が無数についていただけでしたので、半ばホッと、半ばガッカリしたような気持ちになったことだけを覚えております。

これがキッカケとなって、それからいろいろと苦痛を求める方法を考へては、実行するようになってしまいました。

古い注射針の太いのを探し出し、同様に刺そうとしたのですが、どう突立ててみてもささらず、考えた末、板に針を立てて固定し、その上に俯伏せてお腹に針先をあて、大きく息をする方法をやってみました。こうすると針はじりじりと刺さって、痛みも大變に激しく、思わず呻き声をもらしたこともございました。だけど、この方法ですと、切るという感じは全然ありませんので、すぐ厭になつてしまったのです。

時には小刀をチリ紙にくるんでお腹にかまへたり、キッ先をあてて気持ちを慰めておりましたが、高校時代には家庭の事情や、進学準備などにとりまぎれてか、その欲求も余り激

しくは感じませんでした。

ところが、大学に入ることが出来て、多少暇が出来ますと、その反動かのように、より激しい「切腹への願望」というものが盛り上つてきて、自制しようとする私を悩ませ続けました。

ある夜、ノートの整理中に、鉛筆けずりに使っていた安全カミソリの刃が、チヨットしたはずみに折れました。捨てようとして、ケースから抜きとり何気なく眺めたたん、例の願望がむくむくと頭をもたげ私をとりこに致しました。

そのカミソリの折れようが、小さな刀身となっているのです。この小さいが鋭い刃先をみているうちに、私は完全にその誘惑に負けてしまいました。

私はすぐに、厚手で片刃のカミソリ刃を幾枚も買いました。刃並に平行して折りまげると楽に色々の形に折れるのです。あるだけの刃を折っている内に、望みに近い形のものも出来ました。刃は勿論平行で、背の方が、切先から一分程で丸みがつき、あとは殆んど刃に副って平行に、巾二分程のものです。刃渡り八分程の小さな小さな短刀なのです。

私はこれで切腹しようと思いました。だけど

何分、余り小さすぎて、指先で突き立てなければなりません。これでは余りにも「切腹」とは程遠い感じがします。私は、それこそ一生懸命になってあれこれと考へを廻らせました。そして末弟の「オモチャの刀」に思いつきました。

それを、持主たる弟に気づかれずに、そつと持ち出すのは大變スリルがありました。少し錆びて、曲っていましたが、大變、本物と似ております。短いのでツバを外すと短刀のように見えなくもありません。

例のカミソリの折れ刃を、この刀の切先にしっかりと糸で巻きつけて固定し、半紙を巻いて刃先が五分程のぞいた切腹刀の形にしたらえ、出来るだけ雰囲気を整えようと夢中で思案を続けました。

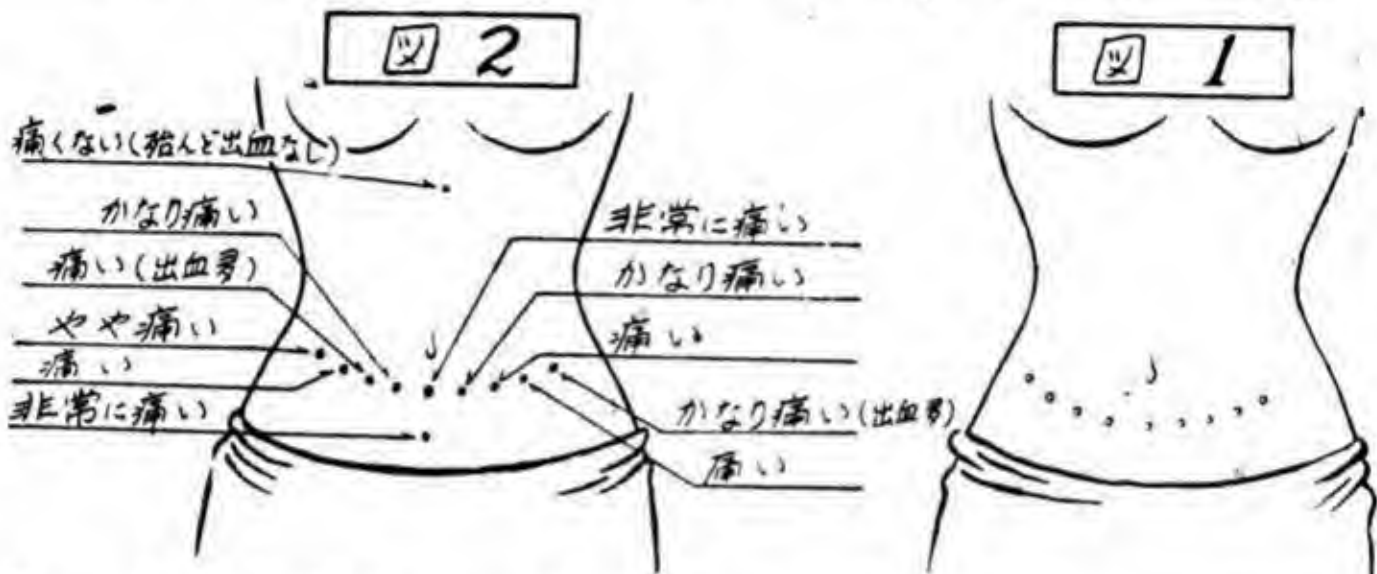
物入れをかき廻して、お正月用の三宝を取り出し、私の部屋へ隠しました。

白いタオルも用意しました。白布代りに切腹の場に敷くためです。もし沢山、血が出て畳を汚したら困るという気持ちもありましたが「本当の切腹」という情景に少しでも近づくたいという気持ちが強かったのです。

姿見も用意しました。勿論、自分の切腹姿を観賞するためです。

切腹の際の衣服は、血が出た場合を考慮して、素肌に着衣をまとい、他には何も着けないことに致しました。

次に深さと場所は、一応一文字腹の場合だったと考えて、おへソの下、二寸位のところを、左脇から右まで一杯に切ることにいたしました。しかし切るといっても、薄い刃ですから、引廻すことは殆んど不可能です。そこで、おへソを中軸にして左右四力所ずつ、刃をある程度の深さまで突き立てることにしました。(突き刺す場所は図1の通りの予定でした)



深さは、一体どれ位い切れるものはわかりませんが、江戸時代の作法でいう、

「五分」に決めました。私の場合、皮下脂肪の厚さは七、八分だろうと想像しております。

それから、姿勢をいろいろと考えましたが正座だと腹部がたるんで突立てにくくなり、ますので、坐布団をたたんで、お尻と、ふくらはぎの間に挿むことに致しました。

切腹の時刻は十二時と決めて、十一時半を過ぎて家人が寝しずまった頃からソロソロ準備にとりかかりました。

十二時ちよっと前に、いよいよ切腹の座に着いて、刀を構え、お腹を揉みほぐして、時計の鳴るのを待ちました。が、すぐだと思った時間は意外に長く、待ち兼ねる程に感じられました。

時計の針が重なり、時報が鳴り始めたのと同時に、私は

力を手に集中して行動を開始致しました。

チクツとする痛みにつづいて、じんじんとしびれるような痛みが、ほんの僅かに感じられました。後はプツプツという感触だけで痛みは殆んどなくなりました。見ていると、脂肪層にじりじりと刃が喰い込んでいくのがわかります。長さ五分程、巾三分程の薄刃はすぐ一杯に刺さり込んでしまいました。

一呼吸して、刃を抜きとると、一瞬、丸く開いて見える赤い創口から、血がもつくりと盛り上って来て、流れはじめました。私は、ほとんど夢中で、そこから一寸程右寄りに次の刃をゆっくりと刺して行きました。

ジーンとしびれるような痛みが、私の被虐心をゆすぶります。

第三番目はおへソの少し下辺りに突き立てましたが、ズキンとする痛み思わず手をゆるめてしまいました。刃はまだ半分程しか喰い込んでいません。一瞬、ゆるめた手にぐっと力を入れると、にぶいブスツという音と一緒に刃は全部姿が隠れましたが、同時にまだ抜きとらない刃の周囲から血が溢れだし、抜きとるやいなや、まるで吹き出すような勢いで流れ出しました。おそらく細い血管でも突き破ったのだと思います。

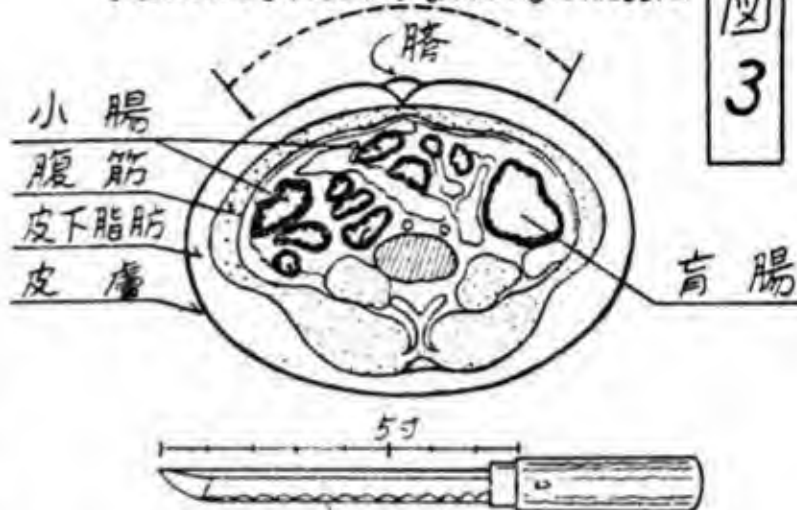


おへソの真下は第五番目に突き刺しましたが、きつ先をあてて力をこめると同時に、鋭い痛みが全身をつき抜けました。他の場合はこの痛みはすぐに消えて、脂肪層の破られる、ごく鈍いものだったのですが、ここでは刃が喰い込むにつれて痛みが激しくなり、とうとうこらえきれずに呻いてしまいました。そのわりには余り血の流出はありませんでした。

右脇腹では、脚のつけ根近くを刺した時に血管を切ったのか、相当、出血致しました。もっとも、この時は刃の許すだけ深く突き刺しましたので、脂肪層をつき抜けて、筋肉まで喰い入ったのではないかと思います。にぶい捲ら、他の箇所とは違った、ズキッとすると筋肉痛を感じました。

全部切り終って鏡をみると、お腹は幾条も流れる血で真赤でした。突いたのは図2のような状態で予定より二カ所増えてしまいました。だけど、氣持がたかぶっているためか、

本当の切腹なら切りねばならぬと考えられる長さ



いうことです。

しかし、刃を深く突立てると、腹壁の筋肉に突き立ちますが、この時は一種特別な筋肉特有な痛みがあり、ここを掻き切るには余程鋭利な刃物と、相当な覚悟がないと難しいことだろうと思います。図2を見ていただくとおわかりと存じますが、脚のつけ根辺りと、おへソの下辺りは特に苦痛も激しく感じました。

私の望む切り方は横一文字ですが、衣服はやはり切りよい点からいって、ない方がよい

と思います。姿勢は正座か、両ヒザ立ちですが、正座の場合は、古来行われたと聞く、三宝を利用して身を起す方法がいいと思いますし、刃物は、あまり長くない、細身の懐剣のようなものが好きです。

私の年代では、図3のようにおへソの高さで、腹壁の厚みは一寸五分弱だと思います。これは、ある医学雑誌でみつけたものの略図ですが、二十才前後の女性の腹部断面図だそうです。下部に向うほど脂肪層は厚くなるのでしようから、本当に切腹するとなれば、深さ二寸程で七寸も引廻わさなければならぬのではないかと思います。

以上、とりとめもない私の体験と雑感ですが、真に迫ったプレイの体験などお持ちの方もあるかと存じます。余程の決心を必要とする貴重な切腹の経験状況など発表していただきたいものです。

#### 【お断り】

誌面の都合により、横村泰氏並に菅良太氏の作品を本月号に予定していましたが掲載出来ませんでしたことをお詫び致します。次号六月号誌上にて発表したいと思えます故、悪しからず御諒承願います。



# 秀緒の生活雑感

藤山秀緒

三月号の読者通信に、私のお願いを載せていただいた処、かえって一度に沢山のお便りが参りました。でも、内容は殆どが私をいたわり、健康を祈って通信を打切るから、とおっしゃって下さいました。矢張り読者通信へお願いしてよかった、と思いました。

マニアの皆様、本当に本当に有難うございました。そのかわり、秀緒はどんなに苦しくても、気力の続くかぎり、皆様のお励ましに応えさせて戴きます。

一度も御返事を差上げなかった方々ですのに、このように理解していただけたことは無上のよろこびですけれど、せめて質問にだけは誌上でよいから答えてくれ、といわれる方も多いので、差支えない範囲で、ここに一括してお答えを書きます。これで、おゆるし下さいませ。

——生年月日は？——  
昭和六年九月十三日です。  
——好きな食べ物は？——

肉類、天ぷら、饅など。  
——職業は？——  
主として、遺産の投資で生活しています。  
——兄弟は？——  
兄が一人居ります。  
——現在の家族は？——  
私と、通いのバ、ア、ヤが一人居ります。  
——起床、就寝の時間は？——  
きまっています。  
——寝る時も、乗馬服を着るか？——



それもきまっています。でも就寝用の乗馬ズボンと長グツはあります。

——乗馬ズボンを穿いて寝ては寝苦しくないか？——

いいえ。適度の緊縛感もあって、私にはむしろ快適にすら感じられます。でも、やはり窮屈で眠れぬときもあります。

——乗馬ズボンはどの位持っているか？——

グレイ系統のものではトルコ地、クレバ、ギャバ各一着。カーキ色ではクレバ、ギャバ各一着。ブルーのトルコ地、ギャバ各一着。オレンヂイエロークレバ、セピアクレバ、純白トルコ地、ギャバ、フラノ、ドスキン各一着宛。それに「火のズボン」として御紹介しているプレイ専用のバーバリ地ズボン一着。ゴム引きズボン一着等です。上衣は、ドスキン、フラノ、ホームスパンの、黒、茶、真紅、ブルー、紺系統などを持っています。

——乗馬服を注文する店は？——

一定していません。ズボンは関西で誂えられたものが多いのです。上衣は自分でデザインして、銀座のKで作らせています。

——靴はどの位あるのか？——

ボックスの黒が、厚手、薄手各二足（外出

用）。それに編上げブーツの黒、茶各一足。ボタン止めブーツ黒一足。それに、水につかったり、プレイ専用に使っているもの黒二足。大部分は東京のTというお店のものですが、その他はいろいろです。

——自分の乗馬服姿に魅力を感じるか？——

少しでも不満な点があるといやになります。が、一分のスキもなく完全武装して姿見の前に立っと、うっとりすることがあります。乗馬姿になっただけで、私には異常な血が湧くように感じられるのです。

——プレイは、独りの時と二人の時では、どう違うのか？——

独りの時は、いつも姿見を使っておりますから、あるいは二人の時と同じといえるかも知れませんが、ただ菊枝と二人のときは、プレイにも一段と張合いが出来ますので、自然力がはいり、それだけ疲れる度合いが強いと申せましょう。

——病気になるってからのプレイ振りは？——

病気は、ハイティーン時代からのものですから、病気を離れて、私の好みは考えられないのです。ただ、次第に、どぎつく、深刻になってゆくことは感じます。いまでは一時失

神しないと物足りなく思います。でも失神するほどのプレイは、それだけ疲労も大きく、病気への影響も考えて、出来るだけ自重しています。

——結婚する意志はないか？——

私は、「告白」で御読み下さったと思いますが、結婚に失敗してからは、男性を好きになれません。というより、私自身の性質から、結婚したことが誤りだったと思っています。ことに、この病気は、八分通り不治ときいていますので、菊枝に見守られながら生涯を閉じる決心です。

——奇クの存在に満足しているか？——

これは難しい御質問ですが、存在自体には満足どころか、敬意を表したいぐらいです。でも、名実共に一流の雑誌になるためには、挿絵や、写真版などの扱い方に、芸術的な工夫がのぞまれます。この種の他誌に、よい挿絵や、写真が載ると、くやしいように感じることがあります。

——なぜレインコートに執着するのか？——

あのガバツとした感触が好きです。男性的で、馬装に次いで、男風に装い得る一番すばらしい服装ですから。尚、ベルトで、きりっ

とウェストを締めていなければ私は興味をそそらないのですが、こんなところにも拘束服としての感覚があるからでしょう。私の持っているのは、ササール・コートと呼ばれるトレチコートのベージュ、茶、黒、純白、それに、ベルティスタイルのバリバリ地のもの、クレバのものなど二、三着を、その時の気分を着ています。

——乗馬服以外の衣服の好みは？——

殆んどスラックスです。上はスポーツシャツやジャンパー、スキー用のセーターなどを交互に着ます。

——感銘をうけた映画は？——

作品としてでなく、私のマニアとしての趣味からいえば、印度映画「アーン」の、乗馬好きの皇妹が第一です。いつも馬装でりりしく振舞い、それはそれは勇しいものでした。

これに続いては、新東宝の「女間諜の挑戦」の高倉みゆき。革ジャンパー、白ズボン、黒革長靴も魅力的でしたし、乗馬上衣の着こなしもよかったです。あのまま、戦死か、出来れば切腹して貰えば、きっと私は映画を観ながら失神してしまったことでしょう。高倉みゆきさんは、菊枝もファンなので一緒に観に行

きます。高倉さんには、「戦雲アジヤの女王」「東支那海の女傑」「嵐に立つ王女」と、どれにも乗馬ズボン姿が出て参りますが、エレガントな美貌と、荒々しい革ジャンパーが良く調和して、妖しい魅力を發揮しているように思います。

——執筆以外に何かやってみたいと思うことはありますか？——

体力が続けば、男装フェティシストとしてデザイナーをやってみたいと思います。世間には、男風なデザインに魅かれる女性の多いことも知っています。ササール・コートだって、ササールが着たものとは違うのに、ほんのちよっとしたきっかけで、あのような大胆なスタイルが流行しました。ガバツと衿を立てた厚地のレインコート、荒々しい革製のジャンパー、ジーツ、スラックス。勇気のある女性には、このようなものを着て身につけますが、気の弱い者は、変態的な服でみられるのを怖れてか、そっと見ているだけです。私が健康的に許されるならば、銀座あたりに小さなお店を持ちたいと思います。そして、女性本来の美しさを損わず、新しい魅力にあふれた男装や、スポーツウェアのために一切の

ものを揃えるのです。女性のスポーツウェアなどの中には、倒錯的に着用されるものも置きます。そして、乗馬ズボン、長靴、スーツなども、各種のデザインを用意し、これをマニアの方々に交互に穿くのです。そして、店の中には、本誌や、公開出来る範囲のフォトを展示します。店員は、もちろんみんな乗馬ズボン姿です。このようなお店で、思いのままのデザインで作った服を着たり、マニアのお客様にお着せしたりして、毎日を送ることが出来たら、どんなに楽しいことでしょう。

——病名は何か？——

腸結核、と云われていますが、私は肉腫ではないかと思っています。私はティーンエイジャーの頃から腸が弱くて、いつも悩んで来ました。その悩みが、女だてらに「腹切りマニア」として、私を育んでしまったのではないかと思います。

——いつまで書きつづけるのか？——

わかりません。でも、この種の病気は急変すると、それからは早いといえます。いつでも死ぬるように、心の準備は出来ています。いっそ、本当に腹を切ろうかとも思いました。が、矢張りその勇気もなく、また周囲への迷



惑を思うと、実行は出来ません。でも菊枝の手許には、私の死と同時に発稿出来るよう、上書きまでした最後の文章が用意されています。この手紙が発送された日、私は短い生涯に別れをつけているのです。しかし、それまでは、意識を失う瞬間まで私はペンを執りつ

づける覚悟です。いえ、そうしなければ居られないのではないかと思います。だが反面には、死期さえ予知出来れば、最期の半年程前に筆を折りたいたも考えています。何れにせよ、この病いが不治であるなら、これからはどこか静かな郊外で、医者や看護

婦に煩らわされずに、馬装で日を送りたいと思います。作品の上では乗馬ズボンに身を固めて断末魔の苦悶に耐える私が、見苦しい振舞いをせずに世を去りたいものと、いまからその場面を想像して、決意をあらたにしておりま

(おわり)

## 麗しき縛しめの乙女たち

大手札型印画紙焼付  
各組三枚一組二五〇円

**聖壇の裸女** 略号(けい)

全身をぐるぐる巻きに縛られた裸の美女が両手を吊り上げられて身もたえする妖しき……

**戸張のかけ** 略号(けろ)

豊満な白き肌をあらわにして肉づきよき太腿を八の字に押しひろげて、花恥しき羞……

**艶姿色模様** 略号(けは)

艶麗花をあざむく全裸の姿態にきびしくも痛ましく、ひしひしと喰い込む荒々しい縄目。

**浴場の欲情** 略号(けに)

豪華なタイル張の浴槽に沈められた縛り美人の胸のしびれるような紐のしまりぐあい。

**いけにえ人形** 略号(けほ)

美しき裸身のすべてをさらけ出して哀れなイケニエは悪魔の前に無抵抗の姿ける。

**覗き見極楽** 略号(けへ)

がらりと開けた襖の向うに展開されている光景は、ああ、またなんというセクシヤルな……

**開股悦虐境** 略号(けと)

真昼静かなビルの一室、両手を背後に或は頭上に括られた若き女性に鮮鋭なるレンズの……

**暖炉の開股** 略号(けち)

お合羽のうら若き女、咽喉に首縄、口には猿轡、冷たきレンガの前にはひきすえられて……

**開股絶対絶命** 略号(けり)

豊胸をふるわせて縄の悦虐に泣く強烈な股間しぼり、もう身動きは絶対に出来ない……

**悲鳴開股** 略号(けぬ)

流石の美女も思わず痛さに悲鳴をあげる首から胸、胸から二の腕、胴、太股へと強烈な……

## 新人モデル大名刺判緊縛寫真集

新鮮味溢るる  
若鮎の乙女達

**ヌード初縛** 略号(みい)

三枚一組 二〇〇円

モデル 平野 笑子

**ヌード初縛** 略号(みろ)

五枚一組 三〇〇円

モデル 田原美佐子

**全裸股間縛** 略号(みは)

五枚一組 三〇〇円

モデル 岩井 知子

**全裸後手比** 略号(みに)

三枚一組 二〇〇円

モデル 平野 笑子

**観念の座** 略号(みほ)

三枚一組 二〇〇円

モデル 平野 笑子

**全裸股間縛** 略号(みへ)

五枚一組 三〇〇円

モデル 絹川 文代

**開股縛比べ** 略号(みと)

五枚一組 三〇〇円

モデル 絹川 文代

**椅子開股縛** 略号(みち)

三枚一組 二〇〇円

モデル 絹川 文代

黒い紐は白い肌に喰い込み

剥がれたままのズロースで

## 連載第三次元小説

影  
の  
国

雪

俊

遙

## 第六章 洗濯用ロープ

新町奴隷市場で珠子を買ったのは、猿の様な顔をした中年の小男だった。

珠子は男に鎖の端を掴まれて、首府の町の北の方にある場末の盛り場へ連れて来られた。日の出町という町である。

劇場「金の城」それが珠子の最初の職場だった。

等身大の女の写真が並んでいる入口を通して楽屋口の手前にある事務所で、珠子は先ず、この劇場の支配人に紹介された。

鎖で、後手にされ、手足に奴隷市場でサーヴィスにつけてくれた鉄環と鉄鎖をしたままの姿だったので、珠子は恥しさに逆上し、又、これから先のことを考えて気も潰れる思いだったので、支配人の男の顔もよく解らなかった。

「座長と楽屋の連中に紹介しよう」

支配人の言葉に、猿の様な男が更に珠子を奥へ引立てた。

事務所を出ると直ぐ細い通路があつて、二燭の電灯がかすかに上の方を照しているだけで足許は暗かった。物につまずいて倒れかゝると、男がぐっと鎖を引張って、傾いた珠子の身体を支えた。手首の鉄の環がキュツとしまる様に喰い込んで痛かった。

「足許が暗いから危いよ。よく気をつけて歩きなさい」



男が案外、優しい声で注意してくれたのは嬉しかった。

こんな境遇になると、無意識に他人の酷しさ、優しさに、ひどく敏感になって来るらしい。それが珠子には悲しかった。

舞台脇を通る時、ちらっと舞台の方を見たら、遊女屋の様な造りの舞台で五、六人の女が責められていた。

「ウッ、ヒーッ」

と、真に迫った呻き声、悲鳴が聞え、暗い客席は水を打った様にシーンと静まり返っていた。

座長は舞台に出ているとかで、身体のあいている踊子達と、文芸部と照明と大道具の主任にだけ紹介され、座長楽屋で待たされた。

正面に大きな三面鏡が据えてあるので、どこに座っても、鎖を纏っている珠子の姿は鏡に映し出された。白い顔が赤く染まった、恥しそうにうなだれている姿が可憐だった。固く閉じ合わせた膝はムツチリと高く盛り上がり、丸太の様に太い丸々とした太腿は、肌目が細くなめらかで、まるで蠟細工の様に美しい。

男は、お茶をいれて一人で飲みながら、まるでなめ廻す様な目で、珠子の全身をじろじろと見廻していた。

舞台では一しきり烈しい責め折檻の物音が響き、女役者の張りのある声が長い科白をいつていた。

それから急に解放された様な騒がしさが、そのあたりを包んで、それが弾けた様に楽屋に押し寄せて来た。

二、三人が遊女姿で走って行くと、色白で目のパッチリした人形の様に美しい女が、ズカズカと中へ入って来た。

「御苦労さん」

と、男がいった。女はチラッと固くなって座っている珠子の方を

見たが、そのまゝ三面鏡の前に座り込んで双肌脱ぎになった。男の役者が、舞台に置き放しにして来た衣裳や小道具を持って来た。

舞台では、大道具がカンカンやっている金槌の音がしている。

「入りは、どうだったかい？」

「そうね。朝の内にしちゃ、それ程悪くもないわ。でも東洋劇場が進出する前に較べると大分、落ちるわね」

「今に取返さずさ。いゝ子を入れたからね」

男は顎をしゃくって珠子を示した。

「君に二、三カ月、ミッチリ仕込んで貰って、娘役として売出したら、いゝスターになれそうな素質はあるぜ」

男は珠子の傍に寄って来て、ちんまりと肉のついた顎を指先で押しあげて、うなだれている顔を引き起した。

「幾つ？」

「幾つだって聞いてるぜ、座長さんが」

男に顎をしゃくられて、震えながら返事した。

「十六です」

「立って御覧」

お人形の様な美しい顔をしている癖に、この女座長は案外、きつそうな女だった。

「あんまりスナリした身体つきじゃないわね」

「よく言えば、ムッチリしていて肉付きがいゝということなんだよ」

「でも背が高くなりそうな身体つきじゃないわ」

「君の相手役だもの、余り高くなっても困るじゃないか」

じつと固くなって立っている珠子の傍へ座長も近附いて来た。

「よく締ったいゝ身体をしてるわね。肉の締り工合と目だけは確か

に堀出し物だわ。これだけの子、そうザラにはいないわね」

「足の恰好を見てやってくれよ。円錐筒を途中で切ったみたいに、上から下へ綺麗に丸味を少しも損わないで、少しずつ細くなってるだろう。しかも、その肉付きのいいこと。ムッチリしていて、しかも肉が固く締っていて、膝の上に二つ可愛い笑窪が出来てるだろう。よく肥えて、しかもキュウツとその肉が引緊っていないと、あすこにああいう笑窪は出来ないんだよ。せり売り台の上にこの子が立たされて、あの笑窪を発見した途端、俺は、こいつはイケると思っただのさ」

「幾らでせり落したの？ この子」

座長はそう言いながら、しやがみ込んで熱心に珠子の脚を調べ始めた。

「四十万」

「冗談じゃないわ、パパさん。こんな子に」

「成行でそうなちゃったんだよ。この子の姉さんなんか、もっといゝ値がついたもんだぜ」

「じゃ、どうせなら、その姉さんの方にすれば良かったのに」

「いや、あれは駄目だ。セーラー服でも着せれば一応、純情そうに見えるだろうが、顔だってこの姉に及ばないし、第一、舞台に立たせる身体じゃないよ。どうしてあんないい値がついたか俺にも解らないんだ。もっとも、頬のポッチャリした、男なら誰でもちよつと虐めてやりたい様な気のする顔だから、一目惚れしやすかったのだからうけどね」

「ヤレヤレ、四十万か。初値としちゃ本当にスター級ね」

珠子を後向きにさせていた座長は、ヤケの様にピシヤッと珠子の

背中を叩いた。

「骨格はガッチリしてるから、うんと踊を仕込んでも、へたばるとはないわね」

「じゃあ、明日から仕込むことにして、お目見得代りに今日は一日、鏡の前に立たせておくか」

「それがいいわ」

それから数分後。次のショーの開演のブザーが鳴って、プロローグに整列するために楽屋を飛び出した踊子達は、通路の突当りの大鏡の前で、とぐろを巻いてしまった。

それとその筈、鏡の前には珠子がバタフライ姿のまゝ、両手をピンと張った姿で立たされていた。いつもは踊子達があわただしい出番の前に、自分の姿をチラッと映してみる鏡の中には、堅締りの珠子の腰にバタフライの紐が喰い込んだ後半身が映っていた。鏡の横の羽目板には金具が打ってある。珠子の手首は座長の腰紐でしっかりと縛られ、紐尻を十程程斜上に延して、その金具に繋いであった。

これでは手を下すことも、足を動かすことも出来ない。

頭上には貼紙が一枚。その下で珠子は羞しさに身を小刻みに震わせながら深々と、うなだれていた。

#### 新入座員紹介。

専属。

川島珠子。十六歳。

前身、自由民。京北女商高一年生。

身長、百五十三纏。体重、四十六斤。

特技。珠算三級。



「へえ。算盤が三級だってさ。」

「おゝかた銀行員にでもなる積りだったんでしよう」

「じゃあ、後で事務所の算盤借りて来て、その上に座らせてやろうよ」

「ちよいと、進行さんがムキになってブザー鳴らしてるわよ」

「うるさいわねえ。誰も出ないって言ってやしないじゃない」

「さあ、行こう、行こう」

口から先に生れて来た様な踊子達の一群が、津波の様に去ってしまった、舞台の方で賑々しくバンドの演奏が始った。すると今度は男優や裏方達は何人も集って来て、てんでに勝手なことを言っでは珠子を品定めし始めた。拡げた腕が疲れてダラリとすると、

「コラ、手をピンと延してろ。指先を真直ぐ、反らせて」

口で言った位では効目がないとなると、鏡の横に吊してあった、しなやかなトネリコの筈を取って、ピシリと横殴りに打据えられた



り、筈の先で肋（あばら）をこじられたりした。

奴隷にされると、こんなに酷い目にあわなければならぬかと、

珠子は情なさに声を忍んで泣いていた。

座長楽屋の入口から、座長と例の男が首を出して笑いながら、男達に代る代る下から肋を突き上げられている珠子を見ていたが、と

めもしなかった。

「今度、売出す新人だから、身体に傷をつけちゃ駄目だぞ」

男が、たった一度、そう怒鳴っただけだった。

「あらあら、泣いてるわ。なんだか一寸、可哀想みたいね」

「女拡党のシンパの娘だそうだから、今迄人に咎を当てられたことも殆んどないだろう。スターになれば、舞台上で随分きわどい責めも演じなければならぬんだから、今から痛めてやって慣らさせた方がいゝんだ」

「自由民の娘だった子を、いきなり酷く虐めたりして、又いつかの子みたいに自殺でもされたら、元も子もなくなってしまうわよ」

「それもそうだが、それ程神経の細い子でもなさそうだから、まあ、あの程度に騒りものにするのは、かえって薬だろう。連中だって今は新鮮で目新しいから面白がって虐めてるが、どうせ一週間も毎日みせつけられちゃえば、すぐ飽きて何もなくなるさ」

「アラアラ、エミと久美が算盤なんか持って来て、縄をほどいて……算盤の上に正座させてしまったわ。痛いでしょうね。膝と胫と足の平の下に三本も。あっ、エミがあの大きな体で膝の上に座ってしまった。パパさん、やめさせてよ。これから踊りを仕込む子に、あんなこととしてしまったら脚が駄目になってしまうわ」

「エミの奴、自分の役を取られるかもしれないと思って嫉妬してるんだよ。一寸、行って止めて来よう」

劇場『金の城』での珠子の第一日は、こんな工合に、物心ついて以来、最も辛く、暗く、悲しい日だった。

十時半の閉場時刻まで、楽屋通路の突当りにピンと腕を延して立たされていた珠子は、腕も脚も棒の様になってしまい、肩と足との

関節が鈍く疼いて痛かった。その夜の床の中で珠子は一晚中、泣いていた。

曉方になって、流石に泣き疲れてトロトロと、まどろんでいるとすぐエミに叩き起された。

「一寸、お嬢様。いつまで寝てらっしゃるおつもりでございますの。コン畜生」

驚いて跳び起きると、昨晚、大部屋に布団を並べて寝た六人の専属の踊子は、もうみんな部屋の中にいなかった。

「アッ御免なさい。つい、寝坊してしまって」

「私が当番だから布団なんか上げてやるわよ。早く御飯食べて稽古場へ行きなさい。先生が待ちかねてるわよ」

珠子は急いで昨晚エミに譲って貰った、お古の黒いスウェーターとストラックスをつけて食堂へ飛んで行った。

劇場から余り離れていないこの家は、昨晚エミから聞いたところによると、あの猿の様な顔をした男と座長夫婦の持家だった。そしてそこに、独り者の裏方や役者数人と、専属の踊子六人が同居しているのだという。この社会で専属とは奴隷のことを言うのだとも始めて知った。

稽古場は陽当りのよい南側の端にあった。

ピッチリした黒のタイツに身を包んだ座長が、小さな笈を手に立っていて、下半身にタイツをつけただけで、上半身はむき出しの踊子達の稽古を見守っていた。

やっとスウェーターの着られる身分になれたと思ったら、又、半裸にならなければならないのかしらと、珠子は心も重く、おずおずと前へ進んで行くと、



「珠子さん。ここへいらっしやい」

気が附いた座長は、花の様に笑って、笥で珠子を手まねきした。品の良い優しい笑顔だったので、珠子の沈んだ心は少し開いた。

仕方がないのでスウェーターを脱ぎ、皆の様に上半身を剥き出した。タイツがないのでこのままでもいいのだらうと、黒い先細のストラックスをはいたままで居たら、

「それも取りなさい」

と厳しい顔で命令された。

ズボンを脱ぎ白いキヤルマタ一つになる。

「それも脱ぎなさい」

珠子は真赤になって、うつむいた。

「あなたは新人だから、裸で舞台に立っても平気になれる様に、心が慣れるまでお稽古場では、いつも裸でダンスやバレエのお稽古をしなければならぬのよ。お稽古している所を皆に見て貰って、そうして舞台度胸をつけるの。いいわね。さ、外しなさい」

外しなさいと言われても外せる筈はない。先生の声は厳しかったが珠子は、うつむいてもじもじするばかりで、思いきってキヤルマタを下すことなど、とても出来なかった。

座長は白いトネリコの笥を持って、ゆっくりと近附いて来た。

「じゃ、言う事を聞くまで笥で叩きます。背中をこちらに向けなさい」

「……………」

「云われる通りするのも嫌、背中をぶたれるのも嫌。でも、どちらかは甘んじて受けなければならぬのよ。貴女は奴隷なんですからね。それを忘れてはいけません」

「……………」

「じゃあ、その綺麗な肌を叩いてやりましょうか。それとも、昨日みんなにされていた様に突き飛ばしてやろうかしら」

「……………」

「本当に言うことを諾かない気ね。私の勘忍にも限度があるのよ。」珠子はシクシクと泣出していた。するとビュッと空気を切る短い衝撃音が耳許を掠めたかと思うと、肩に灼ける様な痛みを覚えた。

ピシッ。

十六才の少女とは思えない、丸々とした雪白の肌に、薄赤く一筋のみみず腫れ。

「ウッ」

と絶えかねて、せきを切った様に泣声が大きくなる。

ピシッ、ピシッ。

笥は身を震わせて泣く珠子のムッチリしたむきだしの肩に、左右交互に打下された。踊子達が稽古をやめ、驚いて一斉に振り返った。

「泣くな」

ピシッ。

「顔を上げて」

ピシッ。

「手を下せ」

ピシッ。

「泣くな。涙を拭きなさい」

ピシッ。

「さあ、脱ぐか」

ピシッ。

数分後。とうとうパンツを脱ぐことをしなかった珠子は、嗚咽しながら座長の前に立たされていた。

「両手を横に上げて、水平に延しなさい」

「右足から一で、太腿を水平に持上げ、膝から下を真下に延す。二で、その足を横へ持つて行って拡げられるだけ拡げる。三で、後へ跳ね上げる。膝を出来るだけ真直に、爪先を出来るだけ高く。いいわね。これを早く繰り返す。この動作がステージ・ダンスのすべての基本ですからね。」

「ハイ。アン。ドゥー。トロワ。アン……」

「他のことは何も考えないで。アン。ドゥー……誰にも見られていないと思って、脚を思いきって開きなさい……」

「爪先をピンと延して。シャキッとしなきゃ駄目よ。遊びじゃないんだから。これが、あなたの職業になるんだから。ドゥー。トロワ……」

いつのまにか先輩達は稽古を止めて珠子の周りを取囲んでいた。恥しいが、答で折檻されながらの稽古だから、どう仕様もなかった。羞しいなどと思って動作が鈍ると、

「もっと早く、もっと爪先を延して、もっと足を開いて。ハイ、アン。ドゥー。トロワ……」

声と一緒に珠子の肩や脚に答が飛んで来た。腕がだれれば、二の腕にピシリッ。足の拡げ方が悪いと、太腿にピシリッ。下を回けば頬に、膝が曲れば、ふくら脛にピシリ、ピシリと答が



打下されて、珠子の真白な身体に何本も美しい薄桃色の条が彩られて行く。

「覚えましたね。当分、毎日この基本を三百回やるのよ。私が多忙ならエミが監督します。これはどこでもやれる動作だから、劇場へ行ってから楽屋でやればいいわ。次の基本。これも楽屋通路で練習しなさい、エミちゃん、半紙を珠子さんの脚の間に挟ませなさい」

「ハイ」

薄い半紙が、珠子の脚に縦に挟まれた。

「踵を出来るだけ上げて爪先で立ちなさい。もっと上がるでしょう。それっぽっち。もっと、ホラホラ。お腹が出っ張り過ぎたわ、引込めて。今度はお尻が出た、身体は真直に。腫が下った、両手を頭上で合わせなさい。手首をピンと延して、指先も。そうそう、その姿勢のまま脚に挟んだ半紙を落さずに歩いてみなさい。始めはゆっくりでいいから紙は落さぬこと。落すと答が飛ぶわよ」

珠子が赧くなってそろそろ歩き出すと、答を手にしたまま座長はさっと横へ廻って珠子の姿勢を注意深く見ていた。

「ホラ、お腹が突き出た」

ピシリ。

「今度は、お尻が出っ張った」

ピシリ。

「腕が下った」

ピシリ。

「とうとう紙を落した」

ピシリ、ピシリ。



丸二カ月、珠子はまことに厳しく稽古させられた。朝と夜は稽古場で、皆が小屋入りする時は一緒に連れて行かれて、楽屋や楽屋通路や楽屋風呂で一人で練習を続けていなければならなかった。

「うちは芸能学校じゃないんだからね。商売なんだから、ゆっくり時間をかけて養成している余裕はないんだ。とにかく舞台に立って、おかしくない程度に早くなるんだ。それから先の芸は舞台に出ながら身につけるんだ」

猿の様な顔をした男——劇場の主宰者の高倉は、よく珠子にそう言った。

最初の中は余り稽古が烈しいので脚にみが入って痛く、しゃがむ事も出来ない様な日が続いた。尿が血の様に真赤だった。珠子は毎日、泣いて暮した。しかし、その苦しさにも慣れてしまふ頃から、踊りも上達して来た。抜ける様に白い身体が、なめらかに踊っていると何かの精の様に美しく見えた。笞を手にした座長は、自分の仕込んだ娘が次第に巧い踊手になって行くのを、楽しそうに見守っていた。



二カ月目の朝、稽古場へ行く座長が、いつものトネリコの笞の代りに、何やら円盤の様な物を持って待っていた。

「珠ちゃん、踊りは一通り出来る様になったから、訓練は一応、昨日で終りにします。これから新しい振付に従って、いかに今迄の成果を生かして行くかという事が大切な課題になるのだから。無論今迄の事を忘れてはいけませんよ。今日から一月がかりで芝居の稽古をするのよ。芝居と言っても、私達の様にバアレスクで働く女は新劇の女優さんの様な難しい演技は余り必要じゃないの。演技や思想を売物にする芝居ではなくて、エロティシズムやサディズムを売物にする芝居なのだから、そのつもりで演らなければ駄目ですよ。殊に一番大切なことは、舞台の上で如何に美しい貴場を見せるかということ。いいわね。貴女は顔も身体も可憐型だから、他人を責める演技など覚えなくてもいいわよ。専ら責められる方を研究しなさい。解ったわね」

「ハイ、先生」

と口では素直に返事していたが、珠子の胸の中は烈しく騒ぎ立っていた。とうとう来たわ。という思いである。

「責めの基本は何だか知ってますか？」

「知りません」

「知らない筈はないでしょう。考えてごらんなさい」

珠子は、うなだれて微かに震えていた。筈ですと答えようとしたが、そんなことを口に出せるものではなかった。

「駄目ねえ。貴女は学校の成績も割と良かったそうじゃない。そんなこと解らないかしら？」

「……」

「責めの基本はね、縛りです」

はずれた。答えないで置いてよかったと思った。

「珠ちゃんは縛られたことあって？」

「ハイ」

「どこで？」

「警察です。それから……」

それから女権党、と答えかけて慌てて止めた。こんな事は言わない方がいいと思った。

「それから……」

「アノ……奴隷市場です。それから、ここへ来てからも縛られましたわ。あの鏡の前に立たされた時」

「そうね。でもバアレスクの舞台では、視覚的效果を考えて、いろいろ変った縛り方をするものなのよ。それを先ず、お稽古します。皆さん此処へ来て、珠子を遠巻きにして座りなさい。珠ちゃんは着ているものを脱いで、エミちゃんに貰った黒いハート型のバタフライ

イがあったでしょう。あれ一つになりなさい」

エミに筈で監視され乍ら、珠子が黒いハート型のバタフライ一つになって跪くと、座長はその口に手中の円盤をくわえさせた。

不審そうに見詰める六人の目。

「少し復習よ。珠子の身体をよく見て。皆がこれを縛るとしたら何を使うかしら」

周囲から一斉に自分の身体を眺められて珠子は羞しさにギョツと身が縮んだ。バタフライの密着感が、何とも言えない哀れさに彼女の心を傷めた。

「前沢君から順々に答えてみなさい」

「私だったら藁縄の太いので縛ってやります」

「どうして」

「だって蠟みたいに、とても滑らかな膚をしてるんですもの。藁縄で縛り上げたらケバが突き刺さるからいい気味ですわ」

「アラ、それだったら私は針金がいいと思う」

「赤や青のコードで縛ると綺麗よ」

「やっぱり麻の細引が一番いいわ」

「私は紅の腰紐で縛るのが一番好き」

「私なら柔道の黒帯で縛ってやる」

一番最後にエミが言った。

「どうしてですか、エミちゃん」

「だってこの子の身体、真白でしょう。黒くて太い物で縛ると一番引立つと思います」

「そうね。舞台の上で白い身体を縛る時は黒くて太い物が一番引立つわよ。嘘か本当か、これでこの子を縛ってみればよく解るわ」



座長はスリッパを脱いだ白い素足で珠子の口にくわえた円盤を軽く蹴った。落すまいと珠子は歯に力を入れた。

「これ何ですか、先生」

「デパートでこの頃、売出した洗濯用ロープよ。巻尺みたいにケースの中に入っていて、手を放すとスルスルと中へ入ってしまうの。だから必要な長さだけ使ったら、ケースの真中に金具が附いてるでしょう、ここへロープの端を引掛けて巻込むのを停めるのよ。巻尺みたいにロープを引出しながら縛って行けるから、舞台で小道具に使うと面白いって、うちの先生が買って来たんだけど、白ばかり多くて黒を探すのに骨が折れたらしいわ」

「アラ、これなら割に太いから見た目もいいわね。先生、これ、物は何ですか」

「ビニールを擦った紐よ。五米あるから充分縛れるわ。皆はこの使い方に慣れ、珠子は縛りの演技に慣れる。今日のお勉強はこれよ。始めに前島君。後手にして胸に縄をかけて御覧なさい」

前島という赤ら顔の、珠子と同じ年の娘が珠子の後に廻って両手を後手に合わせ、ケースを何回も落とし乍ら、手首から脇へ縄を掛けた。

「始めは観念して縛られる所をやりましょう。暴れ乍ら縛られて行く演技は一寸難しいから、ずっと後でね」

前島が右膝を立て、左膝の上に珠子の背中を深くのせた。

「足を伸して、お行儀よく天井を向きなさい」

エミが答尻で、上体だけのけぞって膝を折っている珠子を小突いたが、座長が制止した。

「いいわ、このポーズも仲々面白いじゃない。珠ちゃん、左側が客

席としますよ。そのまま顔だけ客席に向けて観念の目を閉じて前島君に縛られる。やってみなさい」

その間に珠子の、ムックリと白い肉の盛り上った胸板に黒いロープが小蛇の様に執念深く一筋、二筋と絡み附く。胸肉が締上げられた。縛り終ると前島は、珠子の肩口を掴んでぐっと上体を引き起した。四面の壁に大きな姿見がはめてあるので、黒いロープで後手に縛り上げられた珠子の哀れな姿は四方に映し出された。正面の鏡を見ると、腕の附根から鎖骨の下の方へ二筋と、肋骨のずっと下に三筋、横縄が黒く並んで黒い帯の様に喰込んである。腕はハムのようにくびれ、胸腹部は縄で絞られて蜂の様に細い。二つの横縄の間にX型の胸縄が掛かり、白い腕を伏せた様だった美しい乳房に黒紐が斜に酷しく喰込んで豊かな丸みは二つに裂けて見えた。残りの縄を入れた円盤は左脇腹に、ぶらぶら下っていた。

「ほどいて。今度はナナちゃん、縛り役よ」

「やっぱり胸ですか」

「そうね。ナナちゃんはもう古いんだから、胸とお腹と背中に菱縄を打って御覧」

今度は大変だった。珠子は何回も仰向けやら、俯伏せにひっくり返えされた。ナナは両脚を真直ぐ伸して、死んだ様にじっとしている珠子の豊かな身体にビュッ、ビュッと縄を打っては足をかけて引き絞って行った。

ふくよかな太股にも黒い紐がのめり込んだ。最後の結び玉は背中の上の方だった。残った縄をわざと二十程程延して金具に掛けたので、引き起されて両膝ついた珠子の胸の前で鉄のケースが、ぶらぶらと、ぶら下って揺れていた。

エミが面白がって珠子の口に猿轡をした。くびられて二つに割れたふくよかな頬を、エミはピシヤピシヤと平手で叩いては珠子の顔をのぞき込む。

両手は、わざと太腿の脇に当てられていた。しかし手首の上、十糧と行かない所に掛けた横縄が喰入っているの、手は殆んど動かさなかった。胸に一つ、腹に一つ、背中一つ、腰一つ。合計四つの菱縄が、ランプのダイヤを横にした形で大きく、白い素肌を彩っている。

座長は、うなだれた珠子の顔を引き起して正面の鏡を、更に首を捻って後の鏡を見させた。それから右左の鏡を見せて、背中と胸の菱縄、腹と腰の菱縄が、どういう工合に脇に、ピッタリ当てて伸した珠子の腕に喰込んで横に連結しているかを見させた。

「どう、素敵でしょう。舞台の上でこんな風に縛られて、大勢の男の人に見られたいと思うでしょう」

珠子は猿轡されたまま一生懸命、かぶりを振ったが、座長の高笑いに消されてしまった。

座長は、この洗濯用ロープが余程気に入ったと見えて、その日から毎日、行われた責めのお稽古では、珠子はいつもこの黒い紐で縛り上げられた。

種々の訓練の中で一番辛かったのは、逆さ吊りの稽古だった。これは一番、時間も掛った。というのは、逆吊りは慣れると次第に長時間耐えていられる様になる上、お客さんが一番喜ぶ責め姿だからだった。

幾ら影の国のバアレスクでも、女体から全く衣服を剥いで客席に正面を向かせる事は出来ない。これは刑法第百七十五条猥褻物公然

陳列罪で罰せられた。逆吊りの場合も後向きに吊して百七十五条に違反しない範囲内で苦しげにもだえさせるのが今迄のバアレスクの普通の逆吊り演技で、正面向きに吊す場合は、やはりバタフライを附けた儘だ。時代物なら短い腰布を纏わせて、前だけ太腿で挟ませる。逆吊りされた女優は棍棒などでビシビシ打たれ、苦しげに身悶えて身をくねる。腰布の後はずっかり捲れてしまうが、前は絶対に百七十五条に抵触せずに苦悶する演技が必要だった。

これが長時間となると相当の修練を必要とする。専属の踊子は時々稽古場で逆吊にされ、何分間、腰布を挟んでいられるかテストされた。演出家はそれを助手にメモさせておいて、次の公演で誰かを逆吊りにする時はメモの時間内に舞台での責めを中止させた。

高倉は、この洗濯用ロープのケースに目を附けた。直径十五糧程だからバタフライの代用品は立派につとまる。もっとも余り身悶えしたり、身体を振らせたりする訳には行かない。

「これは面白いな。お珠は、これで仕込もう」

「大丈夫かしら、パパさん。百七十五条に引掛ると、劇場代表でお仕置されるのは私なのよ……」

「だから百七十五条に引掛らない様に、しっかりお珠を仕込むのだ。いい事がある、縁側に皆を並べておいてお珠を物干台に吊す。あれなら距離と言ひ縁側の幅と言ひ、小屋の舞台と客席との関係にそっくりだから、いい訓練場所になるだろう。ナナ、男の連中も皆呼べ」

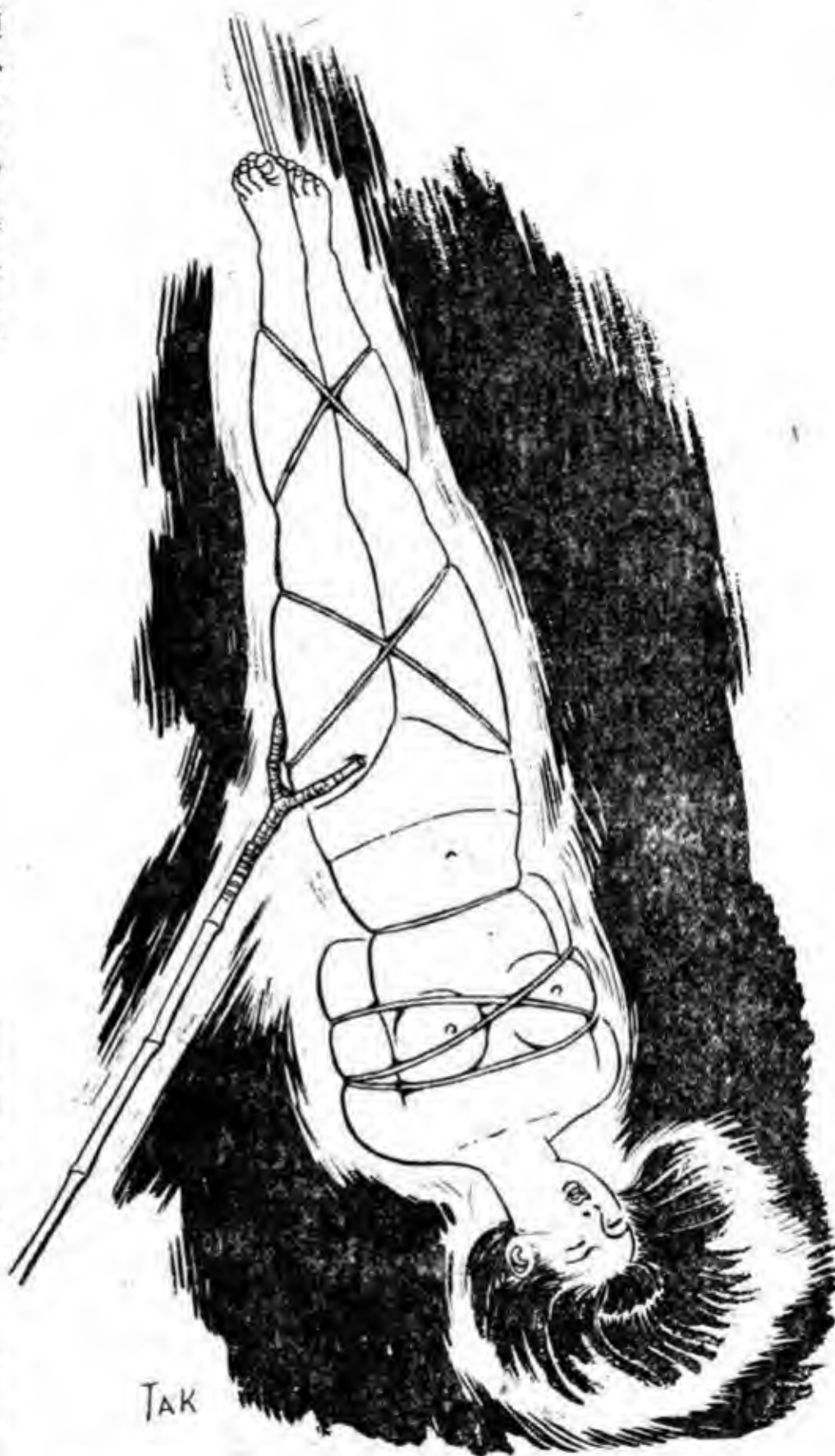
珠子は物干場に連れて行かれた。干物は皆何処かへ持去られ、膝を折って太腿と脛をキツチリ縛り上げられた珠子は、物干竿の真中に紐の端を結びつけられた。男優の上村と伸井が竿の両端に刺股を



当て、ぐうっと持上げた。

「あッ、あーッ。アー」

丸い膝頭を上、豊かな胸をのけぞらせて、真白な珠子の身体が真逆様になる。富士山型に裾を開いて下端を軽く内側にロオルしていた、女学生にしてはハイカラだと学校で評判だった髪型の頭髪が、さっと地を払って垂れ下った。一筋の乱れ毛もなく、きちんと整髪していたのが無残に垂れ下って、逆さになった丸い顔の上で逆立って見える。内側にロオルしていたので毛先は皆、後を向いてい



「紐を短くすればケースの揺れも小さいわけだな」

一休みした後で珠子は又、足を縛られた。今度は膝を真直に伸して足首を縛られ、脛の前面にX型に縄を掛けてから膝下を縛られた膝頭に小さなX縄を掛けて膝上を縛り、太腿に又、X縄を掛けて縛られた。

竿に括られて刺股で又、物干台から宙吊りにされた。今度は前より一つ上の段に竿を掛けられたが、足を伸して吊されたので、逆様になった珠子の顔は前と同じ位の高さにあった。

た。

高倉は膝頭と太腿の附根の両方から腿を縛った縄目までの距離を測り、紐を巻込んで長さを調整しながらケースをバタフライにした。巧く行った所で垂れ下ったロープの長さを測る。文芸部の阿藤が、それをノートする。廊下の両端にエミと座長を坐らせ、上村に命じて、物干竿に逆さに吊上げられた珠子を刺股で少しづつ強く突かせて身体をゆっくり前後に振らせ、ケースがバタフライの役目を果すギリギリの振幅を測った。前後に振る代りに左右に振らせて又、測る。この方が振幅は小さかった。

モデルの独り言

## 紅色の自画像

絹川 文代

先日、私は三人の読者の方から手紙をいただきました。いずれの方々も、私にモデルになつてほしいという希望の便りでしたが、その御熱心なものには、本当に驚いてしまいました。余り真剣な書きぶりなので私の方が面くらってしまいました。

「どうだい、ひとつ俺のモデルになつてみるかい」というぐらゐに気やすく言つて下さる方が肩の荷が楽なのです。紳士的な態度だとか、場所がどうだとかかた苦しく書いておられると、面倒くさくなつて、とうとうどなたにもお返事を差し上げず、失礼してしまいましたので、あまり大きなことも言えません。毎月雑誌を送つていただいて

読者通信なんかを拾い読みして私のことをほめて書いて下さつたところに目がゆくと、くすぐったいような気がします。手紙でもそうですが、お世辞だとわかつていても、ほめられているとやはり悪い気持ちのしないものです。でも、それで鼻を高くして、という気にならないのは、少し不感症になつてゐるのかしら、と思つたり或は人に言われたいします。これ、自惚れじやないんですから、お気にさわつたらごめん下さいね。

おうちにのんびり遊んでゐる時なんか、お誘ひ下さつたら喜んでお供しますとお返事しても私は映画とダンスが大好きなものですから、といつても、独り

逆吊りの身体が上下に振られた。大きく振られた。ブランコ位の振幅になると流石にケースはバタフライの役目を為さなかった。そこで止められ今度は左右に振られた。大きく振られた。振りきつて身体が斜になると、垂下つた豊かな黒髪が波の様に揺れ、パツと黒い大きな花の様に開いた。それから戻つて行く首に引張られる様に蹴いて行く。どの方向に振つても黒い髪は首に曳かれて揺れてゐた。そして首は身体に曳かれて振れてゐた。その首には全身の血が逆流して来て真赤だ。頬などは熱れきつて今にも落ちそうなトマトの様に赤い。うんと細い絹糸の様な針で、その頬を一寸でも刺したらプツと音立てて鮮血が吹出して来そうだった。

珠子は嗚咽し続けていたが、苦しいのか、それが殆んど声にならない。透明な涙だけが額を濡らして乱れた頭髮の中に吸込まれて行く。額も血を吹きそうに紅潮してゐるので、清らかな少女の涙が紅の涙に見えた。髪は乾ききつた海綿の様に幾らでもその紅い涙を吸収した。

「もう休ませてやらないと溢血して死んでしまふわ」

時計を見ていた座長が叫んだ。

上村が刺股を取上げた。何と思つたかヒョイとそれを珠子の丸い豊かな額に引掛けた。そのままぐつと持上げたので、珠子の身は俯伏して宙に水平となる。縁側に居る踊子達には白い足裏と弓なりになつた胸しか見えなかった。胸が苦しげに波打つた。

「あーッ、あーッ、あーッ」

珠子は切なげに喘いだ。額を刺股で支えられて首は上向きに傾いてゐた。涙が、やっと正常に頬へ流れ始めた。その頬からも濡れた額からも少しずつ紅が引いて行く。全身の重味が額に掛る痛さで、



で行くことはないのですが、街にネオンの灯が輝く頃になると、ついフラフラとうちを留守にしていまいますので、待ちぼうけさせるかもしれません。

暫くの間ですがダンスの教師もしたことがありますし、相当の自信があります。お正月にもダンスを教えてほしいという若いお医者がありました。が、謙遜で教えて呉れといったら、しやるんだと思って、楽しみにホールへ行ったのですが、本当に何も知らない初心の方だったのでびっくりしてしまいました。

踊れない人とは肩がこってしまつて折角のダンスの楽しみもなくなつてしまいます。それから何度も誘いの電話を下さったのですが、お断りしてしまいました。

女だてらにお酒に強いっていったら、顔をしかめる方も多いことと思います。洋酒でもカクテルなんか好きですが、どうしたわけかアルコール分の少いというおビールには弱いのです。

もう一本も飲んだらグロッキーになつてしまいます。日本酒だったら、三合ぐらいかしら。

でも、一度お友達数人とバーへ飲みに行つて悪酔いしたことがあつて、自分では何んだかわからないんですけど、なんでも相当あばられたらしく、カウンスターの上から落ちたりして、身体中、打ち傷だらけの青いアザが一ぱいに出来たことがあります。しばらくはお風呂へも行けず困つたことがあります。

それにこりて、それから無茶飲みはしないように心掛けているのですが、電気ゴタツで足をヤケドしたり、車のドアで指をつめたり、いつも何にかしら傷がたえないのは、どうしたことでしょうか。自分の身体は自分で大事にしなければいけないと言われるのですが。

次には、私の好きなエキゾチックな港街神戸について述べたいと思います。今日のところはこれくらいにして、いずれ又、のちほど。

肉付きのよい白い咽喉はのけぞつた儘、蛇腹の様に烈しくのたうち続ける……。

「先生、逆吊りの小休止です。名案でしょうか？」

上村は得意そうに刺股を上下させた。

「うん、少し休ませてから刺股を顎から外せば、すぐ元の逆さ吊りに戻るからな」

「舞台でやったら受けますよ」

「じゃ、これもお珠のレパートリーにするか」

十五分経つと、珠子の顔色は平静に復した。その代り、見るからに柔かそうな白い顎の肉に、刺股が嵌め込まれた様に深々と喰込んでいた。足首の吊縄もくびれきつた様な痛々しい細さ。珠子は目を閉じて、わななき続けた。

「そろそろ、刺股を外しましょうか」

上村の催促に高倉が返事を与える前に座長が叫んだ。

「さあさあ、もう拷問のお稽古は、その位にして。小屋入りの時間ですよ」  
(つづく)

〔次号予告〕——四月下旬発売——

新緑躍進号

表紙オフセット色刷 定価  
口絵グラビヤ大増頁 三百円

グラビヤ・フォト……哀憫美形特集号

特写フォト満載

絵物語口絵特集……「美しき女奴隷画集」

津地谷梨・案  
滝れい子・画

乞御期待!!

増頁、新企画

以下、毎月「特集号」超弩級版の連続発行

随

ずいそう

想

松井 籟子

寒さということはマゾ的慾望につながるものがあるのだろうか。

去年、久し振に筆をとって、自分のマゾヒズムを文字にしてみようと思ったのも二月だった。そして、半年間、毎月、随想のような形で本誌にのせてもらって、暑くなったら書くことがなくなってしまった。

今、又偶然にも、何か書きたくなつて気がついてみると、去年と同じ二月なのだ。

猫の恋がちゃんと季節をわきまえているように、私のマゾ的願望も季節がきまつているのだろうか。

人一倍暑がりやで、真冬でも汗をかくことがある私だから、暑くなるのどびてしまうのかもしれない。寒さというものが、私の肉体を奥の方からゆするものかもしれない。理由はよくわからないが、二月という月は、私にとって被虐を思ふ月ということになる。

もっとも二月十四日にバレンタインデーというのがあって、「男女相愛の日」といわれるから、愛の一つの方法としての被虐が二月に関係があるのも

天の摂理にかなっている、といえるのかもしれない。

梅が咲き、うぐいすが歌い出し、人々は自然の春と同時に人生の春を感じ出すのだらう。そして私は、愛されたいと思い、いじめられてみたいと思う。何の不思議もない話なのだ。

しかし、もっと振返えて考えてみると、暑さがすぎ、秋冷がすぎて、私の被虐への興味は先ず年の暮からはじまるらしい。

年の暮の街を歩くと、ふだんより目につくのが板っぺらと縄……。

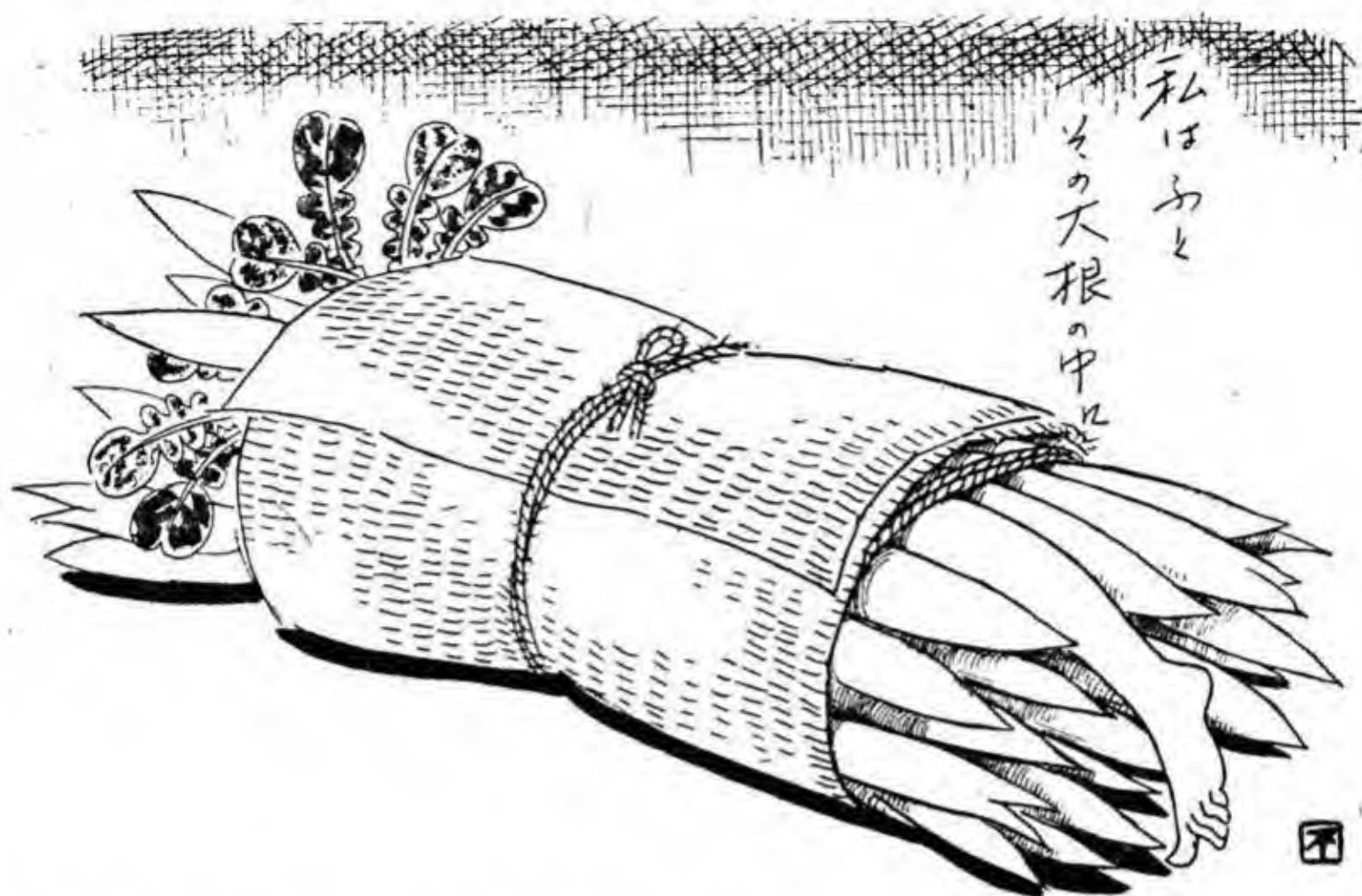
年末年始の贈答の為、小荷物がふえるせいかもしれないし、お正月のしめ飾りに葉とか縄とかが目につくようになるからかもしれない。

あのザラ／＼する縄が、蛇のように道ばたにくね／＼している姿をみると、私は体がひきしまるような気がするのだ。

野菜などを菰包みにして、荒縄をかけて放り出してあることもある。大根の白さが菰の間からはみ出して、妙に痛々しくみえる。

私はふとその大根の中に、人間の脚が混っていたらどんな感じがするだろうと考えてしまふのだ。すると人間の脚の温かさより、大





根の冷たさの方がはつきり感じられて、私は私の素肌に、冷たい大根をおしつけられて大根と一緒に縛りつけられる図を思いえがいてしまう。

大根のコリ／＼した丸みが、私のやわらかい肌を幾分へこますかもしれない。ゆるく縛ったら、スルリとぬけるから、私の腕や脚の方を、ギリ／＼と強く縛りあげなければならぬだろう。

それよりも、私のお腹を俎にして、スパッスパッと大根を輪切りにする人はいないだろうか。私は俎の上に、身動き出来ないようにくくりつけられて、その私のお腹を俎にして大根を切るのだ。私はお腹が切られるかとビクビクするだろう。そのビク／＼する気持が味ってみたいのだ。時にはかなり傷が出来てもいい。赤い血が白い大根に糸のように筋をつけるだろう。け

れど、グサツと私のお腹が切られてしまったらおしまいだ。多分、ステンレスの庖丁なら大根だけ切れて、私のお腹は切られないですむのじやないか……。

野菜の包みから、こんな想像をたくましくするのも、随分世帯じみたマゾ的慾望だと我ながらおかしくなる。

けれど、冬の野菜にはもう一つマゾ的願望につながるものがある。

漬物の重石……。

樽……。

私は人間の漬物を考える。悪魔の考えそうな漬物だ。

大きな重石でおしつぶれた人間を考えると不気味すぎて、地獄絵図のいやらしさだ。

それより自分一人が責められる図の方がいい。

漬物が上手にゆかないといって、叱られてそのお仕置に一晚中石を抱かされたら……。

着物を着ていると菜漬がよごれるから、私は裸にされて、冷たい水でゴシ／＼と洗われる。そして、白菜をつけた樽の上へ、きちんと坐らされるのだ。膝の上に石をのせられ、石ごと荒縄で桶にくくりつけられる。

白菜から上ってくる水が、私の脚を凍りつ

かせるかもしれない。

暖かそうな家の中で、笑い合う人々の声をききながら、私は暗い台所の土間の隅に、一晚中寒さにおののいていたら、凍死してしまふだろうか。

私の体の上から、すっぽりと菰をおおわれたら、凍死まではゆかず、ただ苦しく、切ないのではないだろうか。このお仕置が、もし秘密のお仕置なら、猿ぐつわをはめられて、救いも求められないようにされるだろう。

私が苦しんでいることを知らずに、笑い興じる人々の声をきいていたら、よけいにみじめで、悲しいだろう。

こうして、次から次に私の想像は発展してゆく。

昔——といっても戦後だと思うが「虹をつかむ男」とかいう洋画を見たことがある。

夢を見るように、自分を想像上の人物にして、いろ／＼な風景をあり／＼と目の前に浮かべる癖をもった男の話だった。いわゆる夢屋さんとか、夢見屋さんとか云えるだろうが、もし、私のこういう思いを映画にしたら、買物籠をぶら下げた平凡な主婦が、野菜の包みに目をとめているうちに、たちまち、拷問の場面が展開する。随分唐突な話だが、

それは決して作り話ではなく、本当に私の頭の中で起ることなのだ。

縄でくくられた大根にオーバーラップして縛られた白い脚が画面に出て来たらたいして不自然ではないのではないだろうか。

市場の前に積んである白菜の荷は、木の棧で荒く箱のように作って囲ってある。それは檻にも似ている。

檻の中に菰包みになった私が入っている。裸体に縄をかけられ、菰をかぶせられて……

いったいこういうことを考えている時、私はどんな顔をしているのだろう。

人が見たら、あの奥さん、白菜を漬けようと思っっているのだろうとしかみえないのだろうに……。

真昼の市場の賑いの中で、異常な光景を浮かべている私を誰も知らない……。もし、私の思っている図がそこへえがき出されたら、人々は私を気違いと思うだろうに……。

気も違っていない、普通の常識人である私が白菜や大根から考えることは余りにも異常なのだ。誰がそれを想像出来よう……。

もし想像出来る人があるとしても、被虐を思う女なんて、すぐく淫奔だと思っだろう。むしろ反対なのに……。

だから私はもし出来たらマゾを夢みながら清潔に生きている女を映画にとつてみたい。

その白昼夢の一場面、一場面はどぎつい悦虐に満ちていながら、花を愛し、小鳥を愛し、ただ一人の初恋の人の面影を胸に抱きしめて生きている、静かな女のくらしをえがいてみたい。

でも、それすらが、すでに夢見屋さんの夢なのだ。

○

それにしても、此の頃十九や二十の時のように、縛られた人の絵や写真をもても、体の芯がじーんとするような感じが少なくなってきた。年のせいなのかと思ったり、本誌などのおかげで、そういう絵や写真を見る機会が多くなり、刺戟に麻痺してきたのかとも思っていた。

それが、久し振に、体中がしびれるような感じを受けた僅かな時間を経験することが出来た。

東京の三越劇場で、文楽の三和会の短期公演があつて、それに「松波検校琵琶段」というものがあつた。

これは「源平布引滝」の四段目に当るものだが、歌舞伎でやるにはこの責め場が無理な



ので、人形浄瑠璃にだけ残っているらしい。

源氏の忠臣、多田蔵人行綱が、妻と娘を平家方が守っている鳥羽離宮にしのびこませて、そこに幽閉されている後白河法皇の身をそれとなく見守らせていることからこの場がはじまる。

「林間酒を暖むるに紅葉を焼く」という白居易の詩からたてた趣向で、三人上戸が酒をくみかわす所はよく出るが、問題はここあとなのだ。

行綱の娘の小桜が仕丁の一人に正体を見あらわされて、高手小手に縛られてしまう。

白い小袖に緋の袴というの小桜の姿は、白い肌着に赤い腰巻をつけているようななまめかしさがある。そして、髪は官女のように、長く下げ髪にしているので、これも責めの効果を助けるのに役立つのだ。

小桜は庭の紅葉の木にゆわえられるが、縄尻を長く引いて、木からはなして坐らせられ、背へ竹箒の柄を押しこんで、後手にした手をねじあげられる。

「アレエ、アレエ、術ないわいのう」

と、小桜は身をよじらせて悲鳴をあげる。

「苦しくば白状せい」

「イイヤ知らぬ、知りませぬ」

「知らずばこう」

と仕丁が竹箒をこじる。

早間の三味線にのって、人形の小桜が、まるで生きているように苦しみ、うごめく。

これは生きている役者がやっているのではないだけ、よけいにオーバーに苦しがつてみせることが出来るのだ。

そして、責める方も人形だから、荒々しい動作で、この折檻をやったのけられる。

本当に竹箒を背中へぐつとあてて、ぎゅうぎゅうとこじあげても、やられているのは人形だから、痛くはないだろうが、見ている方には迫ってくるものがある。

こうして仕丁が小桜を責めている最中に、小桜の父の行綱が盲人の検校に化けてこの館にやってくる。

仕丁はそれをあやしく思っているのだ、わざと検校の前で小桜を責めるのだ。小桜には肉体的な責めであり、検校にとっては、実の娘が目の前で責められる精神的苦痛になるのだ、二重の責苦というわけになる。

検校はそれとなくひとごとのようにとめるが、仕丁はわざとつづけ打に小桜を打ちつける。

小桜はたえ入りそうな声で苦しむのだ。

白い小袖の胸にまわされた細い黄色い縄が痛々しく、髪をふり乱して身をくねらす。

見ているうちに私は私の体の芯の方で、きゆうっと引き締ってくるものを感じた。

そのうち舞台では、仕丁が検校に琵琶を所望する。

小桜は木につながれたまま苦しい息をついている。

それを知りながら、父の行綱は露見することをおそれ、静かに琵琶をとり出すのだ。

仕丁はせせら笑いしながら、しばらくその琵琶を聞いているが、ややあって

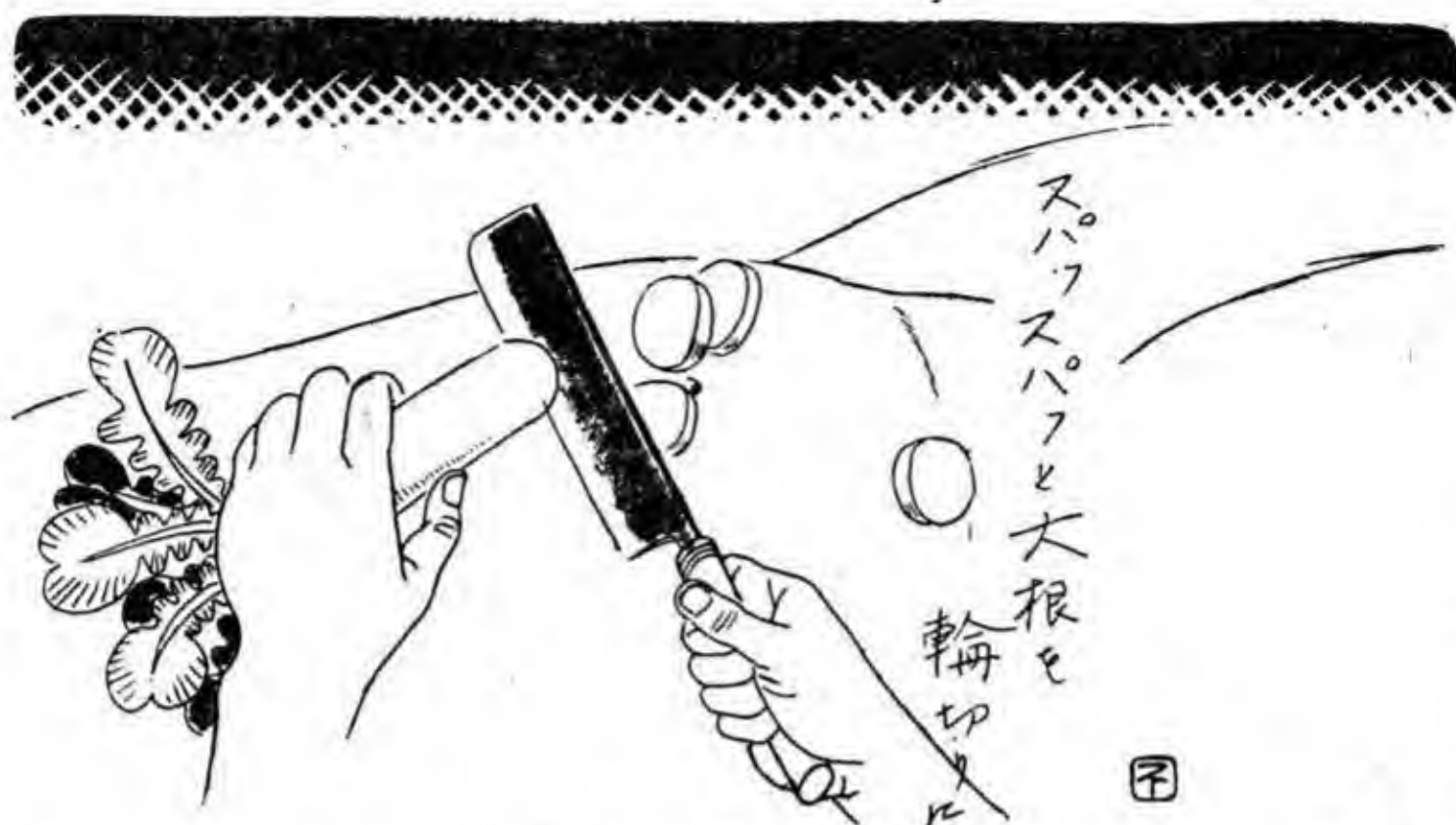
「ドレ、この間にまた一責め……」

と、小桜を縛った縄を、紅葉の木の高い枝にひっかける。そして、少しはなれた所から縄を引くと、小桜の体は宙吊りにされて、木の上へ引かれて行く。

小桜は脚をバタ／＼動かして、体をくねらせて苦しがる。緋の袴をはいているから、脚の形が人形らしい不自然さがなくて、生きているようだ。

「コリヤめろうめ、サアぬかせ。どうじや、ぬかさぬか、ぬかさぬか。ぬかさねばこうしていわす」

と、仕丁は縄をぐん／＼とかいくって、引



図

つぱると、足を泳がせながら、小桜の体は高い木の枝の所まで上ってしまう。

「術ないわいのう。術ないわいのう」

と、声をふりしぼって苦しがる。

こんな時、義太夫語りというものは、

実に切なそうな声を出すものだ。

すると仕丁はさつと縄をゆるめる。

小桜の体は音をたてて下へ落ちる。

それを又吊りあげる。

吊りあげては、落し、吊りあげては落

し、何度もく責めさいなむ。

これはとても役者では出来ない。人形

だからこそ出来るのだ。

しかし、人形遣いの技巧が巧妙で、人

間以上にその苦悶がよく表現される。そ

れに加えて三味線の音と、ふりしぼるよ

うな義太夫の声音……。

私自身、疼痛を感じるような気がした。

大体、義太夫というものには妙に悦虐

的節まわしがあるもので、昔娘義太夫が

盛にはやされたのも、銀かんざしをふる

わせて、さわりをうなると、「どうする

どうする」と声をかけたくなるような情

感が伝ったからなのだろう。

ロカビリーに夢中になる若い人達を酔

わせているような、肉体にひびく陶醉が義太夫の中にはあるのだ。

それに加えて、人間では到底みせることの出来ない責め場が目の前に展開されるなんて、人形浄瑠璃の醍醐味といえるのかもしれない。

たま／＼人数の少い三和会が、検校と、小梅と、仕丁と、三人しか出ないこの場をえらんだので、大世帯の合同公演ではあまり出ない場を見せてもらえたわけだが、拾い物をしたような感じがした。

何度もく／＼の責めに、検校がたまりかねて正体をあらわし、小桜を救って御所を逃げ出すことになるのだが、「松波検校琵琶段」というのを、もしどこかでやったら、是非みるようにおすすめする。

いやらしくなく、美しく、しかもこちらの体にひびいてくるような責め場の展開は、他に類がないと思った程だ。

大体、サジストにしてもマゾヒストにしても、自分がそういう好みがあるということは人に知られたくないと思っている人が多いから、こういう責め場が売り物になりそうな出しものは、妙な恥かしさからすすんで見に行かなかったりするが、この場合は、その責め場



だけでなしに、太棹の三味線で、琵琶の音を出すのがききものになっているから、それをききにゆくような顔をすればいい。

人形浄瑠璃はどうも若い人達には敬遠されがちだが、悦唐の心を満足させてくれるものが往々ある。

「恋娘昔八丈」の白木屋お駒でも、本縄にかかって引かれてくる鈴ヶ森の段が、歌右エ門がやるよりは、人形の方がよっぽど責めというものを感じさせてくれるのだ。

それは、人形であるだけに、写真からはなれることが、かえって思い切りお芝居が出来るということになるのだろう。

そして、お駒の人形の場合、人形遣いが縛られている不自由さを自分自身表現しながら遣うことになっている。

縛られた女の人形と、縄はかかっているが、かかっているような不自由さで遣う男の人形遣いが一つになって、変った雰囲気をかもし出すのだ。

これは歌舞伎で、現実に縄をかけられた美しい娘姿の役者が演じるよりは、違った味が生じる。

そして、人形の場合、捕手が太い棒で、お駒の背を押さえつけたり、胸をおさえつけた

りする。

力をいれても痛くない人形であることが、この時も又、観客に痛さを感じさせる逆効果になるのだ。

まして、歌舞伎では縛るといっても、うしろをむいた所を見ると、縛られた役者が、自分で縄を握っていることがあってがっかりするが、人形の場合は、ちゃんと両手をくくってしまふことが出来るから、歌舞伎より本ものになる。

人形の方が写実的だというのは、おかしいことだが、こと責めに関しては写実的なのだ。

「一谷嫩軍記」でも、歌舞伎ではあまりやらない場面があつて、百姓達がよつてたかつて役人を打ったり、たたいたり、くすぐったり、つねったり、さんく／＼なめにあわせる場がある。

生きている人間では到底出来ないことが、人形だから出来るのである。

そして私は勝手に人形を人間におきかえて想像する方が、夢がひろがるような気がするのだ。

私は女と生れながら、あまり手先が器用でないのであきらめているが、自分で人形を作

って、いろいろな責めのポーズをとらせたらどんなにたのしいだろうと思う。

江戸川乱歩の小説などには時々出てくるが等身大の蠟人形などという大がかりなものではなくてもいい。

フランス人形位のものでいいから美しい責め人形というのを作ってみたい。

誰か作ってみる女の方があつたら、いつでもチエを貸すのだけどなあ、なんて考えている。

そして私の被虐願望はだん／＼現実から遠ざかつて、夢の世界へ入っていつてしまふのである。(終)

## 限定版特別号第一弾！

## 「緊縛フォトアラベスク」

略号(あらべすく) 特価五百円(送共)

(限定版特別号は一切書店売りを致しませんから直接発行所宛お申込み願います。)

限定版特別号第一集として、最近撮影の新入モデルの各種緊縛ポーズを網羅し、文字通り表紙から裏表紙に至るまで可憐なモデル嬢の緊縛姿態にて埋めました

# 女相撲と女斗美

雪 崎 京 人



女斗美研究の土俵四股平氏の記事が暫く掲載されませんが、私達女斗美愛好者はそれを大いに待っているのです。近く同氏の研究発表と共に、出来れば写真、絵画など豊富に掲載し、私達ファンを喜ばして下さい。

私も知合いの女の子に相撲を取らせたことがあり、始めはセーターやブラウスにスラックスの姿で稽古させ、馴れた処で褌をしめさせました。とても恥かしがって、殊に褌を締める時には一騒ぎしましたが、一度褌をつけて相撲をとると、あとは自分か

ら進んで相撲を取りましようと言うことになりました。戸外でなく部屋の中に蒲団をしいて土俵にし、髪を振り乱し汗だらけになって相撲を取っている中に、しまいにはエキサイトして土俵四股平氏の文章に見る様な情景にしばしば接したことでした。

裸体美とか肉体美とか云われますが、若い女が褌をしめて、なりふりかまわず格闘しますと、常は隠れている筋肉がもりもり見えたり、勝とうとする緊張した表情がありありと現われ、文字通り生き生きとした肉体美の極致ではないかと思えます。特殊の愛好家もかなり多く、何等かの形で見たいものと思えます。専門の女相撲はランニングシャツやパンツをつけて殺風景極まるもので女性美など縁の遠いもの。長崎や佐賀県の一部で行われる女相撲もメリヤスシャツ、股引をつけたオバさんの取組で醜悪です。そこへ行くと日本書紀に記載された女相撲、恐らく文献にある日本最古の女相撲かと思われませんが、何と美しく素晴らしかったかと想像します。

二十一代、雄略天皇の十三年（西紀四六九年）の秋、九月、木工猪名部真根、石を台にして斧をとって木をけずる。終日けずれども誤って刃をいためることがない。天皇、其の



処にいでまして、その技術の巧みなのに感心され『誤って石に斧をあてるということはないか』と問われた。真根は得意になって『いまだかつて斧で石を打ったということは御座いません』と答えた。そこで天皇は采女を呼び集め着衣を脱がせ袴鼻（たばな）を着けさせ真根の見える処で相撲を取らせた。うで自慢の石工真根はそれに氣をとられ、美女の相撲をチラ見ながらけずったが、あまりの美しさエロッぽさに思わず手許が狂い、斧を石に打ちつけ刃をこぼしてしまった。天皇は大いにその自慢したことを怒り極刑にし様としたが、真根の友人等の減刑願いで、これを許されたということが出ています。

采女は宮中に仕える女官達で、その時代は天平より遙か以前とて、姿体ものびのびと美人揃いであったことと思います。その美人達が禪一本で相撲をとったなら、真根たらずとも男であつたら、ふらふらとなることでしょう。采女に相撲をとらせたのは恐らくこの時が始めてではなく屢



々この催しをして悦に入っていたことと想像出来ます。現代の様にストリップとかヌードとかなかった時代は、女の裸を公然と見るのは相撲でもとらせるより外なかったでしょう。

う。近松の『関八州繫馬』にもエロチックな女相撲の、これは相撲するだけの場面があります。次の機会に御紹介しましょう。

現在では今東光氏が三十數年前『大調和』という雑誌に発表した。『女相撲』というのがあり、村松梢風氏が昭和十二年頃、発表した『仇討女相撲』という雷物があります。

これなど万里昌代にでも女主人公になって貰い、美女の裸相撲の場面をふんだんに取り入れて映画にしたら面白いものとなると思います。

同封の絵二葉知合いの女達に相撲をとらせた折、友人の画家に画いて貰った絵です。私はこの場合、アンコ型の女よりも普通の体格で少し大柄の女性の方が美しさを遙かに感じました。土俵四股平氏によりしく御願ひして下さい。

(御添付の絵は淡彩画につき、当方にて製版用に模写しました。―編集部―)

## サド特集号第四集の

## 特写フォトについて

近藤

一

サド第四号を拝見しました。グラヴィア・フォト「湧き上るムード特選集」について考えたことを記してみます。

KKのフォトに活躍するモデルとして不可欠な絹川、大塚、愛川の三嬢が今回も顔を揃え、新鋭の館典子嬢も冒頭から艶姿を誇っています。

質量ともにトップを占めるのは、やはり絹川嬢ではないでしょうか。私が惹かれたのは「壁飾」「浮世絵草紙」「蠱惑のポーズ」の三態でした。「壁飾」では伸びやかな肢体と、それでいてムッチリと肉づいた柔らかな女体の線が、モダンなバックに調和した晒者になり、殊に喉を締めつけて

俯向くことを許さぬ縄の絡み方は心憎い程です。

ちよっぴり嬌慢で妖しい美しさを持つ彼女にふさわしいエレガントな角がある以上、やはりお客様を飲ばせるための鳴声が欲しいと思いますね。上の二葉と下の右一葉は、特に佳作でした。「浮世絵草紙」はこれが絹川嬢かと見まがう位の美貌で、東映から日活へ行った東谷映子に似ています。髪を撫まれ無理矢理、足首を持って股を開かせられる彼女の表情は抱きしめたい程です。首から肩、背面の美しさも女体の哀しさを余す処なく見せてくれます。胸乳から腹部のたるみの柔らかみが、訴えるよ

うな瞳の美しさと奇妙な調和を保っているではありませんか。「蠱惑のポーズ」に至って本来の絹川嬢が戻って来た感じがします。髪の形やアクセサリーだけで女体のムードが、こうも変わるものでしょうか。いかにも縛られた女の輝きがあります。無慈悲な縛しめに遇って初めて活気が湧き出る女体というものを感じさせてくれるのです。

「花模様の跪き」は「曲線と麗姿」と同じコスチュームですが、ドレスの割に品のないポーズが続き、立姿など無神経そのものです。「冷酷なる鎖」と「囚女の舞」は同様な欠点があります。髪型といい、表情の低劣さといふ、とても縛られた女体の情感が無く、俗悪な作品です。女装の男性の中にも、もっと女らしい人がいそうに思います。「溪流に哭くおんな」は平凡。

大塚啓子嬢の三態、「くろくも」「水垢離強制」「わななく黒髪」は充実した作品です。虫責め、水責め、後手吊責めというヴァリエーションも楽しいものです。彼女の特徴は、これまでのKK誌上にあらわれたモデル中、随一の豊かな長髪と強い弾力を誇るヴォリュームにあって、拷問のポ



ズが最も安定する女体なのです。彼女自身キツイことなら出来るだけ我慢して素敵な作品を生んでみたいと云う敬服すべきモデル根性の持主らしいから、最近はある安心して愉しめるようになりましたね。「泥まみれの青春」で石抱きや叩き、「架責」で梯子責めにされ、明るいムードの傑作を次々に産み出している彼女には、今後の活躍を期待して更に声援を送りたいと思います。「くろくも」の縄は背景にマッチした色彩のもので、首、乳の上下、ウエストのくびれ、四力所をギュウと絞り、それらを繋いで走る縦の縄も容赦なく、捻じ上げた二の腕にも喰込んで見事なくびれを造っています。彼女の肉体は決して縄目に負けず、喰入る縄によってかえって盛り上がり強調され、殊に腹部はどんなに強く締めつけても、それは彼女の逞しいヒップの張りを誇示する助けをするだけなのです。その見事さは憎々しい程で、荒縄で縛ってやりたい稀少なモデルなのです。「水垢離強制」と「わななく黒髪」はその期待に応えてくれた荒縄縛りの作品でした。どちらも腰のもの一枚の裸身に、厳しい縛しめと容赦ない責めな

ので、雪や氷のシーズンに観るのはドキリとさせられる作品です。冷たい石段の傍に引据えられ手桶の水を頭から浴びせられたのでは、まとった布はより一層肌にまつわりつき、水を吸った縄は肌を噛んだことでしょうか。挙句の果に黒髪の上から上体を踏み蹴られながら逃れる術も無い彼女は、どのような気持ちでいたでしょうか。膝の上を固く括り合わせていたのも彼女の美を増していったと思います。「わななく黒髪」の吊りの良さ、ポーズと云い、申し分の無い出来で、最近のグラヴィアでとみに柔らかなみを増した彼女の裸身が、文字通り爪先立ちという誠実さは敬服のほかありません。

愛川嬢の「葉風におびえて」の十二葉も面白い作品でした。雨晒しという感じでしたが、殊に終りの四葉は雨中の悶えというべきムードで楽しめます。唯、彼女は飽くまでも肉体美で、髪の手入は粗末過ぎ、絹川嬢の美も大塚嬢の愛嬌もありませんから呼吸も許さぬ狼轡が不可欠なのです。先頃の辻村氏の記事の中で愛川嬢がKKのモデル陣から離れたような箇処がありました。が、もしまたカメラの前に立つ機会があれば、

ば、今後は遠慮なく厳しい拷問にかけてみて下さい。精神病院における監護や患者同志の遊戯、女囚刑務所での懲戒、夜の女のリンチ、部落民をめぐる迫害と復讐、被圧迫者による報復など、彼女のムードに適したテーマになると思います。

館典子嬢の和装が三態、「フィアンセーの困惑」と、着物を替えての「強靱なるロープ」それに長襦袢姿の「床飾」は落着いた清潔感が溢れて好感が持てますが狼轡に工夫が欲しく、ポーズが佳いだけに瞳が活きないのは惜しいと思います。

その点、田代悠子嬢の「敷居上での苦斗」は眼だけの演技で、着なれないらしく和服の野暮ったいことはお愛嬌でした。

総じて云えることは、館嬢の清潔な艶姿だけではKKのグラヴィアページを圧し切れず、現在の処では絹川嬢の奔放な美態と大塚嬢の逞しい女体が厳しい苛責に遇って発散するドキリとさせるお色気を支柱にしていると云えるでしょう。トップ・グループに対する奇抜なアイディアとニューモデルの奮起を切望します。



# ガラスとゴムの思い出

— (私の詩と真実) —

原 由 貴 子

のまま、お部屋の隅へ置きました。

「たたむのをお手伝いするわ」

「あ、いいの。いいのよ」

由貴子は何故か、あわててどきまぎした様

子を示しましたが間に合いません。お友達の

一人が手を出して、白いシャツや下着の間に

あった、そのピンクや黄色のナイロンや青い

花模様のある布類を、すっかり拉げてしまっ

たではありませんか。

「あ、これ、なあに？アア、誰なの？」

言い直して、不思議そうに由貴子の顔を見

やると、彼女はもう耳まで赤くなってお布団

に顔を伏せています。お布団の裾を直してい

た看護婦さんが、一寸困った様な複雑な微笑を浮かべて、とうとう説明を始めました。

「まあ、そうなの」

お友達は、顔を見あわせるとクス／＼笑い

出しましたが、すぐ、

「でも、早くよくなってね。何だったら、私

達も、家庭科の実習のつもりで、お世話した

けてもいいわ」

「そうよ。お洗濯だって……」

やはり親友同志で、額に同情を浮かべ、由

貴子を慰めました。

「あら、案外、元気そうね。ユツコ、具合は  
いかが？」

女子高校の、仲の良いお友達二、三人が、  
お花や果物を持ってお見舞に来ています。

「ええ、ありがと。ちよっと痩せちゃったで  
しょ」

可愛い二重瞼が、ニッコリ微笑を返しま  
す。窓の外に眼をやりますと、乾いたお洗濯  
物を看護婦さんが取り入れております。しば  
らく話はずんでいるところへ、両手にお洗  
濯物をかかえて看護婦さんが入って来て、そ



## 二

「ね、少しも痛くないから、我慢するのよ。」

「ええ、ママ、ずっとついてて頂戴ね」

十七才になったばかりの由貴子は、胸を大きくはすませてうなずきました。年の割に大柄なので、ブラジャーの紐などいつも少しきつすぎる位に感じるので。

「女医さんで、外科の方をなさる方って珍らしいんですってね」

ママの言葉に、看護婦さんが何か答えたようです。

やがて、用意もできたらしく、白い手術着の女の先生と一緒に看護婦さんが、カチャ／＼する金属と共に、何か手に持って由貴子のベッドへ近づきました。そっと薄眼をあけて見ると、ガラス筒の製品がにぶく光って見えます。

(あッ、アレ、だわ)

浣腸！　そうです。浣腸なのです。話には聞いていましたが、本当にされるのは始めてなのです。

(嫌やッ。嫌や。羞しいわ……)

由貴子は固く眼を閉じ、無言の抗議を精一杯あらわしましたが何の甲斐ありません。

ベッドには、ひんやりするビニールが敷かれすぐ便器や、ママの作ったオシメも用意されました。

「さ、じっとして……」

脱脂綿と一緒に看護婦さんの腕が、いそがしそうにクル／＼動きます。そして、

「はい。お腹の力を抜いて、楽にするのよ……」

(うっ……)

生れて始めて経験するいやな療法を、必死の想いで耐える可憐な由貴子。それをじっと見つめる真剣な眼、眼、眼……

やがて手を離し、ほっと吐息をつくとき、看護婦さんは由貴子の額の汗をハンカチでぬぐいました。あまりの緊張にたえられなかったのか、麻酔のせい、由貴子はそのまま気が遠くなり、後は何もわからなくなっていました。

(ねえ、先生……)

(そう、特に弱い体質なので、注射ばかりだと、心臓の負担が……)

(じゃ、やっぱり栄養も、当分はこの方法しかごさいませんのね……)

(そうですね。少しづつ注入してあげる他には……。でもあまり続けるといけませんから

よく注意して……)

## 三

今年、高校三年になった、可愛いらしい女学生、由貴子は、春休みの一日をお友達数人と新宿のスケートリンクへ遊びに行ったのですが、帰宅途中で急に腹痛が痛くなりました。家に帰ってすぐ近くのお医者様に診ていただく、単純な消化不良や腸カタル等ではなく、痛み方や熱の具合からも、どうも盲腸の疑いがあるから、すぐ手術した方がよいという事です。学校もお休みの時だし、早速入院の手術をすますと、幸い病室の都合もよく、又、若い女の子のことで、特別にお願いして女医の先生に担当していただいたのでした。

## 四

芝生の上には、うららかな朝の日ざしがふりそそぎ、小鳥の声と共に春風がそよいでいます。手術後の経過も順調で退院も間近になり、ママが家に戻った後は、代りに、看護婦さんが由貴子の身のまわりの世話をすることになりました。手術後、彼女が眠っているあいだに、ママと先生が何やらひそ／＼話していた事や、その内容など、後になって看

護婦さんから聞かされる迄全然知らず、もちろん始めはなか／＼納得しませんでした、先生や看護婦さんの説得で、いや／＼承知したのです。でも、あんな事、毎日続けなければならぬなんて、やっぱり――。

「由貴子さん、ラジオをかけましょうか」  
ダイヤルをまわすと音楽と共に、林房雄作の『朝の口笛』が流れてきました。(昭和三十三年頃)

しばらく、新婚の御夫婦の明朗な会話が続きます。

「ね、貴方、小学校の二年の頃までオシメあててたって、本当？」

「ジョ、冗談じゃない。とんでもないデマだよ。そんな……」

(あらっ)

由貴子は、あの時を思い出して思わず頬を染めました。

「あ、そうだったわ」

一緒に聞いていた看護婦さんは、何を思い付いたのか、一人で忍び笑いをもらすと、由貴子の耳もとへ口を寄せ、何やらささやきました。彼女はみるみる真赫になると、お布団に顔をうずめたまま声も出ません。

「ね、由貴子チャン、貴女もずっとオシメ、

あてない事？」

「……」

「お腹に力がかからないし、その方がいいって、先生もいってらっしゃるのよ」

「……」

「ね、そうさないな。お食事の時も便利だし毎日取り替えて、お洗濯してあげるから。いいでしょ」

ラジオは、赤チャンの消化不良の場合とか、若いお母様方の心得として、等と、家庭衛生の番組に代っています。

「おや、もうそろ／＼お時間ね。クリーム・ミックスはどう？それとも今日はジュースがいいかしら。……やっぱりミルクにしましょうか」

いつも用意の器具が一つ足りない様です。

「あら、今日は便器は？」

「ええ。今日はフラスコへ取るのよ。栄養吸収の具合を計るんですって」

やがて電熱器で手早くミルクが温められると、看護婦さんはいつもの様になれた手つきで、それを大きな浣腸器にタップリ含ませ、

ビニールをひろげながら言いました。

「さ、お食事ですよ」

数分後

「ちよっと、そのまま待ってらっしゃいね」

看護婦さんは急ぎ足で部屋を出て行くと、やがて「医療ニュース」「器具と薬品」という綴じ込みを持って来ました。きつと、どこかの製薬会社のPR誌なのでしょう。

「さ、どれになさる？どれがいいかしら」

由貴子の眼の前に開かれた頁には――まあ？こんな！――

『ズレず、ムレないナースのおしめカヴァー。美しいペンベルグトリコットと、お肌にピッタリ心地よい上質薄ゴム製で、赤チャン用、病人用、夜尿症用にはナース特製おしめカヴァーを。又寄宿舎生活、修学旅行用等、お嬢様向きにはアップリケと可愛いレース付の、女学生用、赤チャン式の前開き型ズロース型と、大型おしめカヴァー各種サイズ取り揃えてございます』

『ナイロントリコットの、やわらかな肌ざわり。良質薄ゴム使用の、可愛いレース付ビュートーおしめカヴァー。ビュートーは貴女の美容と衛生の為に、ピッタリの特製品を発売いたしてをります。特に、御病氣や夜尿症の若いお嬢様は、コルセット、生理パン



ド兼用の、ビューティー特製女学生用おしめカヴァーを是非御愛用下さい。ビューティーのおしめカヴァーでベビーからレディーまで生理時にも、お嬢様方の浣腸用にも最適で、安心して御使用いただけるおしめカヴァーです」

広告には、赤チャン用のさまざまのおしめと一緒に、スカートだけ脱いだセーラー服の女学生が、大型サイズのおしめカヴァーを使用している写真までのっています。

「ね。これがいいわ。ええっと、夜尿症にも又浣腸後にも、ズロースや下着を濡らしません。柔らかなナイロンとゴムの肌ざわり、ですって」

由貴子はお布団の中から激しく頭を横に振りしました。

## 五

次の朝、扉が音もなく開くと、看護婦さんは、何やら包みを持って入って来ました。

「フフ。よく眠っているワ」

目をあやしくかがやかせ、足音をしのばせてベッドに近ずいた。そしてそこへ手早くひろげたのは、——ああ、ピンクのナイロンに薄いゴム張りの、可愛いアップリケをほど

こした、あの、女学生用おしめカヴァーなのです。その、レース付のおしめカヴァーの薄ゴムを縫い込んだ内側に、アメリカ製の衛生材料と一緒に用意のオシメを数枚重ねてありました。

「あらッ」

眠っていた由貴子は、はっと眼をさまし、思わず叫びをあげました。

「おや、とうとうお眼覚めね、ちゃんと用意しといたんだから、騒いでも駄目よ。……」

いつの間に取り出したのか、看護婦さんは太い紐ですばやく由貴子の上体をお布団の上から、ぐるぐる括り上げると、そのままベッドにしっかりと固定してしまいました。

「言うことかかないと、解かないわよ。泣き声あげても駄目。さ、おとなしくなさいナ」

もうこうなっては仕方ありません。それこそ真赫になった由貴子は、高鳴る胸を押え息をはずませて、すっかり看護婦さんのなすがままにまかせました。

「すぐ終わりますからね。ハイ、そうそう……」

……オムツ！十七にもなって、赤チャンみたいにオシメやおしめカヴァーあてられるなんて……。しかし、意志の自由はうばわれています。看護婦さんはおしめカヴァーの前ホ

ックをピッタリかけ終ると、腰の紐を結んでから指でゴムの強さを確かめてホッと息をつきました。

「とうとうあてちゃったわね。ああ、さっき手首や足、少し痛かったかしら。ごめんなさいね。でも、すなおに言う事聞かなかったからよ。おしめカヴァーはお母様も最初から御賛成だったのよ。このオシメなど、お家から何十組も用意して届けてらしたのよ」

由貴子は、幾重にもあてがわれたやわらかなオシメと、締めつけるようなカヴァーの圧迫感を改めて感じ、もう胸は一ぱいで、半分泣き顔になっています。恥かしいやら、情ないやら、口惜しくって、涙が、美しい頬にボロリとこぼれました。

「おやおや、そんな情ない顔をして。ね、大きな赤チャン、イイ子チャンね。オムツの具合、どうかしら？。あ、そうそう、ついでお浣腸しましょうね。……あら、そのままじっとしてなくっちゃ駄目よ。嫌やがると、今度は一番太い浣腸しちゃうワよ。さ、じっと我慢して……ハイ、スグ終りよ」

白魚の様な指が、手早く巧みに浣腸器を操作します。

「オホホ、赤チャンみたい。でも、おしめカ

ヴァーって、便利ね。一番可愛いくって、気持のよさそうなゴム質のを選んで、これにしたのよ。これからもしよっちゅう取り替えてあげましようね。……そう、一日に何回位がいいかしら。あ、それから、栄養流腸の方もしばらく続けた方がいいからそうする様について、先生がおっしゃってたわ。だから、由貴子ちゃん、ますますオシメの要る赤ちゃん

ね」

——不必要なまでの流腸をされ、その上、大きなオシメやピンクのおしめカヴァーを無理矢理にあてがわれて白いシーツの上に身もたえする美少女……。由貴子はどうとう退院の日まで毎日、こうして日に数度ずつ、ガラスとゴムの洗礼を受ける様になりました。でもすっかり習慣になると、最近ではもうそれが

待ち遠しい位なのです。

彼女の病室の窓の外に、色とりどりのおしめカヴァー、数十枚のオシメがいつもひるがえっているのはこういった次第なのです。お見舞に来るお友達の中にも、どういうつもりか彼女の流腸器をコッソリいじって見たり、おしめカヴァーをソツとあてがうしぐさをする人もいました。

ないでしょうか。

編んだお下げ髪、色白の睫毛の長いセーラー服の女学生が太い縄でぎりと縛り上げられ、床へひきすえられ、ひだの多いスカートの花びらのようにひろげて、きちんと坐り、苦しげに前かがみにうつむき、責め手の冷たい言葉におののく姿……。

じつとうなだれて、長い睫毛を伏せ、或はパッチリした目に涙を一杯ためて、恨めしうに見上げ、或は固い猿轡がバラ色の頬に痛々しく喰い入り、哀願するようにふり仰ぎ、迫りくる責め手の姿に、恐怖の目をみはる。

責め手は冷然と容赦なく服をはぎ、可憐なシユミーズ姿を又もぎりぎり縛り上げ、肩ヒモをはずし、白桃のようにプリプリした乳房をいたぶり、苛める。少女の雪のような柔肌には、悲鳴と共に真赤な鞭目がふえてゆく……

## 美少女と責め写真

古 屋 敏 夫



責められる女の哀れさ、美しさ、可愛らしさというものは、矢張り可憐な成熟しきらない

い美少女を無残に縛り上げ、清純なほっそりした姿を責め苛むのが、最も適切なのでは



……といった写真はどうぞでしょう。

髪は、やはり少女らしく編んだお下げ髪、又は、おカッパ。服は紺、又は夏のセーラー服。胸元の胸あてはない方がよいでしょう。

白の開襟運動シャツに短いスカート、又はパンティ。セーラーは冬服より夏の白いセーラー服、殊に半袖の方が軽快で可憐味があります。靴下はいた方がよい。猿ぐつわもあった方がよい。

やや太い目の麻縄で四重か五重の後手高手小手、首縄はない方が襟元のほっそりした白さが損われないのでよいでしょう。ワンピースやブラウス、運動シャツ姿ならば、少し胸元をほだけ、白い胸の肌の上を縄がじかにしめつけるようにした方がよいと思います。

エレガントな可憐な少女なので、あまり行儀のわるい姿はいけません。正座か横すわり位、又は、くの字にころがされているようなのがよく、足をなげだしたり、ひらいたりするのはよくありません。

少女の羞恥をあらわして、両脚はきちんと揃えてほしいものです。

パンティや短いスカート姿なら、白い太腿もスラリとした足も縛り、又猿轡は日本式の

がよいと思います。口をわってかましたのは痛々しいが、どうも美しくありません。椅子へ縛りつけても両脚はひらかず、そろえて縛ってほしいですね。実際の拷問では両脚をひらかせた方が、精神的にも肉体的にも苦痛でしょうが、やはり私は美しい可憐な責められ姿を見たいのです。

憎くて拷問するのとわけが違い、可愛いくて仕様がなから(？)いじめるのですから。又、胸や背の縄目の間に木刀か青竹をこじ入れたり、お下げ髪をつかんで涙にぬれた可愛い顔を仰むかせたり、ふっくりした乳房をつかんだり(以前の「手袋」の写真の如く)荒縄や板切れ、小石などのちらばる地下室か物置のような床へ、じかに坐らされ、ころがされ、身をよじらせて苦しげにうなだれ、或は見上げているといったポーズの写真がほしいと思います。

次に写真に使用される縄についてですが、やはり縄は中細か、やや太い目のロープがいいですね。ヒモは見た目には綺麗でしょうが白黒の写真にすると、どうも緊縛感がよくあらわれなかったり、たよりなく感じられ勝ちです。柔肌に情容赦なく喰い込むロープの方

が勝っています。又、猿ぐつわは出来るだけした方がよいですね。口が見ええると可憐さも美しさも大分減る人がありますから。

場所も座敷や立派な床の間というのだけより、時にはザラザラしたコンクリートの上や土の上、板切れ、縄切れ、棒切れなどの散乱した場所も選んで下さい。時には竹や棒を縄目に差し込む位にして、責場の雰囲気も出してほしいと思います。

裸もよろしいが、美しいワンピース姿や、ブラウス、スカート姿。清潔で優美な下着をつけた姿も縛って下さい。長靴下をはいた女の足は美しいものです。但し、着衣の際、厚着はいけません。長袖よりも半袖ぐらいの服が適当だと思います。和服はどうも肝腎の体の線がよく見えないので従って緊縛感にも乏しいうらみがあります。浴衣姿か長襦袢ぐらいがよいのではないのでしょうか。と、いっても帯か伊達巻ぐらいはしていた方が、きちんとしてよいですね。ヒモなしの和服姿は何となくしまりがなく、美しさに欠けるのじやないかと考えます。

(おわり)

# 宇宙のどこかで

(一)

手記「無実の罪に哭く男」より

佐 治 麻 造

## 作 者 序

或る晴れた初夏の一日、私は六甲山系の一角に孤独なハイキングを楽しんだ。其の際、山かげから突如上昇した異様な物体が、いわゆる『空飛ぶ円盤』であることを認め、離陸点へ急行した結果、若干の遺留品を入手した。

その大部分は、それと関係の向きへ提出したが、その際一冊の小冊子を手許に残した。それは、容易に判読出来る『日本語』で印刷されており、最初は『空飛ぶ円盤』が我が国のどこかで手に入れたものかと思つたが、活字の書体、寸法等より、又紙質及び内容よ

りして地球以外の世界のものであると考えるに至つた。そして其の内容が当誌の愛読者の一部の方に興味あるかと存じる次第であるので、以下『標準日本語』に書き替え、興味ある部分を抜萃御紹介しようと思う。

内容は無実の罪に問われた、或る哀れな男の世に訴える手記である。

思うに、物質の組合せには限度があり、又生物の発生にも順列の制限がある以上、此の無窮の大宇宙のどこかでは、現在の我々人類と殆ど同じ様な『生物』が住んでいて、殆んど同じ様な生活をしている、若くはしていた、としても不思議はない。『手記』の中で



『私』とあるは、いうまでもなく、前述の『哀れな男』である。

手記より判断するに、此の『男』が住んでいる、又は住んで居たと思われる惑星は、甚だしく地球に酷似した天体であり、その上に住む『生物』も我々地球人類と殆ど全く同じ様な身体構造、能力、生活様式を有し、且つ文明の程度も殆ど差は無い様に思われる。ただ、気温は、かなり高く、此の『男』が住んで居た国土に於いても一年中裸で戸外に居られる様であり、そうかといって最高気温もそんなに高くない様であって、つまり四季の変化はあるが気温の差は一〇乃至一五度程度と推察できる。又、科学技術の点では全分野に亘って、地球と殆ど同じ程度に発達している様であるが、ただ化学や医学の点では著しく進歩して居り、疾病も殆ど無い様で平均寿命は百才をかなり越えるものと思われる。社会学的な比較に於ては女権が相当地に大きく評価されていて男権を完全に侵す迄には至らないが、あらゆる職場に婦人の進出が見られる。そうかといって、いわゆる水商売、男に媚を売る婦人の職業も存在して居る様である。

地球の文明国と最も異なると思われる点は、彼等「惑星人」の、犯罪に対する考え方であり、刑罰に於ける思想である。彼等の刑法は全く応報主義、償罪主義を以て貫いて居り、我々社会に於いて見られる様な善導主義的な考え方は一かけらもない。そして、法律の名に於いて奴隷を認めているのである。罪人、囚人、奴隷に対する世間の眼、否、肉親の目さえも冷酷非情であるが、刑を終えた者は再び温く社会へ受け入れてやる、という甚だ割り切った考え方らしい。

裁判官は絶大な力を有し、裁判方式も我々地球社会とはかなり異なり、刑事被告人は弁護人なしで裁かれるものらしく、つまり昔の日本に於ける『お白洲』的なものに合理性を加味したものの様に思わ

れる。

この様な刑事裁判は、ややもすると一方的になり、誤審も生じ易く、『惑星』社会でもこの点、問題となって居るらしく、此の手記もその様な世間の声に訴える意図を有しているらしい。

では、その『手記』の抜萃を御紹介する。

地球にない物質等の名称は、その性質を推察して適当な名を付けるが、止むを得ない場合は原文のまま転記させて頂く。

## 手記「無実の罪に哭く男」

### 私のひととなり

私は本当に哀れな男でございます。

人生の最も楽しい時期を、鉄鎖と戒具と、そして鞭と懲罰とに明け暮れ、漸くのこととて苦痛と屈辱より解放され、人格を返して頂いた老年を、同じ様な妻と二人で細々と露命をつないで居る可哀想な男でございます。

この哀れな男を、無慈悲な法律は再び鉄鎖につなぐとして居るのです。と申しますのは、私が無実を主張して再審理と補償とをしつこく行刑当局に要求するからです。そうなのでございます。私は絶対に無実でございます。罪を犯した覚えもないのに青年より初老迄数十年の歳月を、苦しみ悶え、のたうち廻って過した口惜しさは筆舌につくせません。私の鼻には鼻環の孔があいて居ります。首、腰、手首、足首には、思い出すもおぞましい戒具の跡が消えることなく、又身体中に鞭のあとが残って居ります。

これらは整形手術で簡単に除けることは存じて居りますし、その

費用は、政府指定の医院では無料であることも知って居ります。しかし、これらの刑罰の跡は、私に取りましては、偏屈といわれましようとも、又馬鹿と申されましようとも、意地に残しておき度いものでございます。そして、私の無実が確定しました時、人々の眼の前に行刑当局の無能と苛酷さをつきつけてやる生きた証拠にし度いのです。しかし、この私の願ひも、泡と消えそうです。面子を重んじる当局は、しつこく食い下る私を法律侮辱罪で逆に告発したのでございます。私を理解してくれる少数の人々の手によって此の手記が刊行（若し刊行できれば、の話でございますが）される時には、私は既に冷い鉄鎖に繋がれ独房の壁に向って正座して居ることでございます。或いは又重い足鎖をひきずり乍ら鞭に追われているかもしれません。何れにしても、今ペンを持っているこの両手に冷い手錠が鳴るのはもう直ぐのことでございます。当局は私が訴えを取り下げれば告発逮捕しないとのめかして居ります。併し乍ら私は飽く迄戦います。自殺も逃亡も致しません。死ぬ迄無実を叫んで、決して妥協しない所存でございます。

.....

私は余り大きくはありませんが、一応筋の通った工場主を父として生れ、先ず不自由なく成育し、大学卒業と共に父の工場に勤務致しました。或る程度金銭が自由になりますので、放任主義の父をよいことにして相当遊び回り、或るキャバレーの女給をアパートに囲い、遂には多額の金を誤魔化してバーを経営させるに至ったのでございます。考えれば二十歳台の若僧の分際で大それたことをやったもので、此の点に対しては二年や三年位の懲役は当然でございます。しかし人間の運命の皮肉さは、此の女が後であの様な形で私に

相對するとは、夢想だに及びませんでした。

一人息子の行状を案じた両親は、同業者の娘をすすめる人があったのを幸いに、結婚をすすめたので、私も例の女のしつこい情に些かへきえきして居た際でもあり、女にはバーを与えて別れ、その娘さんと結婚したわけでございます。

女は割と素直に別れてくれましたが、別れ際に「何時かあなたを見返してやる」と一言申しました。その時は何気なく聞き過した言葉でしたが、後になって、あの様にたつぷりと見返されるとは神ならぬ身の夢にも思わなかったことでした。

さて私の結婚生活は初めは順調に過ぎ、案じて居た例の女の邪魔も入らず、円満に行つて居ました。父母は結婚後二年程の間に相次いで亡くなり私が法人に改組した工場の社長となりましたが、又々ふと見初めたバーの女と深間になり、アパートに囲う次第となりました。会社の経営も私の若いせいと、行状のため次第に左前となりました。初め、その上、私の浮気に氣付いた妻は、さつさと実家へ帰り、そして家庭裁判所へ離婚並に慰養料請求の訴えを起しました。私が素直に謝ればよかったのですが、経営がうまく行かないやら何やらで逆に反訴して争つたわけです。細いいきさつは省きますが、結局は別れた妻にも深い／＼恨みを感じさせたわけでございます。

会社を整理した私は、バーの女と結婚して、アパートに同棲し、或る商事会社の社員として再出発しました。今迄の私の仕業に大いに反省を感じて居りましたので、本当に一生懸命に働き一年程の間に相当な地位に昇進しました。特に社長に氣に入られ、経理関係のポストで責任ある仕事をさせられ、社長の私宅へも時々出入りし適令期の御嬢様初め御家族の方とも親しくなりました次第でございます。



## 逮捕

そういう風なわけで、ただ子供の未だないのが淋しい外は人生の意気に燃え、社長の知遇に応えんものと、毎日張切って働いて居りました。折も折、忘れも致しません。私が二十九才の春の或る朝のことです。丁度月曜日でございました。先週中、社長が私に対して何か疑惑の眼と、齒に物の挟まったいい方をなさるので、今日は一



です」と答えるや否や、一人は拳銃をつきつけ、一人は一枚の紙片を差出しました。

「逮捕状」という文字が眼に焼きついた途端、右手首には手錠が喰い入り、更に続いて左手首にも冷い感触が走りました。今から考えますと、どうしてもあの様なことができたのかと思いますが、拳銃のことは、すっかり忘れて居たのでしょうか、矢庭に左手を振り払うとドアの外へ飛び出しました。しかし、すでに右手には手錠が嵌って居るのです。手錠を持った方の婦人刑事は引張られて、よろ／＼

つ直接ぶつかって見ようか等  
と思ひ乍ら朝食の卓に向いま  
した。妻は土曜の夜、私が悪  
友と別れた後も一人ではしご  
して明け方帰ったことを未だ  
根にもっているのか、何だか  
きげん悪くふくれ面して居ま  
した。

私は二、三憎まれ口を叩い  
た後、着更えして靴をはき、  
立上った途端、ドアがノック  
もなしに開きました。「施錠  
してあるのにおかしいな」と  
思った途端、ドアの外に管理  
人の姿が見え同時に二人の若  
い婦人が入って来ました。名  
前をいわれるままに、「そう

し乍ら、さすがにはなしません。その時は手錠の構造もよく知らなかったのですが、右手首の鋼鉄の環が骨も砕けるばかりにきつく緊り、思わず立止ってしまいました。

よろけた婦人刑事はひざをすりむき額を柱に打ちつけて血を流して居ました。一時の逆上から少しさめた私は、血相かえたもう一人の婦人刑事によって難なく両手錠を嵌められ、更に捕縄で腰に固定されてしまいました。私がこの様に逃げようとしたり抵抗したり、その結果警官に負傷させたりしたのは、大変まずかったわけです。怪我をした婦人刑事は手早く応急の処置と身繕いをすまずと、冷い笑を浮べて私を見据えています。

「何故ですか？ こんな風にされるのは」

「おや、さっき見せたじゃないの、ほら」再び突きつけられた逮捕状には、横領罪、強盗罪、暴行罪、そして傷害致死罪という忌わしい罪名が並んで居りました。

「うそだ、こんなことはした覚えはない」

「ふふん、まあ何だね、出る所へ出てから申開きをするんだね。おとなしくしないと後悔するよ。ところで、さっきの御返しをしておこうかね」

両頬に往復ビンタです。色白の二十五、六才の婦人ですが、仲々どうして、そのビンタの痛さ、思わず顔をそむけますと、もう一人の婦人刑事が頭髮を掴んでおいて、今度はそこにあった革のスリッパで往復ビンタです。その頃には開いたドアの外にはアパートの人々が集って好奇の眼で眺めて居ります。恥しさと痛さで、顔を押しえようにも、既に縛しめの身は、どうすることもできません。

「わかったかい。おいで」

グイと腰縄を曳かれドアの外へ出ます。妻の姿を求めますが見えません。妻を呼ぼうとしますが、ビンタの後で思う様に声が出ません。そのまま近所の人々の嘲けりと憐れみの視線に晒され乍ら曳かれて行きました。

外へ出ますと改めて浅間しい我が姿が恥しく、何とかして顔だけでもかくし度いと思いますが、どうすることもできません。思い切りうつむいてトボ／＼歩きますと、いやでも両手首に冷く光る手錠が眼に入ります。

「あの、右手がきつく緊って、とても痛いのですけど」

「お前がさっき引張ったからだだよ。手錠でものは、そういう風になってるんだよ。これからもあることだから、よく憶えておくんだね」全然、相手にして呉れません。毎日乗って通勤して居りましたバス、電車に乗せられ、情け無さに涙を流しました。

「おや、泣いてるの？、嬉し涙なのかい？」

大声に婦人刑事が話しかけるので、気付かぬ人迄も気付いてしまいます。勤務先の会社のある大きな市の警務庁の玄関に入った時は全くホッと致しました。右手は最早痺れて、指は動きません。やっ手錠を外され、腰縄を解かれ、書類と共に留置場係の警官に引渡されます。

「服を全部脱げ、裸になるんだ。」

警務庁の内の雰囲気は私の反抗等全然許さぬきびしいものがあります。いわれるままに、着ているものを脱ぎますと、ああ再び手錠です。

「手を出せ。いっとくがな、ここじゃ、監房の外では手錠を嵌めることになってるんだ。手錠を出されたら両手を揃えて出すんだ。十



五糎ばかり間をあけてな。アゴをしゃくられたら回れ右して手を後へ回すんだ。いいな」

近くの事務机には年若い婦人も坐って居ます。毎度見飽きている風景で、何とも思っでは居ないでしょうが、当人の私にとっては、こんな屈辱はありません。

眼の前で、私の両手に手錠が嵌められました。ついで腰縄です。今度は手錠とは関係なしに、素肌の腰に捕縄が締められました。いつの間にか、もう一人の警官が、私の衣服を厳重に検査し、ポケットのものと革バンド、紐の類を取り除けて居ます。私は縄尻を握った警官に命じられるまま、いろんな姿勢を取られました。両手を上に挙げたり、足を開いたり、足を開いたまま跳び回らされたり、四つん這いになったり。事務係でしょうか、スラックス姿の二人の娘さんが、席を立てて近寄って来て嘲けりの色を浮べて眺めて居ます。

「此の男、留置場は初めてなの？ 猿回し下手くそじゃないの、汗かいてフーフーいってゐるわ」

なる程、猿回しとはいいい得て妙です。しかし乍ら手錠とは何とまあ残酷な道具でしょうか。両手首に嵌められた鋼鉄の触感は私の反抗心を奪い取ってしまいました。私はただ情無さに涙を流し乍ら、警官が振回す縄尻に脅され、いわれるまま猿回しを踊りました。ついで髪の内、耳孔、鼻腔、口腔、肛門迄検査された後、不動の姿勢を取られ、身体中の特徴を記録され、指紋を取られました。

「来い」と縄尻を曳かれ連れて行かれたのは「留置係長」という札を立てた机の前です。

坐って居るのは三十五、六の婦人で、制服が良く似合うキリリと

した方でした。

「正座しろ」机の前に正座します。蒲えた両膝の上に置いた両手に喰い入る手錠と、腰を締めつける捕縄の味、そして衣服をまとうことも許されない浅間しい姿が、私の置かれた境遇をひし／＼と感じさせます。

「お前を横領、強盗、暴行、及び傷害致死罪の容疑で留置する。お前の番号は、エート、一三〇号だよ。後で首に札を付けてもらいなさい。お前は今は単なる容疑者だから監獄法の適用はしないけど、それに準ずる留置人取扱規程で取扱うよ。いいかい。先ず監房外では手錠だよ。必要と認めれば監房内でも後手錠にするからね。監房内では正座。口を利いてはいけない。その他、細かいことは其都度、一度だけ教える。看守には絶対服従のこと。分ったかい。」

「ハ、ハイ。しかし、私は何も悪いことは……」

途端に、縄尻で背中を、したたか撲られました。

「アッ、アッ。痛い、い、痛い」

「ホッホッホ。そんなことは、ずっと後で申上げることよ。もっともっと色々なおしおきがあるからね。ボツボツ教えてもらおうといいわ。それから。お前、さっき飛んでもない大それたことを仕出かしたそうじゃないの。今、医務室で手当してるけど、もう直ぐ来るからね。よく謝まることね。詫び方が御氣に召さないと一寸ばかり脂汗を流すことになるわよ。」

私の衣服を扱って居た警官が口を挟みました。

「係長。一三〇号の着衣はどうしましょう。」

「そうそう、一三〇号」

「ハイといわんか。ハイと」

「ハ、ハイ」

「一三〇号は留置中、衣服を着けるつもりかい。それ共、汚れるから裸で居るかい」

「勿論、着て居ますよ」

「何だ、その口の利き方は」

又も背中に縄尻がピシリと鳴りました。

「いい直せ」

「あつ、ツ、着けさせて頂きます」

「そう、矢張り裸で居るのね。お前はそう見えても仲々賢いじゃないの。」

「あ、あ、ち、ちがいます。服を着ていたいんです」

「オヤ、お前、さつき裸で居る方が良いつていったじゃないか。今変更は認めないよ。其の衣類は預かつとく。さあ、何時になったらお前に返してやれるかねえ。フフフ」

私は諦めました、せめてパンツだけでもと哀願致しますと、意外にあつさりと許しがでて、手錠を嵌められたままの不自由な手でパンツだけを着けさせて貰いました。其の時、今朝、私を逮捕に来て負傷した婦人刑事が姿を見せました。今朝方は逆上して、それ所ではありませんでしたが、今、床の上に正座して仰ぎ見ますと、ナイロン靴下、ハイヒールの脚は仲々魅力的です。膝小僧と額にバンソーコーが貼られて居ります。

直ぐ眼の前に立って、私を見下したので頭を垂れ、

「さつきはどうも相済みませんでした。どうか御赦し下さい」

精一杯の神妙さで御詫びしました。

「おい、一三〇号。お前はそれで御赦しを願って居るつもりか。頭

が高いぞ、此の野郎。」

私は振下ろされる縄尻の痛さを考えると、あわてて、額を床に摺りつけて再びお詫びを繰返しました。生れて初めて手錠を嵌められてから僅か二時間程の間で、私はもう反抗心も自尊心も殆ど失ってしまいました。衆人環視の中を手錠姿で曳き回し、猿回しを踊らせ縄尻で脅す警務当局の巧妙な心理的やり口に、何時の間にか、自らの浅ましい境遇を肯定する様な、そして、唯々御慈悲を御願ひ申上げる外ない様な気持ちにさせられてしまいつつあったのです。

婦人刑事は暫く黙って居ましたが、いきなりハイヒールの足で平伏している私の頭を踏みつけ、ごり／＼とゆすぶりました。これは思ったより痛くはありませんもので、最後にボンと蹴られて「ヨシ」といわれた時は、これで御詫びも叶ったと思いました。

「それじゃ、札を付けて。山本さん、気が済んだ？」と係長。

「イエエ。二時間許り鉄砲にしてやり度いんですけど」

「そう、やっぱりね。一三〇号。やはり御詫びの仕方が気に入らないそうよ。まあ、しよっぱなから鉄砲の味を覚えるのも躰けのためには良いことね。ホホホホ」

私の首にヒヤリとしたものが巻き付きました。鉄鎖です。後で錠の掛る音がしました。ついで一三〇号（大本）と刻印された鉄の札が前と後に一枚宛小さな錠前で付けられました。これには全く精神的に参ってしまいました。けだもの同然の取扱いです。暫く止って居た涙が再び頬を伝います。

話には聞いて、当然のことと考えて居りましたが、自分の身が、その様に扱われて、初めてその苛酷さが実感として感じられた次第です。



「その札はね、いつも前と後にキチンとある様にするんだよ。お前の唯一つの身分証明だからね。じゃ」

と係長が警官に眼配せします。「立て」グイと曳かれて、先ず小用を足させられました。そして再び元の室に帰ると、隅の壁に埋め込んである鉄環に腰縄を結ばれ手錠を外されます。すぐ様右手に嵌め直され、右肩越しに背中へ回され、左手は下から背中へ回され、力任せに両手首を接近させて左手錠を嵌められました。その瞬間、上半身がばら／＼になる様な痛みを感じました。

これが話に聞いて居た鉄砲手錠なのです。

その苦しさ、思わず呻きますが、勿論、たれも助けては呉れません。ものの五分と経たない中に額から脂汗が流れました。十分、十五分、全く苦しいものです。私は此の後、いろ／＼な懲罰を受けましたが、逮捕されるや否や、科せられた此の鉄砲手錠程、苦しいと思っただけではありません。汗が入ってボンヤリしている両眼に婦人刑事の姿が映りました。

「お、お、おじひ…で、ごさい…ます。おゆ、おゆるし…くださいま…し。おゆる…し…」

悲痛な声で哀願する私を小気味よさそうに見下ろして、

「未だ三十分も経っていないよ。二時間と云った筈よ。まあ、ゆっくり味うことね。それに何よ。御慈悲を願うのに身体をおっ立てたままでもいいと思ってるの？　ちゃんと御願ひしてごらん。初めてのことでし考えてもいいわ。フッフ」

私は懸命に上半身を前に倒そうとしますが、少し動かしても忽ち生じる激痛に唯、呻く外ありません。私もいわゆる戒具馴れがしました後日では、鉄砲手錠のままで平伏できる様になりましたが、此

の時はどうすることもできませんでした。

「そう。御慈悲はいらないってわけね。じゃあ、あと一時間半そうしてるがいいわ。」

ボンと額を器用に蹴り上げて、スカートを翻し、あちらへ行ってしまうしました。

私は唯、もう齒を喰いしぼり、口から泡を吹き乍ら、じっと辛抱する外なのです。あまり呻き声が大きいと、たれかが来て肩をゆすぶったり、頭を前へ押ししたりします。その度に私は新たな激痛を感じ失神一步手前から引き戻されるのです。殊に先程の猿回しの時、嘲笑していたスラックスの娘さんに腋の下を擦られた時は、本当に身体中バラ／＼になったかと思いました。手錠はもはや締まるだけ締め、手首の骨は砕けるばかりに痛んで居ましたが、次第に両肩から先の感覚が失われてきました。その代りに今度は呼吸が苦しくなり、呻く力もなくなり目の前が暗くなりました。完全に失神する直前、やっと時間が来て、突然、呼吸が楽になりました。手錠が外されたのです。

「此奴、わりにタフだね。ハイポンなしで済んだじゃないか」

話合う声と共に顔に冷水をぶっかけられ、五、六回ビンタを喰らうと意識がはつきりました。ハイポンとは麻痺した知覚を復活し意識を呼び覚ませる薬剤で、其後、何回となく此の薬によって苦痛を満喫させられたものです。

「ホラヨ」と眼の前に手錠をつきつけられ、一瞬、ぼんやりして居ましたが、忽ち、先程申し渡されました留置人心得を思い出し、両手を揃えて差し出そうとするのですが、手が動きません。

「此の野郎、ふざけるな。こっちは忙しいんだぞ」

と蹴り倒されました。

「それとも、まだ鉄砲を背負い足りねえというのか？」

必死になって起き上り、全力を振りしぼって漸くのことで両手を差出し、手錠を嵌めて貰うことができました。

「どう？気分は？」

冷笑を含んだ声と共に、係長とあの婦人刑事が近寄って来ました。黙ってうつむいて居ますと、

「気分はどうかって聞いてるんだよ。返事するのが馬鹿々々しいのかい？」

鋭い声を浴びせ掛けられた私は、これ迄聞いて居りました色々な話や書物を懸命に思い出し乍ら額を床に摺り付けます。

「骨身に、骨身にこたえますてございます。私めが悪うございました。今後、決してあの様なことは致しません。留置人心得を肝に銘じ神妙に致させて頂きます。どうぞ御赦し下さいまし」

「フーン、仲々すらくと堂に入ったセリフ回しじゃないの。やっぱり学士様だけのことあるわね。じゃあ長谷川さん、次の御客さんもういらしたし、ブチ込んでよ。」

「立て」



よろ／＼と立上って曳かれ乍らフト見ますと若い和服姿の女が二人、手錠腰縄で刑事に連れられ入って来ました。私の浅ましい姿を見た彼女達は驚いた様でしたが、直ぐに同じ自分達の立場を考えたのでしよう。肩をふるわせて嗚咽し初めました。彼女達も裸にされ猿回しを踊らされ、首に鉄札を付けられることでした。唯一つの出入口である地下道の中央にある鉄格子の扉を潜り、再び階段を昇りますと留置場の区画です。看守の警官に引き渡され、番号札の照合が済むと監房へ曳かれます。

監視台を中心にして放射状に配置された監房の鉄格子の中に一人宛の留置人が壁に向って正座して居ります。男は大てい裸ですが、女は下着だけの姿の者が多い様でした。勿論、皆首に鎖をつけられて居り、二人程後手錠を嵌められて居る者もありました。空の監房の扉は開いております。その中の一つの前で縛めを解かれました。

「入れ」

腰を蹴り飛ばされて房内へブチ込まれます。独房は幅が入口で約一米、奥で一米半ばかり、奥行は二米半、天井の高さは二米程、窓なんかは勿論ありません。天井、壁、床、すべてコンクリートです。奥に造り付け



の水洗便器が設備されており片隅にセフラン樹脂繊維の毛布がたたんであります。

「右手の壁に向って、床の印の位置で正座。指示する時以外、正座を崩すと懲罰だ」

云い捨てると看守は鉄格子をガチャーンと閉め、錠を下ろして立去りました。成程、床に円い印が塗ってあります。

云われました通り、その上に正座しますと、灰色のコンクリートの壁が眼の前一尺の所にあります。首には鉄鎖の冷い感触、これで完全な留置人です。好きな時曳き出されて

取調べられ、それ以外の日夜をこうして過す身の上になったのです。しかし、そうしてじっとして考えてみましたが、どういうわけで、あんな容疑を受けて逮捕されたのか、どうしても分りません。一体、私が何をしたというのでしょうか。両手首はところどころ皮がすり剥け、血が滲み、少しはれて居ります。今朝から加えられた理不尽な取扱いを思い出し、思わず涙が出ました。必ず疑いは晴れる。きっと何かの間違いなのだ。取調べられれば直ぐ分ることだ。と考え直しますと、少し気が楽になり、早く調べて欲しいものだと思います。しかし、それはずいぶん甘い考えでした。私を陥し入



れようとした人間があったのか、又偶然が重なってそうなったものか、それは今以て判然致しませんが、既に誰が見ても疑いの余地のない状況証拠と、物的証拠と、そして証人迄も当局は握って居たのです。

### 取調べ

正座の足の痛さに、そつと膝を崩しました。途端に全監房の隅々迄見通せる位置にある中央監視台の看守の合図があったのでしよう。靴音が房の前で止まり鉄格

子が開きました。

「二三〇号、背中だ」

しまったと思いました。看守の言う意味が判りません。

「新入りだな。背中と言ったらな、こちらに背中を向けて手を前に突いて、そうく。いいか、そら」

ひゅうという音と共に背中一面、焼きごてを当てられた様な痛みを感じました。

「これが革鞭の味だ。それ、もう一つ」

びいり。思わず喰いしばった歯の間から呻き声が洩れます。生れ

て初めて受ける革鞭の味です。奴隷達が鞭打たれるのは何度も見て居り、「痛いだろうなあ」と考えたことはありませんが、こんなにも痛いものとは思ひもありませんでした。

「よし。それから、御鞭を頂いたら、こちら向いて御礼を申上げるんだ。こら、額を床につけるんだ、世話を焼かすな」

看守の足下に平伏はしたものの、御礼の言葉は一寸出ません。

「御礼を申上げる程は頂いて居ないというわけか。それなら……」

「あっ、あっ、申上げます、申上げます。ありが、ありがとう……ございました。」

口惜しさが、こみ上げます。

「フン、少しはこたえたか。まだ、此の上にな、鉄線入りの鞭とか、電気鞭とかがあるんだぞ。よし正座。こら鑑札が曲って居る、直せ。」

首鎖を少し回し、札をキチンとします。そして再び正座です。遠くの方で鉄格子の閉まる音が聞え、先刻の二人が監房入りした気配です。しばらくすると近くの房で誰かが鞭を受ける音が聞え、他の留置人を震え上らせます。昼食が配られました。昼食と云ってもプラスチックの深皿に入れたドロドロの混合物です。水、カロリー、その他必要な栄養一切を含んで居るとは云うものの、味は二義的に作られてありますので、とても全部は飲み切れません。考えれば数十年続いた囚人食のこれが最初のものであったわけです。

昼食後用便と、暫く楽な姿勢をさせて頂き、看守の号令一下再び正座の苦業です。どこかの房から曳き出される者があるらしく、罵る声、ビンタの音、そして手錠の嵌まる音がしました。

巡回の靴音、そして時々聞える鞭の音と女の悲鳴、男の呻き声以

外は静寂そのものです。何時間位経ったでしょう、今日は取調べは受けられないのかと残念に思い、巡回の看守に早く取調べて貰うよう頼んでみようか、いやそんなことをすると又懲罰を喰うかも知れない、等と考えて居ります折、靴音が止まりました。さっき、ほんの少し足を動かしたのが見付けられたのかな、とびく、としました、が、そうではなかったようです。

「二三〇号、出房。お調べだ」

しびれた足を懸命にふん張って立上り、房を出ます。差出した両手に手錠が嵌められ、腰縄で固定されます。

「お前には特に厳重に戒具を施す様にとの係長の御注意だからな。足を出して。」

両足首にも足錠を嵌められました。両足首をつなぐ鉄鎖は四十糎程です。

「これも手錠と同じだぞ。あまり鎖を引張ると緊って痛いぞ。注意しておいてやる。来い」

腰縄を曳かれ、足錠の鎖の範囲でヨチヨチと歩き出します。其の歩き難さ。注意はして居るのですが、どうかすると鎖を引張ってしまい、其の度に少し宛緊って来ます。階段を昇る時に「もっと、しっかり歩けんのか」

ピシリと縄尻で背中を打たれ、丁度さっきの革鞭の痕に当たったその痛さに、思わずグイと足鎖を張った瞬間、足錠は足首を締め上げてしまいました。

「あっ、あっ、痛い。痛うございます。少し、ほんの少しゆるめて下さいまし」

「なにに。手錠がきついか。そうかそうか」



看守は意地悪く手錠の鍵穴に鍵を突込んでゆるめる真似をします。

「いえ、手錠ではございません。足錠の方でございます」

「足か。足錠は締っております。お前にや丁度好い加減だ。山本さんみたいに、こっちがひっくり返されちやたらんからな。ぐずぐず云わずに行かんか」

振り回される縄尻に脅かされ、齒を喰いしばってお尻を振ってヨチヨチと歩きます。

丁度、向うから取調べが済んで監房へ帰る留置人が、うなだれて曳かれて来ました。

三十才位の男で禪一本の姿です。勿論、首鎖、手錠、腰縄姿ですが、足錠は嵌められて居りません。本当に羨ましく思いました。先刻の室を通り抜け、廊下を二階へ上り、やっと取調室に着く迄の永かったこと。途中、廊下ですれちがった二人連れの婦人事務員が話しているのが耳に入りました。

「ずい分、ヨチヨチ歩いてるわね。ああ、足錠を嵌められてるわ。何か暴れたりしたのね」

「あの足錠はね、引張ると締るのよ。大分締ってるらしいわ。哀れなものねえ」

「けど、あんな工合じゃ、道中長いことね。フッフ」

取調室は大分、大きな室で五、六米間隔で机が十個程二列に並んで居り、四、五人の男女がそれぞれ机の前に正座させられて調べられて居ります。私は若い女囚の隣の机の前に正座させられました。

他の留置人達も手錠のままです。手錠は仕方ないとしても足錠だけは外して貰えるものと考えましたが、ゆるめても貰えずそのまま正座させられました。正座する時の足首の痛さ、つくづく今朝のふ

るまいが後悔されて来ます。

「取調べ担当官がお見えになるまで、平伏だ」

腰縄が床の鉄環に結び付けられ、そして担当官が見えた時の心得を看守から教わりました。仲々見えません。周りの有様が平伏している耳に聞えて来ます

隣の女はどうやら女スリで、前科もあるらしく、担当官の四十過ぎの男がじろ／＼と下着だけの身体を眺めるのに媚さえ売る強たか者です。しかし流石の彼女も今度は先ず十五年は喰らい込むと聞いて、しゅんとなった模様です。

「あーあ十五年か、一寸長いすわねえ。来る日も来る日もお手々もアンヨもくくられて、何かといえは鞭に鉄砲に海老か。いやになるわ」

「フフン。身から出た錆さ。一汗かいて来るんだな」

「旦那は他人事だと思って涼しい顔なさってるけど、早い話がこの手錠だけでも嵌められてごらんないな、情けないわよ。背中がかゆいんだけどねえ」

「掻いてやろうか」

「結構よ。少しばかり横坐りしたといってさ、鞭でしばかれた痕がかゆいのよ」

「フッフ、負け惜しみいうなよ。しかしまあ、お前位になりや背中の皮も厚くなって鞭位じゃ本当にかゆい位なもんかも知れんな」

「冗談じゃありませんよ。革鞭の痛さだけは馴れるってことはありませんですよ」

「電気鞭はどうだい」

「かんにん。死んでしまいうわ。三回許り喰ったことあるけど本当に

死んだ方がましよ」

「さあさあ、もう済んだからお帰り。明日送ってやるから今晚はゆっくり寝な」

「じゃあ、明日から首に鈴が付くわね。ねえ、後生だから明日、送りの時、顔をかくさせてよ」

「へえ、何故」

「だって恥しいもの」

「お前みたい女でも恥かしいかい？」

「あら、ひどい。私だってさ、こんな恰好を若い男に見せたくありませんよ。ことにねえ、同じ位の年の女の人に見られるのは本当に口惜しくて情けなくて」

「まあ、せいせい笑ってもらえよ。破廉恥罪容疑は顔を隠さないことになってる」

「情けないわねえ。そりやそうと、今度は何処で晒されるの？ 捕った所が田舎の方だから、そっちの方でしょう？」

「そうは行かん。今度は駅前警察署で晒してやる予定だ」

「まあひどい。何とかして下さらない？」

「うるさい。おい、この女を連れて行ってくれ」

看守が呼ばれ、女は曳かれて行きました。

女と駄弁って居た担当官は、あくびして立上ると、書記に

「僕は今日は少し早目に帰るよ。女房と約束があるんでね」

と、さっさと退出して行きました。

他の机もあらかた一段落した模様で、或いは囚人を監房に帰し、或いはそのままにしておいて、旅行の話、映画の話、さてはよからぬ話等を御互いに談笑しています。峻烈な取調べに何とかしていい

逃れようと身悶えし、そして諦めて、やがて課せられるべき刑罰の恐ろしさに身震いしている囚人達の前で。

やがて私の方に気付いた一人が

「おや、これから商売に掛る処もあるらしいよ」

「あそこは山本女史だな。女史、あの男にひつくり返されてむくれちやってさ、今日中に一応責めておかないと気がすまないんだろうサ」

「どこへ行ってるんだい」

「彼氏と一寸デートしてるわ。額の絆創膏を気にしてたわよ。一寸脱けて来るから引張り出しとけて電話してきたんだから」

「するてえと今頃は何だな。あなた直ぐ帰って来るから待っててよ。てな調子で別れを惜しんでる最中だな」

「女史も時計屋の事件じや味噌つけたからな。点数は上げたいし、彼氏は恋しいってとこか」

皆、太平楽を並べて安楽椅子にふんぞり返ってる訳ですが、私の方には、そうは参りません。手錠足錠で締め上げられ、じっと平伏して、彼氏とデート中の担当官様のお帰りを待っているのです。既に机の前に繋がれてから一時間以上になります。膝から下は痺れてしまつて感覚がありません。

「よう、お楽しみ」

やっと帰って来た様子です。急いで先程教えられた心得を思い浮べ、御機嫌を損じない様にしようと考えました。

ハイヒールの靴音が響いて席に着いた模様です。タバコを吸っている様子。

「さあてと。顔をお上げ」



やがて声が掛りました。顔を上げて取調べ担当官である山本婦人刑事を仰ぎ見ます。

「申し上げます。横領強盗暴行及び傷害致死罪容疑で逮捕されました留置人一三〇号、御取調べを受けさせて頂き度く存じます。何卒御存分に御取調べの程御願ひ申し上げます」

再び平伏しようとして、痺れた足のため思わず横倒れになってしまい、床で肩をしたたか打ちつけました。

「フフフ、やり直しね」

冷笑を浴せられ思わず、かっとなりかけましたが、思い止まり屈辱の言葉を繰返させられました。再び平伏した私に暫くして声が掛ります。

「正座」

「担当官様、御慈悲でございます。足錠をもう少しゆるめて下さいまし」

手錠を嵌められた両手を腰縄の許す限度に上方へ上げて合掌し、身悶えして哀願します。

「足錠位でネを上げてたんじゃ先が思いやられるよ。じゃあ、さっさと白状おし」

鋼鉄のいましめの痛さも忘れ、思わず声高に

「一体、何を白状するんです？ こんな目に遭う理由を聞かせてほしいもんです」

忽ち、色白な顔に赤みがさし

「おやッ、いうじやないの。白くれる気かい。おどろいたもんだわ。じゃあね、一昨日の夜、友人と別れてから何をしたか、いいなさい」

「は、はしど酒していました」

「どこを？」

「……………はっきりは覚えていません」

「世話をかけるねえ。じゃあ、こつちから教えてあげようね」

そして私に掛けられた容疑の内容を聞かされましたが、全くびっくりしてしまいました。昨日の新聞を読んでいればよかったのですが、宿醉のため全然この事件を知らなかったのです。

私の勤めて居りました商事会社は、仕事の性質上、交際費や旅費に巾があり、社長以下、適当に社用を楽しんだり、くすねたりしていた訳で、私も初めは小心な位にしておりましたが、今迄の経験もあり空気に慣れるにつれ些か大胆になり、妻も少し浪費癖がありますので、同僚より図抜けたやり方をしたりして居りました。社長には気に入られて居りますし、仕事で充分埋合せをしているんだ、位の軽い気持ちで罪の感じ等、全然感じなかった次第です。ねえ、同僚の中傷もあったのでしよう、社長が十日程前から内々調査された結果、目に余るものと判断され、社内刷新の意味もあって、警務庁へ告発されたのです。当局では直ちに私の身辺を内偵し始め、いろいろと証拠を握り、横領罪で逮捕しようとしていた折柄、一昨日、土曜日の夜の事件が発生したのです。

事件というのは夜の一時頃、社長宅に強盗が忍び入り、家族全部を縛り上げ、社長を脅して金庫を開かせて金品を強奪し、令嬢に乱暴した上、社長の頭部を強打して意識不明のまま、数時間後、死亡させてしまったというのです。日曜のことで当局が本格的に調査し始めたのは夕方になってからのことですが、強盗は折角、強奪した有価証券、金銭、宝石の類を近所の溝に捨てていましたが、調べに

よって社長が会社から持ち帰っていた帳簿が持ち去られていることが判り、又、御嬢様は強盗の振舞い背恰好等よりして顔は隠してはいたが、私らしかった旨、証言されたのです。そして決定的な証拠として、兇器の青銅製のアポロ像に私の指紋が発見されたのが深夜のこと。直ちに私の逮捕となったわけです。

私は話を聞いて、びっくり仰天致しました。

成程いわれて見れば、横領罪に關しましては申し開きの余地はありませんが、それとて、私に關係の無いもの迄沢山おし付けられてあり、口惜しさで情けなさ、そして無分別な行為に対する後悔で胸が一ぱいになり、

「うそです、うそです」

と大声に叫んでしまいました。担当官は御茶を啜り乍ら、憐れむ様な眼で私を眺めていましたが、

「じゃね、このアポロ像に付いていた、お前の指紋はどうしたんだろうね」

と机の上にある箱から、青銅の置物をとり出して見せました。私は必死に考え乍ら

「それは……いつか、じやました時、何かの拍子で触ったんじゃないかと……」

「バカを面白い。指紋でものはね、ついた時間まで略判るんだよ。」

お前、二、三日前に訪ねたことがあるのかい？」

先週中はおるか、私が最近、社長宅へ行ったのは二十日程前のことです。それにしても、その時、晴れやかな御顔でピアノ等弾いていられた御嬢様に乱暴したのが私であるとは。

「私には全く身に覚えがございません。交際費や旅費を余分に取っ

たりしたことはございますが、その他のことは本当に……」

「じゃ、土曜日の晩はどこにいたんだい？」

「それが、その……酔っていたので、どこをどう飲み歩いたか。大体の見当はついてるんですが」

「フン。全市の飲屋やバーの人達に全部聞いて見ろっていうのかい。冗談じゃないよ。こんなに証拠がはっきりしてるのにシラを切るなら切るでいいけど、お前の損だよ。いいかい。自白なしでも充分起訴しておつりが来るよ。素直にしているのと、いないのじや裁判官の心証も大ちがいだよ。明後日迄によく考えてお置き」

「担当官様。私には妻があります。御嬢様に乱暴したりする筈がありません。」

「フン。お前の女房は生理中だったじゃないの。それにお前は若いし、昔から大分その方は手くせが悪かったんだからね。そうそう。持って行った帳簿はどこへやったの？ 燃やしたのかい？ え？」

「帳簿なんて知りません。第一、私は社長の家へ押入ったことは……」

「もういいよ。私はね。お前に怪我迄させられてさ。それでもお前のために一応取調べてやって、お前が神妙にすりや、幾分でも刑を軽くする様にしようと思ってたんだよ。いっとくがね、こんなハッキリした事件は調書を作ってそのまま送ったっていいんだよ。明後日までに書類作っておくからね。よく考えて出ておいで」

「私は、私は本当に……」

私は自分がおかれた立場を、はっきりと悟りました。如何ともし難い深い、ななに落ちたのです。

「お願いです。もう一度よく御調べ下さまし。本当なんです。一人で飲み歩いたのがまずかったですけど、社長宅などには近寄りも



しませんでした。本当です。決して嘘は……」  
「うるさいね。あ、もう一時間以上経っちゃった。あの人待ってるわ。看守さん、来てよ」

隣室から看守が入って来ました。今度は婦人警官です。

「あら、今夜の当直はあなたなの？ おたく迄待たしちやってすみませんわね」

「いいえ、しかしこの

男、バカじゃないかしら。まだいい逃れるつもりらしいですわね」  
「フフフ、本当にどうかしてるわ。コソ泥だってまだ男らしいのがあるわ。いいのよ。こいつがそのつもりなら、こっちもね。フフ」

「御筆先で十年や二十年、どっちでも転びますからね。私も早く貴女のように取調官になり度いわ」

「もう二、三年、経験を積みなさいよ」

担当官は机の上を片付け、私は婦人警官に縄尻を引かれます。痺れた足で懸命に立上ろうとしておりますと、

「オヤ、挨拶を教えて貰わなかったのかい」

ピシリと背中が鳴り、先程の心得を思い出しました。無実の罪を

これが話にゆく  
鉄砲手錠



着せられたとはいふものの、横領罪の一部は認めましたので、仕方がないと口惜しさをこらえつつ額を床にすり付けて

「御取調べありがとうございます」

と御礼を申上げ、よろよると立上って曳かれて行く私の背後から、担当官の無慈悲な言葉が浴せられました。

「房内後手錠にしていよ」

「承知致しました。足錠はどうしましょうか？」

「そうね。一応外してやろうか。けど貴女の判断でどっちでもいいですよ」

婦人刑事はコンパクトを閉め、ハンドバッグを抱えると、私の前

を横切って室外に出てゆきます。

スカートを翻えして、恰好のよい脚で大股にハイヒールを鳴らし乍ら帰って行く婦人刑事の後姿を恨めしく見乍ら、私は鎖の範囲でヨチヨチと歩き出します。

「大分きつく緊ってるわね。痛い？」

どうせ頼んでも、きつと無駄と考えて、諦めて歯を喰いしばって曳かれていました私には、思いがけないやさしい言葉です。

「ハ、ハイ、ハイ、きつくて痛いんです。歩けない位なんです」

「少しゆるめて上げようね」

さんざん無慈悲な言葉を浴びせられ苛酷な取扱いを受けて来た私には本当に涙が出る程の言葉でした。しかしやはり嫌喜びでした。

「あらあら、鍵がないわ。手錠の鍵ならあるけど。足錠を嵌めてあるとは知らなかったのよ。仕方ないわね。辛抱してゆっくり歩きなさい。なんなら膝で歩いてもいいわ」

がっかりしましたが、意外にやさしい言葉に氣を取り直し、やっと階段を降りてしばらく行きましたが、とうとう堪らなくなって膝をついてしまいました。

「どうしたの？」

「ハイ、すみません」

今度は膝でヨチヨチ歩きます。時々バランスを失って倒れそうになる度に腰縄をグイと引っ張られ立ち直ります。並んだ扉の一つから婦人事務員の方が帰り仕度で出て来ました。

「あら。どうしたの？　こんなおそく迄取調べ？。あ、そうか、山本さんの担当の品ね。白状してないらしいわね。おどろいた」

「どうして分るの？」

「だってさ。白状したら山本さんのことだもの、足錠位外してやる筈よ」

「なる程ねえ。図太い男ね、そういわれて見ると。けど私、こんなの見ると、つい可哀想になっちゃって」

「冗談じゃないわ。一々留置人に同情してたんじや警官は動まらないわよ。貴女、そんなヨチヨチ歩きにつき合ってたんじや夜が明けちまうじやない。一鞭当ててシヤンとさせなさいよ。甘えてるのよ」

「だって革鞭、持ってないわ」

「しようない人ね。じや、ごゆつくり。さようなら」

留置場の区画に着いた時は、ひざがすりむけていました。婦人看守に注意されて、入口の看守に平伏し大声で申告します。

「二三〇号。只今、御取調を受けて帰房致しました。なお担当官様より房内後手錠を申し渡されました」

房の前でやっと足錠が外されました。婦人看守が小さな鍵を鍵穴に挿込んで回されますと、今迄足首を砕けるばかりに締め付けていました鋼鉄の環が鎖の様にガチャリと口を開くのです。腰縄を解かれます。ついで左手の手錠だけ外されたので、おとなしく両手を背へ回して後を向きますと再びガチャリと左手錠が嵌りました。婦人看守の御化粧の香りが鼻につき、この方にはやさしく扱われただけに余計に恥しさを感じました。更に捕縄で、首にグイと吊られます。やわらかい御手が触る度に、情けなくて堪りません。

「お入り」

監房へ後手錠のまま入れられ、所定の位置に正座します。

「食事はすぐ持ってきて来て上げるからね」

鉄扉に施錠し乍ら、いいました。



こうして逮捕第一日目に、早くも後手錠の味を知られることになったのです。其後、拘留所や監獄、そして永い奴隷生活に於ては監房内の後手錠が普通のこととなったわけですが、後へ回した両手首に嵌められた手錠をもちやどうすることもできず、壁に向って正座しておりますと、今更の様に囚われの悲しさを、ひしひしと身に泌みて感じました。やがて入口の上部内側に灯が点り、今日一日が暮れたことを知りました。

婦人看守が夕食を持って来て、小孔を開いて内に置いて呉れました。

「お食べ」といって、そのまま扉の外で立っているの、食器の前に正坐したものの、後手錠を外して呉れるのかと考えて、ほんやり顔を仰ぎ見ていました。

すると「欲しくないの？」と訊ねますので、

「あの、手錠を……」といい掛けますと、思わず苦笑いを洩して、

「後手錠はそのままでも、口があれば食べられるでしょ」

情けなく思いましたが、空腹と、それにもまして渴きを感じておりましたので、仕方なく犬や猫の様に食器にじかに口を付けて啜る他ありません。

「早くおしよ」と急がされ、口の周りをべたべたにして、やっと啜り終ります。

「じや三十分間、楽にしていいていいわ。横になっちゃ駄目よ。用便も済ませなさい。」

そのまま行ってしまうおとしますので、私はあわてて

「看守様。これじやできません」

と訴えました。婦人看守は一寸いぶかしげな顔をしましたが、忽ち

ち気がついて、

「そうだったねえ。一寸お立ち」

鉄格子の間から手を入れて、パンツの紐を解いてくれました。用便をすませ、壁にもたれて一息つきました。口の周りが拭き度いのですが、勿論どうすることもできません。

「一三〇号。正坐。」

中央監視台の号令で再び壁に向って正坐です。九時に主任当直看守の巡検が済むと

「就寝」の号令が掛りました。私はともかく毛布を後手のまま床にのべて見ますと、それは袋状になっていますので、苦心して中へもぐり込むことはもぐり込んだのですが、枕もなく仰向くと後手錠が背中に当たりますので、横になって見ますと、一応楽です。暫くしますと、腕がしびれて来ますので寝返りをしたり、うつむけになったり、中々ねられません。我が身の不運を呪い、真犯人を憎み、そして妻は今頃どうしているだろうか、何とかして横領罪以外の疑いを晴らす方法はないものだろうか、等といろいろ考えますと、後手錠の切なさと共に、大声で叫び度い衝動にかられました。涙を流し乍ら悶えつつ、それでも少しは、うとうととしたのでしようか「起床」の号令とベルを夢うつに聞き、あわてて起き上ります。

「点呼」の号令にあわて、毛布を片付けようと致しますが、後手錠の身の悲しさ、それに眠っていて無意識にもがいたのでしよう、手錠がかなりきつく緊っていますので、もたもたしてしまいました。留置人達が次々と容疑罪名と番号を大声で叫ぶ声が段々と近付いて来ますので、毛布はそのままにして取あえず鉄格子の前に正座しました。

主任看守と昨夜の婦人看守が外に立ち止まりましたので、平伏し先程から聞えていました通りを真似て大声をあげます。

「横領、強盗、暴行及び傷害致死罪容疑。留置人一三〇号。身体及び戒具、異状ございません」

「順序がちがう。戒具の方がお前の身体より先だ」

いい直しますと更に「声が小さい」といわれ、又いい直します。すると「額が床から離れとる」といわれ、又、更に三度目のいい直します。

「寝具はどうしたんじや？ 女中でもいるのか？ あーん。」

「ハ、ハイ、たたもうと思ったんですが、後手錠なものですから……」

「なにい？」

右手の革鞭で床をびしりと打ちましたので、思わずビクツとして婦人看守に哀願の眼を向けます。

「口でやればできるだろう、口で」

なる程と思い、毛布の端をくわえてやって見ますと、思ったより簡単にたためました。

「よくおぼえておけ」

平伏した床に口惜し涙が流れました。朝食迄正坐し配られた食事を犬の様に嚙り込みます。三十分の休憩の後、再び正坐です。後手の腕が抜けそうにだるく思わずあえぎ身悶えしますと、直ちに発見され革鞭で背中を打たれました。あのやさしい婦人看守が来たら哀願して、ほんの一、二分間、外して貰おうと考えておりましたが、当直を済ませて帰ったらしく、今度の看守は若い男です。

やがて五、六人が曳き出され取調べを受けに行った様です。時々

革鞭が響き、悲鳴が聞えます。私も少し要領が分りましたので、監視台の眼を盗んで、ちよいちよい足を崩したりする様になりましたが、後手錠だけは如何ともできません。昼食後の休憩の時、何とかしてみようとするのですが、外れることはおろか、ゆるめることから勿論できません。それに手首がすりむけて、はれて来た様です。もがけばもがく程緊りますので諦めました。

午後、正坐が始まると直ぐに、七、八人、曳き出され、中央監視台の所へ集められました。

横眼で見ていると、レンガ色のパンツを穿かせられた二人の女と五人の男の留置人達が、次々と腰に太い革製の腰枷を嵌められ、前手錠を腰枷に固定され、そして鉄鎖で以て、ジャラジャラと珠数繋ぎにされております。

昨日の女スリも、うなだれて戒具を受けております。検務局送りです。

首に巻き付けられた鉄鎖が、急に何んともいえない位切なく、うるさく感じられ思わず首を振りましたが、幸い発見されずにすみませんでした。

囚われの第二夜を迎え、やっと横になります。明日は又取調べです。もはや何とも逃れる術はないのです。担当官のいう様にこの上無実を主張しても刑が重くなるばかりです。明日きげんを損じると今度は後手錠位ではすまないだろう。裁判所でもう一度よく調べを願った方が得策かも知れない、等と今から思うと、馬鹿な事を考えたものですが、いわれるままに白状しようと決心すると、何だか心が少し軽くなりました。

それにしても背を柔い夜具につけて寝るという事は如何に楽なこと



とでしよう。私の両手に手錠を嵌めた婦人看守も、今頃は安らかに蒲団の中で手足を伸して寝ていることでしょう。

朝が来て、あの屈辱に満ちた点呼を受け、正坐して曳き出されるのを、じっと待ちます。

昼近くなった時分、やっと曳き出されました。今日の担当看守は婦人警官ですが、眼鏡を掛けた意地悪そうな女です。又あの足錠が嵌められ、後手錠のままで腰縄です。シャワー室の前で足錠と腰縄を解かれ、後手錠のままでシャワーを浴び、熱空気で乾かすや否や再び腰縄、足錠を嵌められ、引き立てられます。

恥しさに消え入りたい気持でトボトボと歩きますと、歩き方がおそいといって、面白半分のように革鞭が背中に、尻に、腿に加えられます。本当に口惜しくて情けなくて、この後手錠さえ嵌められてなければ、どんな懲罰を受けてもいいから、手向いしてやるのに、とさえ考えますが戒めの身は革鞭を避けることすらできないのです。

涙を流し乍ら担当官の机の前に繋がれ、平伏します。

「どう。少しは賢くなったかい？」

「ハイ。神妙に致しますから、どうぞ御慈悲を御願い申し上げます」

「そうかい。じゃあね、食事して来るから、しゃべることを良く考えておくことね」

さっさと又、出て行ってしまいました。再び平伏して帰りを待ちます。留置人の分際というものを、つくづく思い知らされました。

昼食抜きで再び取調べを受け、身におぼえのないことを白状させられ、少しでも詰ったり、考えと違うことをいいますと、革スリッパでピンタを取られ、身悶えし乍ら自白を終えました。

「よく思い直して白状したわね。えらいえらい。この自供書に拇印

を押すのよ」

殆んど二昼夜振りに右手錠だけが外され、拇印をとられました。

担当官はタバコをふかし乍ら看守を呼んで

「前手錠にしてやってよ。足錠も外しておやり」

正坐した足に足錠の痛みがなくなり、両膝の上に前手錠の両手をのせますと本当に生き返った様です。

「ありがとうございます」

思わず御礼の言葉が出てしまいました。

「二、三日中に局へ送ってやるけどね。どんな気持？ 本当のことを申上げてスツとしただろうね。どの位の刑を喰うか分らないけど、神妙に罪を償うんだよ」

「ハ、ハイ。担当官様。どの位監獄に入れられるでしょうか？」

「サアねえ。まあ自供したんだから死刑にはならないだろうね。まあ軽くて三十年、まずくすると終身懲役だね。」

「終、終身懲役ですか？」

私は驚ろきました。

「人を一人殺したんじゃないの。刑を軽くして欲しいなら、裁判官や検事様の心証をよくするんだね」

御茶を啜り乍ら、刑罰の恐ろしさに身震いしている哀れな私の姿を見下ろして冷笑しているのです。

「御願いです。一度家内に会わせて下さい。いろいろ話しもありますし……」

「フフフ、そりや駄目、駄目。奥さんの方から申出れば会えるけどお前の方からじゃ駄目よ。御気の毒乍ら、奥さんからは連絡がないね。さあさあ、もう用は済んだよ。お帰り」 (次号へ続く)



考察

# 腹を切る事

折伏下男

(その五)

死後の周囲からの同情を期待する。或る人は何人にも見られずにこの世から消え亡せてしまふ事を期待する。或る人は惜しまれる事を願う。これ等は若い人に多いロマンチズムから出ているのだろうが、現実の姿がこれ等の期待から如何に遠いものであることか。これを、一時代前の時代に置き替えてみよう。

見苦しい死に様は何んとも言えども許されない。従容として形を保ち、用意周到のあとを残していなければならぬ。用意周到とは死の理由、時期、場所、方法の適切である事を指す。

先ず第一番目の理由、武士ならば武士で、女性ならば女性として、何人も死すべき時、死すべからざる時、これを道徳の第一課として勉強していた。生命を張った真剣な生活がここから生れて来ている。

第二の時期、タイミングと言ってしまう茶化されてしまうかも知れないが、早過ぎても遅すぎても不可である。それは死刑が死の日時を指定されると同様、自殺すべき日時は一つの事件によって決定付けられるものと考えなくてはならなかった。

第三の場所、血が頭にのぼってては適所は得られない。常日頃からの遠い思慮も必要だが時には応急的な判断も必要であった。

第四の方法、武士ならば勿論、切腹である。

自殺の手段は特殊な方法を入れると数限りもない。刃物で心臓を突きさし頸動脈を掻き切る場合、毒物(劇薬、睡眠薬)等を飲んだり或はガス栓をあげ放しにして自殺する場合、鉄道自殺、火山の飛込み、ビル等の高所からの飛び下り、その他、首吊り、水死等々。

これ等の方法では何れも、自殺者は自殺への第一歩の行動は瞬間的にとり得るものである。えいっとばかりに心臓を突くか、のどを突く。ぐっとばかり薬をのみ込む。思い切つてガスを吸ってしまう。目をつぶって飛び込む。非常に危険な心理状態にある人間が、つい、ふらふらと第一歩の行動をとってし

まえば自殺が完遂されてしまう。又、逆に思いつめた人々が、最後の英断?を下しやすい方法が、かくも手軽に、かくも多く存在しようとは。

しかし、これ等の方法による自殺が、必ずしも瞬間的な死を約束している訳ではない。痛く、苦しく、恐ろしい時間は第一歩の行動をとってしまった直後に、又は数分後に始まるのである。だから自殺とは自己の中に存在する他人が、自殺と言う殺人を犯したと考えられない事もない。

自殺者は、色々な事を考えて自殺を決行するのである。或る人は自らに同情を寄せて



手をしばられている、刀がない等の場合以外自殺するに際し腹を切る事が用意周到の締めくくりとなった。

自殺が生命への冒瀆なりとして否定された現代で、尚、頻発する自殺が自由とロマンチズムに基盤を置き、用意周到なる切腹の受け入れられた前時代では、倫理と責任のもとで統制ある切腹の発生をみた。

次に切腹と他の自殺方法との相違点を考えてみる。先にも述べた如く、他の自殺では多くの場合、第一歩の行動、そこに自殺への踏み切りがある。その代り一度踏み切ってしまったら、もう後へ退くわけにはゆかない。死は痛み、苦しみ、恐ろしさの時間と共にやって来る。

所が、切腹ではどうか。勿論、この切腹では、本当に死への準備行動として存分に腹を切り開く場合と、形式的に腹皮に切り傷をつける場合とを別々に考える必要がある。

### (1) 腹を切り開く切腹

踏み切りは何処にあるか、それは勿論、左脇腹に刀を突き刺す時である。腹部は確にそれによって衝撃を受ける。しかし乍ら切腹者は、つづいて第二行動をとらねばならない。―右へ下腹部を切り開いてゆく。しかし、それだけで死を待つわけにはゆかぬ。しかし乍ら、手負いとなった腹部、そして腹の底より生ずる苦痛、これ等によつ

て心身共に死への準備は整い、急所を求めて我が事終ると言うわけである。

### (2) 皮切り切腹

この場合の踏切りは、強いて言えば急所を求めた時であるが、この場合、立ち幅跳ではなく走り幅跳の如き助走としての腹部皮切りから引き続いて踏切ってしまう。

何れにしても切腹が数段階の行動を、沈着且、冷静にとらなければならぬ事には変わりなく、それだけに切腹により自殺を完遂するには、余程の覚悟と勇気が必要とされることは間違いない。

次に切腹の行動のうち、第一段階として腹をひろげる点について述べてみよう。

第一回の稿でも少し述べたが、切腹の為に腹を出すのは即ち素腹を切る目的である。切腹の本来の意味が、人間の魂の宿るこの部分を切り開き、己れの潔白さを証する為に人に見せしめんとする意図を含んでいたと言う事から、人の前であろうとなかろうと、切腹とは露出された自分の腹に刃を加える事である。そこには文字通り赤裸々な姿を見る事が出来る。

腹を出すのに大別、三種ある。(1)両肌を脱ぎ腰より上部を裸体となり、袖は両足の下へ入れる。(2)片肌(右)を脱ぎ左は左手をもつて襟元から下の方を左へ引き寄せて下腹部を出す。(3)両肌共、脱がずに袴の前を下方に押

し下げ、胸元を左右に押し広げ、更に両襟から下方にかけて左右の手で左右へ押し広げて下腹部を押し出す恰好となる。自殺の場合の切腹では主として(3)の方法がとられた。これ迄本誌に出た挿画では確か「紅葉散華」中のお礼津だったかが、胸元から下腹部迄前を押し広げて、下腹部を一文字に切っている所を画いてあったと記憶している。近い例では「夕陽に散る華」(後編)中、切腹は作法通りに十文字と言う説明付きで、上衣の前を開きズボンも上方を開いて、下腹部を左から臍下迄切りつつある所であった。その他「姫塚物語」、「機上切腹」、「愁風連」等々、一連の女性切腹挿画は皆、この第三の例で適切な所だと思われる。「私は女性の切腹を見た」では介錯があるので純然たる自殺ではなく、(1)の双肌脱ぎ姿の切腹であった。(1)の双肌脱ぎの姿が男性的で勇壮な半面、幾分、情緒に欠けて荒々しくするに反し、(3)の前をくつろげた姿には何となく哀調味豊かな切腹を感じられる。片肌脱ぎの(2)の姿は、如何にも型式にとらわれ過ぎた感じである。いずれにしても上腹部から下腹部迄十分に露わにして、ここに切腹の姿の準備が出来上がると共に、はだけられた腹皮に感ずる冷氣をとほして、自分の目で見える自らの腹を、そして人の目の前で切り開くべき切実なる実感をともなった心の準備が整えられてゆく。

## 告——白

## 鼻と裸とスター

## みよ・すすむ

僕は、男性によって男の喜びを知り、今では一寸した「悲しみよ、今日は」なのである。しかし、少年の頃は、ムクつけき男性が怖くて嫌いだったから女の子とばかり遊んだ。女の子は男の子の様に乱暴なことはいらない。この静けさと平和が好きだったのだが、女の子は一樣に僕に対してはサジ傾向であった。その遊戯が無邪気であっても、僕を独占しようとする意図が強くなるにつれ、僕の本質的な愛の渴きは移行して、十六の年、醜男のMによって完全にソドムの徒弟になった。今でも忘れない。あの男の賤しい形相、妙に白い歯、空をむいた鼻。だが彼の毛深いチョコレート色の肌と裸形は、その不恰好な鼻とムキ出しの歯を生徒、忘れる事の出来ない決定的な「美」と「憧れ」にしたのである。それからだ、僕が鼻を求め、男の裸を求めるのに狂奔しだしたのは。求めるにも高価な代償がある。それは「勇気」と「自虐」である。求めるに怖れながら、それを癒す唯一の手だては映画である。

映画は僕を夢中にさせてくれる。たとえば、数秒、数分でも男が裸になりベーズを交すシーンなら、相手が女であっても、僕はそれを見るだけで完全に彼の相手は僕なのだとい

きかせられたから、むしろ女であってくれた方が安心でもあった。男の鼻は、男が裸であるが故に最も美しく僕に迫り、うずく様に息づいて見えるのだ、洋画での鼻のスターはタイロン・パワー、ルイ・ジュールダン、トニー・カーティス、ロッサイ・ブラッチイ、ETC、邦画では三船、森美樹、山田真三だけである。タイロン・パワーのあの鼻は一寸しゃくれて時々鼻毛がのぞき、ラヴ・シーンになると、彼の口説より何よりあの鼻が脂ぎり、もっと凄く官能をゆさぶってくるのだ。「怪傑ゾロ」や「血と砂」のベーズを僕は忘れられない。

ルイは「女海賊アン」「南海の却火」が最高だ。「南海の却火」では、タヒチのあの灼熱の島での半裸シーンなど僕は七回見たことだ。腋毛が僕を嗅覚の鬼にすらした素晴らしさだった。ロッサイは最近、スターでの上り来たが、僕は彼の初期の、いわば無名の頃から、その鼻に慕っていた。「リゴレット」の極道王子、「トスカ」の貧乏画家など。ロマグレなどと違って、その頃はイタリーの青年ズバリで、美男ぶりも今よりずっとセクシーであった。男性をシンボライズする彼の大きな鼻。僕は写真なりブロマイドで幾度ベーズ



を試みたか数え切れない程だ。  
ソドミアは浮気っぽいというが、僕などその典型的人物かもしれない。今は専らトニー坊やにひかれて日参しているのだから――。  
だが、鼻そのものはトニーのは、より官能的とはいえないだろう。全体からくる雰囲気



僕を捉えているのに過ぎないのだとも思う。  
アラン・ラッドなど、いくら裸であっても何の感興もない。まして、ジョン・ウェンやクーパーなど僕には遠い冷たい岸にいる人なのだ。  
邦画での三船敏郎は、この人自体、演技性

船の太い鼻息や喘ぐ背中から胸への、玉の汗などフラフラとするほど強烈な「匂い」を感じたのを忘れない。それから三船の鼻は余りベーズとめぐりあわない。ムケる程相手の頬へ押しつけてベーズを貪ると云う事は余りにもない、物足りないのだ。

の中にセクシーは少いのだが、陽やけしマスクや、整った体の流れと、あの逞しい鼻は文句なしに嬉しい。木下恵介の作品「結婚指輪」はアメリカ帰りだった田中絹代と東宝スト中で他社出演していた三船との顔合わせ作品だったが、病気の夫（宇野重吉）を診察しにやって来る青年医師の三船にヨロメキかける筋だった。田中が三船の汗のしみた背広を、そっと嗅ぐシーンとか、水泳パンツ一枚の三船の背中へ目まいの来る程魅きつけられて、思わず後から抱いてしまうシーンとか、妙にじめじめした不健康な女性心理をついていた事が頭から離れなかったが……僕自身、泳ぎつかれた三

「ならず者」で岡田茉莉子に強引にされるけれど、傷つき、失心したのを彼女が口移しに水をのますだけである。ただ、一寸彼の鼻は彼女の唇によってくずれ、黒いものがのぞいた様に思う。森美樹は現代青年の疑惑や不信や呪いを、ほんのり甘さの中で鼻と唇のまわりを魅力的にみせるスターだ。ホリの深いマスクだけに、あのニヒルな匂いは正にシャープであり、永遠だ。少年のままの何かを漂よわせて、あの鼻は相手を待っているに違いない。

それが、僕だったら死んでも本望だ。

「女侠一代」の高口幸次は、クリ、カラ、モン、モンの若いやくざになり、凛々しく、甘く、冷たい男の魅力だった。菅原謙二の鼻の様に卑しくなく、三船の様に堅物じゃない。適度の品位と官能を、この鼻は誇っているのだ。

僕はパワーやルイ、はては三船などと、よく夢の中で逢う。必ずその時は、キッカケなしの、ぶっつけ本番と云う奴だ。夢中になって鼻を吸い、鼻毛や……匂いのある鼻クソだのを僕の鼻に貰うのだ。又、ブリーフ一つで立つ三船。その前で裸になって跪く若い男。(僕の時もあり、山田真二である時もある)裸や……匂いや……鼻などに狂喜する僕だ

が、責めと云う事には余り魅力はない。どこ迄も受動的に、匂いを楽しむ方なのだ。

映画を見て、その場でエキサイトしてしまいう時や、同好の人を求めて徘徊する時など、様々であるが、少くとも「鼻」だけは、今の僕に取ってはなくてはならぬ美であり、夢なのである。女の鼻の責め——など絵によく見るのが、どうして男の鼻の責めはないのか、絵にならないからだろうか？

男の禪や下着類の悪臭(僕には何よりの香水)靴下なども不可欠な僕の宝でもある。

スターだって人間だ。

必ず汚すし、履き替えるであろう。その下着類、僕はそれが今ほしい。

タイロン・パワーの鼻毛と

ロツサノのシャムハレと

三船のブリーフからランニングシャツと森の靴下を僕は集めて毎日その匂いの中で暮す……なんて素晴らしい事だろう。

僕は臆病だから現実には「男性」は、ほしくない。

ほしいのが本音だが、とても恥かしいし、怖しい。悲しい性をつけ込むエセ・ソドミアもいるから尚の事、相手を選ぶに難かしい。

僕が今迄相手とした男性の中に、本当の魂の触れ合いなど求めるべくもなかった。そのものズバリの交歓だけであっては今更、何をか云わんやである。だから僕は、つましく一人ひそやかに唯一人、スターを自分の園に引き込んで楽しんでいる。相手も自己も傷がつかずに結構、素晴らしい時が持てるのだ。

僕ってゼイタクなのかもしれない。

魂の触れ合いを求めるなどと云いながら、自分だけの楽しみを冒されたくないための云いわけをしているのだから——。

悲しいが、僕はこう結論を下さぬわけにはいかないのだ。

ソドミアって本当は、それ自体、永久に結びつく事のない、裸と匂いと鼻のエゴイズムだって。

その時、その時、自分の中に触れたものだけを直観として、盲滅法に這いずり廻り、それはそれで瞬時のエンジョーイとして、火花を散らし、四散しつくして消えて行くものなのだろうって。

それ故に「夢」は無限であり、夢に託す僕の祈りは無上なのである。

鼻のスターよ、どんどん現われて、僕を喜ばせてくれ。裸になって僕を狂わせてくれ。





私は三年程前から本誌を読み続けています愛読者の一人です。私は古川裕子様やみずしま・まもる様のようにゴムに心をひかれるのです。ゴム製品としてはオムツカバーやメンスバンド、レインコートと色々ありますが、話にきくとこちらによるとアメリカのメンスバンドは総ゴム製でオムツカバーの様とか。愛読者の中でこのような事に精しい方、或はゴムの感触にひかれる方、是非誌上で御教示下さるようお願い。又、私はメンスバンドの何度も使用されて古くなつたものに興味があります。但し大人用の中でウールゴムやビニールは好みません。ヌメヌメとしたゴムのついたものが好きです。指先にねばりつくような古いゴムのタッチが忘れる事が出来ません。

(山口 本郷生)

○

菅良太様、御鄭重なお答ありがとうございます。貴男がかつての河内様でなかつても私は残念に思っています。お答を頂きまして何か安心したような喜びを覚えております。さて無惨絵マニアの絵の事です、それは氏が題名に使われ御意を申されたもので絵は画いてありませう又アイデアのH大尉の物語にも絵はありませんでした。その時の奇巧は何年の何月号かは覚えておりませう又私の手元にもありませんので悪しからず御諒承下さい。貴男も絵を御好みの御様子ですが私は時間をかけますと相当に画けますので御作猩紅匪も原作のままに其の場其の場の情景を画いて別紙に書き写しまして時折り読み返しては楽しみの新にしています。貴男のお好みのように私も美しい口髭、黒々と密生した胸毛のある逞ましく、そして品位のある日本軍人がむこた

らしい構図にあうのが非常に好ましく其の為に御作には心から喜びというより有難さを感じつつ拝読しているしだいです。いつの日か御作の誌上に発表されます時を、焦らず期待しつつ御礼にかえます

(四日市 江木清)

○

初めてお便りします。小生は二十四才の名古屋に勤めるサラリーマンです。奇巧の事は二年ほど前より知り、旧刊新刊等、大体、全部、読んでいます。最近号を読んだ感ずることは、旧刊に比べて切腹等の奇巧独特の文が少なくなつたという事です。緊縛とか責めとかいつたものは他の本でも、しばしば見かけますが、この切腹ばかりは他の本では、ぜつたいありません。それなのに現在の奇巧のあり方は、緊縛とか、責めにかたより過ぎて、本来のあり方から少しずれてる様に思えます。これは小生の感じのみかも知れませんが、切腹愛好者は非常に多いと思えます。これは一例ですが、最近、余り切腹のいい記事がありませんでしたが、十月号は久しぶりに皆川波苗子さん、東福次郎さんの立派な切腹記事が載りました。今後ともつと切腹に感ずる記事を多く載

せて頂く事を望んで止みません。皆川さん、藤山さん、十一月号の伊勢の看護婦さん、その他、女性切腹愛好家の皆さん、ぜひお便り下さい。(熱田 五郎)

○

日頃、浣腸マニア諸兄姉の通信を拝見し、おなつかしく感ずる次第でございます。私も幼少より浣腸に苦しまれ、そして何時の間にか、その喜びをこよなく愛する様になつたのです。辱かしめられ苦しめられ、やがて、自ら苦しめる喜びは、私達マニアのみ共通の場を感ずるのでございましょう。そして、他誌には見えない異色ある研究誌としての奇巧の心が、私達の喜びを満たしてくれるのであれば、私達の手で奇巧を守り助長してゆかねばならぬと思えます。それにつけても、最近、読者通信で拝見致しますマニア諸兄姉の御希望、それは私にも共通する希望であり、正に同感に耐えません。しかし、ともすれば異色ある文献誌だけに、往々にして白眼視される憂なきにしもあらず、私達はそれに対して節度を守つてゆきたいと思ひます。これに関して、編集部に望むと共に私達も反省してゆくものではありませんか。(一)記事につ



いて。最近号の流腸記事は面白くないとの声を散見致します。私も同感。思うに流腸は、その行為前の緊張、施薬中の羞恥と、排便感抑制の苦痛、排便の羞恥のみであつて、比較的变化に乏しい題材と思います。従つて我々マニアの要求は、どうしても情景描写を強く要求したいのですが、何分、流腸の際には必然的に下半身露出のため、往々にして描写が露骨になるのを免れません。現実に、「尻」「肛門」等の語句はタブーとせられており、ムードを以て我慢せねばなりません。言外の意味と、ムードを尊び、マニアはマニアなりの解釈を想像的に発展させたいと存じます。それにしても編集部にお願ひしたい事は、毎号一篇だけでなしに、せめて二百頁の五十分頁位、小篇、或は抜粋でも結構です。二、三篇の流腸物をお願いしたいのは、私だけの希望でしょうか。(二)同好クラブ、文通について同好クラブの結成、そしてマニア相互の文通希望の多いこと、私もそうありたいと思います。趣味を同じくするものが、互に胸襟を開いて語り合える。或は文通出来ましたら、どんなに素晴らしい事でしょう。でも、場合によつては

善意が、そう取られなかつたり、奇巧の読者には絶対にそうした事はないと信じてますが、男女交際の折の不測の間違ひもないとは断言出来ないかと存じます。そこに堅実と信用を誇る奇巧は、一切の文通幹旋はしない。誌上を通じてのみと明記しておられることは、正に同感に耐えませんが、但し、住所明記の上は、個人的文通は自由とのこと、私もその勇氣はないのですが、(三月号秀緒様のお氣持よく分ります) いずれ私書箱でも設けて大いに文通致したいと存じます。(三)座談会開催について前項に關連して、編集部には是非お願いしたいこと、それは流腸座談会の開催でございます。日頃その希望も多く、私はここに具体的に提案致したいと思ひます。(イ)場所、大阪(ロ)日時、編集部指定の日時(ハ)参加者、司会者として、奇巧編集部の方、一―二名。読者通信投稿者並に執筆者の中から、編集部にて適当と思はれる者数名を選出、必ず出欠のアンケートを取り、会は五―七名で開催し、流会を必ず避けること。(ニ)座談会の内容は、自己紹介(勿論匿名可)殊に告白的流腸歴、現在の心境、所持する器具収集物、マニアの在り方、奇巧に

花坂道子緊縛フオート集 大中判印画紙焼付

○全裸緊縛 略号(はな1)

八枚一組 八〇〇円

○股間縛集 略号(はな2)

八枚一組 八〇〇円

○ヌード縛 略号(はな3)

二枚一組 三〇〇円

○股間緊縛 略号(はな4)

二枚一組 三〇〇円

望む等、司会者のリードによる。(ホ)会費は交通費、会場費、食費等華美にわたらない限り各自負担は如何でしょう。モデル嬢による実演的なことは、事が流腸であるだけに、勿論避けるべきですが、モデル嬢の座談御出席は大いに歓迎する所でしょう。マニア諸兄弟の忌憚ない意見交換は、修正の上、奇巧誌上に飾るにふさわしいものとなると思ひます。編集部にも、真面目な研究討論会となるよう御指導御研究を切に願ひ上げる次第でございます。四KK業書について発刊予告を心よりお祝い申し上げます。それにつきまして、是非お望む等、司会者のリードによる。(ホ)会費は交通費、会場費、食費等華美にわたらない限り各自負担は如何でしょう。モデル嬢による実演的なことは、事が流腸であるだけに、勿論避けるべきですが、モデル嬢の座談御出席は大いに歓迎する所でしょう。マニア諸兄弟の忌憚ない意見交換は、修正の上、奇巧誌上に飾るにふさわしいものとなると思ひます。編集部にも、真面目な研究討論会となるよう御指導御研究を切に願ひ上げる次第でございます。四KK業書について発刊予告を心よりお祝い申し上げます。それにつきまして、是非お

絹川文代緊縛姿態集 大手札型印画紙焼付型

○全裸緊縛集 略号(きぬ)

三枚一組 二五〇円

○股間縛三態 略号(きこ)

三枚一組 二五〇円

○全裸高手小手略号(きた)

三枚一組 二五〇円

○緊縛全裸立姿略号(きり)

三枚一組 二五〇円



で何か心のつながりを感じます。  
尼崎SY生・兵庫・山中生・島直樹(旧号の御健筆を再び期待しております)・上原由紀子・東京、九仁子・原川美津夫の諸兄姉、御多幸を祈りますと共に、今後とも通信を通じて交換しつつ、よりよき奇クであるよう、盛り立ててゆこうではございませんか。(K生)

読者通信にて拝見致しますのに小生同様の浣腸マニアの多いことに驚かされます。殊に一、二月号の女性をめぐつての通信には種々

考えさせられるものがあります。勿論「浣腸」という特異の記事に暖い愛情を、見せられるのは貴誌にのみ限られるものであれば、自由なる発言は大いに尊重されねばなりませんし、又、この通信にのみ、孤独なる浣腸マニアが発言するのであれば、それを暖く抱擁されることを、一読者として切にお願いする次第です。それにしても女性の呼びかけにかくも大きな反響を呼ぶことを考えてみますのに——ここだけの話題ですが、セックスを感じずには居られません。

## 女性『切腹風景十二態』(9×13センチ)印画紙焼付 十二枚一組 九百円

モデル 大塚啓子嬢 略号(せふ)

### 輝美切腹

大手札判(9×13センチ)印画紙  
焼付 モデル 愛川悦子嬢  
二枚一組 二五〇円  
略号(こせ)

### 切腹のプレイ

大手札判(9×13センチ)印画紙  
焼付 モデル 愛川悦子嬢  
三枚一組 三〇〇円  
略号(れい)

### 女性自刃三態

大手札判(9×13センチ)印画紙  
焼付 モデル 愛川悦子嬢  
三枚一組 三〇〇円  
略号(じじん)

### 豊麗切腹三態

大手札判(9×13センチ)印画紙  
焼付 モデル 愛川悦子嬢  
三枚一組 三〇〇円  
略号(ほう)

これについては又改めて、投稿したいと存じますが、フックスの風俗の歴史(安田訳四巻)の「浣腸」の図の説明にも、「目的は女性の尻を強調するのみ」と、ありますが、私は「浣腸」を、「浣腸」それ自体として「被虐」の或は「責」の一要素として、セックスとは切り離して、考えたいのでございます。それにしても貴誌が多くの要望にもかかわらず、断乎として、文通の幹旋を排撃し、禍の種を未然に絶たれております態度に、共感を感じずには居られません。そうした観点から、小生は、純粹に「浣腸」をとりあげ、或は読者諸氏に生ぬるいの感を与えるかも知れませんが、貴誌の謙虚に過ぎる程の編集方針にそい、且つ賛意を表したいと存じます。(栗瀬長)

先日、フォトアラベスク確かに受け取りました。美しい写真に魅惑されてしまいました。只、余りにも美しく撮りすぎてあるのではないでしょうか。如何にも頼みこんで縛らしてもらいましたという感じのするものばかりです。作為が見えず、美しさばかりを狙いすぎたのでは……と思われまふ。と、色々いいましても、買つてよ

かつたと思つたことには間違ひありません。私は画集や読物には嫌悪を感じるばかりで見る気もしません。私と同様な考えの方々も多数おられることと思います。故、フォトアラベスクの様な写真集を今後も引続き発行下さいます様おねがいいたします。(荒木生)

ピンクの腰巻が素肌に触れる心持よき、赤い襟のかかつた襦袢を広く押し拡げて塗る白粉の香り……私には堪らない快感と興奮を与えてくれるものです。どこにもあることでしょうか、中学生の頃、友達と盆踊りに女装して以来、忘れられない魅力なのです。三十才になる今日まで、あの嫌な軍隊に入られて馬鹿げた道化役をしたことが、くやまれてなりません。私は五十キロ、一五三センチという体格なので、どちらかというと小肥りの方なのですが、そのせいか喉仏も突出せず頬も豊かなので女装すると本当によく似あうと云われます。そんな関係で青年会の演劇部にはいつてよく女形をやつています。父はもと村長をつとめたりした斜陽族なので、家の体面からそんなことは止める、とよくいわれましたが私は隠れるよ



うにして出演しました。現在では妻もあり子供もあつて勤めに出ているのですが、いつも生活は楽しみに溢れています。というのは、結婚して三年位かかつて妻を訓練したので。私は肌着や腰巻など妻と同じものをいつも二枚ずつ作らせ、夕食が終つて二人切りになると、その下着をつけるのです。馴れてからは外出するときなども下着は女物そのままです。私は、こんな家庭での生活をしていることを知られたくないので、風の吹いて来た時や自転車に乗つたときなどは心配して、いつも裾に氣をとられますが、それが又、嬉しいのです。私の村に近い町に芝居の衣裳を貸している家があります。村芝居に出ていた時に知り合つてから、いつも心易くして頂いていきますので、氣が向けば出かけて行つて女装して写真をとつていますが、今では大きな写真帖に一杯ギッシリと貼りつめるほどになつています。同じ扮装を二度とするのが嫌なので、いつも変つた恰好をと思つているうちに、こうなつたのです。最初行つたのは確か昭和三十年の秋だつたと思つています。芝居に出て現代劇で娘役をやつて、お化粧して楽屋から花道

に出たとき、若い青年達の燃えるような愁波を感じてから女役になることが嬉しくてたまりませんでした。色気たつぷりな芸者にしてほしいと頼みました私の前にしやがみこんで顔をつくつてくれるのは、その主人で五十近い体格のいい方なのです。白粉をつけては海綿で延ばし延ばししたあと、パフで叩いたり紅をさしたりしてキレイな顔に仕上げてくれました。時がたつにつれて、女になつていく自分の顔を見ているのが、とても楽しいのです。化粧が終つて腰巻をしめたり長襦袢を着せてくれましたが、腰に喰い入るようになり、めた何本かの紐のおかげで氣持まで、とても女らしくなるんです。こんな時は、はじめから女になるまで一枚一枚、写真にとつて残しています。その後も何回となく女装して、時には洋装のカツラを着て映画に行つたりしたこともありましたが、このようなことは最も印象に残つていゝ一つです。最近では歌舞伎の女形もやつていますが、顔をつくるのも衣裳をつけるのも自分一人でやれるようになっていきます。パンツをはいていたりするようなヤボなことはしないではじめからお腰をして化粧をして

## 代理部案内

☆最新作女体緊縛写真

大手札(9×13) 印画紙焼付

凌辱 略号(れん)

愛川悦子、辻村 隆  
連続12枚1組 八〇〇円

浴室股間縛

愛川悦子 略号(よく)  
3枚1組 二五〇円

悦虐雨ざらし

愛川悦子 略号(あめ)  
3枚1組 二五〇円

剥れた腰巻

花坂道子 略号(まき)  
3枚1組 二五〇円

全裸強烈股間縛り

花坂道子 略号(きよう)  
5枚1組 四〇〇円

ヌード縛り五態

益田房子 略号(ふさこ)  
5枚1組 四〇〇円

寝室の苦悶

益田房子 略号(くもん)  
3枚1組 二五〇円

腰元拷問

村井知可子 略号(もん)  
5枚1組 四〇〇円

湯上りの折檻

大塚啓子 略号(せつ)  
3枚1組 二五〇円

行、燈(アンドン)

愛川悦子 略号(あん)  
3枚1組 二五〇円

いたぶり 略号(いた)

春日ルミ、愛川悦子  
3枚1組 三〇〇円

妖艶閨の縛しめ

田中芳代 略号(ねや)  
5枚1組 四〇〇円

太股縛り三態

大塚啓子 略号(ふと)  
3枚1組 二五〇円



いますが、とても楽しみです。私は、もう完全な女装マニヤですね。これまで随分、沢山な化粧や着付の記事を調べたり、男娼、ゲイボーイをはじめ、マニヤの写真手記を集めて大学ノート二冊に小さな文字でギッシリ一杯の記事をつくりました。いつか折を見て発表したいと思つていたので、演劇評論には女装記事が多いと聞いているのですけど、残念な事には未だ入手出来ません。同好の方のお知らせを待つています。いつかは、こんなのを見つけて一人きりで女装の醍醐味を味わつてみたいと思つています。私は普段会社へ勤めています。女装するのは家へ帰つてからなので、家へ帰るのがとても楽しみで妻もわたしのこの趣味を喜んでくれます。(観音寺市 山田政二)

上原由紀子様へ。貴女の事を三月号の読者通信欄で知りました。貴女は浣腸趣味とのこと。私は今年の一月、盲腸炎になつた時、病院で看護婦さんに二度されました。あのときは、きつと石鹼液であつたと思います。看護婦さんが便器を持つてくる間が長く感じ、まるで看護婦さんに責められているよ

うに思いました。それから後、浣腸について興味を抱きました。貴女は恥かしさを中心とした責めが好きだとの事です。肉体に苦痛を与えられ、そして恥かしい責めをされたいと思つておられるのではありませんか。私は、そう感じました。私も最初はマゾであり貴女のような若い人に吊り上げにされたり鞭打ちや責めにされたといふと念願していましたが、ついにそういう機会もなく、自分自身でそういうことをやつてみました。思うようには出来ませんでした。しかし、その後いつとなくサド的に変化し今はかえつて貴女のような人を責めてみたくなりました。三月号の貴女のイメージは私も大賛成です。あのように貴女を責めることが出来たら本当に素晴らしいと思います。御便りをお待ちしています。(小林一文)

藤山秀緒様、三月号所載の女飛行士断腸譚と通信、拝見しました。抑え難い淋しさに襲われて今ペンを執つています。病身に残り少ない命を大切にしたいと、あなたはおつしやいましたね。そして、そつとしておいて欲しいと云われしました。私が今、あなたへの通信を

## 腰元全裸折檻

村井知可子 略号(せつかん)

3枚1組 二五〇円

## 振袖哀歌

花坂道子 略号(ふり)

3枚1組 二五〇円

## 股間縛り三態

大塚啓子 略号(こか)

3枚1組 二五〇円

## 股間縛り五態

益田房子 略号(ます)

5枚1組 四〇〇円

## 全裸高手小手

愛川悦子 略号(たか)

3枚1組 二五〇円

## 女学生凌辱図絵

川辺砂登子 略号(りよ)

5枚1組 四〇〇円

## 賭

儀(カケニエ)

愛川悦子 略号(かけ)

3枚1組 二五〇円

◎印画紙の大きさは、大手札型(9×13種)です。

お申込は 天星社代理部へ

書いて、あなたをまた悩みに追い込むかも知れないと恐れながら、やはり書かないでいられないのです。あなたは、もう病魔にかつ事を諦めておられるのでしょうか。残り少ない命と断定なさる根拠は充分なのでしようか。あなたは力の続くかぎり男装の女性切腹のテーマを見つめて行きたいとおつしやいましたが、あなたの生命をより長く、より強く維持する努力は放棄されたのでしよつか。私は、あなたのお書きになるテーマの魅力が分るような気がする。以前、書いたことがありました。しかし

それは単にそう思っただけで、私は結局、私なりの嗜好から、あなたの作品を拝見して来たことに気づきました。その観点から私はあなたの作品が好きでしたし、作品を通じて想像されるあなたの人柄に敬愛の念を感じていたので。かつて私が投稿した読後感の中で一般的敬称として用いた氏という接尾語が、あなたの御注意を過分に惹いたようでした。以来、私はあなたを藤山さんと呼んで、あなたの作品の持つ特異な雰囲気やKの誌上から絶やさないよう、お願いして来たつもりです。甘美の



極、そして最も凄惨な自虐を生甲斐のようにしておられるあなたがKKにとつても貴重な人であることは愛読者なら誰でも異議の無い筈です。唯、私は、あなたの作品を愛好する余り、あなたの事情を無視して酷い言葉を浴びせ過ぎたと思います。私には、あなたの自由意志を押しとどめることは出来ない筈でした。たとえ今夜にでもあなたが厚い飛行服に身を包んで自らの肉体を切り裂く刃を柔かな下腹部に突き立てようとなさつても……。奇を好む人達の心ない言動が、あなたを苦しめたことは残念です。またKKの読者の中で、あなたの意思に反して自制できなかった欲求があつたというのも淋しいことでした。しかし藤山秀緒を愛する余り、その奥の奥の社会人を追い求める人々が数多く現われたことについては、愛くるしく強い魅力を持つ藤山秀緒自身にも責の一半があるものと私は思います。藤山秀緒の烈しい情熱とともに、実在のあなたの根源をなす肉体が若く美しくあつてほしいと私は願いました。しかし、限りある肉体のことです。まして病に蝕まれ、日夜、夜毎、激しいプレイに身を悶えておられるのでは、私

としてあなたの自由意思を尊重する他に途はない様です。身も心も美しかろうあなたが、不可抗力的な肉体の生理の果に、やむなく老醜を晒すより、美しくも壮烈なテーマに自ら殉じて逝かれたら……など、つい自刃の教唆もしいかない気持になつてしまします。どうか御無理をなさらぬよう、あなたの云われた残り少ない命を大切になさいます様、お願いします。転居をなさるとのこと、お仕事の面や、あなたのお体のために、より良い条件を備えていればよいものと、住宅難の都心の一隅から秘かに祈り致します。(近藤一)

○ 小生は三十一才になるマゾヒストですが、女性の着衣に、かぎらない憧れを持っています。読者通信を拝見していますと女装愛好の方が多くみられるようですが、私も一度、女装してみたいと日夜、思っている次第です。真赤な腰巻をして長襦袢を着て伊達巻をし、お召の着物に帯付で髪は島田にして(むろんカツラです)完全な女性?となつて御婦人方のお相手をしたり縛られて責められたいと思つています。又、パンティとブラジャー、そしてスリッパを着て赤

女体

『浣腸風景十二態』

(9×13cm) 印画紙焼付  
十二枚一組 九百円

モデル 大塚啓子嬢 略号(ちふ)

女体浣腸連続フォト

略号(ちよ)

(9×13センチ) 印画紙焼付 十二枚一組 九百円  
モデル 愛川悦子嬢

いセーターにスカートの洋服姿やパンティとブラジャーだけ、腰巻だけといったように下着だけの場合や、和服、洋服等でプレイを楽しまたいと思ひますが、どなたか御同好の御婦人の方はお出でになりませんか。復刊後の奇巧にマゾ・フォートの写真が載つていませんので淋しく感ぜられますが、特集号等で頁をさいて載せて頂ければ幸いと思ひます。そして、出来ましたなら女装した男の写真を願ひしたいと思ひます。モデルに事欠くようでしたら私がモデルになつてもよいと思ひます。(名古屋坂井生)

○ 最近号にて春日ルミ・フアンズの投書を見かけて大いに意を強くしています。我々、ルミ崇拝者は再びその勇姿をグラビヤで見出すこ

とを急じている次第です。今年に入つてのマゾヒストの収獲は、週刊スリラー誌、一月二十九日号のマゾ同好者の消息記事でしょう。例え、それが人名ヒボウ的な記事であつても、現実にマゾ同好者が盛大な行動を続けているという点において我々誌上マゾヒストにとつては又と得がたいものです。聞けば三〇〇人弱の人々がマゾヒズムを楽しんでいたとの事、同好者として、実に羨ましい限りです。記事中の人物で奇巧投稿者と思われる人物が見かけられるのも、何かしら、なつかしい次第です。ただ憎くむべきは、記事の内容が余りにも悪意に過ぎている事です。こうしたスキヤンダル・キャンペーン的要素を除けば実に素晴らしい現実にマゾヒストを満足させる内容なのですから……。先月号ではサ



ド女性の心理的追求め不足についての愚見を述べましたが、それについて一般にサド女性の対象が中年又は、老年のマゾ男性であるのも興味ある現実です。強きものを支配したいという一般的な公式は現実には少々異なつた方向に適用されている様です。即ち公式通りである、たくましい若い男性を征服、支配する女性ということになります。現実には上述の如く中年以上の人々が対象となつています。といふことは、中年以上の男性、即ち、現経済社会の支配指導階級、つまり強き者は社会的地位のある男性であり、それを支配したいサド女性という完全な資本主義的、階級的、心理状態を示しているものといえましょう。勿論、この出発の仮定からして再考されねばならぬ基礎的薄弱性を持つていますが、その裏付けは「神……女性のみぞ知る」ものであつて、マゾ男性の知るべき処ではないといえます。いづれにしても、こうした点についてサド女性へ教訓的思考の発表を望みます。先日の新刊にロンドンにベディキユア専門の靴みがき(?)が出現したことが載つていました。主として水商売の女性が利用するとの事、聞い

ただけで血の湧いてくる話です。毎日、女性の足の爪をみがき染めて生活できる、なんて正にマゾ男性の理想像でしょう。僕も秘かにベディキユアや足専門のクリームの使用について智識を求めていますが、時々何もかも放り出して河原町辺りのバーでこの商売をやりたい念にかられます。といつても現実には社会が受け入れないでしょうが……。それから黒いタイツの流行はすごいものですが、我々マゾ男性にとつては、もう一つだけだけません。黒ストッキングで脚を包まれます、女性の足の微妙な神秘的な表情が全然わからなくなり、女性の脚への崇拜がそがれていくでしょう。女性にとつて脚こそ、その表情を示すものであり又、我々への支配力のシンボルでもあります。どんなに綺麗にフアッショナイズしても足の特に足首より下の部分には、その人の年齢肌質がはつきりと表われてきます。即ち、ハイティーンの足はスナリとして肉がとれていますが、三〇才前後の女性では、せい肉がついて足だこが多く形がくずれてきています。もつとも我々には、完全な足よりも不完全な足が最もそのあこがれの対象となり得るわけ

## 新人モデル嬢新作緊縛姿態集

大手札型(9×13センチ) 印画紙焼付

愛川悦子嬢の巻

☆ベッド変型縛り(略号1)

四枚一組 三〇〇円

☆全裸強烈縛り(略号2)

四枚一組 三〇〇円

大塚啓子嬢の巻

☆股間縛り(略号3)

☆全裸縛り

(略号4)

五枚一組 三五〇円

田中芳代嬢の巻

☆セーラー服縛り(略号5)

五枚一組 三五〇円

☆股間しばり

(略号6)

四枚一組 三〇〇円

です。そういつた意味でグラビアの女性について、もつとその脚の部分でクローズアップしていただければありがたい次第です。それでは又、春日ルミ嬢の御健康を祈りつつ。(京都 大倉安夫)

○東京、吉沢弘様、大阪、大橋清様、四月号にお二人の私に対するお呼びかけがあり大変嬉しうございしました。私がK誌のお仲間に入れたて頂いてから一年ばかりたち、その間、色々の浣腸に関する知識も得て、責めとしての浣腸に大きな憧れを感じているのでございす。この一年を通してみますと柴

崎様の「王宮の浣腸室」や四馬先生の浣腸の口絵を見ましては、どなたかこの由紀子をおの様に強制的に浣腸責めにして下さる方は居らつしやらないかと随分、心の中で祈つておりました。しかし、そうした願いも、とても知つた方にお願ひする勇氣もなく、それでK誌を通じて私のお話し相手を得られたらと思つていました。処、お二人のお手紙を拜見し、又々、こうして筆をとつた次第です。私もK誌で色々の責めをお教え頂きまして、肉体的な残酷さといつた責めには殆んど、いいえ全然、興味を感じません。そうした責めを受



## 美貌汚辱

△鼻責めを中心とした▽

大手札型印画紙焼付

略号(はせ)

三枚一組 二五〇円

モデル 絹川 文代

けるのは苦痛しか与えられませんが、私が憧れるのは恥しさを極度に要求されるものなのでございます。その意味でムチ打ちなどもムチ打たれる事より体の自由を奪われ恥しい姿勢をムチの前にさらさねばならないことに魅力を感じます。とは申しまして、一度もそうした目に会ったことのない私が、若し本当にそうされたら堪えられないかもしれません、それでも矢張り、そうして頂きとうございます。純粹に恥しさに對する責めだけでございましたら、どんなにうれしいことでも我慢させて頂きとうございます。私が浣腸に魅力を感じますのは、そんな点にあるのでございましょう。あらゆる哀願も聞いて頂けず、人の前に私の一番恥しい姿勢をさらさねばならない恥しさ。その上、顔をおおうのさえ許されずに両手両足も固定されます。由紀子の横では、そ

## 特高拷問

△破られたズロースから▽

大手札型印画紙焼付

略号(とく)

三枚一組 二五〇円

モデル 絹川 文代

うした由紀子をあざけるように太い浣腸器やイルリガートルが、カチカチ音を立てて用意されます。そして私は、とうとうグリセリン浣腸をされます。しかし、浣腸の本当の苦しみは、これからなのです。お許しのでるまで由紀子は、いやでも身もたえて我慢しなければなりません。吉沢様、大橋様、誌上にて色々の浣腸責めのアイディアを聞かせて頂けたら嬉しう存じます。最後に多くの浣腸ファンの方々が誌上に登場(女性の方も出来るだけ多く)なさるよう希望します。もう一つ最後には是非、浣腸特集号を発行して下さいようおねがいいたします。

(東京 上原由紀子)

○ 三月号、早速、読まして頂きましたが小生の好みにピッタリで実に満足すべき内容でした。小生、今までに種々のS的傾向の雑誌を

読みましたが、どれも皆、同じ様な物で、小生を満足させた雑誌は一つとしてありませんでした。それに反して貴社のは素晴らしく小生を心から満足させてくれました。小生、奇譚クラブを入手してまだ日が浅いので、これについての感想は他日、改めて述べさせて頂きます。(A生)

○ 四月号で近藤一さんの「最近考えたこと」を読んだので、二月号に私の出した便りが読者通信としてのついている事を始めて知りました。私は近藤さんの文章を拝見して、なにかしら大変心をゆきぶられるような気持ちにおそわれました。ほんとうに心の奥底からゆきぶり起されるような気持ちでした。あの頃と違つて、私は今でしたら何か書けそうな気持ちがします。あの頃でしたら、私、とてもペンとはれませんでした。今でしたら書けそうですね。いや、書きたいという気さえます。大分日が経つていたので迷惑をされる人もいないと思います。でも、その頃の手紙なんか殆ど焼きすててしまいましたが、手紙を読みかえしてみたいという事は出来ませんが、田舎

へ帰つた頃の今から七年前ごろのことは、今でもありありと、目にうかぶようです。載せて下さるかどうか存じませんが、暇をみてぼつぼつ書きためてゆこうかしらと思います。(大阪 川端多奈子)

○ 書店の店頭でキクを何気なしに拝見してびっくりしました。婦人の乗馬記事の次に女優の乗馬日記がありましたが、余り私の平常の生活にびつたりしているのので一寸お便り致します。私、目下、某私大の英文科に籍を置く女子大生で、身長は一米七〇ですけれど体重は七〇キロもあるのです。女としては少しふとり過ぎなので適當のスポーツをやつたらやせると言つてお友達が乗馬をすすめてくれて三年程前から初めたのですが、ちつともやせずふとるばかりで弱りました。夏休みなんか毎日朝から馬をのりまわしてシャツからパンツ迄汗でビツショリになつて女中が私の洗濯物で驚いた位です。ところであの記事の中に女優さんが家に帰つてから馬丁を馬の代りに室の中を這いまわらせるところがあまりますか、あんなこと、私はふだんボーイフレンド二人をドレイのようにしていつも遊んでいます。



一度見せてあげたい位、唯私のは皮の鞭など使わず馬が歩けなくなると素足で男の頭をぐんぐん踏みつけてやります。(大崎蘭子)

○悦特第三集を入手、隅から隅まで読ましていただきました。今迄この様な素晴らしい雑誌は読むことは勿論のこと見たこともありませんでした。天から私のために特別にお与え下さった神の書ではないかと、わななく手で頁をくつたものです。巻を見れば第三集とあり、他にも沢山の特集が出ているとのこと。何故もつと早く私の目に触れなかつたのでしょうか。日本にもこのような素晴らしい雑誌が現実に発行されているということは私にとつては本当に驚異のようものでした。その内容のすばらしさは私をして夢の天国へ遊ばせるようなものでした。いや、私の今迄胸に抱いていた夢、とても実際にはないだろうと思つていた夢でし

た。日本にもこの様な雑誌が有るのか、いや有つたのかと今更乍ら驚きと共に嬉しくなりました。きつと後々の世に残る文獻的価値のある雑誌として、後世の人にも読まれることと思ひます。あの電車や汽車の中へ投げすてられ屑屋が東にして目方で買つてゐる週刊誌なんか、全く紙の浪費といつていいでしょう。今後どうか、これに倍したすばらしい内容の雑誌の出来ることを祈ります。嬉しさのあまり一筆。(岡山 佐用生)

○御無沙汰申上げております。日に春めいて参りました。先月号に私に呼びかけた文章がありましてので恥しいような妙な気持ちになつてしまいました。貴誌を通じて文通の便があるのなら、けつこうなのですが、それは出来ないとする若し文通をする場合は誌上のみになると思ひます。この件は一寸気になつたので申上げましたが

## ○浣腸フオート

大手札型印画紙焼付

四枚一組 三〇〇円

モデル 絹川文代 略号(ちせ)

## ○浣腸責アツプ

大手札型印画紙焼付

四枚一組 三〇〇円

モデル 絹川文代 略号(ちあ)

## 写真 硯

(ハリツケ) 三態 略号(はり)

大判印画紙焼付 三枚一組 四〇〇円  
モデル 大塚啓子

私に適当な女の人が見つかるのを望んでおります。(文通) 風谷雪乃さんの記事を拝見して、私には顔や姿はあまり気になりませんが、私には顔や姿はあまり気になりませんが、大へんマゾの方だそうですが、私の好みと少しでも合わないかと、いろ／＼空想してみました。又何かのときはよろしくおねがいします。雪乃さんに会つていろ／＼話をしてみたい気にもなりますが……。そろ／＼花が咲くせわしい春がやつて来ます。御誌の発展を祈ります。

(兵庫 福村時依)

○初めて投稿します。私は以前から奇譚クラブを愛読しておりましたが、その中どの書店にも見当らず、今日までそのままにしており時々今までのものを取り出して読りかえして読んでおりましたが、先日、外出先の古本屋にて一月号二月号三月号が出ており、さつそく購入し貪る様にして読みました。が新年号の「撮影会、兼、座談会」の記事を一番興味深く、読ませて

いただきました。私も下手ながらカメラをひねくりまわすので本を見るよりも、自分で女の身体を縛り自分のカメラを使つて思いきり撮影してみたら、どんなに楽しいだろうと空想しました。しかし今迄そんな写真を撮つたことは一枚もなく、又モデルも見つからずスタジオに行つて写すなどということは、とても私には出来ず残念に思つています。どなたか私のモデルになつて下さる方は居りませんか。又誘ひ方について何かありましたらお知らせ願ひたいのです。それから8ミリ等でありましたらそれもお願ひします。最後に私は映画の時代物によく出る高祖ずきんのことですが、あれを見ると何ともいへぬ気持ちになります。一度自分で女装してやつてみたいと思つておりますが、これもやり方を知らず困つておりますので、おわかりでしたらぜひお教え下さい。私にとつて猿ぐつわと共にお高祖ずきんや覆面というものは、あこがれの的です。いろいろとつ



まらぬことを並べましたが、よろしく御指導下さることをお願いしてペン置きます。

(仙台 小田彦一)

○ あいかわらず直接講読者で無い事にひけめを感じながらも毎号拝読いたしております。三月号は普段より早く二十五日(一月の)に入手致しました。早速、開いた所はグラビヤ、この二、三カ月で一番素晴らしい様に思いました。それから目次を見て五十九頁を開きました。栗瀬様の異加苦研究は浣腸マニアの僕にとつておくりものでした。昨年、後半頃より、ようやく浣腸に関する頁が毎号少しずつ有る様になり嬉しく思っておりますが、今後共、是非、毎号一頁でも浣腸記事を編集して下さい。ようお願いします。ところで今月号の読者通信では上原様の文章を二、三度、くり返し拝読しました。それに関して僕はこの間、成人になつたばかりで大きな事はいえませんが、SMの方々の会等は色々開かれていと思うのですが、それと浣腸マニアの方々は、どこか違う所があるのではないかと思います。僕は浣腸の他にフェチでもあるので、見る目が違つてい

るのかも知れませんが、浣腸はやはり恋人、夫婦、同性、全てをふくめて一対一が最適じゃないかと思ひます。特別、親しい方の他は人に秘めてする事が又、一種の楽しさじゃないかと思ひます。それにグループともないますと、やはり色々問題が起こる可能性が考えられ編集の皆様に迷惑をかける恐れも出て来るかも知れません。以上は飽くまで僕の思考ですが、一対一や文通等は僕も是非やつて見たいと思ひます。それから上原様も通信だけでなく是非、告白や体験を読ませていただきたいと思ひます。(勿論、小説等も含めて)最後に、この頃、王宮の浣腸室が掲載されていませんが続編を期待して見ます。長くなりました。おゆるし下さい。

(兵庫 山中泉太郎)

○ 小生の原稿採用して戴き誠にありがとうございました。しかしながら後で読み返しますと、その文の拙劣さ加減は甚だしく、全く赤面せずには居られませんか。さて、最近の一般刊行物の中から私の目に触れたマゾ的と思われる記事に就いて、私の感想を述べてみたいと思ひます。まず、「週刊スリラ

」の記事は本誌に於いても大きく採り上げられ、あまりにも有名なので、さて置くとして、「週刊平凡」二月三日号所載、小山いと子女史の読切連載小説「わたしは女」第十二話「こぶしの下の恋」には、乗馬を好むヒロインの馬に対する加虐的な心理や情景がよく描写されています。例えば、

(前略)——京子はこうして意味もなく馬を走らせる。ふだんは舐めるように可愛がるのに一旦騎乗となると、ヘトヘトになるまで駆けさせる。……枯草の続く河原が尽き、根株の間に水がきら／＼光るあたりに来ても、京子は拍車を弛めなかつた。さすがのアーリー(馬の名)も薄のようにあがる水しぶきの中でたたらを踏んだとき京子は激しい一鞭をくれた。「何が怖いのか、馬鹿！」馬は高いななき、方向を変えてジャンプすると堤防を駆け上つた。——(後略)

## 女体緊縛フォトE組

9×13印画紙焼付

ES1	ヌード緊縛集	モデル	佐賀美智子嬢	三枚一組	二五〇円
ES2	全裸悦虐集	モデル	須川 令子嬢	四枚一組	三〇〇円
ES3	羞	モデル	佐賀美智子嬢	三枚一組	二五〇円
ES4	酒宴の弄者	モデル	佐賀美智子嬢	二枚一組	二〇〇円
ES5	脱がされる娘	モデル	須川 令子嬢	五枚一組	三五〇円
ES6	あわや寸前	モデル	佐賀美智子嬢	二枚一組	二〇〇円
ES7	剥れたスロース	モデル	佐賀美智子嬢	五枚一組	三五〇円
ES8	乙女のすべて	モデル	花坂 道子嬢	七枚一組	四五〇円
ES9	女学生の縛り	モデル	須川 令子嬢	二枚一組	二〇〇円
ES10	緊縛のベッドシーン	モデル	佐賀美智子嬢	六枚一組	四〇〇円







